

東洋大学 FD・SD 活動報告書

(2019 年度)

東洋大学高等教育推進センター

2020 年 5 月

3年目を迎えた高等教育推進センター

高等教育推進センター長 松原 聡

2019年度は、高等教育推進センター発足後3年目を迎える年である。2017年4月にFD推進センターから名称を変更するとともに、その業務も拡大された。これまでの内発的なFD活動に加えて、SD活動との一体的な推進、国内外の高等教育の動向の把握、ICT活用教育やアクティブラーニング等の新たな教育方法の普及促進について組織的に取り組んでいる。とりわけ、今年度は、新たな取り組みとして、FD・SD研修部会と教育開発・改革部会の企画により、FD・SD研修会の開催が実現した。当日は、web会議システムを利用して全キャンパスに配信し、専任教員、非常勤講師、職員が100名ほど参加を得られた。

こういった取り組みの背景には、大学教育の質を保証していこうという、日本の教育行政の大きな動きがある。その中で、FD・SD、自己点検・評価、アクティブラーニング、高大接続などのさまざまな課題が掲げられてきた。

本学においても、2019年10月に「大学評価統括本部設置に関する規定」を、「東洋大学大学評価統括本部規定」として改正し、全学的な内部質保証推進組織として機能するよう整備した。私たちの活動は、こういった全学的な内部質保証体制の中に組み込まれており、とりわけ、教育の質の保証に取り組むという意味で、この体制の中核を担っているとも言えよう。この体制を見据えて、本センターはIR室との連携を深めながら、全学的な高等教育の質保証に取り組んで行こうと考えており、全教職員のご協力をお願いするところである。

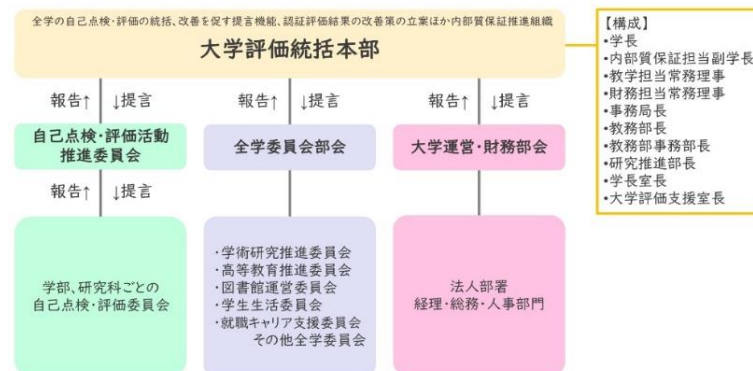


図 本学の内部質保証推進体制（2019年10月時点）

今年度は、新型コロナウイルスの流行とその対応で年度末を迎えようとしている。企業がテレワークに取り組むように、大学においても、来年度はWEBを活用した講義のあり方などが実質的にとわれることになろう。ここまでの、高等教育推進センターでのICT教育の取り組みが活かされ、さらなる高等教育の質の向上につながることを期待したい。

目次

学部 FD・SD 活動報告	1
文学部	2
経済学部	5
経営学部	8
法学部	11
社会学部	14
理工学部	31
生命科学部	34
ライフデザイン学部	39
総合情報学部	44
食環境科学部	48
国際学部	50
国際観光学部	54
情報連携学部	61
研究科/センターFD・SD 活動報告	66
文学研究科	67
経済学研究科	70
経営学研究科	75
法学研究科	78
社会学研究科	81
理工学研究科	87
生命科学研究科	92
ライフデザイン学研究科	96
総合情報学研究科研究科	99
食環境科学研究科	102
国際学研究科	105
国際観光学研究科	107
情報連携学研究科	121
学際・融合科学研究科	123
社会福祉学研究科	131
国際教育センター	134
高等教育推進センター/委員会 FD・SD 活動報告	137
2019 年度高等教育推進センター/委員会活動一覧	138

高等教育推進委員会	139
教育方法改善部会	144
FD・SD 研修部会	146
高等教育研究部会	149
教育開発・改革部会	150
各学部・研究科からの教学データ提供依頼実績	151
付録	152
高等教育推進センター刊行物	153
東洋大学高等教育推進センター規程	157
東洋大学高等教育推進センターニュースレター VOL.2 アーカイブ	160

学部 FD・SD 活動報告

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

1) 『各年度データブック』による情報公開

例年、文学部における授業実績や教育に関わる各種取り組みについて、各年度の「データブック」として作成し、学部教育の基礎的な資料を共有している。各学科や関係部局からの情報提供に基づき構成され、ガルーンやホームページを通じて学内外に広く公開している。

2) F D 講演会・研修会

例年 2 回程度、学内外の講師を招いての講演会・研修会が実施されている。講演・研修テーマは、学部内自己点検・評価委員会での検討をもとに、教員が共通に学ぶべき課題であり、かつ時機を捉えた内容を意識して設定している。2018 年度は海外大学との協定に向けた海外視察報告会、文学部授業評価アンケート分析報告会など、多様な視点を盛り込んだ講演会・研修会を実施した。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

①『文学部自己点検・評価報告書（2018 年度データブック）』の公開

活動実績

例年通り、文学部の教育研究活動について「データブック」として情報公開を行った。

成果・課題

継続的な FD 活動を進めるために、ここから得られたデータを分析して学科・学部の改善につなげる方法を模索する必要があると考える。

なお、今年度もホームページ等での公開のみとし、刊行経費の削減を行った。

②FD 講演会・研修会

活動実績

【2018 年度海外文化研修および 2019 年度実施に向けた海外視察報告会】

海外文化研修を引率した教員および視察を担当した教員による報告がなされた。

鈴木道也（史）・高野聡子（教育）：イタリア（研修）

高橋 厚（哲）：スロベニア（研修）

石田仁志（国コミ）・平畑奈美（国コミ）：ウズベキスタン（視察）

【2021 カリキュラム改訂・学習成果測定指標策定に関する研修会】

高等教育推進支援室の新山課長補佐による 2021 カリキュラム改訂・学習成果測定指標策定に関する研修会を実施した。

【PROG テスト結果報告会】

就職・キャリア支援部で実施した PROG テストの報告が(株)リアセック担当者からなされた。

【2019 年度海外文化研修報告会】

海外文化研修を引率した教員による報告がなされた。

山口しのぶ（東洋思想）・沼田一郎（東洋思想）・白井 順（東洋思想）：中国

大野寿子（国コミ）・三重野清顕（哲）：ドイツ・スイス

成果・課題

海外文化研修を引率した教員および視察を担当した教員による報告会では、文学部における海外大学との学生交流および研究交流に関する意識向上の一助となった。

また、PROG テスト結果報告会では、学生のジェネリックスキルを可視化する一助となった。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数（人）			HP 掲載
		教員	職員	計	
2019/4/10 15:00～15:30	2018 年度海外文化研修および 2019 年度実施に向けた海外視察 報告会	87	5	92	×
2019/6/5 15:00～16:00	2021 カリキュラム改訂・学習成 果測定指標策定に関する研修会	82	5	87	×
2019/7/10 15:00～15:30	PROG テスト結果報告会	86	5	91	×
2019/11/6 15:00～15:30	2019 年度海外文化研修報告会	83	5	88	×

3) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

2019 年度の FD 活動を踏襲しつつ、学部長のイニシアティブの下、2020 年度文学部自己点検・評価委員会委員を中心に推進していくこととなる。

具体的な予定としては、これまでに引き続いてグローバル化に対応するための学生の海外派遣や研究交流を推進する研修会・交流会等を実施していくことを想定している。併せて、学生による各種アンケートや適正テスト等の分析結果等を基に、学生満足度の向上や学修環境の改善を推進していきたい。

また、学生に対して適正な教育環境を提供するためには、ST 比や SS 比の改善も取り組むべき課題であり、同委員会を中心に検討を重ねていく。

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

経済学部では授業評価アンケートを中心にして FD 会合・FD 研修会・FD 視察等の様々な組織的な取組を行っている。こうした活動によって学部の教育力は毎年着実に向上している。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

①授業評価アンケート

活動実績

講義科目は全学方式、ゼミアンケートは学部独自方式で実施した。実施科目：講義科目（春学期 199 科目、秋学期集計中）、ゼミ（春学期 19 科目、秋学期 152 科目）。

成果・課題

アンケート結果に基づいて、授業改善に取り組むことができた。アンケート結果について経年的に集約し、今後の資料としていきたい。

②FD 会合

活動実績

以下のテーマで FD 会合を実施した。

春学期（テーマ別）

テーマ 1：「大規模講義の運営について」

テーマ 2：「データを使った分析を用いる講義」

テーマ 3：「学生の図書館・データベース利用について」

テーマ 4：「経済学に興味が無い学生をどう引きつけるか？」

秋学期（担当講義別）

経済学科専門科目「専門ゼミの採用方法について」

国際経済学科専門科目「研究活動の活性化に必要なこと」

総合政策画家専門科目「学科助教の担当科目について」

基盤科目「FD で議論すべき教養のテーマ」

英語：「英語の現状と今後の課題点」

初習外国語：「総論、言語別の状況、問題点、授業実施状況（内容・方法、成果、反省・今後の改善点）」

経済学科基礎ゼミ：「2019年度の振り返り」

国際経済学科基礎ゼミ「21カリの基礎ゼミ運営について」

総合政策学科基礎ゼミ「次年度の活動内容および成績評価基準」

成果・課題

各分科会での議論の内容は、報告会と報告書の作成を通じて共有をおこなった。知見のさらなる共有や、行動に向けたワーキンググループ化などを検討していきたい。

③FD・SD研修会

活動実績

今年度は1回のFD研修会を実施した。中川功氏（拓殖大学教授）による「大学等修学支援新制度のポイントと根本問題」を2019年12月5日に開催した。

成果・課題

大学等修学支援新制度に伴う成績評価などについて、講演と質疑応答により理解を深めた。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数（人）			HP掲載
		教員	職員	計	
2019/12/05	大学等修学支援新制度のポイントと根本問題（講演）	46	3	49	×

④FD視察

活動実績

経済学部教員による、FD関連の視察およびイベント等への参加は以下の通り。

- ・Moodle Moot：崇城大学、2020年2月26-28日
- ・大学研究教育フォーラム：京都大学、2020年3月18-19日

成果・課題

視察の成果の共有化を工夫したい。

⑤ 学生との意見交換会

活動実績

本年度は2回実施した。

1回目：2019年7月23日（火）12時15分～12時50分 参加者0名

2回目：2019年10月15日（火）12時15分～12時50分 参加者4名

成果・課題

意見交換会の結果は教授会を通じて共有した。

第1回目の意見交換会は、周知不足より参加者がいなかった。この点を踏まえ、開催曜時限や周知方法の改善を検討したい。

3) 2020年度に向けたFD・SD活動実施計画 / ACT, PLAN

経済学部ではこれまでのFD活動を来年度以降も引き続きFD推進委員会を中心として実施していく予定である。成果の共有の一層の推進や、それを受けた改善への行動を検討していきたい。

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

経営学部では、これまで、各学科や学部 FD 委員会が中心となり教育内容等の改善に組織的に取り組んできた。具体的には、初年次教育である「基礎実習講義」など授業ごとのワーキンググループを設置したり、また、年 2 回程度学外の講師を招いて学部 FD 講演会・研修会を開催したりすることにより、教職員の教育活動に関する能力と意識の向上に努めてきた。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

授業内容改善のための会合

活動実績

これまでに引き続き、各学科が主体となって授業内容を改善するためのワーキンググループ等を設置し、教員間で教育手法を共有して内容の改善を図った。また、英語教育分野では教育検討委員会の他、非常勤講師を含めた懇談会を各学期に開催して教育の質向上を目標に意見交換を行った。

成果・課題

同じ授業を担当する教員の間で解決すべき課題を共有し、互いのティーチングスキルを向上させるという意味において、着実に成果を上げている。

授業公開

活動実績

各学科、英語教育分野で授業公開を行い FD 活動に取り組んだ。経営学科では演習を除く全ての授業を学科教員向けに公開した他、仮想的な授業公開（ToyoNet-ACE の授業コースへ教員が相互登録することによるもの）の試みも行った。

成果・課題

学部内で積極的な授業公開が行われ、それに基づいて授業改善のための意見交換の場が設けられた。公開実施率や参観率は、今年度マーケティング学科の場合、それぞれ 100%、84.6%であった。

学生アンケートの活用

活動実績

全学実施の在校生・卒業生アンケートの結果を活用するだけでなく、学科ごとに学期末アンケート等を実施し、その結果を学科会議で共有して教育の質向上に取り組んだ。

成果・課題

アンケートの結果は、担当教員だけでなく学部・学科教員で情報共有し、学習到達目標に即した教育方法の工夫やアイデアを交換し合っている。学生に対して適正な教育環境・内容を提供するために、今後は、アンケートだけでなく、学生との懇談会等の開催を検討したいと考えている。

学部内 FD 講演会・研修会

活動実績

第1回学部 FD 講演会では、芝浦工業大学の浜野学先生に「学生が自己効力感を感じられるような授業づくりへの工夫-コーチング技能の活用-」というタイトルで講演をしていただいた。事前にコーチング関係の図書を2冊購入し、学部内で共有して講演会に臨んだ。大きな反響が得られたため、第2回学部 FD 研修会では、同講師によるワークショップ「コーチングを活用した学生指導」（仮題）を3月13日に計画していたが、新型コロナウイルス感染防止のため中止が決定された。

成果・課題

講演会の前から多くの教員が関心を持ち、当日も積極的な参加が得られた。講演後の質疑応答も時間を延長して行われた。中止となった第2回講演会の内容は来年度以降への持ち越しを検討したい。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数（人）			HP 掲載
		教員	職員	計	
2019/9/25 13:15～14:20	「学生が自己効力感を感じられるような授業づくりへの工夫-コーチング技能の活用-」	51	2	53	×

学内外 FD 講演会・研修会への参加

活動実績

学部内5人のFD委員が中心となって学内外のFD講演会・研修会に参加し、本学他学部や他大学の教育に関する先進的な研究や事例を学んだ。それらは、「2019年度 Rcus 大学マネジ

メントセミナー」「Academic Writing Workshop」「コーチング指導を活用した学生指導」「Material Development as the First Step in Collaboration between Disciplines and English Teaching Faculty」「授業運営で留意したい改正著作権法」などである。

成果・課題

FD 委員が上記の講演会に参加しただけでなく、その成果を学部全体で共有できたことが意義深いと考えている。また、「授業運営で留意したい改正著作権法」（学内 FD・SD 講演会）には経営学部からも多くの教員が積極的に参加した。

3) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

2019 年度の FD・SD 活動を踏まえつつ、引き続き、各学科や FD 委員会が中心となって、FD・SD 活動を推進していくこととなる。授業改善のための研修や学生アンケート等の活動を通してより良い教育環境の提供を目指すと共に、学内外の FD・SD 講演会で得た知見を学部全体で共有することによって教職員の教育活動に対する関心や意識を向上させていきたいと考えている。

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

法学部では教育の質を高めるべく、FD 学習会や学期末試験不受験者代替措置の実施、単位
僅少者面接、保護者との連携を視野に入れた活動を基本的な柱とする学部独自の FD 活動を実
施するとともに、授業評価アンケートやルーブリックを導入したシラバス・チェックを始めと
する全学的な FD 活動にも積極的に参画してきた。毎年、適宜工夫や改善を盛り込みつつ同様の
活動を継続的に実施し、学部全体の教育能力の向上に努めた。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK**①授業評価アンケートの実施**

活動実績

春・秋の各学期に本学高等教育推進センターによる全学統一フォーマットを用いた授業評価
アンケートを実施した（春学期:172 授業、秋学期:169 授業）。さらに法学部独自の質問項目
を設け、貸与六法を用いた試験実施と学習成果の関連などについて学生の意見を継続的に収集
したり、学生の志望進路（公務員志望など）に関する質問項目を設け、どのような学生が履修
しているのか担当教員が把握できるように工夫している。

成果・課題

前年度は春学期 141 科目、秋学期 138 科目であるため、実施科目は前年度よりも一割以上増
加した。本アンケートにより各教員が自分の授業を客観的に振り返る良い機会となった。アン
ケートの回答率を増加させるのが今後の課題である。

**②法学部学期末試験不受験者代替措置の実施（学部 FD 委員会、カリキュラム検討委
員会合同）**

活動実績

各学期の学期末試験を病気その他やむを得ない事由により受験できなかった学生（※学期末
試験を実施する法学部開講科目の受講生に限る）に対して統一した対応を行えるよう「学期末
試験不受験者代替措置」を定めて、科目担当教員がそれぞれ該当学生と相談して日程を設定し
て代替措置を実施した。ガルーンを利用することで情報共有を容易にした。

成果・課題

統一した対応を行うことで、授業間の不平等を解消できる。

③単位僅少者面接の実施（学部 FD 委員会、学生生活委員会合同）

活動実績

留年率や退学率の低下につなげるべく、修得単位が少ない学生に対する個別面談を 2019 年 4 月に学部 FD 委員会委員と学生生活委員会委員が実施し、教員が学生の相談に乗るとともに助言を行った。面接後には、面接対象者の保証人に「単位僅少者面接結果通知」（欠席者には欠席通知）と「修学状況調査書」を送付した。欠席学生には「修学状況調査書」を後日教務課まで持参させ、学修状況の把握や学生との面接といったフォローアップを教務課で行った。

成果・課題

教員に直接悩みや状況を話し、アドバイスを得ることにより、学生の勉学へのモチベーション向上につながったケースが多々見られた。今後は、欠席学生数をどのようにしたら減らすことができるのか、また、欠席学生をどのようにフォローするのが課題である。

④保護者との連携を視野に入れた取り組み

活動実績

法学部生の保護者に「14（とーよー）メール」と題したメールマガジンを毎月 14 日に配信し、教育活動の紹介や行事予定の案内、各種事務手続きなど様々な情報提供を教職員が行っている。2019 年度の配信件数は延べ 17,683 件となっている。

成果・課題

大学側から直接保護者に連絡することで、保護者が大学の様子を身近に感じられる一助となっている。保護者のニーズに応える情報をさらに多く提供することが今後の課題である。

⑤法学部 FD 学習会の開催

活動実績

教員主体の FD 学習会を 3 回開催し、今年度昇格した教員・新任教員による「語学教育」「スポーツ教育」での取り組みについて報告したほか、外部講師として落語家を招聘し、学生を惹きつける授業を行うための話し方の工夫などを学ぶ機会を設けた。報告や講演の後に質疑応答を通じて参加者は情報の共有や交換を活発に行った。詳細は「研修会等の参加状況」を参照。

成果・課題

教授に昇格した教員や新任教員による語学科目やスポーツ科目における運営方法や工夫、課題などについて教員間で議論を交わした。他の教員の工夫を学ぶことで、自らの授業のさらなる改善を図ることができたとともに、新任教員は東洋大学における授業運営についてアドバイスを受けることができた。また、複数の教員の要請に応じて、外部講師としてプロの落語家を

招き、どのような話し方をすればより魅力的な授業を行うことができるのかを学ぶ機会を設けた。今後も、教員のニーズや現実に応じた、より実用的な内容を FD 学習会として企画していきたい。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数（人）			HP 掲載
		教員	職員	計	
2019/7/2 16:15～16:45 スカイホール	第 1 回 FD 学習会 講演:「初修中国語の授業で manaba を使ってみました」 講演者:中田妙葉教授（法律学科）	42 名	3 名	45 名	無
2019/11/12 16:00～16:45 スカイホール	第 2 回 FD 学習会 講演:「人（学生）を惹きつける話術」 講演者:春風亭傳枝氏（落語家・東洋大学文学部印度哲学科卒業生）	42 名	3 名	45 名	無
2020/2/4 15:15～16:15 スカイホール	第 3 回 FD 学習会 講演:「スポーツ科目における授業運営の工夫と課題」 講演者:白木孝尚准教授（企業法学科）	39 名	3 名	42 名	無

3) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

今年度の実績を踏まえ、2020 年度も適宜工夫を凝らしながら FD 活動を引き続き実施していく。その際、不受験代替措置についてはカリキュラム検討委員会と、単位僅少者面接では学生生活委員会と緊密に連携して進めていく。教職員からの要望に応じて学部 FD 委員会を中心に企画を立てて FD 学習会を一層充実させるなど、教職員全体で教育の質保証に向けて取り組んでいく。

また、学部 FD の活動をホームページで報告できるよう体制を整えたい。

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

2016 年度の FD では、多様な学生に対応するための教職員連携の模索をテーマとした活動を行ったが、2017 年度からは、「TOYO GLOBAL DAIAMONDS 構想」により進められているグローバル教育の強化に関連した活動を中心に FD・SD を実施してきた。特に英語で行う専門科目も含め、学生の英語力を伸ばしていくことが重要であるとの認識から、その関係の取組みを実施している。また、新任教員との関係では、学部新任教員研修会を毎年早い時期に継続的に開催している。

2018 年度については、4 月の FD 推進委員会を皮切りに社会学部における FD 活動を開始した。主な行事としては、5 月の社会学部新任教員 FD 昼食会、7 月の英語・バイリンガルテキスト活用に関する FD、12 月の成績（GPA）と PROG データの活用に関する講演会、3 月の「経済学部の FD 活動に学ぶ」をテーマとする講演会を実施するなど、年間にわたって活動を展開した。

これらのうち新任教員向け FD は、各種学内システムや手続きなどに早期に慣れ親しんでいただくための機会として例年通り実施している。このほかは、FD 委員会として選定した課題に沿って計画的に実施している。2018 年度の取り組みのうちバイリンガルテキストの活用は「TOYO GLOBAL DAIAMONDS 構想」により進められるグローバル教育の強化とも関係して、社会学部として取り組むべき英語教育の目標や工夫に直結するテーマである。また、GPA や PROG の活用は、3 つのポリシーや学修成果の測定の改善につながるテーマであり、外部講師による講演や他学部の取り組みの共有も社会学部の教育力向上につながるものであった。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

社会学部新任教員 FD 昼食会

活動実績

実施日：5 月 20 日（月）12：30～13：30

新任教員 3 名には 4 月にメールで告知し、各学科の FD 推進委員および学部長にも案内を出した。参加者は、新任教員 3 名、教員 6 名、社会学部教務課職員 3 名、合計 12 名が参加した。12 時 30 分より昼食を取りながら、リラックスした雰囲気の中、新任教員からの疑問や質問に教職員が答える形式で進められた。議論したテーマは以下に集約される。

- ① ゼミ運営について。学部生のゼミは初めて受け持つので、どのように卒論にまで発展させていけばいいのかわからない。
- ② 1 年生の英語のレベルが極端に異なるので、どのレベルに合わせて授業を実施すればいいのかわからない。
- ③ 2 部の学生はモチベーションの高い学生とそうでない学生の差が極端にあるので、どのようにまとめていけばいいのかわからない。
- ④ 4 年春学期に就活のため休む学生にどのようにゼミの重要性を理解してもらえばいいのかわからない。

成果・課題

研修会後に参加した新任教員にアンケートを取った。その結果、以下のような回答があった。一部紹介する。

Q1. 着任後に、東洋大学の業務全般で、感じられたことが何かありますか？

・前任校では大学院の仕事が中心だったので、学生の教育は初めてのことばかりです。

Q2. 授業を進める上で、特に注意していることはありますか？

・学生が能動的に学べるような工夫をするようにしています。

・時事ネタを取り入れること、できるだけ最新の動向を紹介すること。学生目線で「わかりやすい」説明をすることを心がけています。

Q3. 東洋大学の学生に対して、感じられたことが何かありますか？

・学力が様々なので、どのように指導するとよいか、まだ間合いなどを模索しています。

・比較的真面目に手抜きをせずに課題に取り組もうとする学生が多いように感じました。英語の TOEIC の得点のばらつきが多く、必修科目（ゼミ）の指導法に悩んでいます。

Q4. 東洋大学における改善点や改良点などのご意見があれば自由にお書きください

・まずは自分が慣れてスムーズに仕事ができるようになりたいです。

・WIFI を全キャンパス内で使えるようにしていただけないでしょうか。

Q5. 今日の新任教員 FD についてご感想を自由にお書きください

・ふだん、先生方とゆっくりお話しできる機会がないので、こんなにたくさんの先生に具体的なアドバイスを頂けてとても良かったです。ありがとうございました。

・授業運営に役立つノウハウが大変勉強になりました。学科単位などでも FD があるのでしょうか？（あればよいと思いました）

第一回 社会学部 FD 研修会：英語による授業のノウハウを学ぶ―講義科目と演習科目に関する授業の経験から

活動実績

実施日：7 月 1 日（月）16：45～17：45

今日スーパー・グローバル大学（SGU）構想のもとで、「外国語による授業科目数」の増加が求められている。そのなかで社会学部としても、語学科目以外に、英語を中心とした外国語による授業科目が徐々に増えてきた。しかし、学生の語学力のばらつきや学生側の動機の欠如など、さまざまな要因により、多くの先生方が外国語による講義や演習の実施に躊躇している。そこで、本年度第一回の社会学部 FD 研修会では、これまで英語による授業を実践されてきた 社会文化システム学科・平島みさ教授および社会福祉学科・佐藤亜紀准教授より話題提供をいただき、全体討論を行った。これまでの取り組みを通じて得られた有効な方策と今後の課題として、以下の事柄が共有・指摘された。

* 当日配布した資料を添付する。

成果・課題

- 同一クラス内での学生の英語力の格差が大きく、クラス分けに工夫の余地がある。
- 英語で授業を進めるにあたって、学生のモチベーションの維持に多大の手間を要する。学生の関心の所在を見極め、それに応じて授業内容を組み立てることが有効である。
- 映像を多用するなど、教材の工夫が重要である。
- 社会学部内で 60 の英語授業が開講されているので、これらの相互調整と体系化をはかり、社会学部全体としてまとまりのある英語授業の組み立て方をすることによって、個々の英語授業が進めやすくなり、かつ、全体の学習成果をも高めることができるのではないか。

ご登壇いただいた両先生がご経験を率直に披歴くださり、各教員にとって多くのことを考える機会をいただいた。

第二回社会学部 FD 研修会：初年次教育の取り組みと課題—各学科の事例から

活動実績

実施日：12 月 2 日（月）17：00～18：10

初年次教育では、大学における学びの態度の涵養や基礎的なアカデミック・スキルの習得が目指されている。こうした試みは教員が大学生のころにはほとんどなかったものであり、各教員は初年次教育に対応した新たな知識や技術の習得が求められる。このため、初年次教育の方法をめぐって、どの学科も試行錯誤の状態が続いている。

そこで、第 2 回の社会学部 FD 研修では、各学科の初年次教育をめぐる試行錯誤の過程や残されている課題を共有した。当日は以下の 5 学科の教員に登壇していただき、各学科 10 分の持ち時間で、自学科の取り組みと課題を話した。

社会学科	石川 菜央／米原 あき
社会文化システム学科	高橋 典史
社会福祉学科	榊原 圭子／村上一基
メディアコミュニケーション学科	王 雪萍

* 当日配布した資料を添付する。

成果・課題

これまでの取り組みを通じて、有効な方策および今後の課題として、以下の諸点が共有された。

- 泳ぎ方を教えてから泳ぐのではなく、「まず、プールに突き落とす」ことも必要である。具体的なタスクを学生に与えることで、それと格闘しながら学ぶ方法は効果的である。
- 合宿形式でのワークショップは、集中的なガイダンスとなり、有効である。
- 「不本意入学」の学生にとって、井上円了や大学の歴史を学ぶことで、大学のプライドをもたせることにつながっている。
- ウェブ上のニュースではなく、徹底的に紙の新聞に触れさせることを重視することで、メディア・リテラシーを磨くことが可能になる。
- アカデミック・スキルを教えているものの、その土台となる学問への意識、批判的な視点に乏しいので、しっかり根付いていないのに、水や肥料を与えているようなところがある。

いずれの報告にも共通していたのは、学生は「先生が〇〇してくれる」という意識が強いので、いかに主体性をもった学びのスタイルを身に着けてくれるか、高校4年生から大学1年生になってもらうか、という点に苦心していることである。全体として、豊富な実践に基づく各報告は、実に示唆的であり、各教員にとって有意義な機会となった。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数（人）			HP 掲載
		教員	職員	計	
2019/5/20 12:30～13:30	社会学部新任教員 FD 昼食会	9	3	12	×
2019/7/1 16:45～17:45	第一回社会学部 FD 研修会：英語による授業のノウハウを学ぶ	61	4	65	×
2019/12/2 17:00～18:10	第一回社会学部 FD 研修会：初年次教育の取り組みと課題	62	4	66	×

3) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

① FD 委員会の定期的な開催

社会学部 FD 委員会を年 4 回開催することを目標とする。

- ・ 5 月上旬 年間計画の再確認

- ・ 7月下旬～8月上旬 次年度予算要求のための計画の立案
- ・ 12月上旬 年内の計画の進捗状況の確認および報告書の作成
- ・ 1月下旬 報告書作成と当該年度の活動内容の反省及び次年度への引継ぎ事項の確認

② 新任教員に対する FD

新年度開始時に、社会学部新任教員との交流を深め、本学の授業に関する FD 研修を実施。

③ FD 講演会の開催

当該年度の FD 講演会の実施の具体案を第 1 回 FD 委員会で企画する。なお、今年度、新型コロナウイルスの感染防止対策のあおりを受け、キャリア委員会と共同で開催する予定であった「『対話 (dialogue)』の授業—教材開発のためのワークショップ」という企画が延期となった。このため、次年度はできる限り早い段階で、この企画を実現させたい。

④ 年間活動報告書作成

報告書の作成に向けてスケジュールを確認し、各委員の担当部分を決定する。

2019年度社会学部FD研修

英語（講義）授業について

東洋大学
社会学部社会学科
佐藤 亜樹
7/01/2019



はじめに

- (1) 英語（講義）授業：取り組みの概要
- (2) 英語（講義）授業の長所
- (3) 英語（講義）授業の短所
- (4) 活用した社会資源・教材
- (5) 英語（講義）授業を進める上で難しかったこと
- (6) 大学側への期待・要望

2

(1) 英語（講義）授業の概要

- * 科目名：ソーシャルワークの基盤と専門職B
- * 2018年度秋学期に開講
- * 講義形式、162名の登録（社会学科2年生・3年生）
- * 社会学科士資格取得に必要な科目

* 教授する内容：

- (1) 北米ソーシャルワークの発展の歴史
- (2) ソーシャルワーク専門職とは何か
- (3) 専門職に必要な価値・倫理等

3

(1) 英語（講義）授業：取り組みの概要

英語で取り組んだこと：

- (1) PPTのアジェンダ
- (2) 本日のテーマの紹介
- (3) まとめ

* 学生に尋ねると...「英語での授業だとは知らなかった」、「外国人（中国出身）なのに日本語だけでなく英語でも授業なんて...」

→ 英語のみの授業：学生の自信のなさが全面に押し出されていた。
授業への動機付けが失い、目がうつろになる学生もいた。

4

1

2019/7/10

Agenda

- * Introduce the instructor to students
- * Introduce yourself to others
- * Syllabus Instruction 1: Course contents, objectives, schedule, & policy
- * Syllabus Instruction 2: Criteria for grading & method of evaluation
- * Introduction to the initial topics

5

Initial Topics Asked in the Last Session (1)

- (1) What do you identify 3 components of which social work consists?
Bartlett (1970)
* 「ソーシャル・ワーク実践における本質的な要素：価値、知識、技法（技術）」
* 知識と価値が方法よりも優先であり、知識と価値が方法を規定している。
- (2) What is social work and social worker?
* ソーシャルワークとは、科学に基づいた相談援助実践・学問である。
* 自力で問題解決できない人を専門的な価値・知識・技法を活用して援助する仕事。
* ソーシャルワーカー...ソーシャルワークを具現化する専門職。
- (3) What/who will be targets of social work?
* 個人とその環境にあるものすべて、個人と環境の相互作用。

6

(2) 英語（講義）授業の長所

- * 扱う内容が米国ソーシャルワークの「歴史」や「価値・倫理」だったので、英語で教えること自体は自然であった。
- * 教える側の思考が整理され、なぜそれが重要なのか説明しやすかった。
- * 講師が授業内で英語教材を使う動機付けが高まった。
- * 講師が英語を勉強するための動機付けが高まった。

7

(2) 英語（講義）授業の長所

* 学内の様々な社会資源を探索し、ネットワークを作ることができた。

例

- (1) ハッカースミス・アンディー氏 (Andy Hockersmith, Mikosud Program Coordinator, at International Affairs Office, Toyo University) による ECZ (English Community Zone) の紹介



- (2) ハンス・フゾイクン (Hans Husoy, 国際学部修士課程交換留学生) によるノルウェー文化の紹介・母国でのボランティア活動・日本文化についての発表



8

2

(2) 英語（講義）授業の長所



*学内の様々な社会資源を探索し、ネットワークを作ることができた。

例

- (3) 黒羽夏子さん（社会学部2018年度英語スピーチ代表）の英語スピーチ：「障害を持つ人々へのボランティア活動を通して得たもの・認識の変化」について話してもらった。

→英語のスライドを示したが、「まったくわからない」という回答が多かった。

9

(2) 英語（講義）授業の長所



*活用可能な既存のメディアを探索することができた。学生は、米国ソーシャルワークが発展せざるを得なかった状況にある程度、理解することができたのではないかと考えている。

例

- (3) TED Talkより:
 "What Makes a Good Life? Lessons from the Longest Study on Happiness"
 "Social Workers as Super-Heroes"
 "How I Learned to Read - and Trade Stocks - in Prison"
 "Out of the Darkness: The Story of Mary Ellen Wilson"
 (4) American Idioms...Drive me nuts!

10

師 you drive me nuts



<https://tenor.com/search/driving-me-crazy-gifs>

11

(3) 英語（講義）授業の短所

- * 学生の英語運用能力が不十分であった。
- * 学生の英語で学ぶための動機付けが低い。
- * 日本語併用・日本語訳付きになり、通常の授業の倍の時間が必要だった。
→シラバスすべてをカバーできない。
- * TED等...字幕（日本語を含む）が使えるものもあった。しかし、字幕はスクリーンの下部にあるため、後部座席の学生には見えない。
→ 大学側による設備投資の必要性
→ 材料を準備するための時間を考慮してほしい。

12

3

(4) 活用した社会資源・教材

https://en.wikipedia.org/wiki/Mary_Ellen_Wilson



- (a) ECZのスタッフ
- (b) ノルウェーからの交換留学生
- (c) 社会学部社会学科3年生
- (d) TED Talk の活用
- (e) 米国ソーシャルワーク専門職が作ったビデオ視聴
- (f) 全米ソーシャルワーカー協会の倫理綱領の紹介
- (g) 米国人のソーシャルワーク学部生が使っていたスラングの紹介 等

13

(5) 英語授業を進める上で難しかったこと

- * 学生の動機付けの維持
- * DVD視聴の際、字幕の位置が低く、後方にいる学生には見えない
- * シラバスの内容を割愛せざるを得ないこと



<http://www.obirichi.niue.nagoya-u.ac.jp/research/2001/hori.html>

14

(6) 大学側への期待・要望

- * 選択必修科目を英語授業にすることの妥当性に関する議論
- * 英語授業への動機付けの高い学生を集めて授業を行うことの可能性
- * 講義授業の際は、スクリーンを学生が見やすい位置に、可能なかぎり多く設置してほしい
- * TED Talk等、既存のメディアを活用する際のサポート（日本語訳を入れる等）

15

ご清聴ありがとうございました



16

4

2019年度第一回社会学部FD研修: 英語による演習科目

東洋大学社会学部社会文化システム学科
平島 みさ
2019年7月1日(於: 東洋大学スカイホール)

本報告の問題意識として

担当英語ゼミの アイデンティティ・クライシス!

- ・カリキュラムの構造的問題: 直接連携する講義科目がない。
- ・ゼミ内容の問題: Advanced English Conversation Class と位置付けるのか、本格的に英語で「文化社会学ゼミ」を実施できるのか。

目次

1. 社会文化システム学科英語ゼミの現位置
2. ゼミ実践概要
3. 成果
4. 問題点
5. 学部へのご提案

1. 社会文化システム学科英語ゼミの現位置 (2016年度から、2年次選択必修科目)

- グループ①: 文化社会体験演習(定員: 約15名×2)
1. 国際理解分野: インドネシア/エビ
 2. キャリア分野: ラオス/コーヒー
- グループ②: 社会調査及び実習(定員: 約20名×5)
- 3~7. 質的調査4コース、量的調査1コース
- グループ③: 社会文化システム論演習Ⅰ(英語ゼミ、定員なし)
8. 日本社会・文化事情
 9. 英語圏社会・文化事情(平島 2018年度から担当)
 10. 東南アジア社会・文化事情

1

2019/7/10

担当ゼミ設置目的:
留学希望者向けに英語圏社会・文化事情について学ぶゼミ。

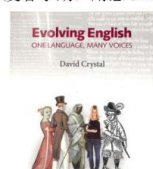
- ・初年度2018年度は特に条件を付けず。
⇒結果、第一希望の学生たちと第二希望の学生たちとの間で英語力・履修意欲の差が激しい。
TOEIC最高: 800点台後半、最低: 300点台前半。

- ・2019年度は、以下の条件付。
TOEFL iBT: 50点以上、またはTOEIC: 480点以上。

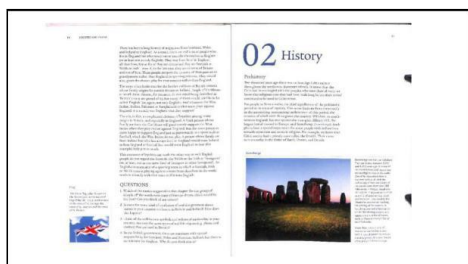
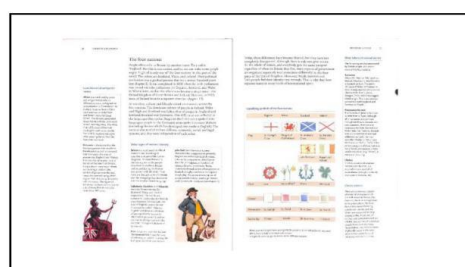
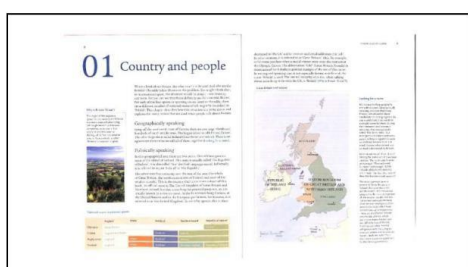
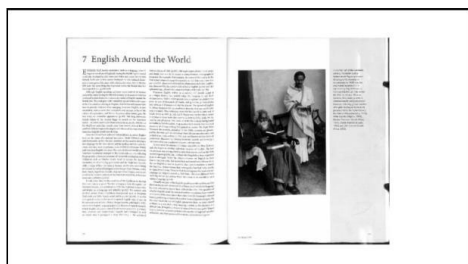
2. ゼミ実践概要 (教員作成プログラムから学生の自主的プログラムへ)

- 2-1. 2018年度春学期:
文献講読+英米社会・文化事情についてゼミ報告
- 2-2. 2018年度秋学期:
テキストを使用したディスカッション(5週)+
英米映画(指定)を題材に英米社会・文化事情について報告
- 2-3. 2019年度春学期:
テキストを使用したディスカッション(5週)+
英米映画(自由)を題材に英米社会・文化事情について報告
☆ディズニールンドでフィールド調査または映画鑑賞・評論

2-1. 2018年度春学期: 用意したテキスト



2



2-1. 学生たちの班毎の報告テーマ

- ① 日本・香港・イギリスの教育制度の違い
- ② Cath Kidstonは日本で成功したのに、Emma Bridgewaterは成功しなかったのはなぜか
- ③ ビートルズに見るイギリス民族音楽の影響
- ④ アフタヌーンティとはなにか

その結果、
文献購読は、2頁ずつ、4頁のテキストを読むのに文法から教えることになった。

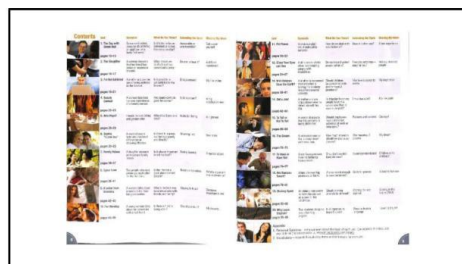
ゼミ報告は、①は通常の3・4年ゼミ報告以上に良い報告、②はたとえどしく自分の言葉で報告。以上2つは報告の構成と統計等の使用も適切であった。ところが、③と④はWiki等丸写しで、引用文も読めず。

あまりに質疑応答時に沈黙が続くので……

学生たちと秋学期のゼミ運営について相談

↓
「英文は読みたくない。」
「英語をたくさん話したい。」
「自分たちが話したいことを話したい。」

2-2. 2018年度秋学期：英会話のウォーミングアップ後、
右2冊から班ごとに映画とテーマを選択



2-2. 学生が選択した映画とテーマ



5

“TenpointstoGryffindor!”



この魔法の言葉でゼミが一気に活性化!

しかし...

果たして「社会学部」のゼミがこれでよいのか...

2-3. 2019 年度春学期：英会話のウォーミングアップ後、
学生たちが選んだ映画とテーマ①



2-3.2019年度春学期：英会話のウォーミングアップ後、
学生たちが選んだ映画とテーマ②



6

3. 成果

- ◎自分の意見を明確に発言するようになった。
- ◎論理的思考が身についてきた。
- ◎実のある深いディスカッションが、「日本語で」できるようになってきた。
- ◎留学生たちが活躍する場となっている。

4. 問題点

- 少人数クラスなのに履修目的・姿勢が多様。
(学生たちの自尊心のケアまで必要になった。)
- 社会学部の学生たちなのに、社会問題への視点が主観的で、社会を機能的・構造的に見る視点が脆弱。←高校までの「英会話」教育の弊害？
- 学生たちの異文化に対する想像力の欠如。
- 指示待ちで、予習をする習慣がない学生が多い。

5. 学部へのご提案

1. Advanced English Conversation Classと位置付ける場合

- ◎語学クラスとの連携: 英語はセリフではなく「言語」であり、英語圏文化の基礎を形成し、知ることに理解を深める。
KnowingBilingual ⇒
- ◎異文化を専攻中の姿勢を養う。特に、近年著しく多民族・多文化化している英語圏社会における禁忌・タブーを学習する機会を設ける。

2. 本格的に学部・学科カリキュラム内で体系づける場合

- ◎当学部で英語での講義・ゼミ科目は合計60コマ開講。

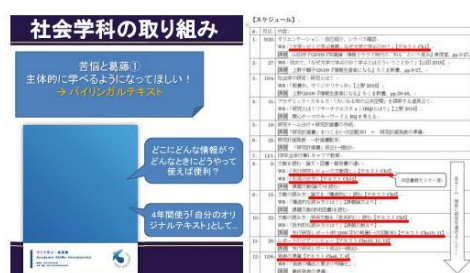
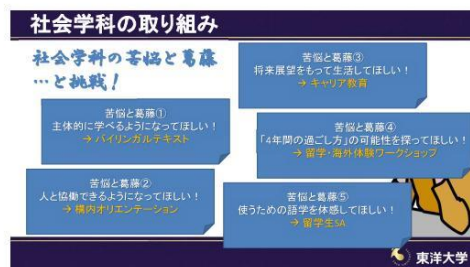
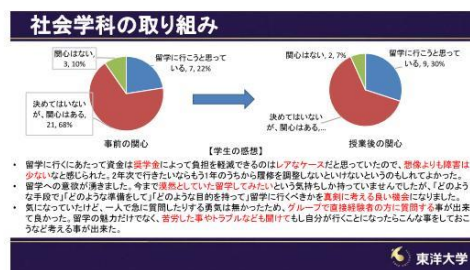
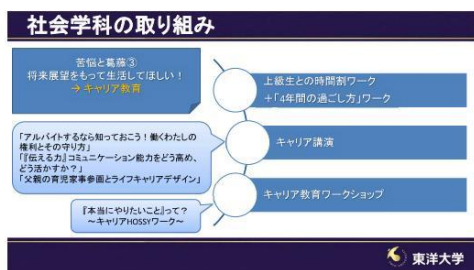
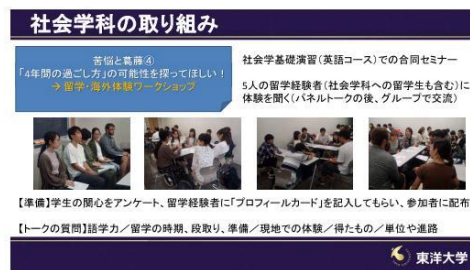
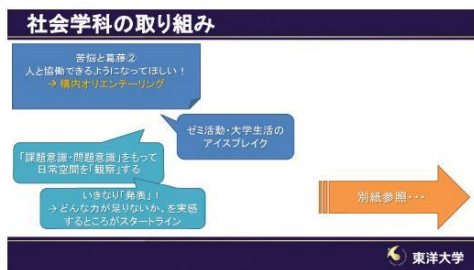
せっかくなので私見ですが、

- ①各学科の英語でのゼミと連動する履修モデルとして、
英語での講義科目をできるだけ多く他学科にも開放？
- ②英語でのゼミ・講義を学部横断で履修できるコースの設置？

2021年度の学部・学科改編に向け、
英語で実施するゼミ・講義にも、
何卒よろしくご協力のほどお願い申し上げます！

ご清聴ありがとうございました。

別添資料② 第2回 FD 研修会配布資料

1
2020/3/52
2020/3/5

3

4

社会学科の取り組み

苦悩と奮闘！
使うための語学を体感してほしい！
→ 留学生のみなさん

社会学科への留学生に、学習初期の履修相談で声がけ
→ アメリカ出身の学部生が引き受けてくれた

【採用手続き】**留学生ならではの手続き**も
「資格外活動許可申請書」を入管に提出すれば、週20時間程度の
アルバイトの許可印が貰える。許可の有無をビザの裏のスタンプで
確認。なければ入管で申請が必要。

【SAIに授業で主に行っていること】
・授業のテーマに関する自国の文化や制度についての紹介
・グループディスカッションへの参加と活性化

【留学生SAIがいてよかったこと】
・日本と外国の違いを具体的に紹介してもらえる
・学生の英語を使うモチベーションがUP！

【留学生SAIならではのむずかしさ】
・英語はネイティブでも、必ずしも社会学が専門ではない
・日本語が話せないので、学生たちの細かいケアはできない

東洋大学



まとめ

大テーマ：高校4年生を大学1年生に

- 主体的に学べるようになってほしい！
- 人と協働できるようになってほしい！
- 将来展望をもって生活してほしい！
- 「4年間の過ごし方」の可能性を探ってほしい！
- 使うための語学を体感してほしい！

社会学基礎演習のゼミの
時間を有効活用

各教員がサポートする
教室での学び

↓

(場所) 教室に捉われない学び
(時間) 1年での学びが4年間の基礎

東洋大学

2019年12月2日（月）
社会学部教授会FD研修会

社会文化システム学科の初年次教育の 取り組みと課題

社会文化システム学科
高橋 典史

2 基礎演習について

【各ゼミの共通点】

・基礎的なアカデミック・スキルの修得

・2年次以降の学びへの橋渡し

例) 「社会文化体験演習」関連の講演・報告会など（合同ゼミ）

1 学科のカリキュラムの概要



【学科の特色ある活動】

・フレッシュヤーズ・キャンパス (FC) @大学セミナーハウス (八王子)

→ 「社会文化体験演習」に関わるワークショップ、教員による講義、懇親会など



3 高橋の基礎演習について

- ・1年間を通じてPC教室を使用
→とにかくPCを使った作業を実践させる
例) 文献・資料検索、レポートやPPTの作成など
- ・新聞DBをとくに活用
- ・双方向的学習の一環としてToyoNet-ACEも利用



4 取り組むべき諸課題

- ・基礎ゼミにおける「基礎的なアカデミック・スキル」の学修内容のすり合わせ
 - ・初年次の必修科目（基礎演習、社会文化システム概論、社会学概論、社会調査入門、語学など）の関連づけ
 - ・「社会文化体験演習」以外の2年次以降の諸科目への橋渡し
 - ・「初年次でのつまづき」への対応
- 新学科に向けた要検討事項

- ・「まわしよみ新聞」の体験

＊陸奥 賢（むつ さとし）氏（観光家/コモンズ・デザイナー/社会実験者）の発案

<http://www.mawashiyomishinbun.info/>



3

4

2019年度第2回FD研修会

2019/12/2 2019年度第2回FD研修会

2019/12/2

社会福祉学科の初年次教育 —2016カリでの取り組みと課題—

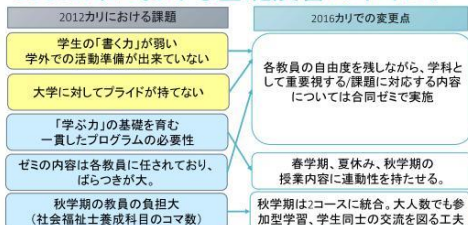
村上 一基 ・ 榊原 圭子

春学期合同ゼミでの実施内容(2019年度)

実施日	内容	講師
第4回(5/7)	井上円了と東洋大学について学ぶ	早稲田大学 坂倉 裕治先生
第8回(6/4)	アカデミックライティング① レポートの構成	早稲田大学ライティング センター 外村絵里奈 先生、嶋田大海先生
第9回(6/11)	アカデミックライティング② 引用の方法	森田先生 & ゼミ4年生 /RIASEC
第12回(7/2)	フィールドに出る心構え/PROGワークショップ	

＊合同ゼミ以外の回は、社会福祉的な課題に関する調べ学習、グループディスカッション、プレゼンテーション作成・発表、ディベート、フィールド体験、レポートライティングなどを各ゼミにて実施

2016カリにおける基礎演習のポイント



「井上円了と東洋大学について学ぶ」～学生の感想

“私立大学が差別を受けていたことも、それを見直そうと努力した人が自分の通っている東洋大学を創立した井上円了さんだったことも初めて知りました。早稲田大学や慶應義塾大学と並んで今の私立大学のため、また学問のために努めていた人が創った大学に通えていることに誇りを持ちたいと思います。”



“今日のお話にあった哲学館事件にロマンを感じて、東洋大学へのイメージが大きく変わりました。特に文部省との確執が、生々しくて面白かったです。元々東洋大学を第1志望として志して入学したのもありますが、母校への愛がさらに増したような気がします。”

村上一基・榊原圭子

1 村上一基・榊原圭子

2

村上ゼミの例

- 社会と自分との関わりを考えながら、アカデミックスキルを身につける
- 現代社会・社会福祉に対して自分たちの持つ問題意識をアカデミックな問いにし、答えを見つける方法を考える
 - ✓ビブリオバトル
 - ✓新聞記事の発表
 - ✓グループ発表(2回発表)
 - ✓レポート作成(2回提出)

春学期、夏休み、秋学期の連動



村会一基・榎原圭子

3 村会一基・榎原圭子

4

秋学期の工夫～大人数でも参加型の授業

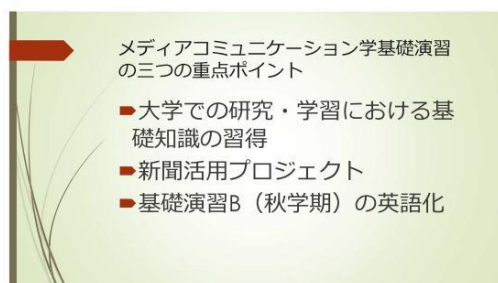
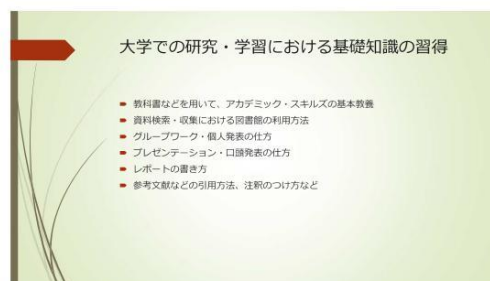
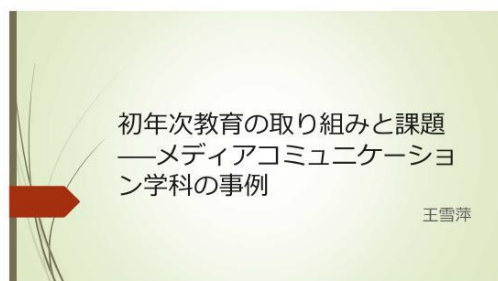
- 「社会福祉の基礎」→英語開講(英語で授業を受ける第一歩として)
- 三部構成
 - ✓プレゼンテーション
 - ✓社会福祉の課題を知る(外部講師による講演、英語での講演含む)
 - ✓レポートの作成(アカデミックライティング)
- 参加型授業のための工夫
 - ✓グループワーク
 - ✓グループワークでの学生同士のコメント
 - ✓講義でのコメントシート、レスポンの活用

課題

- 学生の主体的な授業への参加
- 文献の講読の機会が少ない
- ゼミ(そして学科)へのアイデンティティを育みにくい
 - ✓合同授業が多い
 - ✓秋学期のコース減
- 学生の関心を持たせるための課題
 - ✓学生の変化(社会福祉への関心がまだ少ない学生の増加?)
 - ✓アカデミックスキルを社会福祉への関心と有機的につなげて学ばせる方法の模索が必要ではないか

2020/3/5

2020/3/5



1

2



新聞活用プロジェクトの特徴

- 大学の予算で新聞を教材として使用（朝日新聞または読売新聞が配達される（半年間で配達される新聞は切り替わる））
- 1年生から新聞を読む習慣を身に付ける
- 両新聞社による共同授業の開催
- 各ゼミに両新聞社の記者などを講師として派遣講座を開催
- 夏休み期間中の1日インターン
- キャリア教育のマスコミ塾
- 新聞の活用方法は各ゼミの担当教員に任せる

基礎演習8（秋学期）の英語化（2016年度から）

- 2016-2017年度、各ゼミの担当教員の協業によって基礎教養や、グループワーク、学生発表などを英語で行った
- 2018年度以降新聞プロジェクトと連携するゼミが増えている
- 主ゼミではNVTと日本の新聞の比較分析を英語で発表させている




主ゼミでの事例

- 春学期の2人一組による新聞記事の比較研究
- 秋学期のグループワークでの両新聞の報道の異同に関する分析研究（発表とレポート）
- 新聞社の講師派遣（社会学部社会学専攻学科O8の岩田正洋氏による講演「判断力を身につけよう」フツの記者とデスクの経験から）

初年次教育での課題（社会心理学科）

戸梶 亜紀彦

※大学生としての**主体的な学び**ができない

- 年度による違いはあるが、年々この傾向が強まっている感覚

↓

何か良い**アイデア**があれば・・・

○高校生（中学生）の感覚が抜けない？

- 先生が教えてくれる。
- 先生が連絡してくれる。
- 先生がやってくれる。

↓

先生が○○してくれる。

○書籍は正しい？

- 新聞記事やブログの内容に関する議論
 - グループ討議は比較的盛り上がる！
 - **自発的な取りまとめ役、さまざまな意見**
- 書籍（社会心理学関連）
 - **質問がバターン化**

※書籍を批判的に読めない

- ・議論するテーマを見つけることが難しい(?)
ただし、この現象は初年次に限らない

↓

どうしたものか・・・

※文献を引用するマインドの理解

- ・手にする書物に引用がないから？
- ・新聞、雑誌、テレビ番組なども引用がないから？

↓

どうしたらいいのか・・・

○文献の引用・・・？

- ・レポートにおいて引用文献を書くよう求める
ところが・・・
- ・引用文献に記述されている文献を読んでいない

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

理工学部では学士力の質保証に主眼を置き、学生に充実した専門教育を提供するように努めた。その結果、原級率は 2011 年入学生の 22.7%から 2016 年入学生の 14.7%に減少した。2018 年度は従来の FD・SD 活動を継続すると共に、理工学部教員と川越事務部職員が学生の学士力保証を目指した教育に取り組む考えである。理工学部生の学修意欲を向上させ教員の教育力を高めるために、アクティブラーニングに関する講習会を計画した。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

春・秋学期の出席状況確認（4～5 月、9～10 月）

活動実績

理工学部教員が必修科目を中心に学生の出席状況を調査し、職員が電話連絡により出席不良の学生と保証人に科目履修指導した。

成果・課題

科目履修指導件数に対して電話連絡できた割合は 95%以上を維持している。近年はこうした成果もあってか、出席不良の学生数が減少傾向にある。今後も履修指導を継続していきたい。

学修相談会（2019/9/21）

活動実績

春学期の成績を基に学生と保証人を交えた面談を行い、学生に科目履修指導した。2019 年度の参加者数は 167 名であった。

成果・課題

学修困難な学生を早期発見することは、教員が当該学生を継続的な学修指導の契機となる。学修相談会は、学生の実級率低下だけでなく学修改善、進路指導に貢献していると捉えている。

川越キャンパス FD 講演会

活動実績①

日 時 2019 年 10 月 10 日(木) 17:00-18:00
講 師 楊 明 氏
テーマ PBL 教育 - 統合的なものづくり技術を担う人材育成 -

成果・課題①

理工学研究科との共催でFD講演会を開催した。首都大学東京システムデザイン研究科の楊明先生が「統合的なものづくり技術を担う人材育成」と題目して講演された。講演内容は、国際連携プロジェクトの人材育成、企業とのコラボレーションによるPBL教育である。理工学部教員30名が参加した。他大学の人材育成事例について、本学教員が知る機会となった。

活動実績②

OMATLAB FD セミナー

日 時 2019年12月12日(木) 15:00-16:00

講 師 マスワークス・ジャパン

テーマ 教育活用事例のセミナー

成果・課題②

今年度導入した科学技術計算、およびシミュレーション用ソフトウェア MATLAB/Simulink の Campus-Wide License という包括ライセンスを活用した教育について、ライセンスの供給元である日本法人のマスワークス・ジャパンに協力いただき、教育活用事例のセミナーを開催した。学生が興味を持ち、楽しんで学べる最新機能の紹介と、オンライン自習コンテンツや授業での活用例など、デモを交えて紹介していただいた。

多くの教員から質問があり、と教育への活用の期待がうかがえた。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数(人)			HP掲載
		教員	職員	計	
7/11	PROG テスト結果 報告会	80		80	

グローバル化への取り組み

活動実績

英語による専門科目の開講

英語成績優秀者への表彰

成果・課題

英語による専門科目の開講コース数は、教員の努力により年々コース数は増えており、直近3年の開講科目数は、93, 90, 99である。しかしながら履修者が少ないのが現状であり、今後は履修者をいかに増やすかが課題である。学生の学習意欲を高めるために、理工学部長がTOEICの成績優秀者に「理工学部長賞」を授与している。

また今年度は理工学部から TGL ゴールド認定者を 5 名、シルバー認定者を 4 名輩出することができた。

基盤教育科目の学習支援

活動実績

基礎科目学習支援室

英語学習支援室

成果・課題

大学 1, 2 年生を主な対象として、学生の基礎学力修得を支援することが目的である。基礎科目学習支援室では、理工学部生が数学・物理学を修得するために、支援室アドバイザーによる学習支援を実施している。夏期・春期休暇中には微分積分学の特別講座を開催した。英語学習支援室では、出席不良学生への補習、留学方法や基礎文法の授業外学習と自主学習個別指導を行った。利用者に対して適切に学習支援できる様、目的別に利用時間帯が工夫されている。学生個人の能力は異なるため、個々の能力に応じて柔軟に学習支援する必要がある。

3) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

これまで取り組んできた FD・SD 活動を継続し、理工学部教員と川越事務部職員が学生の学士力保証を目指した教育に努める。理工学部学生の学修意欲を向上させ、教員の教育力を高めるために、今年度の FD・SD 活動を通じて課題として挙げた点を改善していく。

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

これまでのように、生命科学研究科の FD 活動と連携を保ちつつ、以下のような取組を行った。

- (1) 授業評価アンケートの実施と所見の作成
- (2) 外部講師による FD・SD 講演会
- (3) 学外 FD 推進ワークショップへ専任教員／板倉事務課職員の派遣
- (4) 全国私立大学 FD 連携フォーラム・オンデマンド講義の視聴

上記以外の FD 関連活動として、4 月 13 日に「ティーチング・アシスタント FD 研修会」を板倉キャンパスで実施している。あるいは、学部の FD 委員会の担当ではないが FD 活動に関連するものとして、「新入生基礎学力調査とこれに基づく学習支援プログラムの実施」などもあった。

次項にて上記(1)～(4)の 2019 年度活動状況について記す。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

① 授業評価アンケートの実施と所見の作成

活動実績

全学的な取組である「授業評価アンケート」に関し、本学部は全対象教員による積極的な参画を目指した。本学部の授業評価アンケートの実施状況は次の通りであった（カッコ内は全学平均値）：

【春学期】：実施科目数 100、回答有科目率 100%（97.9%）、回答率 60.9%（45.9%）

【秋学期】：実施科目数 97、回答有科目率 95.9%（97.2%）、回答率 52.4%（37.1%）

また、アンケート項目については、以下の 6 項目を生命科学部独自のオプション項目として追加し、授業実施や学生指導の参考とした：

- ① あなたはこの授業の予習や復習をして意欲的に学習しましたか。
- ② 教員は授業時間内・外の質問に快く応じ、適切な説明をしましたか。

- ③ あなたはこの分野の知識を身に付けましたか。
- ④ 教員から自主的な学習を促すための工夫や助言がありましたか。
- ⑤ 教員は学生の反応・理解度を確かめながら授業を進行しましたか。
- ⑥ 教員は学生の理解を深めよう、能力を高めようとの熱意・努力が感じられましたか。

これらも含めた授業評価アンケートの結果に対し、ToyoNet-ACE を通じて授業担当教員からの所見を学生に公開している。

成果・課題

アンケートの回答率については、全学平均よりも明確に高い数値を上げている。これは今年度に限ったことではなく、生命科学部の毎年の傾向である。アンケート結果を授業改善につなげていくためには、より確度の高いアンケート調査の実施が必須となるので、これからも回答率を高く維持していきたい。

また、理系学部は実験や実習などの手を動かす科目が多いため、講義科目主体の文系学部に比べて、学生は授業を“積極的にやった”という実感を持ち易い傾向がある。その一方で、実験・実習においては、学生と教員との関係だけでなく学生同士の関係が授業評価に影響してくる度合いも高い。そうした固有の諸事情も勘案する必要があるため、アンケート結果を読んで解釈する際には、教員には十分な注意と洞察力が求められる。

② 外部講師による FD・SD 講演会

活動実績

生命科学研究科の FD 活動と連携しながら 4 本の講演会を実施した。内訳は、教育／指導方法に関わるものが 2 本、学生理解／対応に関わるものが 1 本、教学のあり方に関するものが 1 本であった。全て板倉キャンパスの会議室で実施した。各講演会のテーマ等は次の通りである：

- テーマ： 『埼玉県の「協調学習」の取組』
講演者： 小川 剛 氏（埼玉県立総合教育センター・主任指導主事）
講演内容： ① アクティブ・ラーニングの背景について
② アクティブ・ラーニングで求められていることについて
③ 埼玉県の協調学習「知識構成型ジグソー法」の取組の紹介
④ 中高での理科の授業におけるジグソー法の導入事例の紹介
- テーマ： 『発達障害など精神的な障害や不調を持つ学生への対応』
講演者： 萩原 豪人 氏（人間総合科学大学臨床心理研修センター心理相談室長・
准教授、臨床心理士）
講演内容： ① コミュニティ心理学を土台とした障害の「見立て」について

② 障害を持つ学生への「支援」の工夫について

- テーマ： 『大学院教育の質保証と的確な評価法』
 講演者： 近田 政博 氏（神戸大学大学教育推進機構／大学院国際協力研究科・教授）
 講演内容： ① 重点化後の大学院進学動機の多様化と、学習姿勢の変化について
 ② 大学院学生の研究指導について
 ③ 大学院講義の成績評価について
- テーマ： 『大学のカリキュラムマネジメントの実質化に向けて』
 講演者： 杉谷 祐美子 氏（青山学院大学教育人間科学部・准教授）
 講演内容： ① 高等教育政策と大学のカリキュラム編成とマネジメントについて
 ② 「カリキュラムマネジメント」の内容について
 ③ カリキュラムの編成と授業科目のデザインについて
 ④ カリキュラム編成の構成要件について

成果・課題

講演会の参加状況は次の通りであった：

開催日	講演会名	参加者数（人）			HP 掲載
		教員	職員	計	
2019/7/29 15:00～16:30	埼玉県の「協調学習」の取組	10（私立高等学校 長を1名含む）	1	11	×
2019/12/9 14:45～15:30	発達障害など精神的な障害や 不調を持つ学生への対応	32（食環境科学部 教員5名を含む）	7	39	×
2020/1/20 15:00～16:00	大学院教育の質保証と的確な 評価法	17	0	17	×
2020/2/17 13:00～14:30	大学のカリキュラムマネジメ ントの実質化に向けて	17	0	17	×

講演者はいずれも熱のこもった発表を行い、本学部教職員が近時の教育動向に対応する知識や技能をアップデートする上で、有意義な講演会であった。ただ、これを実地に試してみてもの効果については、個々の教職員の裁量に委ねられているものでもあるため、検証が難しい。

また、2回目以降の講演会は参加人数の増加を意図して、学部教授会や研究科委員会の直前に実施をした。過去の参加状況に照らすと、この試みは一定の成果を挙げたと考える。しかし、生命科学部には専任教員が31名いることを考えると、さらに出席率の向上を目指す必要がある。

③ 学外 FD 推進ワークショップへ専任教員／板倉事務課職員の派遣

活動実績

これまでのように生命科学部予算内に FD 予算を確保し、学部教員が学外の FD 講演会等に参加する場合の参加費や交通費の支出を行った。また同様の予算措置が高等教育推進支援室でもなされており、そちらも利用させていただいた。詳細は以下の通りである：

〈学部予算〉

- 『授業運営で留意したい改正著作権法』（2020 年 2 月 14 日、於・東洋大学 白山キャンパス 125 記念ホール）

〈高等教育推進支援室予算〉

- 『FD 推進ワークショップ（新任専任教員向け）』（2019 年 8 月 8 日、於・浜松グランドホテル）
- 『第 21 回 関西大学 FD フォーラム』（2019 年 7 月 20 日、於・関西大学 千里山キャンパス 第 2 学舎）
- 『2019 年度 分野連携アクティブ・ラーニング対話集会』（2020 年 1 月 26 日、於・帝京平成大学 中野キャンパス 303 教室）
- 『FD のための情報技術研究講習会』（2020 年 2 月 26 日、於・追手門大学 茨木総持寺キャンパス）

以上の他に、参加申込がなされていたが COVID-19 対応のために参加が取り止められたものもあった。また、上記の他に個人研究費等を使つての参加もあったと推察できる。

成果・課題

学外の諸機関による FD 関連の催しが多くなり、教員も参加しやすい環境が整えられてきた。上記の参加も教員による自発的・主体的なもので、学習成果も上がったものと思われる。

ただ、本学部の専任教員数を考えると、まだまだ件数が少ないように思われる。日常業務の分量を考えると、学外研修までなかなか手が回らないのかもしれないが、積極的な学外研修への参加を促したい。

④ 全国私立大学 FD 連携フォーラム・オンデマンド講義の視聴

活動実績

本学が加盟している「全国私立大学 FD 連携フォーラム」は、立命館大学にサーバーを設置して FD・SD 活動用のさまざまなビデオ教材をオンデマンド方式で提供している。2017 年度より本学部教員の希望者は、高等教育推進支援室と連絡してアクセスのためのアカウント申請を一括して行なってきた。2019 年度も同様にしてアカウント取得を行い、26 名の教員が各人で教材の視聴を行なった。

成果・課題

31人の専任教員を抱える本学部のうち、26人の教員がアカウントを取得しビデオ講義の視聴に臨んでいる。e-learningのようにいつでもどこでも必要に応じて機動的に取り組めるのがこのオンデマンド講義のメリットであるため、視聴の頻度や活用のあり方については各人に任せている。何らかの縛りを設けるよりは、他のFD活動を補完する取組として便利で臨機応変な使い方を続けていければと考える。

3) 2020年度に向けたFD・SD活動実施計画 / ACT, PLAN

来年度に向けては、まず現在実施中の活動は継続して取り組むこととしたい。その際には、特に次の3点に留意したいと考えている。

生命科学部は人材の養成に関する目的として、「生命の総合的理解の上に立って、地球社会の発展に貢献する創造的思考力、かつ倫理観を併せ持った人材を育成」することを掲げている。この目的は学生の教育に於いてだけでなく、その教員の成長や資質能力の向上にも深く関わると解される。そこで生命科学分野との関連をもったFD・SD研修会等を実施したい。

また、教員の学生理解力や対応力を増進するための取組も引き続き企画していきたい。本学部のように理系の学部においては、研究室等における人間関係が複雑化しやすい。そうした状況の中で、悩みや問題を抱えてしまう学生への対処や支援について、教員も勉強を続けていく。

さらに、FD研修会等への教員の出席率の向上については、引き続き課題として残っている。よって来年度の計画についても、できるだけ多くの教員が参加できる途を模索しながら取り組んでいきたい。

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

2018 年度までは、①FD 研修会の開催（年に 2 回）、②学生との意見交換会の実施、③シラバス点検、④授業評価アンケート、⑤TA 研修会の実施を主な活動とした。特に 2018 年度には、FD 研修会を教授会開催日に開催することにより、2017 年度までより参加者を倍増させることができた。2019 年度の FD 活動の推進についても、基本的には 2018 年度までの活動を継続・充実させることを主眼とした。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

①ICT 活用ワークショップ

活動実績

* 日時 2019 年 11 月 6 日（水）14:40～15:50

* 場所 講 306 教室

* 講演者と講演内容

藤原喜仁氏（情報システム部情報システム課）…Chromebook の基本的な使い方について

北 真吾氏（人間環境デザイン学科）…ACE を利用した授業中の資料配布や課題提出、

GoogleSheet を利用したオムニバス授業の出席・成績管理について

高橋健介氏（生活支援学科子ども支援学専攻）…Chromebook の授業での活用事例について

熊澤拓也氏（健康スポーツ学科）…Chromebook の授業での活用事例について

成果・課題

Chromebook を実際に触り、学生の立場で授業での活用事例などを体験できたので、大変わかりやすかったとの感想を多くいただいた。対面の授業ではなかなか意見が出ない場合でも、共有ファイル上に、コメントを書き込むことにより、ディスカッションが活発になる効果もあったとお話も、実際に体験することにより、より実感できた。また、講演後、早速、ゼミで共有ドライブを作成したり、共有ファイルを教員同士で共同作業する際や、学生複数名で指導案を作成する際などに活用しているとの声も聞かれた。講演時間が 1 時間と短かったため、少々盛沢山であったので、この企画は来年度も継続して実施したいと考えている。

②発達障害学生に対する合理的配慮を考える～事例から具体的な修学サポートを探って～

活動実績

＊日時 2020年1月8日（水）14:40～15:40

＊講 306 教室

＊講演者と講演内容

杉田記代子氏（健康スポーツ学科）…以下のような流れでお話いただいた。

- 1) 発達障害の概略（診断名の整理）
- 2) 大学生の発達障害の特徴と留意点
- 3) 事例
- 4) 発達障害学生に対する合理的配慮

成果・課題

発達障害と一言と言っても、実際には、自閉症スペクトラム障害、ADHD（注意欠如・多動症）、LD（学習障害）が重なり合っている。教員としては、診断することよりも、本人が何に困っているのかを知り、支援することが大切であり、例えば、朝の授業に来られないのであれば、場合によっては、生活を記録させ、問題解決のために何をしなければいけないかを共に考えたり、本人が何に困っているかを明らかにするために MSPA（発達障害者用要支援度スケール）も有効であることがわかった。医師であり大学教員でもある先生から、実際の事例を挙げながら、どのような支援をされたのかを聴くことができ、大変参考になった。先生が最後に述べられた一近視の人が眼鏡をかけるように、発達障害についても困りごとを軽減するにはどうすればよいのか、科目の修得要件を変更することなく配慮することが合理的配慮であるという言葉は、非常に納得のいくものであった。今後も、取り上げて行きたいテーマである。

FD 研修会①②の参加状況

開催日	研修会名	参加者数（人）			HP 掲載
		教員	職員他	計	
2019/11/6 14:40～15:40	ITC 活用ワークショップ	49	9	58	×
2020/1/8 14:40～15:40	発達障害学生に対する合理的配慮を考える～事例から具体的な修学サポートを探って～	45	8	53	×

③学生との意見交換会

活動実績

＊日時：2019年6月25日（火）12:15～12:55

＊場所：学生ホール

* 内容：授業内容や施設・設備、学生生活に関する学生からの要望の聴取・意見交換

成果・課題

学生の参加人数は25名とやや少なめであった（昨年度は45名）が、貴重な意見を得ることができ、大変有意義な意見交換会であった。今年度も学生ホールにて、5～6名ごとにテーブルを囲み、グループディスカッションをしながら、1枚の模造紙に意見を付箋で貼っていくという方式を取った。「改善して欲しいこと」と「続けて欲しいこと」で付箋の色を変える方法は昨年と同様のやり方とのことだが、良いアイディアである。「続けて欲しいこと」として、キャリア支援室や図書館の自習スペース、スポーツ大会、テスト期間中の朝ごはんや個々の先生方の授業の良い点（例：Chromebookを使用した授業）などポジティブな意見も多数見られた。また、この意見交換会への感謝の意見も複数見られた。今年度ならではの「改善して欲しいこと」としては、赤羽台へのキャンパス移転を2021年に控え、赤羽台移転後の運動施設に関する不安、特に課外活動場所についての不安に関する意見が多く見られた。こうした意見については、関係部局等での検討課題としたい。また、次年度は、ゼミ担当教員等を通じて、この会を周知し、もっと参加学生数を増やしたいと考える。

③学生との意見交換会の参加状況

開催日	研修会名	参加者数（人）			HP掲載
		学生	教職員	計	
2019/6/25 12:15～12:55	学生との意見交換会	25	9	34	×

④シラバス点検

活動実績

* 日程：2020年2月～3月

* 内容：「シラバス作成のためのガイドライン」に則り、次年度開講全科目について、FD委員を中心に組織した点検委員（学科・専攻各3名）によりシラバス点検を行った。

成果・課題

標準レベルにおいても、事前・事後学修時間や成績評価の方法・基準について、チェックが入らないシラバスが散見されたので、今回は、標準レベルにすべてチェックが入ることを目標にシラバス点検後の修正に力を入れた。次年度は、さらに発展レベルにもより多くチェックが入れられるようにしていきたい。

⑤授業評価アンケート

活動実績

* 日程：2019年6～7月 および 2019年12月～2020年1月

* 内容：「専任教員は各学期 2 科目（通年 4 科目）、非常勤の教員については 1 科目の授業評価アンケート（対学生）を実施した。

成果・課題

授業評価アンケートは、教員及び学生も Toyonet-ACE を使用した授業評価の実施に慣れつつあり、スムーズな実施・活用に結びついている。授業時間を使わないで済むことも良いことと考える。

⑥TA・SA 対象 FD 研修会

活動実績

* 日時：2019 年 4 月 13 日（土）13:00～15:00

* 場所：講 307 教室

* 内容：以下のような時程で行った。

13:10～13:25 ミニ講座「TA/SA の役割と留意事項について」

13:25～13:35 ワーク①TA/SA ハンドブック内容理解度チェック 1

13:35～13:50 ワーク②TA/SA ハンドブック内容理解度チェック 2

13:50～14:00 休憩・第二部ディスカッションテーマの提示

テーマ A：「クラスで親しくなった学生からコンパに誘われ、メルアド等の連絡先を交換したいと言ってきた。どう対応すべきか」

テーマ B：「大人数講義科目、ゼミナール、実験科目、外国語による授業等、特定の授業においてより教育効果を高めるためには、教育補助員として当該授業でどのように学生・教員と関わりを持ち、どのような手法を取るべきか」

14:00～14:30 ワーク③第二部グループディスカッション

14:30～14:55 発表・質疑応答

14:55～15:00 講評・閉会挨拶

成果・課題

今年度は、TA に加え SA も対象として研修会を行うことにより、グループディスカッションを活発に行うことができ大変有意義であった。前半の「TA/SA の役割と留意事項について」のミニ講座も参加者みな真剣に耳を傾けてくれ、それを踏まえたうえで、第二部のディスカッションに入れたことは大変良い流れであった。ディスカッションのテーマも身近であったため、大変活発なディスカッションとなった。ミニ講義のパワーポイントを作成された方、そしてこの研修会の流れを企画された方に敬意を表したい。また、ToyoNet-ACE にて、欠席者に課題が出されたが、その課題提出者 1 人 1 人にフィードバックコメント書いてくださった高等

教育推進支援室の職員の方にも感謝したい。次年度以降も同様の形で、また、より多く参加できるように、他の行事との重複を考慮した日程調整を行いたい。

⑤TA・SA 対象 FD 研修会

開催日	研修会名	参加者数（人）			HP 掲載
		TA	SA	計	
2019/4/13 13:00～15:00	TA・SA 対象 FD 研修会	3	19	22	×

3) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

2020 年度のライフデザイン学部における FD 活動の推進については、2019 年度に実施した内容を、さらに拡充させていくことが必要であると考えます。私を含め FD 推進委員のほとんどが今年度初であったため、不慣れな点が多々あったと感じる。その反省を踏まえ、次年度は多少改善できると考えている。

FD 研修会の開催については年度内 2 回の開催を維持しながら、学部教員の希望を参考にし、よりニーズに沿った研修テーマを検討していきたい。特に障害学生への合理的配慮については、戸惑う点も多く、今後も研修すべきテーマであると考えます。

学生との意見交換会については、2017 年度から実施しているグループディスカッション形式が好評であり、次年度以降も継続的に実施したい。次年度は学生への周知方法を工夫し、より多くの学生を集めたいと考える。

シラバス点検については、点検は毎年行われているにもかかわらず修正が十分に行われていないことが問題である。次年度に向けて、点検後の修正を確実に進めてもらうための方策を検討したい。

授業評価アンケートについては、Toyonet-ACE を用いた授業評価のシステムが浸透し始め、各授業でスムーズに実施できている。引き続きスムーズな実施が行えるよう、学部内での体制作りを整えたい。

また、TA・SA 対象 FD 研修会は、次年度以降も同様の形で実施していきたい。今年度より、TA だけでなく SA も参加としたことは大変有意義であった。

以上

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

総合情報学部では 21 世紀のユビキタス・コンピューティング・ネットワーク時代に必要不可欠な情報通信技術に習熟し、社会を先導できる「第一級の情報の創り手・使い手」の輩出を目的として FD 活動を行ってきた。この教育方針を実現させるために、これまでの具体的な活動として、春・秋学期の出席状況確認、学修相談会、全科目シラバス点検、基礎教育・専門教育・ICT 教育の学修支援に関する取り組み、春・秋学期の履修相談、7. 全学年の学生に対して担当教員を割り当てるクラス制度、学部としてのグローバルの取り組み、等を行ってきた。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

①春・秋学期の出席状況確認（4～5 月, 9～10 月）

活動実績

春学期は 1 年必修科目の総合情報学概論、2. 3 年次総合情報学演習と 1、2 年次英語必修科目において、秋学期は 2. 3 年次総合情報学演習と 1、2 年次英語必修科目において、各担当教員を通して、学期はじめの 4 回の出欠調査を行った。

成果・課題

出席不足の学生に電話連絡で状況の確認を行っており、その結果について、情報を共有した。なお、前学期の単位取得状況が芳しくない学生にも同時に教学課から電話連絡等を行った。

②学修相談会（9 月 21 日）

活動実績

学生及び父兄との学修相談を行いその結果を教員間で共有し、学生にフィードバックした。

成果・課題

今年は 2 月に予定していた学修相談会は、新型コロナウイルスの影響で中止となった。面談を希望する保護者もいたが、書面や成績資料を送るなどして対応した。

③全科目シラバス点検（1月）

活動実績

2020年度の全科目シラバス点検を教務委員会が中心となった。1月～2月を目処に確認調査および修正依頼、再確認の作業を行った。

成果・課題

各学科の教務委員と教員が科目担当者に必要な修正を依頼して、3月半ば頃までに作業は滞りなく完了した。

④基礎教育・専門教育・ICT教育の学修支援

活動実績

総合情報学部では、独自に情報学習支援室を開設し、学生同士が学び教え合う場を用意し、1年次からのICTスキルとコミュニケーション能力醸成の支援を行った。

成果・課題

1年次の必修演習科目において、ITパスポート試験合格程度の情報処理技術の習得を目指した。

⑤コンピテンシー評価とPROGテスト

活動実績

コンピテンシー評価とPROGテストの結果をGPAと比較して今後のカリキュラムの参考にした。

成果・課題

秋学期には、授業アンケートを実施したが、概ね良好な結果であった。

⑥全学年の学生に対して担当教員を割り当てるクラス制度

活動実績

全学年の学生に対して担当教員を割り当てるクラス制度を活用し、学生と教員間のコミュニケーションを密に行える支援を行った。

成果・課題

1年次春学期必修科目として基礎ゼミナールⅠをクラス単位での講義体制で実施したり、個別履修相談を実施した。

⑦専門英語講読の開講

活動実績

4年次を対象にした英語による専門科目として、専門英語講読Ⅰ・Ⅱをゼミ単位の少人数クラスで開講した。

成果・課題

研究室単位で専門に関連させながらグローバル化に対する取り組みが行えた。

⑧SGU ルーム運営

活動実績

7号館1階にSGUルームを開室し、英語学習全般、留学等グローバルに関する学習相談や学習支援を行った。

成果・課題

本年度は助教を中心に対応や指導に当たり、本学部より交換留学生2名が最終選考に通過し、2020年度夏より1年間カナダの本学提携校 Douglas College に1名、オランダの大学に1名それぞれ派遣されることになった。

⑨英語カラオケ・チャンピオンシップ 2019

活動実績

2017年度から総合情報学部でスタートした「英語カラオケ・チャンピオンシップ」では、14名が決勝進出を果たした。学部教員や協賛企業の審査員らによる審査の結果、優勝者から3位および特別賞が表彰され、協賛企業から豪華賞品が贈られた。参加者にはTGポイント5、来場者にも1ポイント授与された。また、このイベント参加への一つの動機付けとして、常時7号館シアターにカラオケ最新機 LIVEDAM STADIUM が設置されており、誰でも自由に利用できる。

成果・課題

今年度は、総合情報学部創設10周年記念イベントの一環として開催したが、当日東武東上線の人身事故の影響で決勝大会にノミネートされながら3名が欠場となり残念であった。来年度以降も開催する予定であるが、白山を会場としての開催の要望が他学部の参加者等から寄せられているので、今後も国際教育センターと交渉していきたいと考えている。7号館シアターのカラオケ機の利用状況は無償貸し出し先の第一興商にフィードバックした。

⑩ 英語学習法に関するセミナー（４月５日）

活動実績

例年４月初旬の新入生ガイダンス時に、東進ハイスクール講師、一般財団法人実用英語推進機構代表理事で、文部科学省の「英語教育の在り方に関する有識者会議」の委員でもある安河内哲也氏による、英語学習法に関するセミナーを開催した。

成果・課題

新１年生全員が参加し、７０分にわたりペアワークを取り入れ英語によるコミュニケーション活動や音読練習を行った。

⑪ 学部独自の海外語学研修の実施

活動実績

海外語学研修として、本年度より３週間、アメリカ。カリフォルニア州立米カーズフィールド校に１８名の学生を派遣した。研修参加者は語学研修で学んだことについて、２回のグループプレゼンテーションと１回の個人プレゼンテーションを実施した。

成果・課題

今年度は専任教員２名が全行程にわたり同行し、安心・安全で充実した学習環境が確保された。

3) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

これまで通りの活動の継続と共に、各コースでの学習意欲、授業改善のための FD 活動を提案し、実施していく予定である。また、グローバル化推進の一環としての海外研修の候補地として、アメリカ本国のカリフォルニア州立大学ベーカーズフィールド校で引き続き実施する予定である。

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

食環境科学部は、食環境科学科（フードサイエンス専攻、スポーツ・食品機能専攻）と健康栄養学科の 2 学科からなる。FD 活動においては 2018 年度に引き続き、①新入生基礎学力調査の実施とこれに基づく学習支援プログラム、②FD/SD 講習（講演）会、③FD 推進ワークショップ（新任専任教員対象）への派遣および報告会、④TA・SA 講習会、⑤安全講習会、⑥学会発表・参加奨励金制度、⑦学部独自の評価項目を含む授業評価アンケート、⑧食育作文コンテストによる食育活動といったプログラムを実施してきている。

2018 年度は、FD・SD 研修活動として、「管理栄養士国家試験出題基準（ガイドライン）改定、国家試験対策に関する講演」「英語論文の読ませ方のコツセミナー」の 2 講演を開催した。英語関連の教授法についての講演、「英語論文の読ませ方のコツセミナー」では、株式会社アルクの講師をお招きし、学生の卒業論文、修士論文や英語論文の輪講指導の際に必要な、英語論文の読み方のコツを指導するための効果的な教授方法についての講演をしていただいた。英語関連の教授法に関する悩みを持つ教員は多く、すぐに授業で実践できる内容であったと、高い評価を得ることができた。

2019 年度の FD・SD 活動は、昨年度実施の管理栄養士国家試験出題基準（ガイドライン）改定、国家試験対策に関する講演をさらに発展させ、e-ラーニングを活用した国家試験対策方法や効果的な模擬試験の活用法、模擬試験の成績をデータベース化し、国家試験合格までの効果的な教育方法の構築等について、外部講師をお招きし、FD 活動を実施することを検討していた。また、昨年度行った「英語論文の読ませ方のコツセミナー」を発展させた内容で、英語教育に関するプログラムを 3 月中旬に実施することを予定していた。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

大学教育における機械翻訳の活用について

活動実績

2018 年度の「英語論文の読ませ方のコツセミナー」に引き続き、本年度は下記の内容でセミナーを開催する予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染防止策として、次年度に延期とした。

- ・目標設定（機械翻訳のメリット・デメリット、AI と語学、学生へのアドバイス）
- ・学生の Reading Skill を向上させるテクニック（前回のコンテンツの復習）
- ・機械翻訳について（機能、弱点、ミス、サンプル）

- ・ 学生に伝えたい機械翻訳アドバイス（機械翻訳の効果的な使い方のアドバイス）

【話題提供】 英語で発表する：西洋式と和式のプレゼンの違い

講師：株式会社アルク 教育ソリューション部 英語プログラムディレクター

Bence Tamas, Ph.D. 先生

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数（人）			HP 掲載
		教員	職員	計	
2020/3/4 11:00～12:30	「大学教育における機械翻訳の 活用について」 —新型コロナウイルス感染防止 のため次年度に延期—				

本セミナーは 2020 年度前期に同じテーマでの開催を検討している。

3) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

来年度の FD・SD 活動として、今年度実施できなかった「管理栄養士国家試験合格までの効果的な教育方法の構築」等に関するセミナー、また英語教育に関するセミナー「英語論文の読ませ方のコツセミナー：大学教育における機械翻訳の活用について」を実施することを予定している。

さらに来年度は教職員の FD・SD に関する具体的なニーズを調査し、2020 年以降の本学部の状況に即したプログラム、教育の更なる質的向上を目指したプログラムの検討を行っていく。

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

国際学部は 2017 年度の発足後 3 年が経過した。この間の新しい試みとして、クォーター制の導入、全講義科目の英語化および全日本人学生の長期海外留学（グローバル・イノベーション学科）、海外英語実習の必修化と一部科目の英語化（国際地域学科）が実施されている。これらの試みは概ね順調に推移しているとみられるが、一方、①クォーター制は国際学部のみが導入しているため他学部開放科目や教員の人的運用に関して弾力性が欠ける、②全日本人学生の長期海外留学や海外英語実習の必修化は教育面以外での教職員の実務的負担が大きい、③講義の英語化は受講学生の英語力の格差により理解力に差があるなど、問題点も少なくない。これらの課題については、引き続き学部・学科において組織的に共有を進め改善を図っていく必要がある。一方、授業評価アンケートやシラバス点検、PROG テスト結果説明会については既にしっかり定着しており慣例化している。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK**活動実績**

授業評価アンケート、シラバス点検、PROG テスト結果説明会を例年どおり実施した。また、11 月 8 日には「専門科目と英語科目の協働」についての FDS D セミナーを外国語教育委員会と合同で、さらに 11 月 26 日には「海外留学にともなう単位認定の最新事情」をテーマとした FDS D セミナーを国際交流委員会と合同で開催した。また、新高等学校学習指導要領（2018 年 3 月公示）に対応して、高校地理必修化に関する研修（清風南海学園本館、皇學館大学文）に教員 1 名を派遣した。

① 授業評価アンケート

2019 年アンケート実施科目数は、国際学部全体で 340 科目、回答者延べ数 6,694 名であった。

② PROG テスト結果説明会

2019 年 7 月 9 日 15:00-16:00（於：特別会議室（8 号館 7 F））、PROG テストにつき、専門の業者を招いて本年度の結果や、他大学・本学内他学部との比較などについて解説を受けた。

③ 「専門科目と英語科目の協働」についての FDS D セミナー

2019 年 11 月 8 日 16:30~18:00（於：国際学部資料室（8 号館 7 F））、FD 委員会・外国語教育委員会共催で、明治大学 河野円教授を招いて「専門科目と英語科目の協働－その鍵は教材開発－（“Material Development as the First Step in Collaboration between Disciplines

and English Teaching Faculty”）」とのテーマでご講演頂いた後、参加者による意見交換を行った。

④ 「海外留学にともなう単位認定の最新事情」についての FDS D セミナー

2019 年 11 月 26 日 15:00~17:00（於：第三会議室（6 号館 1 階））、FD 委員会・国際交流委員会共催で標題のセミナーを開催し、堀田泰司 広島大学森戸国際高等教育学院教授・副理事（国際企画担当）から「単位制度の歴史とアジアにおける発展、そして、フレキシブル教育の中での未来像」とのタイトルで、また小幡浩司 福井大学国際地域学部教授からは「日本における留学単位認定の現状と課題」とのタイトルでご講演頂いた後、参加者による意見交換を行った。

⑤ 高校地理必修化に関する研修

2019 年 8 月 9 日、開催された人文地理学会主催の令和元年度地理教育夏季研修会

（於：清風南海学園本館）、10 日に開催された皇學館大学と E S R I 主催の GIS day in 伊勢 2019（於：皇學館大学）に参加した。

⑥ シラバス点検会

2020 年 2 月 12 日 11:30（於：特別会議室（8 号館 7F））において、学部教員による分担で、専任、非常勤の双方のシラバスについてピアレビューをおこなった。分担および集約は教務課職員が行い、ピアレビュー結果を担当教員に送付して基準に従って修正を行った。

成果・課題

① 授業評価アンケート

アンケート対象は国際学部全体で 335 科目（昨年 319 科目）、回答者延べ数 6,694 名（昨年 6,028 名）であった。評価結果は、グローバル・イノベーション学科・国際地域学科とも前年度より全体的に向上した。

② PROG テスト結果説明会

7 月 9 日の教授会の前に開催され、32 名の教員の参加があった。数値化された項目やその内容については、個人情報の秘匿の観点から公表できないが、専門の業者による説明があり、本年度の結果・本学他学部の学生との比較・他大学の同系統の学部との比較について、詳細の解説があった。

③ 「専門科目と英語科目の協働」についての FDS D セミナー

日本の大学において第 2 言語で専門科目を教え、あるいは専門科目の中で第 2 言語も教える場合には、学習者に言語と知識という 2 つの負荷をかけることになるため、慎重なカリキュラム構築と専門科目・英語それぞれの担当者の密接な連携が必要となるが、その実践例として、理系専門科目の教材を作成し英語の授業で使用したケースを河野円 明治大学教授から紹介してもらい、その後参加者との意見交換を行った。

④ 「海外留学にともなう単位認定の最新事情」についての FDS D セミナー

GGJ および SGU の取組みが進展し、東洋大学においても留学交流実績が拡大、海外留学の形式・内容・期間が多様化する中、留学中の単位認定に関して国際学部は 2018 年にガイドラインを改訂し、UMAP の UCTS を参照基準としつつ合理的で学生に分かりやすい単位認定のあり方を模索してきた。しかるに、海外の大学において多様な科目履修をおこなってきた学生に対し、東洋大学のどの科目に対応させるのか、対応する適当な科目がない場合はどのように対応するのかなど、なお課題も多い。

かかる状況に鑑み、国内外における留学交流の事情に詳しい専門家 2 名を招き、留学にかかわる単位認定の最新事情、好事例（Good Practice）の紹介を受けながら、将来の課題について意見交換を行った。なお、本セミナーは国際学部以外の教職員にも公開する形で実施した。

④ 高校地理必修化に関する研修

8 月 9 日に開催された 人文地理学会主催の令和元年度地理教育夏季研修会において、高校の地理必修化に対応した文部科学省の次期高校学習指導要領の公表を踏まえて、高校での地理の授業の変化を、同研修会に参加して状況を把握した。

翌日の 10 日に、皇學館大学で開催された、同大学と E S R I 主催の GIS day in 伊勢 2019 で、高校教育や大学教育における GIS の活用方法について、A R C—G I S のソフトの使い方や応用方法について説明を受けた。

⑤ シラバス点検会

特別課題についての記載漏れが多く見られたものの、昨年の点検結果より要修正数が減少し、総じて改善していることが確認された。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数（人）			HP 掲載
		教員	職員	計	
2019 年 7 月 9 日	PROG テスト結果説明会	32	2	34	×
2019 年 11 月 8 日	「専門科目と英語科目の協働」 についての FDS D セミナー	10	5	15	×
2019 年 11 月 26 日	「海外留学にともなう単位認定 の最新事情」についての FDS D セミナー	20	5	25	×
2020 年 2 月 12 日	シラバス点検会	31	4	35	×

3) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

クォーター制導入、全日本人学生の長期海外留学実現、英語講義内容の高度化、海外英語実習の必修化と一部科目の英語化といった諸課題については、PDCAにより効果を検証しつつ引き続き改善を図る。また、高校学習指導要領に対応した本学部の教育のあり方（高校におけるプログラミング、地理などの新規科目の必修化）に対応したFDについても実施していく。慣例となった授業評価アンケート、シラバス点検、PROGテスト、各種セミナー研修参加については、一層着実な定着を図っていく。

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

2017 年度は国際観光学部が発足して最初の年であり、FD 活動は、国際地域学部時から展開してきた活動に引き続き、1) 授業評価アンケート、2) PROG 報告会や FD 講演会といった外部から識者を招聘してのイベント、3) シラバス点検会を実施した。授業評価アンケートは教員間に十分に定着し、一定の成果が得られ、また、イベントにおける異種の教育現場からの講演は、普段接することのない経験談を聴くことができ、知見を広めることに大いに役立った。さらに、シラバス点検会では、関連分野の教員がグループになってお互いのシラバスをチェックしあうことで、同僚ではあるがそこまで知りえない授業の内容を知ることができたのはその後の授業運営に効果的であった。

2018 年度は、前年度に引き続き、1) 授業評価アンケート、2) PROG テスト報告会や FD 講演会といった外部から識者を招聘してのイベント、3) シラバス点検会のほか、4) GPA 講習会、5) コース別プレゼンテーション（3 回）、6) 特色ある授業プレゼンテーションを実施した。PROG テスト報告会においては、株式会社リセアックの方を講師とし、本学部学生の結果について、全学や近接分野の学部とも比較しながら、学年別、入試経路別にデータが示され、アンケート関連分析の結果も説明された。これにより、学科のアドミッションポリシーとディプロマポリシーを再確認し、それに応じた学生の資質を客観的に知る良い機会になった。

FD 講演会においては、山梨大学大学院教授の森澤正之氏に、反転授業を組み合わせたアクティブラーニングの実践について講演いただき、今後活用できる有力な授業方法の一つであるという認識に至った。

そして、2018 年度からの新たな試みであるコース別プレゼンテーションは、教員間で情報共有の目的で、学科のすべてのコースを十分に認識しておくことをねらいに各コースのプレゼンテーションを企画した。さらにコースに加えて、すべてのコースにまたがる英語担当教員から、学科の語学学習及び国際活動についての説明もしてもらい、お互いに各コースの理解、そしてコース間リンクできる学修内容の認識が深まったと考えられる。

最後に、特色ある授業プレゼンテーションでは、学部内の教員 2 名による授業の紹介を行った。このプレゼンを年度末に実施することにより、これまでの FD 活動を踏まえた身近な教員の最新の授業内容を知ることができ、新年度へ向けての意識付けとすることができた。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

学科コース別プレゼンテーション

活動実績

国際観光学科にあるコース、ツーリズム・エグゼクティブマネジメント・観光政策・サービスコミュニケーション・観光プロフェッショナルの 5 コースに加えて、英語科目の教育指導内容について各コースの教員がプレゼンを行った。

成果・課題

各コースにおける育成したい人材像などを確認することができた。コースが異なるとなかなか授業名だけでは分からない教育内容や、コースの中でどのような意味合いで観光学分野の用語が使われているかなどを全教員で共有することができた。さらに、語学教育や留学生教育についても説明を受けて、ともすとはっきりと分けてしまいがちな専門教育と語学教育とが、学部教育のミッションとしてどのようにリンクしているのかについて確認し合うことができた。課題としては、このような説明会で得た理解を目に見える形で今後のカリキュラムに反映させていくことである。

学部カリキュラムに関する外部評価報告

活動実績

学部のカリキュラムについて、外部の有識者にインタビューを行った結果について報告した。有識者の内訳は、ホテル総支配人クラス 3 名、ホテル人事関連 3 名、ホテル産業などのコンサルタント 2 名、出版及び教育関連 3 名であった。

成果・課題

今年度は、カリキュラムについて、外部から意見を聴く外部評価を実施した。評価報告は、①学部カリキュラムのあり方、②大学時代に学んでほしいことがらに分けられる。以下、外部からの意見をまとめた。

① について

本学部の英語名称が、International Tourism Management とあるように、グローバルな現場で活躍できるマネージャーの育成という観点から、多彩な科目を用意する必要がある。一方で、現場での鍛錬という機会としてインターンシップ系科目は良い試みであるが、内容によってはあまり意味のない活動になってしまう。最低 3 カ月は働く必要がある。さらに、マネジメントは重要であるが、日本の伝統文化・歴史・宗教・芸術などの教養的科目が手薄になっている。観光学という視点と、グローバル人材には欠かせない知識であるので充実をしたほうがよい。

②について

マネジメント・ビジネススキルはしっかり学んでほしい。公的資格にも挑戦してほしい。例えば、中小企業診断士・宅建士・税理士・会計士など難関の資格にも挑戦すべきである。

課題

- ① 及び②から、日頃の教育で共通したことからを感じている教員もいたと思われ、外部評価を聴くことで再認識できた。これをきっかけに、新たなカリキュラムの考案にあたっているいろいろな示唆を得ることができた。課題としては、すでに教員間で動きはあるものの、なかなか充実しない学部卒業生のネットワークを構築して業界内の情報をより多く得ることや、国内外の観光系大学間でのネットワークづくりが急務である、そして、本学部がマネジメント教育に重きを置いていることを今以上にアピールする仕掛けが必要である。

PROG テスト 報告会

活動実績

現在、「社会人基礎力」、「学士力」といった、大学教育を通じたジェネリックスキル育成への期待が高まっている。PROG(Progress Report on Generic Skills)は、学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同で開発した新しいタイプのプログラムで、学士教育を通したあらゆる段階において、学生のジェネリックスキルを可視化するツールとして役立てることができるというものである。

PROG はジェネリックスキルをリテラシーとコンピテンシーの2つの観点から見るものであり、本学ではリテラシーを「知識活用力」とコンピテンシーを「行動実践力」と定義し、学生へのアンケートによって測られている。報告会では、測定結果を報告していただき、意見交換を行った。

成果・課題

報告会では、本学部学生の結果について、全学や近接分野の学部とも比較しながら、学年別、入試経路別にデータが示され、アンケート関連分析の結果も説明された。学科のアドミッションポリシーとディプロマポリシーを再確認し、それに応じた学生の資質を客観的に知る良い機会になったと考える。

1年生の行動実践力について、その中の特に親和力や行動力は、他大学の平均を上回るということで、これはアドミッションポリシーの「相手の立場に立つ」「リーダーを経験」という志向の強い学生を入学させており、ポリシーに適っている。

他方、3年生の行動実践力についても大学平均を上回っており、入学後2年経過しても持続しているとわかった。これに対して、3年生については、情報分析力や課題発見力をもっと身につけることが課題であることが分かった。加えて、2017年に新しく学部として発足し、アドミッション・ディプロマポリシーに合致した学生を入学させ4年後社会に送り出すことができたのかも重要な課題であるが、これについてはもう少し時間をかけて経年的にも検討したい。

特色ある授業の紹介

活動実績

学部教員 2 名がそれぞれの授業において特色ある取組を紹介したのち、学部の全教員と意見交換を行った。

成果・課題

最初に、宮崎裕二専任講師から国際観光学研修に関する特色ある取組が紹介された。国際観光学研修は、大学の海外研修制度をとおして海外留学・研修（1 か月程度から 1 年間）に参加する学生、あるいは、今後、大学の海外研修制度をとおして参加しようと検討する学生から構成されている。1 年生と 2 年生の日本人の学生と海外留学生が受講している。

授業の目的は（１）学生が意味のある留学・研修を実現するために「自ら」が訪問する国を多面的に研究する、（２）学生が興味・関心あるテーマを決めて、グループでディスカッションしながら、海外留学のイメージを具現化する、（３）学生が留学・研修先で使用される実践的な英語運用能力の基盤を構築することである。

これらの目的を達成するために 2 つの特色のある取組が行われている。一つ目はオペレーションの工夫である。ディスカッションのテーマを教員ではなく学生自身に決めさせて、情報収集させている点である。自らが関心のあるテーマのためしっかりと予習を行うこと、堂々と発表できるようになるという指摘があった。講義教室からアクティブラーニング教室に変更したことによって、発表者が自信ある態度でプレゼンテーションを行うことができた、受講生同志のコミュニケーションが高まったという報告もあった。

2 つ目は、海外留学前の学生に海外の疑似体験を積ませる工夫である。外務省「海外安全虎の巻」を活用しながら、日本国内にしながら学生の危機管理意識を高めている。次に、図書館ガイダンスの導入である。海外からも日本の情報を積極的に収集できるように、本やニュースの探し方や、企業研修の方法を図書館の担当者によって行われている。さらに、実践的な英語の基礎的語学を学修するために、海外留学・研修が疑似体験できるテキストを活用していた。

次いで森下晶美教授から産学＋学内連携によるゼミ活動の取組について報告がされた。2018 年度の産学連携 PBL 型ゼミ運営の事例である。森下ゼミでは、ゼミ生が、実社会において、プロジェクトを立案、推進できる能力を育成することを目的に、産学連携のゼミを実施している。産学および学内の協力も得ることで、学生にも多角的・実践的な学びができることに意義があると考えられている。

ゼミ生は、2018 年 4 月から 9 月にかけて、JTB 総合研究所、阿寒観光協会、アドベンチャー・トラベル・ツーリズム・アソシエーションと連携しながら、まちづくり推進機構北海道・阿寒におけるアドベンチャー・ツーリズムによる活性化のプロジェクトに取り組んだ。アドベンチャートラベル・ワールドサミット(ATWS2021)」を誘致する一環として、阿寒地区におけるアドベンチャー・ツーリズムの可能性を調査し、4 つの提案として「ツーリズム EXPO JAPAN 2018」において、最終的に英語プレゼンテーションを行うものである。

現地でアドベンチャー・トラベル・ツーリズム・アソシエーションの方からのレクチャーやガイドさんとのアクティビティを体験する中でアドベンチャー・ツーリズム顧客の知的好奇心の高さなど、実際に自分たちが経験したからこそわかったものが多く、貴重な体験ができたという学生のコメントがあった。

アドベンチャー・トラベル・ツーリズム・アソシエーションから学生のプレゼンに関して、当学学生の提携先となるビジネスパートナーを探してもよいほどの質の高いプレゼンだったという総合評価を得た。さらに、「まだ、日本では認知度の低いアドベンチャー・ツーリズムについて、日本の大学生がここまで調べているとは思っていなかった」や「母語でない英語でプレゼンを行った勇気には敬意する」といった評価を得ることもできた。

これに対して、本試みに関する今後の課題として、次の3点が指摘された。

- ① 関係者が多くなるほどスケジュール調整が難しく、相手方に合わせるため、計画が大幅に狂ってしまったこと。
- ② 調整・手配に手間がかかること、枠組みをいつまで持続できるか不透明だったこと。
- ③ 研修は効果的だが費用（現地調査の旅行費用）がかかること。

キナン大学講演会

活動実績

本学協定校の中国暨南（キナン）大学深圳旅行学部の新（Li Guangming）教授（学部長・研究科長兼任職）を招き、中国における観光教育の現状に関する講演会を開いた。

成果・課題

キナン大学は、深圳という中国本土の最南端に位置しており、東南アジアをはじめとした留学生は国内で最大規模の国際色豊かな大学である。授業も中国語と英語で行われている。国際的な人財を育成しているという点で本学部との教育について情報を共有することは大変意義があった。

李教授から学部のミッション、カリキュラム、取り組んでいる国際プロジェクトなど丁寧に説明がなされた。また、キナン大学の観光学教育で力を入れている内容について、将来本学でも取り入れていきたいことがらもあった。李教授のお話から、本学部でも国際教育プロジェクトをより積極的に進めていくべきであると感じた。

シラバス点検会

活動実績

学部内の5コースに、語学科目を取りまとめた1チームを加えた6グループに、教員を振り分け、グループの中で同僚教員のシラバスを点検した。大学全体でのシラバス作成指針に則ったルーブリック及びチェック項目に従って、修正の必要があるか否かについて相互チェックをした。

成果・課題

総数 683 件のシラバスチェックを実施した。大学が定めるシラバス作成ガイドラインに沿っているか否かをチェックすることの重要性に加え、教員が他の教員の授業内容を点検することで、学部全体がどのような内容の授業を行っているのか知り合うことができるため、本シラバスチェックは興味深いことであり、自身の教育活動の啓発にもつながると思慮する。また、形式・内容双方のチェックをすることは意義があった。なお、今回の反省としては、非常勤講師の分もすべてチェックするため、その総数が多大になってしまい、やむを得ずコースや語学など分担制にしており、お互いにチェックするシラバスが偏ってしまったことである。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数（人）			HP 掲載
		教員	職員	計	
2019/04/11 14:30～15:00	学科コース別プレゼンテーション（ツーリズム・エグゼクティブマネジメント）	32	2	34	×
2019/05/16 14:00～14:30	学部カリキュラムに関する外部評価報告	31	2	33	×
2019/05/16 14:30～15:00	学科コース別プレゼンテーション（サービスコミュニケーション・観光プロフェッショナル）	31	2	33	×
2019/06/13 14:30～15:00	学科コース別プレゼンテーション（観光政策・英語）	31	2	33	×
2019/07/11 13:30～14:15	PROG テスト 報告会	32	2	34	×
2019/12/12 12:30～13:30	特色ある授業の紹介	27	3	30	×
2020/01/16 12:30～13:00	キナン大学講演会	29	4	33	×
2020/02/13 11:00～12:00	シラバス点検会	31	3	34	×

3) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

2019 年度の活動において特筆できることは、「外部評価報告」であり、2018 年度に実施し好評だったため継続した「学部教員の特色ある授業の紹介」である。いずれも教員から大変好評だったため、2020 年度も継続して行っていきたいと考えている。

通常授業は基本的に一人の教員で行っており、授業運営で悩んでいることなども、FD 活動としての授業紹介や意見交換を通じて共有できることは、学部教育の全体の質の向上にもつながっていくと考えられるためである。それに加えて、1 回は外部からの講演者を招くことも広く知見を得るという観点から実施したいと考えている。

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

本学部、情報連携学部（Information Networking for Innovation and Design:INIAD）は、2017 年 4 月に開設した新学部であり、2019 年度は開設 3 年目にあたる。

INIAD の人材の養成に関する方針は、

コンピュータ・サイエンスを基盤としたカリキュラムにより、チームを組んで、コンピュータを使いこなし、情報を通して連携し、素早くアイデアを形にできるような人材を養成する

事であり、この方針に基づき

新しいビジネスを構築できる人材、新しい公共システムを構築できる人材、新しい製品や新しい情報サービスを技術とデザインの両面から具体化できる人材など連携イノベーションを起こせる中核人材を養成する。

事を教育成果の目的としている。

教育の特徴としては、以下の点あげられる。

- ・ 1 年次にはすべての学生がプログラミングとコミュニケーションを集中的に学び、情報連携のための素地を身に付ける。2 年次からはエンジニアリング、ビジネス、デザイン、シビルシステムの 4 コースに分かれて専門的な知識や実践的なスキルを身に付け、3 年次には各コースの専門性を活かしたコース横断のチーム実習を行う。
- ・ 入学初日から学生一人一人が自分の PC を持参することを義務付け、授業は黒板やホワイトボードのない教室で教材をプロジェクターに投影して行う。キャンパス内はペーパーレスを徹底し、課題提出や試験についても、各自の PC からオンラインで行う。
- ・ MOOCs を活用した反転型の教育を実施し、知識を受け取る部分は授業前に配信されたオンライン教材で予習をしておく。一方、キャンパス内では少人数教室で、教員や学生同士による対話中心の授業や、グループワークやプレゼンテーションなどを行う。

・教員組織は、専任教員と特別教員（ハーフタイム）と助教によって構成されており、講義科目と演習科目、実習科目を連携させた教育や、複数コース開講の科目では同一のシラバス、同一の教材を使うなど、教員のチームによる教育を実施する。

2018 年度までは、学年進行でこれらの教育体制を構築しつつ、対面による会議や研修会のみではなく、全教職員が Slack や Google 社の G Suite を活用し、授業の効果的な運営や教材のブラッシュアップ、学生の習熟度や達成状況の共有などを行うことで、リアルタイムで短期の PDCA サイクルを回してきている。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

①学部の特性と入学者とのミスマッチの解消

活動実績

本学部では、前述のような特徴ある教育を行っているため、学生には、入学を決める段階から、こうした学部の特性やアドミッション・ポリシーを十分に理解してもらう必要がある。

これまでの教授会やその他のミーティング等において、実際に授業を担当している多くの教員から、教育改善のためには、まず入試の段階において、学部の特性と入学者とのミスマッチを防ぐことが最優先事項であるとの共通認識が得られた。

そのため、まずは 2018 年度から AO 型推薦入試において、INIAD MOOCs 型を試験的に導入した。これは、本学部が初年度の必修科目で用いているプログラミングに関する MOOCs の教材の一部を Web 上に公開し、受験生はその教材を元に各自で学習を進め、試験当日に公開した教材の範囲内から出題する筆記試験と面接によって可否を判定する入試である。

MOOCs の教材は、授業を担当している複数の専任教員が、学生の理解度などから毎回ブラッシュアップを重ねている実際の教材であり、それを Web 上で学習することで、志願者にとっては入学前に、自分がこの学部での学習に適しているかを判断することができる。

導入の結果、当初予想していたよりも、MOOCs の教材による学習に前向きに取り組んだ受験生が多く、この入試による入学者は、追跡調査においても入学後の学習が比較的スムーズにできていることが判明した。

そのため、2019 年度に関しては、この形態を他の推薦入試にも展開するとともに、これまで書類選考とインターネットによる面接のみで判定していた海外直接入試でも、この MOOCs の仕組みを利用したオンラインの試験を開始した。また、一般入試やセンター利用入試においては、本学部との適合性をはかるために、学部での面接を加えた入試方式を新設した。

これらの入試の実施にあたっては、毎回、事前に学部長と作問担当者、面接担当者によるミーティングを実施し、作問意図や面接での質問内容の確認や共有、前回の反省や次回の改善点などを綿密に話し合った上で実施している。

成果・課題

この結果、次項で記載する入学後の学力試験の得点が上がりつつあり、それに伴い、初年度のコンピュータ・サイエンス系の科目の教育内容も、徐々にレベルアップすることができている。

課題としては、本学では 2020 年 3 月の時点で、2021 年度に実施するすべての入試方式や方法を決定しておかなければならないため、2020 年度に実施した入試で入学した学生の状況を踏まえて、2021 年度入試の見直しや改善をすることができず、改革のサイクルに時間がかかってしまうことである。情報連携学部としては現代の情報通信をベースとした時間感覚を東洋大学が持つ事を強く要望する。

②数学リメディアル教育の充実

活動実績

本学部では、「文・芸・理」の融合によるイノベーションについて教育研究を行うという観点から、入学試験の方式も理系に限定していないが、この 3 年間、新入生に対して 4 月当初に学力試験を実施し、その後の各学生の学習状況を分析してきた結果、高校 1、2 年生レベルの数学の学力が、入学後のプログラミング等の学習成果と相関関係が強いことが分かっている。

このため、2018 年度からアドミッション・ポリシーに、「入学後の学修に必要な、基礎学力としての数学の学力と論理的思考力を有している人材を求める」ことを追記するとともに、高等学校で数学を十分に学んで来なかった学生に対しては、2018 年度から、数学リメディアル教育を実施している。

具体的には、学部のカリキュラム担当教員と学部の数学関係科目の担当教員の中から、この数学リメディアルを管理監督する教員を選出し、学部との連携の下で、元高等学校の数学教員を採用し、学生の指導にあたっている。

2018 年度は試験対策講座の実施や個別指導が中心であったが、2019 年度からは、入学時の学力試験で数学ⅠA、ⅡB が不合格だった学生について、全員を 10 名程度の小規模クラスに配属し、時間割を決めて、学期期間中に毎週補習授業を実施することとした。

また、この学力試験の合格を、一部の正課科目の履修条件にするとともに、春学期や秋学期の終了時には再試験を実施し、学生は在学中に必ずこの試験に合格することを学部全体で促すようにした。

成果・課題

この数学リメディアル教育の充実により、1 年次終了時の学力試験の不合格者は圧倒的に減少した。また、1 年生のプログラミングの学習状況も徐々に向上してきている。

ただし、高校時代に数学ⅡB を履修していない学生、また、どうしても数学になじむことができない学生が少数おり、それらの学生の指導が課題である。

②コース横断連携実習の運営

活動実績

2019 年度は、学部教育の核のひとつとなる、3 年次のコース横断連携実習を実施した。

この連携実習では、2 年次からエンジニアリング、ビジネス、デザイン、シビルシステムの 4 コースに分かれていた学生が、1 学年 400 名の中で、学生主体でコース横断の 80 チームを作り、共通テーマに対してプロジェクトを立案、遂行し、成果を発表する。

INIAD のテーマである文芸理融合、連携力、多様性を体現する重要科目であり、初年度である 2019 年度については、共通テーマを「2020 オリンピック・パラリンピックに貢献する」に設定した。

学生には学年当初に実習の趣旨や、プロジェクト/研究の進め方、チームの作り方、ロジカルシンキング等について授業を行った後、学部長の下で 20 数名の専任教員がチームを組んで学生の指導を行った。ただし、指導にあたっては、「学生が自主的に取り組むもの」とし、学生にはグループワークを進めるための場所と SNS を提供するが、教員が具体的な進め方を細かく指示することはない。

このことで、本学学租の井上円了先生の信条である「自分の頭で考える」「考えて自分から動く」という姿勢を身につけさせ、多様な視点を意識すること、想像力を使って立場を変えてみる、個だけでなく全体を考えることなど、実社会でプロジェクトを進めていくために必要な能力を育成する。

この実習の運営にあたっては、1 年間を通して Slack 上で教職員の専用のチャンネルを作り、リアルタイムで学部長や担当教員が積極的な情報共有や意見交換を行いながら実施した。

当該チャンネルでは、実習の全体方針や学生の指導方法の共有、各チームの進捗管理、中間報告や最終評価についての情報共有をするだけでなく、各教員がそれぞれの指導上の相談をしあったり、事務局も交えて各チームのプロジェクトに必要な施設・設備の利用や機器、仕組みの検討などを行い、学部全体での教育を実施した。

また、対面によるミーティングも複数回実施し、特に 3 月 4 日に実施した学部の FD 研修会では、この実習に関する全体的な総括や、全教員の意見交換を実施した。

成果・課題

実習の成果として、2020 年 1 月 8 日に各教員の下で全 80 チームの最終発表が行われ、1 月 15 日には各教員から推薦された 11 チームによる学部全体の発表会が行われた。

各チームの最終発表のスライドは、MOOCs 上にすべてアップされており、INIAD の全在校生や教職員がいつでも閲覧できるようになっている。

各チームの成果は様々であるが、オリンピック・パラリンピック実施に伴う社会的な問題を情報連携の観点から解決する方策として、公共の Wi-Fi をセキュリティで保護されたプライベートネットワークへの変換するシステムや、IoT センサやアプリを使った会場のゴミ問題の解消プロジェクトなどが提案され、一年間のプロジェクトを通じて試作と評価までを実施した。

また、外国人観光客向けに、ハラルフードが提供可能なレストランの検索や、言語を使用せずに直観的に使用できる案内や地図、観光地や免税店などの様々な情報の提供、困ったときにリアルタイムに回答を得られたり、緊急時の通報を助けるアプリやサイトなど、オリンピック・パラリンピックに伴う国際化を意識したプロジェクトも多かった。

学部の FD 研修会では、チームの中での学生の意欲や貢献度に違いがあることや、2020 年度に向けて、学生指導の方法や評価基準について話し合われた。

3) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

2020 年度は、本学部が完成年度を迎えることとなる。

学部の教育研究活動については、これまでの 3 年間に於いて、おおむね当初予定していた設置時の計画は順調に実現できてきているが、2021 年度からの新カリキュラムの構築に向けて、学部長の下、執行部においてこれまでの教育研究活動の検証と見直しを行っていく予定である。

研究科/センターFD・SD 活動報告

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

文学研究科はディシプリンが確立した独自色の強い 8 つの専攻からなり、各専攻において少人数の大学院生を手厚く指導する態勢がとられている。そのため FD・SD の観点から本研究科に共通する活動や目標等を設定しにくい状況が続いていた。

そうしたなか、本研究科において実施されている「授業評価アンケート」は、アンケート内容の改善を経ながら、一定の成果を収めてきた。またアンケートの集計結果は研究科委員会で報告され、研究科内で共有されてきた。ただし、アンケートの回収率が低く、全体像がつかみにくいという課題は 2018 年度も残っていた。

また 2018 年度には新たに研修会の開催が検討された。しかし本研究科の課題や問題意識に合致する講演のテーマや講師を具体的に絞り込めるほどには機が熟しておらず、引きつづき本研究科に適した研修の機会をじっくり模索することになった。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

① 研修会 (1) SCOPUS 講演会

活動実績

文学研究科長のイニシアチブのもと、以下の要領で研修会を行った。

講師：井上淳也氏 ソリューション・コンサルタント（エルゼビア・ジャパン株式会社）

題目：Scopus 活用セミナー—人文社会学分野の投稿先選定と論文のインパクト

対象者：文学研究科教員および文学部教員、文学研究科博士後期課程在籍者

内容：1. Scopus で可能な検索 2. 収載タイトルの有無および評価指標の確認 3. 論文のインパクトの見方（被引用数、論文評価指標）

成果・課題

グローバルな文献検索のツールとしての Scopus が、人文社会学系の研究教育においていかなる利用価値を有するのかについて知見を深める機会となった。講演後にエルゼビアによって実施されたアンケートの集計結果からも、Scopus その他の文献データベースの使用実績にかかわらず、各参加者にとって非常に有益な講演会だったことが確認できた。講演の配布資料は、不参加の教員にも配布された。

研修会の告知は、文学研究科委員会および文学部教授会で教員向けに、さらに文学研究科各専攻で博士後期課程在籍者向けに行われたが、参加者は想定よりもやや少なかった。研究科委員会の開催日に実施されたものの、委員以外の大学院担当教員および学部教員には必ずしも都

合の良い日時ではなかったようだ。また、すでに日常的に Scopus を利用している教員や、逆にグローバルな文献検索ツールの恩恵が乏しい分野の教員も少なくなかったと考えられる。

② 研修会 (2) 大学院における学修成果測定

活動実績

文学研究科長のイニシアチブのもと、専攻長会議において以下の要領で研修会を行った。

講師：新山文洋氏（東洋大学高等教育推進支援室）

題目：大学院における学修成果測定

対象者：文学研究科専攻長会議メンバー、その他の関係者

内容：1. 大学基準協会の提言 2. 学部版の学修成果測定指標 3. 検討のポイント 4. 検討の
手順とスケジュール 5. 他大学の状況

成果・課題

講演では大学基準協会による他大学の審査状況をふまえ、本研究科において学修成果を把握する方法およびディプロマポリシーとの関係性を明確にするための検討のポイントが確認された。研修会および専攻長会議を通して、本研究科における指標策定の方向性が定められ、各専攻においてディプロマポリシーの見直しおよび学修成果測定指標の策定が行われた。

③ 院生アンケート

活動実績

学年末の12月18日から1月30日にかけて、院生を対象にしたアンケートを実施し、回答用紙は教務課窓口に用意された箱に回収された。実施前に研究科FD委員によってアンケート項目の見直しが行われ、設問の文言や選択肢が変更され、より適切なアンケートへと改善がなされた。集計結果は研究科委員会で報告され、回答結果が資料として配付された。

成果・課題

前年度までの反省をふまえ、各専攻での回収率をあげる取り組みが奏功して、回答者数は前年度の2倍強の30名に上昇した。博士前期課程1年生の回答人数が全体の半数近くを占めたのは、学習継続の意思の強さの現れと捉えられる。集計結果からは、全体として授業運営や研究指導への満足度が高く、少人数教育の有効性が確認できた。自由記述の項目には、授業内容、運営方法、院生研究発表会、研究環境等に関して個別の要望や提案等も書かれていたが、その大半は各専攻での対応および各教員の取組によって改善が期待できる事柄であった。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数（人）			HP 掲載
		教員	職員	計	
2019/6/12 14:45～15:45	Scopus 講演会	29 (含院生)	4	33	×
2019/10/16 16:40～17:40	大学院における学修成果測定	10	4	14	×

3) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

2019 年度の活動を継続して、2020 年度も研修会と院生アンケートを中心に FD・SD を進めていく。研修会としては本研究科の各専攻に共通する課題についての講演会を開催して研鑽の機会としたい。とりわけ近年、研究科において留学生（外国人院生）の割合が増えており、日本語能力を向上させる仕組みや、アカデミック・ライティングの指導の必要性が高まっている。そうした現状に鑑みて、留学生の指導に焦点を当てた研修が行われる予定である。研究科独自の課題に沿った研修のテーマを探る一方で、学部の FD でも本研究科と共通する課題に関わる研修会が実施されているので、共同での開催も視野に入れたい。また院生アンケートも引きつづき実施して、院生の実情や教育の効果を把握するとともに、データとして積み重ねることで、組織的な改善への一助としたい。

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

【経済学専攻】

- ① 年度 2 回（春学期と秋学期）授業評価アンケートを行い、学生評価結果を研究科委員会にて全教員（全委員）に提示し、改善点を洗い出し、対応を図ってきた。さらにフィードバックコメントを学生に公開してきた。
- ② 博士前期課程においては、全学生が出席する論文発表会を開催し、各学生の報告について指導教員とともにその他の教員もコメントすることを繰り返し、教員相互間の指導能力の向上に努めた。
- ③ 博士後期課程においては、年 1 回の論文中間報告のほか、D3 時点での博士論文報告会に指導教員以外の教員の参加を広く募り、様々な観点からコメントすることにより、教員相互間の指導能力の向上を図っている。

【公民連携専攻】

- ① 年度 2 回（春学期と秋学期）授業評価アンケートを行い、学生評価結果を全教員に送付して要望への回答を記載した後、全院生にフィードバックしてきた
- ② 修了予定セメスターのはじめに最終時点に、院生も参加できる中間報告会、最終報告会を開催し、主査・副査以外の教員も含めてコメントすることで、教員の指導の質の向上と標準化を図ってきた。
- ③ 月 1 回、専攻に所属する専任教員の会議を開催し（非公式）、授業内容や方法に関する事項の議論を行ってきた。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

（経済学専攻・公民連携専攻合同）FD 会合

活動実績

2019 年 11 月 14 日に「外国人留学生の指導方法について」をテーマとして経済学研究科全体の FD 会合を実施した。

成果・課題

経済学研究科では外国人留学生の割合が高く、日本人学生に対する研究指導とは違った苦労も多いため、創意工夫が求められる。しかし、これまではそれぞれの教員が持つ留学生指導上

の問題点、指導方法について情報を共有するフォーマルな機会がなかったため、今般はじめてFD 会合という形式で討論することとしたものである。その結果、各教員から忌憚のない悩みや問題点が出され、またこれまで多くの留学生を指導してきたベテラン教員からアドバイスを得ることができた。今回はフリートーキングに終始した感があるが、次年度以降は外国人留学生に対する指導方法について、社会制度や文化的背景に対する理解も含めて体系的に学び討論することにより、全教員の指導力の向上を図ることが課題である。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数（人）			HP 掲載
		教員	職員	計	
2019/11/14 15:30～16:30	経済学研究科 FD 会合	13/26	1	14	×

（経済学専攻）授業評価アンケートの実施とフィードバック

授業評価アンケートを ToyoNet-ACE（manaba）のアンケート機能を用いて春学期の7月と、秋学期の1月の2回行った。回答結果を集計し、フィードバックコメント案を記載したものを10月および2月の研究科委員会で配布し、改善点を洗い出して対応を図った。研究科委員会で了承されたフィードバックを ToyoNet-ACE 上で学生に公開した。

成果・課題

寄せられたすべてのアンケート回答に対してフィードバックコメントを付けるようになったため、学生たちもかなり具体的な要望や提案を出してくるようになってきた。アンケート回答率は、春学期は休学者を除く在籍者26名中24名（回答率92%）、秋学期は25名（回答率96%）であった。また、学生個別の悩みや苦情などに対しては、担当教員と十分に打ち合わせをしてフィードバックコメントを作成することにしたので、問題点の客観的な洗い出しに効果的であった。今後は、アンケート項目作成段階から、各教員の参画を促すことが課題である。

（経済学専攻）研究発表会の実施

活動実績

博士前期課程・後期課程合同の研究発表会を春学期に計5回、秋学期に計9回開催した。毎回、教員・学生間で活発な討論が行われた。

成果・課題

在学は全員参加が義務付けられているため、毎回、教員ばかりでなく学生からも厳しい質問が出され、白熱した討論となった。指導教員を含めた参加教員が議論をリードし、さまざま

な観点からコメントすることにより、FD 効果の向上が図られた。また 1 月の「修士論文最終発表会（口述試験）」においては、多数の教員が一堂に会して同席し質問・コメントすることで、相互に指導能力の向上が図られた。今後は、研究発表会の参加教員が当日発表者の指導教員（主査・副査）に留まっているため（各回の参加教員は 4 名～7 名程度）、指導教員以外の教員の参加を促すことが課題である。

（公民連携専攻）授業評価アンケートの実施とフィードバック

活動実績

リアルタイム評価支援システム REAS を用いて匿名回収アンケートを実施。実施時期は 8 月及び 2 月。①評価のあった科目の評価内容を全教員に公開、②担当教員が要望への回答や感想、教員からの要望事項等を記載、③全教員および全院生に公開（メーリングリスト、ToyoNet-ACE を活用。また、専攻担当教員会議および研究科委員会にも開示している。

成果・課題

この方式は 10 年以上実施してきて要望に基づきカリキュラムやシステムの改善も行っており特段の課題はないと自己評価している。

（公民連携専攻）論文報告会の実施とフィードバック

活動実績

春学期修了生に対しては 4/27 中間報告会、6/22 最終報告会、秋学期修了生に対しては 10/4 中間報告会、12/14 最終報告会を開催。それぞれ、教員、院生が 20～30 名程度参加。報告終了後、必要に応じて主査、副査を中心に指導方針の検討を行い、結果は対象院生にフィードバックされた。なお、秋学期修了生の一部院生からの要望もあり、7/26 にプレ中間報告会を開催した。

成果・課題

中間報告会⇒最終報告会⇒口述試験のフローは安定しており、原則としては問題ない。ただし、社会人経験のない留学生など研究や論文執筆能力の乏しい院生の指導は難しい面もあり、その一助として、プレ報告会を開催し教員が院生の進捗状況を把握することは有効と考えられる。ただし、日本人の社会人を含む全院生に必要なわけではないので、当面公式化（義務化）はせず、指導教員が必要と判断する院生に参加を促す方式で進めることにしたい。

⑥（公民連携専攻）専攻担当教員会議の開催

活動実績

月 1 回開催される研究科委員会後に開催し、院生の指導等も議題とした。

成果・課題

コミュニケーションの強化と認識の共有には効果がある。一方、非公式の会議であるため、具体的なアクションに移すには研究科委員会を経る必要があること、議題が体系的でなく部分的な議論にとどまりがちであること等問題が顕在化してきた。

⑦（公民連携専攻）外部向け講義の授業参観可能

活動実績

出願予定者向け外部講義の授業参観を可能にした。

成果・課題

通常の講義も参観可能とすることには履修者に抵抗があるので、まず、出願予定者向けに行っている公開講義に教員が参加できるようにした。延 10 名が参加した。非公式の試みであり事後アンケート等は義務付けていない。

3) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

（経済学専攻・公民連携専攻共通）

2019 年度の FD 会合の開催が両専攻合同で 1 回のみに留まったので、2020 年度は各専攻別に春学期・秋学期に各 1 回ずつ開催し、それぞれの専攻に特有の問題点・課題を洗い出し、所属教員の研究指導能力の向上、指導ノウハウの共有につなげていく。

（経済学専攻）

①引き続き年度 2 回（春学期、秋学期）の授業評価アンケートを実施する。回答率 100%を目指し、アンケート項目作成段階から各教員の参画を促す。

②博士前期課程・博士後期課程合同の研究発表会・修士論文発表会・博士論文報告会における指導教員以外の参加を促す。また、各報告会後に教員間で議論をする場を持つことを検討する。

（公民連携専攻）

① 年度 2 回（春学期と秋学期）授業評価アンケートを行い、学生評価結果を全教員に送付して要望への回答を記載した後、全院生にフィードバックする。（継続）

② 修了予定セメスターのはじめに最終時点に、院生も参加できる中間報告会、最終報告会を開催し、主査・副査以外の教員も含めてコメントすることで、教員の指導の質の向上と標準化を図ってきた。（継続）

③ 月1回開催する専攻所属教員会議を公式化し、授業内容や方法に関する事項の議論をより体系的に行いうる体制とするとともに、同会議の一環として、客員教員を含めた拡大会議を年2回開催することとし、内規を定めた。(新規)

④ 公開講義の授業参観を可能にするるとともに、講義後に何らかのフィードバックを行うことを検討する。(新規)

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

- A. 授業改善について
- B. 修士論文中間報告会・修士論文発表会・博士課程中間報告会・博士課程公聴会の実施

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

A. 授業改善について

「学生アンケート調査」（授業アンケートも兼ねている）は、2019 年 11 月 6 日（水）から 2019 年 11 月 30 日（土）までとして実施した。その結果は、「令和元年度学生授業アンケート調査報告」としてまとめ、経営学研究科委員会の資料として公表した一方、大学院の講義と演習を担当しているすべての教員にフィードバックした。

学生アンケート調査についての具体的な内容と結果は以下の通り。

○調査期間：2019 年 11 月 6 日（水）～2019 年 11 月 30 日（土）；○調査方法：講義と演習の時間にアンケート票を配布；○回収方法：担当教員を通じて高等教育推進委員の金子に提出；○回答者 39 名；○調査項目：(1)志望理由、(2)講義・演習・研究指導及び講義科目の満足度、(3)満足あるいは不満の理由、(4)授業を受講して得た成果または役立ったこと、(5)学習・研究を進める上で、思うようにいかなかった点、改善点、(6)現在設置している講義科目以外で、設置してほしい科目や研究領域（前期課程のみ）、(7)博士学位論文の中間報告会の回数や時期および形式についての改善すべき点（後期課程のみ）(8)講義科目や演習・研究指導、ならびにその他要望事項（授業運営、院生生活、設備など）

アンケートの結果は次の通りである。

- ・志望理由は、中小企業診断士や税理士の資格取得が多い。
- ・満足度については、昨年同様に、各専攻とも「大変満足」「満足」の回答が圧倒的に多い。
- ・満足の理由としては、教員から十分な指導が受けられ、講義、カリキュラム内容が良いことを挙げる院生が多かった。
- ・不満の理由には、中小企業診断士と経営学修士が求める内容や志向性に関する指摘があった。
- ・授業で得た成果や役立ったことについては、実務への活用や論文の書き方が習得できたこと、を挙げる院生が多かった。

- ・院生の学習・研究上で思うようにいかなかった点や改善点については、大学院での学習と仕事の両立に苦労があった点はかなり多くの院生から回答があった。また、修士論文のテーマ選定、執筆の進め方に不安を持っている学生もいた。
- ・現在設置されている講義科目以外に設置して欲しい科目や研究領域については、マーケティング等の科目が挙げられている。
- ・博士学位論文の中間報告会の回数や時期および形式についての改善すべき点では、院生同士の意見交換の場としての中間報告会も実施の要望があった。
- ・講義科目や演習・研究指導およびその他の要望(授業運営、院生生活、設備等)については、・校舎の温度調整の改善について、かなり多くの学生から希望があった。また、プリンターの改善を希望する院生が多かった。さらに、ホワイトボードのインクに関する改善の指摘も多かった。

B. 修士論文中間報告会・修士論文発表会・博士課程中間報告会の実施

令和元年度では、経営学・マーケティング・会計ファイナンスの3専攻はそれぞれ修士中間論文報告会、修士論文発表会ならびに博士課程中間報告会、博士課程公聴会を実施した。中間報告会と論文発表会それぞれの日程と参加者数は、下表の通りである。

<博士前期課程>

専攻	修論中間報告会 (1)	修論中間報告会 (2)	修論発表会(論文口 述試験)(1)	修論発表会(論文口 述試験)(2)
経営学	実施日:7月31日 参加者数:報告者7名	実施日:11月6日 参加者数:報告者7名	実施日:2月3日 参加者数:発表者7名	
マーケ	実施日:7月31日 参加者数:報告者6名	実施日:11月6日 参加者数:報告者6名	実施日:7月31日 参加者数:発表者1名	実施日:2月3日 参加者数:発表者5名
BA	実施日:7月27日	実施日:11月9日	実施日:2月2日	
F ①	参加者数:報告者15名	参加者数:報告者15名	参加者数:発表者14名	
	実施日:7月25日	実施日:11月28日	実施日:1月30日	
②	参加者数:報告者4名	参加者数:報告者3名	参加者数:発表者1名	

注：BAF専攻の①は、企業家・経営幹部養成コースと中小企業診断士登録養成コース；②は会計ファイナンス専門家養成コース；をそれぞれ示している。

< 博士後期課程 >

専攻	博士課程中間報告会(1)	博士課程中間報告会(2)	博士課程中間報告会(3)	博士課程公聴会
経営学	実施日:7月31日 参加者数:発表者1名	実施日:11月6日 参加者数:発表者2名	実施日:3月14日 参加者数:発表者1名	
BAF				

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

法学研究科では、FD・SD 活動として、2018 年度まで①FD 講演会、②教員相互の授業参観、③研究科長・専攻長による学生からの意見聴取、④学生アンケート、⑤修了生アンケートを行ってきた。①は、FD に関わる重要テーマについて外部から講師を迎え教員を対象とする講演会を開催してもらうことによって、教員の FD に関する意識を高めることを目的とした。②は、教員が他の教員の授業を参観し、または逆に他の教員に授業を参観してもらうことによって、自己の授業方法の改善を目的とするものである。③は、執行部の教員が学生と面談を行うことで、FD 活動に学生の視点を取り入れ、FD に学生の意見を反映させることを目的とするものである。④は、講義内容についてのアンケートで、次年度のカリキュラム作成に役立てる目的で実施し、⑤は、特に修士論文作成過程についてのアンケートで、今後の研究指導に役立てることを目的としている。これらの活動を通し、授業改善に関して一定の成果を上げてきた。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

①教員による授業相互聴講

活動実績

実施期間は 12 月 4 日から 12 月 10 日まで行った。聴講者から 6 講義について、コメントが寄せられた。

成果・課題

留学生に対する講義のやり方で参考となる事例、またテキストの有効な活用法、英語での講義のやり方の工夫など多くの示唆があった。課題としては、実施期間が短かったこともあり、コメントが寄せられたのが 6 講義についてのみであったことから、今後は、実施期間を長めに取り、もう少し多くのコメントが提出されるようにしたい。

②研究科長・専攻長による学生からの意見聴取

活動実績

実施日は 2019 年 12 月 2 日（月）・4 日（水）・6 日（金）の昼休み。担当者は、研究科長、公法学専攻長、私法学専攻長がそれぞれの日を担当した。面談に来た学生は 4 名であった。

成果・課題

データベースの充実や大学院予算での古本の購入など学生からの要望を聴くことができ、さらに、カリキュラムの不便さなど、学生の率直な意見を直接聞くことができた。課題としては、対面での意見聴取としているため、時間設定が厳しくなり、時間的に面談に来られない学生もいたと思われる。今後は、社会人の学生がいることも考慮し、もう少し時間の幅を広げつつ、特に夜間にも時間を設けるようにしたい。

③学生アンケート

活動実績

実施期間は2019年12月18日から2020年1月22日までで、回答は7人(私法学専攻1名、公法学専攻6名)であった。

成果・課題

どのような科目を学生が重要視しているか、また新規科目についての要望、大学院での交際交流イベントに関する要望、カリキュラムの改善点など、次年度のカリキュラム作成にあたっての参考となった。課題としては、アンケートの目的からすれば、全学生からのアンケートの提出が望ましく、今後は、提出をできるだけ徹底できればと思っている。

④模擬講義講習会

活動実績

2020年2月18日(火)16時から17時まで実施。報告者は1名で、参加教員は6名であった。

成果・課題

憲法の第1回目の講義を想定した講義が30分ほど行われ、そのあと、参加の教員からの、講義での教科書や、レジュメ・パウポの利用方法、tOYO-netの有効な使い方、時間配分などについてアドバイスがなされ、教員同士でも、講義の進め方について活発な議論がなされた。本年度は、短期招聘教員の講演会や、実務家による講演会など他の行事との日程調整がうまく行かず、模擬講義講習会を1回しか行うことができなかったが、次年度からは複数回開催できるようにしたい。

3) 2020年度に向けたFD・SD活動実施計画 / ACT, PLAN

2020年度についても、法学研究科では引き続き、①授業相互参観、②研究科長・専攻長による学生からの意見聴取、③模擬講義講習会、④学生アンケート、⑤修了生アンケートを中心にFD活動を実施する予定である。FD講演会については、法学研究科に所属する教員は、

例外なく法学部に所属しており、法学部の開催する FD 講演会に参加している。そのことから、2019 年度は FD 講習会を実施しなかったが、今後は、学部と大学院で異なる点を考慮しながら、研究科主催の FD 講演会の開催を検討したい。

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

社会学研究科では、これまで授業の内容及び方法の改善を図る組織的な取り組みを実施するため、研究科内に「社会学研究科改革ワーキンググループ（以下WGと表記）」を発足させ、研究科委員会終了後にWG会議や研究科委員全体からなる全体会を開催し、積極的にFD活動に取り組んできた。2018年度も、その一環として在籍学生に向けたアンケートを、例年通り実施し、満足度と改善への希望・アイデアをすくい上げた。それら結果を、WGにて検討したところ、増加している留学生に対する指導体制の充実や、学部生に対する大学院進学へのPRが必要であることが認識された。

また、福祉社会システム専攻の発展的な運営を検討するため、数回にわたるWGを開催し、社会学研究科の将来像の設計も含め討議を繰り返した。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

① 社会学研究科改革ワーキンググループによる将来構想の検討

活動実績

福祉社会システム専攻の廃止、社会学専攻内のコース化について、WGにて話し合いを実施し、全研究科委員に報告、検討を行ったところである。

成果・課題

それら検討の結果は、以下の通りである。社会学専攻新コースでの学生募集開始を2020年度より行う予定となった。

大学院社会学研究科福祉社会システム専攻の募集停止について

1. 概要

(1) 福祉社会システム専攻修士課程を「社会実践学コース」に改め、社会学専攻博士前期課程（既設3コース）における学生の履修上の区分のひとつとし、学生が自らの研究テーマに即して、社会的課題を分析し対応法を策定するための実証的社会調査手法を修得させるための科目及び研究指導を配置する。このコース化に伴い、福祉社会システム専攻は廃止し、社会学専攻博士前期課程を4コースとする。

(2) 授与する学位：既設の社会学専攻と同様（修士（社会学））

(3) 定員：既設の社会学専攻に含む（入学定員10名、収容定員20名）

(4) 開始時期：2021 年 4 月

※2020 年 4 月入学をもって福祉社会システム専攻の学生募集停止

2. 背景と改組計画案

本専攻は 1996 年の専攻開設に始まり、幾度かの改組転換を経て、2018 年度より学部 2 部の社会学科および社会福祉学科を基礎とする社会人のための専攻として、白山キャンパスの社会学研究科において社会福祉学と社会学の 2 領域を教育研究の柱とした人材養成を行ってきた。この度、赤羽台キャンパス構想における社会福祉学分野の資源の集中という全学方針のもと、本専攻においても社会福祉学分野専任教員の社会福祉学研究科への段階的な移籍（2020 年度 1 名、2021 年度 2 名）が決定し、当初の人材養成目的やカリキュラムを維持することが困難となったことから、既設の社会学専攻内に社会学系の新たなコースを設け、本専攻のもう一方の柱であった社会学領域に関する教育研究の継承・発展を図るものである。

3. 社会実践学コースの目的と対象

本コースの学問領域は社会学である。オーギュスト・コントは社会学を、「実証哲学」の全体系を集約する学的領域と位置づけた。この理念は、現代の社会的課題への取り組みにおいてこそ重要である。具体的には、働き方やキャリア、寿命の伸長に伴う人生のあり方が変わりつつある現代社会の諸課題に、個々の生き方や志と照らし合わせつつ向き合い、その成果を社会に還元する人材育成に資する知識や能力を修得させることを目的とする。本コースの主な対象は、社会的課題に関心を持ち、かつ、対応を求められる立場にある社会人であり、企業の CSR 担当者や社会的企業家、非営利組織やボランティア団体のリーダー、保健・福祉領域の管理職、オルタナティブな働き方やサード・ステージでの社会活動のあり方を模索する個人などを想定する。なお、これら組織に所属しながら通学する社会人に対応するため、授業科目及び研究指導は専ら夜間及び土曜日に配置する。

4. 社会実践学コースの教育内容

現代の社会的課題との関わりにおいて自身の関心を位置づけ、建設的な議論や提言に結びつけるために必要な専門的知識を主体的に身に付け、社会的課題を分析し、対応法を策定するための実証的社会調査の技法を学ぶ機会を、以下の点を重視して提供する。

- (1) 専門的な文献検索や読解の方法の習得。
- (2) 専門的な文章表現やプレゼンテーションの方法の習得。
- (3) 自身の関心に即した実践的な調査計画の策定法とデータ分析技法の習得。
- (4) 同じ関心を持つ異分野の人々との知的なネットワークの醸成。
- (5) 研究や学習の成果を論文やレポートとしてまとめるための専門的技能の習得。

5. 科目構成

「研究基礎論」、「社会実践設計論」、「留学生のための日本語ライティング」

「基礎的データ解析法」、 「質的データ分析法」

「貧困・格差と地域社会」、「教育システムと社会構造」、「雇用・労働・ジェンダーと社会」、「ライフ・キャリアと社会」、「ケアと社会」、「社会実践学の最先端」（非常勤・講義のみ）

社会福祉学研究科へ移籍する教員を除いた専任教員 5 名で授業科目及び研究指導を担当する。コース化に伴う新たな専任教員の雇用は発生しない。

活動実績

以下の内容にて、「2019 年度社会学研究科 授業評価アンケート」を実施した。

* * * * *

問1 今年度秋学期に履修している授業コース数（「研究指導を除く」）を教えてください。

1. 0 2. 1 3. 2 4. 3~4 5. 5 以上 回答欄 ()

問2 大学院の授業内容、運営方法等についての感想を、自由に記入してください。（自由回答）

問3 大学院の授業を受講することで得た成果、役立ったことを記入してください。（自由回答）

問4 学修・研究を進める上で、思うようにいかなかった点、改善点してほしい点があれば、自由に記入してください。（自由回答）

問5 社会学研究科の基礎科目のカリキュラムについて、基礎学力を習得するのに十分だと思いますか。(1つ選択)

1. 十分である 4. やや不十分である

2. まあ十分である

3. どちらともいえない 回答欄 ()

問6 あなたの専門領域からみて、専門領域の特論・演習・（社会心理学専攻の総合研究）科目のカリキュラムは十分だと思いますか。（1つ選択）

1. 十分である 4. やや不十分である

2. まあ十分である

3. どちらともいえない 回答欄 ()

問7 現在設置されている科目以外に、どのような科目があればよいと思いますか。また、その理由も述べてください。(自由記入)

問8 現在受けている研究指導について、あなたは満足していますか。(1つ選択)

- | | |
|--------------|----------|
| 1. 満足 | 4. やや不満足 |
| 2. まあ満足 | 5. 不満足 |
| 3. どちらともいえない | |

回答欄 ()

問9 研究指導について、要望があれば述べてください。(自由回答)

問10 英語で行われる科目を、2019年度春／秋学期に受講していますか(1つ選択)。

- | | |
|--------------|------------|
| 1. 受講した・している | 2. 受講していない |
|--------------|------------|

回答欄 ()

成果・課題

設問は、回答の手軽さのため10問とした。回答者の授業履修数を尋ねたQ1に続いて、Q2～Q4は大学院の授業に対する評価を聞き出す設問で、授業評価アンケートとして中心的な設問である。そしてその後続くQ5～Q9は、2015年度から大学院FDを目的に実施した学生アンケートと同じ設問・選択肢として、今後の大学院のFD活動に資するデータを収集するために設定した設問である。最後のQ10は、国際化の一環で導入されている英語授業の履修状況をチェックする設問である。なお、各専攻長を通じ院生への回答を求めたものの、回答率は20%弱であり低調であった。今後の課題として、本アンケートの結果が、院生にいかなる利益をもたらすのかを、十分に周知し回答を求める必要がある。

③HIRC21の催しに伴う海外教員・院生を交えた研究に関する懇談会も実施

活動実績

2回にわたり、日韓共同セミナーを実施した。概要は、次のとおりである。

①日韓(高麗大学校・中央大学校・東洋大学)共同セミナー

ーヒューマン・インタラクションと社会的認知の心理学ー

日時：2019年11月22日(金)14:50～18:00

会場：東洋大学白山キャンパス(8301教室)

開会挨拶 14:50～15:00 戸梶亜紀彦(東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻長)

セッションⅠ 講演1 15:00～15:30

尾崎由佳(東洋大学) “Stress builds up only in those who believe so: The Effect of Mindset on perceived Levels of Stress”

セッションⅡ 大学院生による口頭発表 15:40～16:20

沓沢 岳 “Development and Validation of a new Self-control Training Method”

滝口雄太 “Focusing on the Suspicion: The Correlation with some Type of Trust”
 セッションⅢ 講演1 16:30 ～ 17:10
 Yang-Seok Cho (高麗大学) “Does the CSE reflect the Modulation of task-
 relevant or task-irrelevant Stimulus Dimension Processing?”
 講演2 17:10 ～ 17:50
 Jae-Hwi Kim (中央大学校) “Sudden-Death Aversion: Avoiding superior Options
 because they feel Riskier”
 閉会挨拶 17:50-18:00 桐生正幸 (東洋大学大学院社会学研究科長)

②日韓（成均館大学・東洋大学）共同セミナー ―アジア社会心理学の進展に向けた研究交流―

日時：2020年2月6日（木）13：30～17：40

会場：東洋大学白山キャンパス 8301 教室（8号館3階）

開会挨拶 13：30～13：40 桐生 正幸（東洋大学大学院社会学研究科長）

PART I 講演 13：40～14：40

Hoon-Seok Choi（成均館大学）：アジア社会心理学会会長

“Muddying the Western Waters: Bringing 'Social' Back into Empathy Research”

PART II 研究発表会（大学院生による研究発表） 15：00～17：30

口頭発表 15:00～15:20

Jeong-Gil Seo（成均館大学）

“Culture-congruent display of sadness and social support: A comparative study
 between Japan and Korea”

ポスター発表 15:20～17:30

JungHyun Roh（成均館大学）

“One Yet Many: The Impact of Superordinate Category Complexity and
 Common Ingroup Identity on Inter-Korean Attitudes”

東洋大学社会学研究科社会心理学専攻 大学院生による英語ポスターセッション

閉会挨拶 17：30～17：40 戸梶 亜紀彦（東洋大学大学院社会学研究科専攻長）

懇親会 18:00～20:00 Tres Dinning（8号館1階）

成果・課題

それぞれとも、院生が中心となり討議、懇談会を企画運営したことにより、国際的な交流のノウハウを学び、教員間でも両国における教育における情報交換ができたことは、大変有益であったと評価される。また、院生間による共同研究の計画も話し合われ、今後も期待されよう。

Table1 HIRC21の催しに伴う海外教員・院生を交えた共同セミナーでの参加者

第一回	第二回
-----	-----

本学教員	8 名	10 名
海外教員	2 名	1 名
本学院生	24 名	24 名
海外院生	0 名	2 名

④ 在学生への進学 PR 及び留学生への指導体制に関する検討

活動実績

継続事業である学内 PR については、4 月の学部ガイダンスに「大学院紹介コーナー」を設け、また学部教授会で、随時大学院報告を行って研究科に所属していない教員にも大学院の存在等をアピールした。留学生については、チューターを通したきめ細かい指導を確実なものにするための人選等の工夫を重ねて、次年度に向けては学外の大学院生も活用して指導体制の充実を期すことになった。

成果・課題

内部からの進学者は少数であったが、留学生の受験生は全大学院の中でも極めて多かった。合格者も多く、PR などの効果があったものと考えられる。チューターに関しても、各専攻において適材の人員を配置したものと考えられ、修士論文などの質も向上したものと思われる。双方とも、2020 年度に向けて継続的に推進すべきと考えられた。

3) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

2020 年度も、2019 年度の F D 活動を受け進めていく予定である。

① 社会学研究科改革ワーキンググループによる将来構想と学生募集に関する検討

実質的な募集開始と教育が求められることから、WG などを通じて十分に検討を重ねていきたい。年間、3～5 回の WG の開催を予定したい。

② 社会学研究科 FD 推進委員による院生へのアンケート調査の実施

引き続き院生の意識、意見などを知るため実施する。回答率を高めるための対策も十分に検討したい。特に、FD 担当者と各専攻長との十分な話し合いの場を設定したい。

③ HIRC21 の催しに伴う海外教員・院生を交えた研究に関する懇談会も実施

最低 2 回の共同セミナーを実施したい。院生が主体となる企画を教員がサポートしながら、中国の大学や院生との交流も深める下地を作っていきたい。

④ 在学生への進学 PR 及び留学生への指導体制に関する検討

教員一丸となって、積極的な働きかけと体制作りに努力したい。また、在校生を中心とした PR のネットワークについても検討していきたい。

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

理工学研究科では、2015 年度に第三者評価の指摘を受けて、教育目標、教育課程、授業改革のための組織的な取り組み方法等を含むプロセスが適性に機能しているかを検証するため「適切性等の検証に関する内規」を作成した。院生の学修・研究能力向上と、大学院担当教員の指導力（質保証）を高めるために、専攻長会議で継続的に検証を実施し改善に務めてきた。また、研究指導体制や研究教育環境の改善に資するため、毎年「教育・研究等改善アンケート調査」を実施している。他にも、理工学研究科の教育研究活動の改革に向けて、各種 FD・SD 活動に取り組んできた。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

川越キャンパス FD 講演会

活動実績

日 時：2019 年 10 月 10 日（木） 17 時 00 分 ～ 18 時 00 分

講 師：楊 明 氏（首都大学東京 大学院システムデザイン研究科教授）

テ ー マ：PBL 教育－総合的なものづくり技術を担う人材育成－

参 加 者：教職員

成果・課題

理工学研究科では、「グローバルな視点とローカルな価値観を理解する国際的視野と研究活動を自ら推進できる実践能力を持った人材養成」を目的に、海外 PBL・インターンシップの取り組みを推進している。これまでの活動をより広く効果的に実施するための参考として、大学院の PBL 教育で先進的な取り組みをおこなっている首都大学東京の楊明教授に「企業とのコラボレーションによる PBL 教育」、「国際連携プロジェクトの人材育成」に関する事例や手法に関する講演をいただいた。学生と企業のマッチング、参加学生が企業の抱える課題を自ら見だし、解決手段の手法に関する内容にも触れていただき、本研究科の PBL 教育への取り組みの参考になる内容であった。

川越フォーラム 2019

活動実績

日 時：2019 年 11 月 9 日（土）10：00～16：10

場 所：2 号館 2016 教室

参 加 者：学部生、大学院生、学部父母、教職員、企業、フィリピン・マプア大学教授

成果・課題

川越フォーラムは、キャンパス内の学部生（理工・総合情報）と大学院生（理工・学際融合・総合情報）の横断的な研究発表会の場とし、本学教員以外の産業界関係者からも、学生発表に直接コメントや評価をいただく実践形式の場となっている。学生のプレゼン能力を高めるとともに、研究活動を社会に発信する良い機会の場として継続して開催している。今年度は、産業界に加え、グローバル化を意識して海外の大学教授（フィリピン・マプア大学）も招聘し、丁寧なコメントをいただいた。

この取り組みは、学内からの進学者増、教育研究力向上、産業界との連携による研究開発型のキャリア形成に資することも考えている。昨年度に引き続き、50 名程の学部生の保護者に参加していただき、大学院の研究活動と大学院進学への理解を得る事ができた。しかし、学部生参加者は 60 名で、昨年度に比べ 10 名減となってしまった。

英語ワークショップ

活動実績

日 時：2019 年 11 月 16 日（土）、11 月 23 日（土）12 月 7 日（土）、12 月 21 日（土）
10：00～13：00

場 所：川越キャンパス 1 号館 4F1442 教室（生体医工学専攻講義室）

講 師：ヒューマングローバルコミュニケーションズ株式会社

参 加 者：学部生（大学院進学予定者：大学院学内推薦入試合格者）、大学院生

成果・課題

海外での研究発表（学会）や研究テーマに沿ったコミュニケーションのために必要不可欠な英語のリテラシー（読む、書く、発表する、質問する、議論する）をバランス良く学ぶことをねらいとした「英語によるプレゼンテーション（スピーチ）能力向上のための英語ワークショップ」を開催した。参加者は、来年度大学院進学予定者（学内推薦）を含め 15 名の参加があり、英語のよる研究発表における基本的スキルを習得することができた。

課題として、参加申し込みは定員の 15 名に達したが、途中欠席する学生もあり、4 日間のプログラムを全て出席した学生は数人だけであった。

ベンチャー・サイエンス特論

活動実績

日 時：2019年10月26日（土）、11月16日（土）、11月30日（土）

9：30～18：00

場 所：4号館4階産学協同教育センター

参 加 者：大学院生、自治体職員、企業

成果・課題

「ベンチャー・サイエンス特論」は、本学産学協同教育センター・中核人材育成講座と連携したプログラムで、ものづくり分野の中核を担いうる人材に必要な実践的マネジメント能力を、ワークショップを通じて習得することを目的とした講義内容としている。今年度は、「事業戦略」と「マーケティング」に関する実践的理論と戦略策定演習を中心とした内容で、プロジェクト・マネジメントの基礎知識、ものづくり分野の管理技術、起業や特許取得に関する理解を深める事ができた。参加者アンケートでも、スキルの修得、実践的な視点から学ぶことができた等の満足度の高い回答が多かった。

参加学生の能力と意欲に大きな差があるために、学生への事前の動機づけが今後の課題である。

適切性等に関する検証

活動実績

日 時：① 2019年11月21日（木）15：00～16：30

② 2020年2月20日（木）13：00～15：00

場 所：理工学研究科長室

参 加 者：研究科長、専攻長、事務職員

成果・課題

理工学研究科では、「研究科、専攻の目的」「教員組織」「教育目標、学位授与方針および教育課程の編成、実施方針」「学生募集および入学者選抜」「ポリシー」等に関して、適切に機能しているか「適切性等の検証に関する内規」に基づき、定期的に検証を行っている。

- ① 11月21日（木）は、各専攻で「学部のディプロマ・ポリシーと大学院のアドミッション・ポリシーの整合性」、「カリキュラム・ポリシー」、「就職実績や社会的ニーズ等を鑑みてのディプロマ・ポリシー」の検証結果について報告があった。改めて、全専攻の「3つのポリシー」について検証を行い、変更・修正等がないことを確認した。
- ② 2月20日（木）は、大学院の「教育内容の質」について検証を行った。理工学研究科では、グローバルに活躍できる人材の育成の取組として、「サイエンス・イングリッシュ討論」の開講、「英語ワークショップ」講座の実施、「TOEICテスト」の受験を義務付けている。この取り組み内容の効果の検証と、今後の改善について、英語担当教員も交

えて議論を行った。また、国内外の企業・教育研究機関と連携した PBL 教育の実施に向けての検討。起業家養成プログラムの開発に向けて、他大学の取り組みを参考に議論を行った。

教育・研究等改善アンケート

活動実績

実施期間：2019 年 11 月 22 日（土）～2020 年 1 月 10 日（金）

対 象 者：博士前期課程 122 名、博士後期課程 9 名（2019 年 10 月 1 日現在在学学生）

回答者数：博士前期課程 108 名（回収率 89.3%）、博士後期課程 5 名（回収率 75%）

成果・課題

理工学研究科が実施する「教育・研究等改善アンケート」は、学部学生向けの授業評価とは視点を変え、研究指導等についての学生満足度評価の色彩を強めた設問により、研究指導体制や研究教育環境の改善に資する項目にしている。設問は博士前期課程で 37 項目、博士後期課程で 28 項目とし、内容も若干変えてアンケートを実施した。主には、研究活動、教育研究環境、TA・アルバイトにおける研究への影響等、多岐に渡り学生の満足度を確認する内容となっている。

アンケート結果は、2 月の専攻長会議で確認した後、それぞれの専攻でも検証を行い、改善に向けての議論を行った。特に、総合的な満足度で「不満がある」と回答があったところには、専攻内でその原因を調査し、早急に改善を行った。

シラバス点検

活動実績

実施期間：2020 年 2 月 3 日（月）～2020 年 3 月 5 日（木）

点検総数：1,870 件（理工学研究科博士前期・後期課程）

成果・課題

シラバス点検チェックリスト（セルフチェック用）に基づき、授業担当者によるセルフチェック、専攻長による第三者チェックを行った。一部、「標準レベル」に達していない授業科目があったが、専攻長を通じて見直しを依頼した。このため、すべての授業科目において、学修の質を向上させるための基本的内容が記述されており、重点事項をクリアすることができた。「発展レベル」についても専攻長による第三者チェックが終了しており、修正が必要と思われる授業科目については修正を依頼した。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数（人）			HP 掲載
		教員	職員	計	
2019 年 7 月 11 日	PROG テスト結果 報告会	80		80	無
2019 年 10 月 10 日	大学院 FD 講演会	30	2	32	無

3) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

「適切性等の検証に関する内規」に基づき、2020 年度においても院生の学修と研究能力向上、大学院担当教員の指導力（質保証）を高めるために、大学院担当教員と川越教学課大学院担当職員が連携して FD・SD 活動を継続して推進していく。

① FD 講演会

PBL 教育、起業家養成プログラムに関連した FD 講演会を開催する予定である。

② 朝霞・川越・板倉キャンパス研究交流会

川越の 3 研究科（理工・学際・総情）が中心となり学部と連携して開催してきた「川越フォーラム」が今年度で終了した。。このため、既存の「朝霞・川越・板倉キャンパス研究交流会」に「川越フォーラム」で培ったノウハウを注入し、キャンパス間の大学院生を中心とした研究交流へと発展させる予定である。

③ ベンチャー・サイエンス特論

来年度においても、本学産学協同教育センター・中核人材育成講座と連携したプログラム内容で実施する。

④ 教育・研究等改善アンケート

設問内容の変更はなく継続して実施する。

⑤ シラバス点検

継続して実施する。

⑥ 適切性等に関する検証

「適切性等の検証に関する内規」に基づき、自己点検・評価項目を中心として検証を行う。

4) 部局間協定校（ベトナム国際貿易大学）との連携活動実績

2019 年 9 月に部局間協定（教育研究連携）を結んだベトナム国際貿易大学の VJCC から依頼を受けて、2020 年 3 月に日本式国際ビジネス学科の学生に「ものづくり哲学」の集中講義を行う中で、東洋大学の大学院の紹介も行った。

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

生命科学部と連携し「6 年間の一貫教育」を目指して、継続的に授業方法の改善、学習および研究環境の整備、学生へのキャリア支援を行っている。そこで、FD・SD 講演会（例年）、オンデマンドビデオ（全国私立大学 FD 連携フォーラム）視聴（2017～）、授業評価アンケート（～2017）を実施、さらに安全講習会および機器分析教育プログラムの講習会の開催（例年）、グローバル化を視野に入れた基盤科目の開講（2017～）、M1、D1、D2 による中間発表会（例年）、他研究科との研究交流会（例年）の開催、学会奨励金の支給（例年）を行っている。その成果として、成果発表数と賞の受賞数が年々増加しているため、今後も、上記の取組を継続しながら、学生個人に合わせた指導を行う必要がある。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

①FD・SD 講習会の開催

活動実績

以下の研修会を生命科学部との共催により 開催した。

研修会等の開催状況

開催日	研修会名	参加者数（人）			HP 掲載
		教員	職員	計	
7/29	「埼玉県の『協調学習』の取組」 （埼玉県総合教育センター・小川剛先生）	9	1	11	無
12/9	「発達障害など精神的な障害や不調を持つ学生への対応～事例 A さん：考えられる見立てと支援例～」（人間総合科学大学・萩原豪人先生）	35	0	35	無
1/20	「大学院教育の質保証と的確な評価法」（神戸大学・近田政博先生） （15：00～16：00）	17	0	17	無
2/17	「大学のカリキュラムマネジメントの実質化に向けて」（青山学院大学・杉谷祐美子先生）（13：00～19：00）	17	0	17	無

成果・課題

今年度は例年よりも多い合計 4 回の研修会を行った。各研修会とも、多くの教員の参加を得、所用にて欠席の教員には研修会の模様をビデオ撮影したものを貸し出した研修会もあった。著作権などとの関連で録画等困難な場合もあるので、できるだけ多くの教員が参加できるよう、早めの設定とアナウンスを今後とも心がける必要がある。

②学生の研究および学習能力の向上（安全講習会および機器分析教育プログラムの講習会）

活動実績

専門分野の研究計画を実施し学位論文の作成へと展開できるように「良い環境作り」を目指している。そこで、生命科学部と共催で、実験を行う全学生を対象に、実験に伴う事故の予防や対処に関する安全講習会、また希望学生を対象に、質量分析器と透過電子顕微鏡の使用法などに関する技術講習会を実施した。

成果・課題

例年の開催のため、開催アナウンスなどスムーズに行われ、数多くの学生が参加して、研究の推進に効果があった。汎用機器類の使用説明会は質量分析装置、電子顕微鏡以外にも拡充したいが、予算との兼ね合いでさらなる検討が必要である。

③ 学生の人間力の向上

活動実績

1. **グローバル人材の育成**：専門科目以外に基盤教育科目として「英語プレゼンテーション演習」「科学英語ライティング」「科学コミュニケーション特論」「科学コミュニケーション演習」を開講し、英語でのプレゼンテーションとコミュニケーション能力を強化した。さらに、独自の奨励金を支給し英語による学会発表を推奨した。
2. **中間研究発表会**：指導教員だけではなく、全教員が全学生を指導するという意識を持つために、M1 生、D1 生が研究の進捗状況を英語のポスター形式で発表し、研究目標設定の確認と達成状況について点検・評価を行った。
3. **朝霞・川越・板倉キャンパス研究交流会**：理系学部の教員と学生の意見交換により、新しい観点から様々な発見をすることを目的として、口頭発表・ポスター発表会を実施した。

成果・課題

1 については例年通りである。2 については、2019 年度は 8/22 に博士後期課程 2 年 3 セメスタ 4 名の口述発表、8/22-8-23 に博士前期課程 1 年 2 セメスタ 1 名、2/18-19 または 2/20-2/21 に博士前期課程 1 年 2 セメスタ 21 名、博士後期課程 1 年 2 セメスタ 1 名の英文ポスターによる中間研究発表が行われ、合計約 150 名の参加者による質疑があり、各発表者が今後の研究の方針などについてのサジェスションをもらった。1,2 とも、従来から行われている活動で、とくに改善をするべき課題はない。3 については 7/6（土）に板倉キャンパスにて約 100 名の参加者をえて開催された。研究発表 2 件、ポスター発表 66 件が行われた。本研究科からの発表件数を増加させたいと考えている。

④ 学生の研究・教育環境の把握と改善

活動実績

生命科学研究科における研究・教育のさらなる充実を目標に、2 年時初頭および卒業時に、受講した授業や遂行中の研究に関する満足度などのアンケートを行うこととした。板倉事務課にアンケート集計をしてもらい情報共有することでキャンパスライフとメンタルのフォローを協同行う。また、指導教員との密接な環境となりがちな大学院学生の研究室外の相談相手として、研究科内の教員を、学生の希望に応じてアドバイザーとして指名する制度を新たに設けることとした。

成果・課題

アンケートは 2020 年 3 月（卒業生）及び 4 月（新 2 年生）実施予定、アドバイザー制度の説明と登録は 4 月のガイダンス時に行う。

⑤大学院進学率の向上

活動実績

学部と連携して大学院進学の説明会を実施した。留学生のため、シラバスやホームページ、各種書類の英語化などの整備を順次行った。

成果・課題

例年通りの取り組みであるが、今後も引き続き加藤堂の拡充を行う必要がある。来年度より学部3年生4年生の新学期ガイダンスの際に大学院に関する広報活動を行う予定である

3) 2020年度に向けたFD・SD活動実施計画 / ACT, PLAN

- ① **学生の研究環境の向上**：学生が「研究および学習能力の向上」と「人間力の向上」を目指す取組（中間発表、技術講習会、基盤教育科目など）は継続する。さらにSGU構想の数値目標のためには、今後一層の英語化が求められる。また、それに伴い、シラバスやホームページ、各種書類の英語化などの整備、教職員による留学生サポートを行う。
- ② **学生生活委員会との連携強化**：学生が研究や人間関係から生じる様々なストレスを解消するため、学生生活委員会と連携による精神的なサポート体制の強化を目指す。
- ③ **FD・SD講演会の開催**：例年同様に、学習手法とアカデミックハラスメント（学生の心ケアなど）をテーマに、生命科学部との共催で、最少でも春学期、秋学期各1回の講演会を実施する。さらに、出席者を増加させるための工夫、著作権の問題に配慮しながら、講演の録画およびLIVE配信を検討する。
- ④ **学生アンケートの活用**：2020年度に開始する研究科独自のアンケートの結果を解析し、研究科全体として授業改善・研究環境改善に役立てる。

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

本研究科としての活動として、合同研究発表会の実施などを通じ、教員の研究、社会貢献、管理業務に関する資質向上を図ってきた。また、授業能力向上に資するため、外部の FD 講演会等への参加促進、関連図書の配置などを行ってきた。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

①研究科学生アンケート

活動実績

授業・研究指導等の改善を目的として、ライフデザイン学研究科・福祉社会デザイン研究科（朝霞）所属の大学院生全員を対象に 2019 年 11 月 11 日～2020 年 1 月 20 日の期間において、Google Form で作成した Web 学生アンケートを実施した。質問は主に①「講義」 ②『授業時間内における「研究指導」』 ③『授業時間外における指導教員（主査・副査）の「諸指導」』 ④「授業（講義や研究指導）の開講曜日・時限」 ⑤その他の観点（国際化、キャリア支援等）から設定した。この結果を、研究科内で共有し、今後の改善方法の検討を行っている。

成果・課題

20 件の回答が得られ、アンケートそれぞれの設問に対する回答を、その内容にしたがって分類、整理し、その件数と比率を求めた。昨年度より、紙ベースのアンケートから Web アンケートに変更したことにより、回答率も増加してきている。また、回答内容は、概ね好意的な回答であり、研究科における教育に対する肯定的評価が得られたと考える。今後、アンケート結果の公表を行う予定であるが、ここで明らかになったいくつかの問題点については改善を図る必要がある。このことが入学者の確保等にも良い影響を及ぼすと考える。

②研究科 FD 講演会

活動実績

「留学生受け入れと研究指導上の留意点」というテーマで北脇秀敏氏（東洋大学副学長、東洋大学国際学部国際地域学科教授）をお招きして FD 講演会を以下のとおり実施した。北脇氏は東洋大学国際地域学部設立当初より留学生受け入れ担当として尽力され、自らの研究室でも

多くの留学生の指導経験を有する。豊富な経験の中から留学生受け入れと研究指導上の留意点をご教示いただいた。

日時：2020年2月19日(水)14:40～16:00 場所：東洋大学朝霞校舎第2会議室

参加者：教員 22名、職員 6名

成果・課題

講演では留学生の受け入れに関する説明会・日本語学校や海外でのリクルートの方法、留学生入学試験での能力の見きわめ方などを始め、研究指導方法、学生生活に対するサポートの必要性を北脇先生の体験を含めて多面的に解説を頂いた。国際学部に比べ留学生の人数の少ないライフデザイン学研究科であるが、今後の留学生増加を見据え、大変参考になり実践に役立つ講演であった。

今後も研究科が直面する様々な課題を洗い出し、適切な講演会を企画していく必要がある。

③学修成果の測定指標の検討・開発

活動実績

各専攻・コースならびに自己点検・評価活動推進委員会で検討し、各専攻の学修成果の測定指標（試行版）の開発を行った。

成果・課題

2020年度に学修成果の測定指標（試行版）を運用し、必要に応じて見直しを行いつつ、学修成果測定指標が確定される予定である。

④博士後期課程院生へのプレFDに関する情報提供

活動実績

博士後期課程院生および指導教員に対し、他大学等で開催される大学院生も参加可能なFDに関する研修会等の周知を行い、FDに関する情報提供を行った。

成果・課題

引き続きプレFDに関する情報提供を積極的に行い、参加を促していく予定である。

3) 2020年度に向けたFD・SD活動実施計画 / ACT, PLAN

研究科全体として、以下の諸点から活動の充実を図っていく。

1) 日常における教員の研究、社会貢献、管理業務に関する資質向上の啓発

① 研究科委員会等を活用した、FD・SDに関係する情報の確実な共有と議論ならびに実践。

② 在籍する大学院生との適切なコミュニケーションを通じた日常的なリフレクション（省察）の実施。

2) 学生アンケートの継続的な実施

- ① 研究科委員会等を活用したアンケート結果の確実な共有と議論ならびに改善。
- ② より有意義な学生アンケートとして発展するよう質問項目および方法論の継続的な検討。
- ③ 学生アンケート結果に対する各専攻によるコメントの継続的な公表とともに、回答内容の公表。

3) FD 研修会等の継続的な実施

- ① 研究科所属教員ならびに職員の研鑽の機会としての当該研修会等の継続的な実施。
- ② 社会情勢の変化に応じたトレンドやトピックスを把握する契機としての実施。
- ③ 2020 年度については「キャンパス移転に伴う地域連携、社会人入学生の増加（が予想される事）への対応」をキーワードとした研修会の開催を予定。

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

総合情報学研究科は、設置以来、教育理念の実現のために以下の FD・SD 活動に取り組んできた。①定期的に FD 研修会を開催し、授業方法の研鑽や改善に努めてきた。②授業アンケート(平成 28 年春学期は授業評価アンケート)を実施し、大学院生の意見を尊重しながら授業の改善や環境整備を行ってきた。③涵養した行動力を評価するため、コンピテンシー評価を実施してきた。なお、定期的に開催している修士・博士研究発表会は FD・SD 活動から教育活動(研究指導)へ分類を移行する。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK**FD 研修会****活動実績**

年 2 回定期的に開催し、FD および自己点検評価へつなげている。

第 1 回 FD 研修会 (9 月 12 日)

(1) 学部コンピテンシー評価の中間報告 (塩谷、喜岡)

第 2 回 FD 研修会 (2 月 20 日)

(1) プレ FD 研修会企画

(2) KPI (上原)

(3) 授業アンケート (上原)

成果・課題

本研究科は行動力の涵養に力を入れている。第 1 回 FD 研修会では、学部の基礎ゼミナールで実施されたリアセック社タクナル方式のアクティブラーニングについて、その結果をコンピテンシー評価で分析した結果を報告した。プロジェクトの初年度でもあり有意な結果は得られなかったが、次年度以降も継続する。

第 2 回 FD 研修会では、プレ FD 研修会を企画し、KPI について総括した。授業アンケートについては②で報告する。博士後期課程の修了予定者の中から助教採用を目指す希望者を対象に次年度、プレ FD 研修会を実施する。シラバス作成ワークショップや模擬講義などの案が出た。

本研究科では KPI をアセスメントポリシーとして活動を評価している。主な KPI は以下の 4 つである。

- ・定員充足 (目標 1.0) : 定員充足率=在籍者数/在籍定員

修士 0.83、博士 1.83、全体 1.0 であった。

- ・人材育成（目標 1.0）：進路決定率＝（就職者数＋進学者数）/修了者数
研修会実施時には未回答多数につき判定不能であった。
- ・教育の質保証（研究）（目標 1.0）：業績数の平均＝ Σ 業績数/在籍者数
全体 1.28、英語のみ 1.08 であった。
- ・教育の質保証（行動）（目標 3.0）：行動特性の平均率＝ Σ 全行動特性/在籍者数
行動特性の平均率は 3.5(全体), 3.1(M1), 4.1(M2), 2.5(M1 入学時)であった。

授業アンケート

活動実績

ToyoNet Ace を用いて授業アンケートを実施した。提出率は $5/38=0.13$ であった。ただし、未提出者のうち 13 名は「入力データあり」の状態だった。

成果・課題

授業科目及び研究指導科目に関する問では、研究に直接役立つ科目に対する評価が高かった。また、データサイエンスの講義に対する強い要望があった。2021 カリキュラムにて対応する予定である。社会人からサテライトキャンパスの要望があった。遠隔講義で対応する予定である。

教室設備、研究機器、授業環境などに関する問では、1 月中に空調が故障するトラブルがあった。直ちに対応したものの修理までに時間がかかった。

専攻の運営方法に関する問では、履修登録や登録抹消期間が不適切であるとの指摘があった。学年暦とも関係するため全学的な対応が必要である。

総じて、提出率は低いものの、有益な意見が得られた。

コンピテンシー評価

活動実績

毎学期末、博士前期課程の学生を対象としてコンピテンシー評価を実施している。また、新入生を対象に入学時にコンピテンシー評価を実施している。これらの結果を年度末、第 2 回 FD 研修会にて報告した。

また、第 2、3 セメスタの博士前期課程の学生を対象として新たに 2020/2/20 に PROG テストを実施した。

成果・課題

本研究科のコンピテンシー評価は IPA の提案した雛形に基づく、本研究科ではルーブリックを 6 段階に拡張し、設問方式として実施している。行動特性の平均率は 3.5(全体), 3.1(M1 年度末), 4.1(M2 年度末), 2.5(M1 入学時)であった。年度末の M1 と M2 には有意な差があり、M1

の入学時と年度末には有意な差がなかった。これらの結果から修士論文の執筆及び海外研究発表が行動力向上の大きな要因であると思われる。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数（人）			HP 掲載
		教員	職員	計	
2019/09/12 13:40～14:10	第 1 回 FD 研修会	13/14	0/0	13/14	×
2020/02/20 14:30-15:00	第 2 回 FD 研修会	14/15	0/0	14/15	×

3) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

次年度以降も①～③の活動を継続する。また、2020 年度は博士後期課程の完成年度である。そこで、博士課程修了後のキャリアを考慮し、プレ FD 研修会を実施する予定である。

また、学部と大学院を一体化した一貫教育を目指し、2019 年度は学部の 2021 カリキュラム改革を実施した。2020 年度は大学院側のカリキュラム改革を予定している。

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

科学技術の高度化、社会・経済・文化のグローバル化などにより、社会経済の各分野において指導的役割を果たすとともに、国際的にも活躍できるような高度な専門能力を有する高度専門職業人の養成が強く求められている。食環境科学研究科食環境科学専攻博士前期および後期課程は、「食品・栄養及び本学の特徴であるスポーツを通じた健康寿命の延伸、食の安全・安心に係る分野でグローバルに活躍できる高度専門職業人」を育成する目的で、2016 年度に開設された。2018 年度の主な FD 活動、①FD 講習(講演)会(英語論文指導教授法)、②学会発表・参加奨励金制度の実施、③TA/SA 研修会、これらに加え高度専門職業人を養成するために必要な食環境科学研究科独自の FD 活動として、④研究科独自の評価項目を含む授業評価アンケート、⑤研究とキャリアの進捗状況：年次評価、⑥食のグローバルイノベーション人材創出塾および中間発表会、⑦海外研修(GiFT 主催・マレーシア)を実施している。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】**① FD 講演会(コーチング技能を活用した学生指導)**

2020 年 2 月 17 日に、出江 紳一教授（東北大学大学院医工学研究科）をお越しいただき、上記テーマについてご講演いただいた。コーチングを活用して学生の動機づけを高め、スムーズに指導を進めるためのスキルについて理解を深めた。当日は 27 名の教職員等が参加した。なお、本企画は、食環境科学研究科における教育・研究の質の向上を狙いとし、研究科独自の FD 研修会として開催した。

② 学会発表・参加を促す目的で、全学の奨励金制度に加えて、食環境科学研究科においても学会発表・参加奨励金制度を導入しており、今年度は 1 名（計 1 件）の利用があった。

③講義に対する FD 活動として、研究科独自の授業評価アンケートを実施した。各教員は集計結果をもとに「授業評価アンケート結果に対する所見」を作成した。集約した所見をもとに、次年度の教育研究指導に反映していく。

④ 高度専門職業人として将来を意識しながら研究活動を行うために、博士前期課程 1 年生および博士後期課程 1 年生、2 年生を対象とし、年次評価を指導教員と学生が話し合いながら作成した。

⑤ 高度専門職業人として必要な、高い専門性を活かした情報発信能力、ディスカッションなどによるコミュニケーション能力、自身の専門分野以外の分野との異分野間コミュニケーション能力、ロジカルシンキングを活かした提案・問題解決能力、世界情勢・風潮に対応できる国際性豊かなバランス感覚等を身に着けた人材を養成するために、食のグローバルイノベーション人材創出塾を開催した(2019 年 8 月 19 日)。院生が自らの研究内容についてプレゼン

テーションを行い、様々な業種の学外有識者に評価していただいた。また、半年後の中間発表会を2020年2月21日に実施し、フラッシュプレゼンテーションおよびポスター発表形式で行い、学外有識者の評価から学生の成長度を測ることができた。

3) 2019 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

- ① 今年度の FD 講演会については、食環境科学研究科として独自に企画し、教職員の参画を促した。当日のご講演では、ロールプレイも含まれるなど充実した時間となり、参加者からも好評価であったことから、各教員における意識改革等、高い教育改善効果があったと判断できる。
- ② 学会発表・参加奨励金制度については、本制度を利用した学会参加、発表があった。学生が自身の研究を専門分野において発表、質疑応答する機会が増加し、学生の科学的なコミュニケーション能力等の向上につながっていることが考えられる。
ただし、2019 年度においては利用者が 1 名(1 件)と件数が少ない為、指導教員や学生への周知を強化し、利用を促進する等の検討が必要である。
- ③ 授業評価アンケートについては、本年度も研究科独自の授業評価アンケートを実施し、学生からは建設的な意見が寄せられた。今年度は、各授業に寄せられた意見が少なかったが、引き続き、今後も授業評価アンケートを実施し、教員・事務・学生のコミュニケーションの為にツールとして機能させていく。
- ④ 2017 年度より継続実施をしている研究活動の年次評価については、年次評価の形式はキャリアの目的を意識するようにし、各指導教員および各学生には、研究科での教育研究活動と学生のキャリアの目的がどのように結びついているのかを考えてもらった。年次評価は研究科で共有された後、各学生に返却する予定であり、翌年度以降の研究活動に活用してもらう。
- ⑤ 食のグローバルイノベーション人材創出塾において外部有識者から評価いただいたことで、高等教育機関と実社会との関係性が緊密となり、高度専門職業人の育成のための基盤が形成できた。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数				HP 掲載
		教員	職員	その他	計	
2 月 17 日(水)	コーチング技能を活用した学生指導	25	1	1	27	無

4) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

上記の FD 活動はどれも高い教育効果・教育改善効果が認められたと想定される。2020 年度以降も引き続き全教員および外部有識者が関わりながら実施していくことを検討し、食環境科学研究科の教育に合った FD 活動について継続的に議論を重ねていくこととする。

特に、外部評価委員の取り組みについては、これまで 4 年間学長施策予算において対応をし、2019 年度が終了の年となる。2020 年度からは構成員を一部新たにし、これまでの実績を踏まえ取り組み内容をブラッシュアップしていく予定である。また、海外研修については、2019 年度は参加人数の関係上実施が出来なかった海外インターンシップ(タイ・チュラロンコン大学との交流)が、2020 年度より科目として立ち上がり実施計画が進んでいる。本インターンシップは、本研究科の目指す高度専門職業人の育成により特化し、寄与する内容となる。

以上

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

国際学研究科の前身である国際地域学研究科では、国際地域学・国際観光学両専攻で修了生を対象としたアンケートを実施している。学部と比べて学生数が限られているので、記述式（日、英2言語、無記名）の項目を複数設定している。その結果は専攻会議で報告され、教員間で共有・議論し、今後の研究教育体制の向上に活かしている。院生共同研究室の備品や管理方法について、学生の要望をもとに検討、改善を行ってきた。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK**①修了予定学生のアンケートの実施**

活動実績

実施日：2020 年 1 月 25 日（土）有効回答数：国際地域学専攻（M・8 名,D・1 名）の全学生
実施方法：口述試験実施日に紙の質問票（無記名）を配布し、基本的に同日に回収。設問：大問が 6 つ。具体的には以下の通り

1. 以下の項目について、あなたの印象評価してください。（＜大変満足、満足、どちらでもない、やや不満、不満＞の 5 段階評価と自由記述）
（1）リサーチスキル科目 （2）専門科目講義・演習 （3）研究指導
2. 授業を受講することで得た成果、役立った事を記入して下さい。（自由記述、以下同様）
3. 研究を進める上で、思うようにいかなかった点、改善点があれば記入して下さい。
4. 院生発表会の回数や時期および形式について改善すべき点があれば記入して下さい。
5. より国際学研究科らしい教育プログラムにするためには、どのような授業科目、授業形態、取り組みが必要だと思いますか？
6. その他の要望（学生生活、設備等）があれば、記入して下さい。

成果・課題

全体に、各学生と指導教員との関係は良く、研究指導にたいする満足度は高いいっぽう、学際的な研究科ゆえに、自分の研究分野と関係のある授業が少ないという要望が多かった。

また院生共同研究室については、広さや備品に関する不満が多く（パソコン、プリンタ、ロッカー、エアコンなど）、教務課の英語対応の不足に対する指摘もあった。

②カリキュラム・研究指導等検討会

活動実績

日時：10/8 11:50～ 場所：セミナー室 8

- (1) 特別課題研究論文の扱いの検討
- (2) 現行カリキュラムの検討
 - ・研究指導科目
 - ・リサーチスキル科目
 - ・院生発表会
- (3) その他

成果・課題

上記(1)について、実務経験のある社会人学生を念頭におき、通常の修士論文とは異なる審査基準を設定しているが、現在までのところ提出された実績がないことが報告され、この制度を廃止する方向で検討すべきだという意見が多く出された。

上記(2)については、次回のカリキュラム改編を念頭に置いたものであるが、研究指導科目やリサーチスキル科目の扱いについて改善点が議論された。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数(人)			HP掲載
		教員	職員	計	
2019/10/08 11:50～12:50	カリキュラム・研究指導等検討会	12/12	0/0	12/12	×

3) 2020年度に向けたFD・SD活動実施計画 / ACT, PLAN

次年度も引き続き修了予定学生を対象としたアンケートを実施し、その結果を研究科として議論していきたい。

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

国際観光学研究科ではこれまで年度末に 1 回、学生への満足度アンケートを実施してきた。学部と比べて学生数が限られている分、記述式を多くしてできるだけ生の意見を吸い上げて行くことに重きをおいている。その結果は、研究科委員会ならびに専攻会議で報告され、教員間で議論し、今後の研究教育体制の向上にフィードバックされてきている。一例として、院生共同研究室や院生発表会の運営において学生の要望が反映され、改善が行われてきた。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

① 特色ある教育研究報告会

活動実績

教員の大学院での教育や研究について 1 回につき 1 人の教員が担当し、2 回行った。

成果・課題

12 月と 1 月の研究科委員会後に実施した。12 月は内田彩専任講師から報告があった。内田講師の専門分野は、観光歴史学、温泉論、観光行動論である。講演では、研究のフレームワーク、教育のフレームワークを学部・大学院とリンクさせて説明していただいた。詳細は別添する。近接分野の教員はもちろん、分野を異にする教員にも興味深い講演であった。1 月は古屋秀樹教授から報告があった。「教学マネジメントを支える基盤－FD・SD の高度化に向けた提言－」を用いて、FD の取り組み視点（7 項目）の紹介があった。7 項目の 1 つである「提言 3 教員の能力開発の機会を保障する」について、様々なレベルごとの取り組み事例が紹介された。その一方で、FD 活動に対する批判例の紹介があった。次に、大学院の FD についての問題提起、我々を取り巻く状況（高校→大学、学習指導要領の改訂）について紹介があった。高等学校の授業内容の高度化（具体例）、学部での授業の取り組み例（例：情報演習）、大学院における教育：DP と整合した人材育成と主成分分析の取り組み事例について報告があった。同じ研究科内でもなかなかお互いの研究・教育内容を情報交換できる場が日常ないため、本機会は貴重であったと考えられ、このような場の設定が今後の共同研究にもつながっていくと期待される。2 回分の資料は別添する。

②院生アンケート実施

活動実績

毎年1月の年度最終の院生発表会の際にアンケートを実施しており、経年データになるにつれ、本研究科の運営に関して有用な示唆を得られるようになった。今年は初めてオンラインアンケートの形で行い、学生はToyoNet-ACEを通じて回答できるようにした。

成果・課題

実施日：2020年1月25日（土）

有効回答数：国際観光学専攻在籍学生

（M1：10名、M2：6名、D1：3名、D2：1名、D3以上：1名）合計21名

質問内容 ※満足度以外はすべて記述式

- (1) 印象評価 講義・演習/研究指導 5段階の満足度（非常に満足・満足・やや不満・不満・どちらでもない）とその理由
- (2) 授業を受講することで得た成果、役立ったこと
- (3) 研究を進める上で思うように行かなかった点、改善点
- (4) 院生発表会の時期および形式について改善すべき点
- (5) より国際観光学らしい教育プログラムにするためにはどのような授業科目、授業形態、取組が必要か
- (6) その他の要望(学生生活、設備等)

課題としては、今後内容を精査して、専攻会議で議論していく。特に、年4回実施している院生発表会の回数が多すぎるという意見が毎年見られるため、今後変更するかどうか議論する予定である。アンケート結果の詳細は4)に示す。また、社会人学生からの要望で、6・7限の授業が少ないということがあげられる。本研究科が社会人に積極的に学びの門戸を開いていることを鑑みると、社会人学生に授業を十分に提供できる環境が整っていないといけない。これについても早急に改善を試みる。

研修会等の参加状況

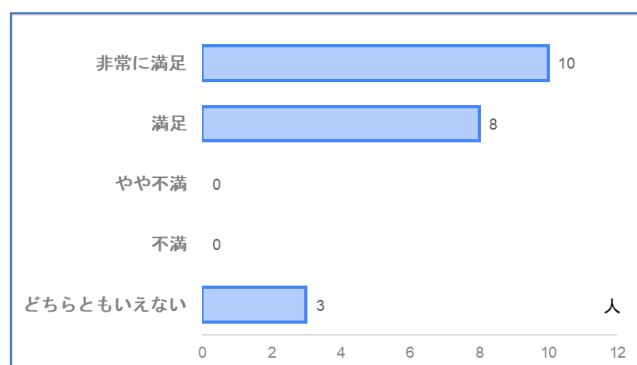
開催日	研修会名	参加者数（人）			HP 掲載
		教員	職員	計	
2019/12/12 11:20～11:50	特色ある教育研究報告会第1回	15	0	15	×
2020/01/16 11:20～11:50	特色ある教育研究報告会第2回	14	0	14	×

3) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

2020 年度は、継続して FD 講演を開催し、本研究科の教員から教育研究報告をしてもらおうと予定している。可能であれば、学部の FD と連携して外部から講演者もお招きしたい。院生アンケートについても継続して年度末に行う予定である。

4) 院生アンケート結果

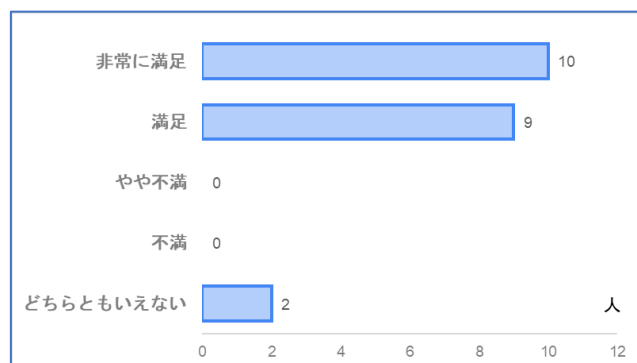
① 授業・演習の満足度 21 人中 18 人 (85%) の学生が満足していると回答



理由：

- すごく興味深い授業がいくつもあって、研究に役に立つ授業もありました。(M1)
- 講義の内容は理解しやすいです。勉強になりました。(M1)
- 最新の研究情報や業界情報を教えてもらえ、視野が広がった。もっと論文の書き方、論理思考など基礎的なことも知りたい。(M1)
- 学部時代より、さらに知識を吸収することが多くなり、非常に満足しています。(M2)
- バリエティに富んで楽しかった。(M2)
- 先生方が充実している。(M2)
- 質問が出来やすい環境にある。(D1)、質問に真摯に答えていただいた。(D1)
- 学生への熱意と配慮あふれるご指導ありがとうございます。(D3)

② 研究指導の満足度 21 人中 19 人 (90%) の学生が満足していると回答



理由：

- 研究について何回も相談していただき、助かりました。(M1)
- 沢山の意見をしていただきました。また研究に関わる本を薦めてくれて貸していただきました。(M1)
- 熱心で一々を教えていただいた上で、自ら足りない部分からさらに指摘されながら、良い研究のやり方を教えていただきました。(M2)
- 物凄く詳しく指導と協力をいただきました。(M2)
- ご丁寧にご指導頂いた懇切丁寧にご指導いただいております。(M2)
- 毎週、指導していただける。(D1、2名)
- 学生一人一人の状況を配慮したご指導のおかげで、会社勤めと研究のバランスが維持できます。(D3)

③ 授業を受講することで得た成果、役立ったこと

- データや先行研究など、自分の研究にとって役に立った。(M1)
- 先生の授業を受けて自分の研究に関する知識を身につけました。(M1)
- もっと広い範囲の知識が分かって、多角的に自分の研究を考えられます。(M1)
- 語学力の重要性を知った。留学生も多いため視野が広がり、国際的な知識を得ることができた。パワーポイントによる発表について知見を得た。(M1)
- 観光に関する知識をいろいろ学びました。(M2)
- 学部時代より、思考力や書く能力などはよくできていると思いました。(M2)
- ホテルやリゾート、IR 施設の実態など。(M2)
- 知見が広がったこと、同志（仲間）やネットワークが増えたこと。(M2)
- 幅広い知識。(D1)
- 広い視野を持つことができた。(D1)
- 研究者である一方、学生を指導することが大学教員のあるべき姿であることを再認識できる。(D3)

④ 研究を進めるうえで思うようにいかなかった点、改善点

- 外国の状況に関わる資料を探すことが難しいです。(M1)
- 新しい専門分野を学ぶ上での基礎研究のための取っ掛かり（資料収集）が難しかった。英会話ができず、英語報告会に苦労した。(M1)
- 文字を図形化すること(M2)
- 社会人向けの6限・7限の講義が少ないと思います。(M2)
- 研究しかたを教えてほしい。学生は完全初心者です。(M2)
- 地方自治体での情報収集、インタビュー(D1、2名)

⑤ 院生発表会の回数や時期及び形式について

- 多すぎると思います。一学期一回ぐらいで適当だと思います。(M1)
- 毎学期一回で行えばいいと思います。(M1)
- 発表会があるからこそ、圧力され、自らに勉強します。発表会がないなら、どうなるか想像しがたいです。(M1)
- 年4回は回数が多いように感じる。中間と期末報告会の間が短く、準備が充分にしにくい。可能ならば年2回（現在の期末報告会）に減らしてもらいたい。(M1)
- 毎学期一回でいいと思います。(M2)
- 良いと思います。普通。(M2、2名)
- いつの間にか、レジュメとパワーポイントの両方を提出することが忘れられている。会社勤めとの両立に苦しむ社会人学生でさえ、この原則を守っているのに、時間に余裕のある前期課程の院生がパワーポイントのみの提出でうやむやにしていることに対し、怒りすら覚える。研究をなめてます。その姿勢を改めて、きちんとレジュメも作成して、発表に望むように徹底するか、いっそのこと、パワーポイントのみでも可とする旨を周知していただきたい。(D3)

⑥ より国際観光学らしい教育プログラムのために、効果的と考えられる授業科目、授業形態、取り組みについて

- 日本の地域のことについて、遠くないところなら、学校の教室に授業を受けることだけではなく、現場に行ってみて、先生の説明を聞きたいです。(M1)
- イタリアの大学への留学プログラム（短期留学、語学留学など）を増やしてほしい。海外留学奨学金をもっと増やしてほしい。イタリア語の語学試験のサポート（東洋大学での受験が可能になったり、受験料の補助等）がほしい。(M1)
- 現場実習がより効果的です。(M2)
- もう少し定量的、経営管理的なことをカリキュラムに加えたほうが良いのではないかな。(M2)
- 一般の日本人と旅行したい。(M2)
- 博士前期課程の院生にも学会発表を義務付ける。(D3)

⑦ その他（学生生活、設備など）について

- 強いて言えば、学食を改善すべきだと思います。(M1)
- 学内で使えるWi-Fi情報をもっと告知してほしい。(M1)
- 共同研究室のプリンターが壊れやすい。ステイプル対応にしてほしい。(M2)
- 部活のことを紹介してほしい。(M2)
- 研究室にカラーコピーのプリンターを設置してほしい。(D1)

- 教務課のオープン時間を社会人学生にも配慮したものにしていただきたい。特に始業時期前後の時間短縮は大変対処に苦しむ。(D3)

別添資料① 特色ある教育研究報告会 12 月

FD 講演会：特色ある教育研究報告会

日時：2019 年 12 月 12 日 11 時 20 分～11 時 50 分

会場：8 号館 7F 特別会議室

参加人数：15 名

研究及び教育への取り組みについて

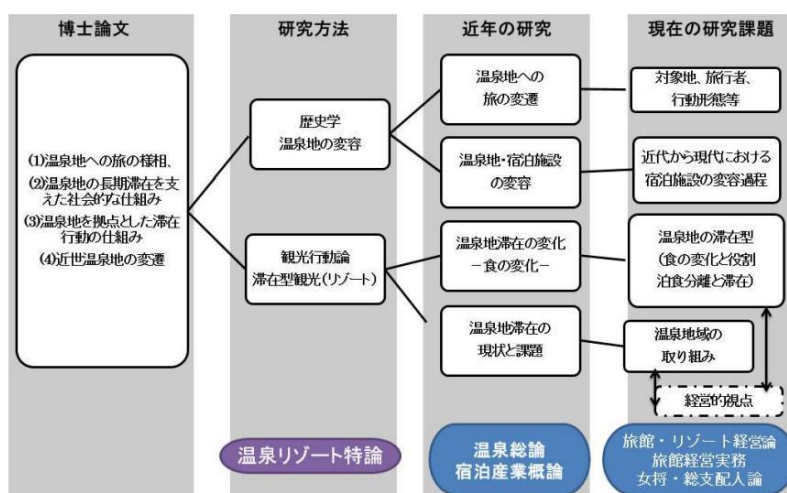
国際観光学部 専任講師 内田 彩

1. 専門分野

・観光歴史学、温泉論、観光行動論

2. 研究のフレームワーク

* 大学院の研究：『近世後期における温泉地への旅と滞在生活に関する研究』（博士論文）



観光歴史学の視点から温泉地への旅という歴史的事象と滞在生活の仕組みを考察した。日本型長期滞在の原型である近世後期の温泉地を対象に(1)温泉地への旅の様相、(2)温泉地の長期滞在を支えた社会的な仕組み、(3)温泉地を拠点とした滞在行動の仕組み、(4)近世温泉地の変遷について明らかにした。以上、近世期における滞在型観光の構造と行動形態を提示することで、現代における温泉地の再生計画で求められる滞在型観光の構造と行動形態を提示した。また研究の過程で現代の温泉地は本来温泉地が保有していた保養・療養と観光・遊興が分離した形態であり、温泉地の原点回帰に目を向ける必要があることを指摘した。

3. 教育のフレームワーク

(1) 学部教育

①「学生の状況を踏まえた学習指導」

大学の授業は、受講生数、配当年次などにより、目標とすべき到達点、配慮すべき点などが異なると考えられる。学生の現状を把握することを心掛けながら、柔軟に授業を組み立てることに取り組んでいる。具体的には授業初回にプレテストを行い基本的知識の確認をすることに加え、毎回リアクションペーパーをとり、授業の理解度を把握するようにしている。

②「興味・関心の持てる授業」

「知ることの楽しさ」を学んでもらえるように心がけている。例えば「温泉地のまちなみ保存」を学ぶ際には、最初に歴史的なまちなみの写真を見せて、日常生活となにが違うのかを自分自身で考えて、「発見」してもらうようにしている。授業中に1つでいいので、何か「おもしろい」と感じてもらうことで、「学ぶことの楽しさ」を感じて欲しいと願っている。

③「能動的な学習」

ゼミナール以外は「能動的学習」が難しく、基本的には「受動的学習」となる。ただし基本的な「学ぶ」という姿勢を身につけてもらうため、また「飽きさせない」ために、授業中に書く、考える、見る、知るなどの「作業」を導入している。最終的には「考えるプロセスの重要性」や「多様な見方や価値観を受け入れること」を理解した上で、「自分自身の考えをまとめて伝えること」ができるように心がけている。

④「分かりやすい授業」

「授業についていけない」と思わせると、学習意欲が著しく低下するため、分かりやすい授業を心がけている。受講の前提となる知識や文化が異なるため、写真・DVDなどの視覚教材を用いて多角的に理解してもらうことで、授業に興味・関心を持つとともに、わかりやすい授業になるよう心がけている。

(2) 大学院教育

◎大学院教育の意義（「大学院教育について」文部科学省）

- ・研究・開発能力を持つ研究者等の養成
- ・高度な専門的知識・能力を持つ高度専門職業人の養成(社会人学び直し大学院プログラム含む)
- ・教育能力と研究能力を兼ね備えた大学教員の養成
- ・知識基盤社会を多様に支える高度で知的な素養のある人材の養成
⇒「知識基盤社会」の形成と学問の社会的貢献

①「研究手法の説明」

観光学は新しい学問分野であることに加え、学際的な研究領域でもある。そのため、大学院生も多様な背景・目的を持つ場合が多い。授業では「温泉及び温泉地」の理解を深めてもらうとともに、研究対象にどのような手法を用いてアプローチしているのか、理解を深めてもらうよう努めている。

②「新たな視座を得る－温故知新－」：能動的・積極的な姿勢と地道な調査から研究フレームを構築

日本人の観光行動は、周遊型観光が一般的であり、温泉地もその滞在拠点の一つとして

捉えられてきた。特に「日本人は長期滞在に向かない」、「伝統的に日本旅館は1泊2食であつた」という言説をよく聞くが、歴史を振り返れば、必ずしも「事実」とは言えない側面がある。現代の認識（常識・知識）だけから物事を見るのではなく、歴史的視座のなかでデータ（資料）を丹念に分析することで新たな視座を得ること、また、研究の社会還元という視点を忘れないように指導することを心がけている。

別添資料② 特色ある教育研究報告会 1 月

FD 講演会：特色ある教育研究報告会

日時：2020 年 1 月 16 日 11 時 20 分～11 時 50 分

会場：8 号館 7F 特別会議室

参加人数：14 名

話題提供者：古屋 秀樹（教授、専攻長）

テーマ：教員の研究教育活動と情報交換

国際観光学研究科では、FD 活動の一環として、研究科の教員から自身の研究教育活動について情報提供ならびに意見交換を行った。主な内容は下記のとおりである。

1. 「教学マネジメントを支える基盤—FD・SD の高度化に向けた提言—（佐藤 浩章）、中央教育審議会 教学マネジメント特別委員会」を用いて、FD の取り組み視点（7 項目）の紹介があった。

2. 7 項目の 1 つである「提言 3 教員の能力開発の機会を保障する」について、様々なレベルごとの取り組み事例が紹介された。

その一方で、FD 活動に対する批判例として「一方向的な講義にとどまり、教員のニーズに応じた実践的な内容になっておらず、教員の日常的な教育改善の努力を促進・支援するに至っていない」旨の紹介があった。

3. 大学院の FD について、問題提起があった。

大学院の特徴（vs 学部）

- ・ 授業履修者（院：ほぼ個人対応）
- ・ 留学生⇄日本人（例：修論のテーマ、手法）
- ・ 修論の基準、指導⇄授業

※査読付き論文の投稿、学会への参加・発表を推奨する事例の紹介。

大学院の特徴（観光関係）

- ・ 出身学部・経歴の多様さ（基礎？）

FD の定義について

- ・ 教員の「研究能力」の開発を含んでいる事例もあり。

4. 我々を取り巻く状況（高校→大学、学習指導要領の改訂）について、紹介があった。

・ 学力の 3 要素の重視

- 1) 知識・技能の確実な習得
- 2) (1)を基にした) 思考力、判断力、表現力
- 3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度
(AL などによる主体的な学び、対話的な学び、深い学び)

例：論理的思考力育成のための「学習論文」の作成（高校の取り組み事例）

- 1) グループで調べ学習をして制作物にまとめて発表

- 2)グループ学習を発展して、個人の研究テーマのまとめ
 - 条件① 自分で課題を設定すること。
 - 条件② 仮説を設定すること。(仮説設定→検証)
 - 条件③ 検証結果があること。(自分で確認、インタビュー、文献)
 - 条件④ 検証結果をもとにした、自分なりの考察・まとめ
- ・高大接続の見直し
 - ・高校:学力の確実な育成
 - ・入試:多面的・総合的評価(推薦・一般での判定等)
 - ・大学:学力の更なる伸長(専門性、社会との関連性)
- 5. 高等学校の授業内容の高度化 (具体例)
 - ・現代の国語 (仮称)
 - ・ 目的に応じて多様な資料を収集・解釈し、根拠に基づいて論述する活動
 - ・ 文学作品等を読んで、構成や展開、優れた表現などの効果について言葉の意味や働きに着目して批評する活動
 - ・ 根拠を持って議論し互いの立場や意見を認めながら集団としての結論をまとめる活動
 - ・歴史総合(仮称)
 - ・ 歴史の推移や変化を踏まえ、課題の解決を視野に入れて、世界とそこにおける日本について、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察する
 - ・理数探究 (仮称)
 - ・①教科の枠にとらわれない多角的、多面的な視点で事象を捉え、②数学や理科における見方・考え方を活用したり組み合わせたりしながら、③探究的な学習を行うことを通じて、④新たな価値の創造に向けて粘り強く挑戦する力の基礎を培う。
 - ・(小学校)プログラミング教育の導入
 - ・① 「プログラミング的思考」を育成すること。
 - ・② プログラムや情報技術の社会における役割について気付き、それらを上手に活用してよりよい社会を築いていこうとする態度を育むこと。
→段取り、論理的な試行、正確な表現が育まれるか(私見)
- 6. 学部での授業の取り組み例 (例: 情報演習)
 - ①作法の習得(レポート、プレゼン)
 - ②事実に基づく説明
 - ③説得できるプレゼン資料 (説明資料型プレゼン)
- 7. 大学院における教育: DP と整合した人材育成
 - ・ 新たな知見の獲得⇔今までのことを正しく理解
 - ・ 要素分解と総合化 (例:国語での文章解釈 概念と論理)
→多変量解析(主成分分析)・回帰分析の課題(テーマ設定→解釈)

→アンケート調査実施の課題 「テーマ⇄調査票⇄分析方法・データ」⇄結論

8. 主成分分析の取り組み事例

例：ドラッグストアで販売されているファンデーションのプロダクトマップ

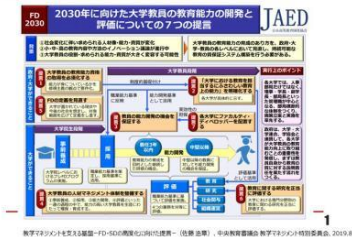
以上の発表の後、下記のようなコメントがあった。

- ・要素還元を通じて、自らの気づきが深く再確認できることは、比較的有効と考えられる。
- ・レポートやプレゼンの一般的な要求水準を学生に教授することや、統計学の有効性が読み取れる。

以上

※次頁以降、プレゼンテーション資料

- FD:大学教員の教育能力を高めるための実践的方法



教員マインドを支える提言—FD-SDの両立に向けた提言—(佐藤 浩), 中央教育審議会 教員マインド特別委員会, 2019.8

提言3 教員の能力開発の機会を保障する

- 最適な内容のFDを最適な方法で提供する

レベル	具体的な活動内容
教員・教員志望者	研究会・ワークショップ(例: 教育実践研究、シラバス作成、アクティブラーニングを促す教育方法、多人数授業法、学習評価法)、公開授業、授業評価、研修評価(ヒアリング)、セミナー、カンファレンス、授業コンテスト、ディスカッション、教員志望者向け、教材・教科書作成、論文執筆、学術発表、教育実践研究発表、メンタリング(教員志望者に対する建設的な批判)
カリキュラム担当者	研究会・ワークショップ、各部署における委員会やワーキンググループでの作業(例: 大学のシラバスの編纂、一貫性のあるカリキュラムの構築、カリキュラムの改訂、教員志望者向け研修のための研修会の企画)、他大学の視察
教員・教員志望者	研究会・ワークショップ、各部署における委員会やワーキンググループでの作業(例: 教員志望者向け研修、GPA・キャリア支援、学際的連携、学生からの教員評価、授業アンケート)、他大学の視察

FD活動に対する批判例

- 一方向的な活動にとどまり、教員の一に広げられ実践的な内容になっておらず、教員は主体的な教育改善の努力を促進・支援できていない。

教員マインドを支える提言—FD-SDの両立に向けた提言—(佐藤 浩), 中央教育審議会 教員マインド特別委員会, 2019.8

大学院のFDとは?

- 大学院の特徴 (vs学部)
 - 授業履修者(院: ほぼ個人対応)
 - 留学生や日本人(例: 修論のテーマ、手法)
 - 修論の基準、指導の授業
 - 出身研究室: 盲点付き論文の投稿(新規性、信頼性、有用性)
 - 学友への参加・発表
- 大学院の特徴(観光関係)
 - 出身学部・経歴の多様さ(基礎?)→1年目教員2年目(1914)6、教員
- FDの定義(日本大学)
 - 教員の研究能力や教育能力の開発、
 - 教育システムの開発(教材、授業評価などの仕組みづくり)
 - 組織開発(教員研究組織などを導入した形にすること)→竹村学長年頭のあいさつ(研究力の向上)

2020年 年頭のあいさつ 竹村学長

2020年 年頭のあいさつ 竹村学長

2020年 年頭のあいさつ 竹村学長

2020年 年頭のあいさつ 竹村学長

1. 大学としての使命を再確認すること
2. 大学としての使命を再確認すること
3. 大学としての使命を再確認すること
4. 大学としての使命を再確認すること
5. 大学としての使命を再確認すること

教員マインドを支える提言—FD-SDの両立に向けた提言—(佐藤 浩), 中央教育審議会 教員マインド特別委員会, 2019.8

我々を取り巻く状況(高校→大学、学習指導要領の改訂)

- 学力の3要素の重視
- 背景: 社会構造も急速に大きく変革。知識基盤社会の中で、新たな価値を創造
- 1. 知識・技能の確実な習得
- 2. (1)を基にした「思考力、判断力、表現力
- 3. 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度 (ALなどによる主体的な学び、対話的な学び、深い学び)
- 例: 論理的思考力育成のための「学習論文」の作成
 - 1) グループで調べ学習をして、制作物にまとめて発表
 - 2) グループ学習を発展して、個人の研究テーマのまとめ
 - 条件①: 自分で課題を設定すること。
 - 条件②: 仮説を設定すること。(仮説設定→検証)
 - 条件③: 検証結果があること。(自分で質疑、回答「1」, 文庫)
 - 条件④: 検証結果をもとにした、自分なりの考察、まとめ
- 高大接続の推進
 - 高校: 学力の確実な育成
 - 入試: 多面的・総合的評価(推薦: 一般での判定等)
 - 大学: 学力の更なる伸張(専門性、社会との関連性)

高等学校の授業内容の高度化

- 現代の国語(教科書)
 - 目的に応じて多様な資料を選択・編集し、読解に資する活動
 - 文の組織や構成、構成や構成、構成など効果について、読者の感情や態度に着目して批評する活動
 - 読解を通じて議論し、自分の立場や意見を認めながら異議を唱える活動
- 歴史総合(教科書)
 - 歴史の経緯や変化を踏まえ、課題の解決を視野に入れて、世界とその時における日本について、歴史的な課題の解決に資する活動
- 理数探究(教科書)
 - 正統科の枠にとらわれない多面的、多面的な視点で事象を捉え、①数学や理科における能力、考え方を活用した取り組みを促すこと、②探究的な学習を行うことを通じて、③探究的な課題の解決に資する活動
- (小学校) プログラミング教育の導入
 - ① 「プログラミング的思考」を育成すること。
 - ② プログラミングや算数・数学の学習における基礎について、それらを上手に活用してよりよい社会を築いていくこととする能力を育成すること。
 - 段階的、論理的な思考、正確な表現が求められる(私見)

学部での授業の取り組み例(例: 情報演習)



③ 説得できるプレゼン資料



6

11

※評価基準は自身の主観によるものです 12



17

18

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

情報連携学研究科は、2017 年 4 月、赤羽台キャンパスに情報連携学部と同時に設置された新研究科である。情報連携学部が完成年度を迎える 2021 年度までは、基礎となる学部から進学する学生が存在せず、下記の人材養成に関する目的のとおり、社会人の再教育を中心とした研究科となっている。

(人材養成に関する目的)

社会人の再教育を軸に、さまざまな分野においてある程度の社会的な実績を有する人材に対して、「情報連携」を実現するための横断的な教育を実施し、それによってその人材が持っていた専門性を情報連携の見地から大きく発展させると共に、新たなビジネスをインキュベーションできる高度な専門的職業人を養成します。

このため、社会人学生が入学しやすい入試制度とした一次試験免除制度や、入学後の学修計画に配慮した長期履修制度、短期修了制度を導入するとともに、社会人学生が履修計画を立案しやすいよう、原則週 2 日の授業で修了できる時間割を編成している。

その上で、社会人学生にとって本研究科での研究が、これまでの職務経験のブレークスルーとなることを促すとともに、多様な分野の教員や大学院生同士の交流が起こるよう、できるかぎり多くの専任教員が関与する形態で教育を行うとともに、大学院生同士が交流することができる共同研究室を設置した。

また、修士論文の中間報告や論文報告会については、多くの教員の参加により、特に活発な議論を行ってきた。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

企業、業界団体との連携協会、他業種への働きかけ

活動実績

2019 年度は、開設 3 年目、第 2 期目の修了生を輩出するにあたり、今年度は特に社会人学生が在職している企業や業界団体との連携を強化することとした。

ひとつには、各指導教員間で学生の特性とニーズに関する情報を共有しつつ、教育と研究指導を進めた。また、第 1 期生の修了者と継続的な関係を構築するとともに、研究科全体とし

て、企業のニーズに適したより実践的な教育内容や研究指導を行うことで、それらの企業との連携を強めることができた。

さらに、それらの企業が属する業界団体との働きかけを強める一方、Web 媒体による他業種への広報活動の充実も図り、DX（デジタル・トランスフォーメーション）の知見を求めている地方自治体からの受け入れの調整を行った。

これらの活動は、直接的な FD・SD 活動ではないが、現時点では、前述した本研究科の教育研究を充実させていくためには、多様な企業、業界団体、分野の大学院生の受け入れと連携強化が必須であることから、今年度については上記の活動を重点的に行った。

成果・課題

上記の取り組みの成果として、2020 年度の入学生については、第 1 期目の修了生の派遣企業から 2 名、在学生と同業種の他の企業から 2 名、地方自治体から 1 名の受け入れが確定している。

このことから、本研究科の教育研究が、当該企業や自治体のニーズに応じているものであると考えられるが、これらの大学院生の教育研究において、派遣元の企業や団体とのさらなる連携強化に繋がるように努めていく必要がある。

3) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

冒頭に記載したとおり、2021 年度からは、基礎となる情報連携学部から学生が進学してくることとなる。2019 年度には 7 月 17・18 日に 2 回の進学説明会を開催し、本研究科の説明だけではなく、大学院での学びや、大学院生に求められる姿勢について説明を行った。

一方で、これまでは情報連携学部での学修を前提としていない大学院生のみであったが、2021 年度からは、すでに情報連携学の基礎は学修済みの学生も対象となることを前提として、学生の受け入れや教育内容、研究指導方法の抜本的な見直しや、キャリア教育についても構築していく必要がある。

このため、現在研究科内で構築している研究科長、専攻長、学部長、学科長による代議員会を中心として、2020 年度中に上記について検討、制度設計を行っていく予定である。

1) OUTLINE OF THE FD/SD ACTIVITIES UP TO 2018 / ACT, PLAN

The Doctoral and Master Courses of the Graduate School of Interdisciplinary New Science were, respectively, opened in 2007 and 2011. Several advanced educational programmes were developed and quite a few international symposia, seminars and workshops were organised and held in collaboration with the Bio-Nano Electronics Research Centre to initiate international collaborative research projects and encourage students to carry out advanced research. As a result, a number of scientific papers were published in international journals by the students and their supervisors, and truly advanced young researchers were created during the academic years from 2007 to 2018. The School exchanged agreements on “PhD Double Degree Programmes” with the University Pierre and Marie Curie - Paris 6 and the University of Nantes in 2012 and with Sorbonne University in 2018. International academic internship programmes were specially designed for post-doctoral researchers and PhD and master students from partner universities. The “Erasmus+ Programme, European Commission, European Union”, was carried out in 2018 collaborating with the Politehnica University of Timisoara, Romania, and it was so successful that the programme was extended by one more year. The Secretariat of the Research Promotion Office and the Graduate School efficiently supported the above activities from an administrative point of view in collaboration with the academic staff members. The remarkable achievements in the research and educational programmes at the School proved that the standards of the academic and administrative staff members are very high even from an international point of view and as a result, the academic activities at the School made a great contribution to the advancement of the international programmes such as the “Top Global University Project” carried out by Toyo University.

2) FD/SD PROGRAMMES AND ACTIVITIES IN 2019 / DO, CHECK

2.1 ADVANCED EDUCATIONAL PROGRAMMES

PERFORMANCE

The School was established as an international graduate school and therefore the syllabi were written in English so that both Japanese and international students could understand

the research and educational policies and programmes organised by the School. The style and content of each syllabus were improved via mutual review among the academic staff members of the School.

The lectures and workshops were classified into two categories; that is, (a) fundamental and (b) specialised lectures and workshops. Note that the School accepts students from different countries and different fields such as physics, chemistry, biology, mechanics, electronics and biomedicine and therefore fundamental lectures are necessary for those from different educational backgrounds.

(a) Fundamental lectures

Introduction to bio-nano science fusion; English for science and technology;

Fundamental mathematics; Fundamental physics; Fundamental chemistry;
Fundamental biotechnology

(b) Specialised lectures

Extremophiles; Nanoelectronics; Nano materials; Bio materials and nanotechnology;

Microbiology; Bio nano science; Advanced nano science and nanotechnology;

Workshop on advanced equipment I, II, III, IV; Web education I, II

All the lectures and workshops were given in English. Particularly, in “Web education”, students gave presentations on their research plans and results in English, which were recorded and distributed via the Web educational programme “GEOSSET TOYO” in collaboration with overseas universities. In “Workshop on advanced equipment”, the principles and operational techniques of state-of-the-art microscopic and spectroscopic equipment were taught and instructed, which contributed greatly to the progress in the students’ ability to operate advanced equipment and carry out advanced research.

ACHIEVEMENTS

Even several undergraduate students attended some lectures, having read the syllabi. There was a remarkable improvement in students’ English and the students started their research using and operating several pieces of equipment and spectroscopic analysers without any trouble thanks to their participation in the “Workshop on advanced equipment”.

The academic staff members gave extracurricular courses on oral and poster presentations in English to those students who were going to participate in and present their latest research results at international conferences and symposia.

2.2 ADVANCED RESEARCH

PERFORMANCE

Advanced research in the fields of nano science/technology, bio science/technology and bio-nano fusion science/technology was actively carried out via interactive instructions and discussions between students and their supervisors, thanks to which quite a few scientific papers were published in international journals and presented at international conferences and symposia.

ACHIEVEMENTS

- (a) 13 scientific papers were published in international journals. The mean impact factor of a journal was over 4.500, which shows that the academic standards of the School are very high even from an international point of view.
- (b) 1 invited talk was given by an academic staff member at an overseas university.
- (c) 17 papers were presented at international conferences/symposia. 9 students gave presentations on their latest research results at international conferences/symposia.
- (d) 27 papers were presented at the 17th International Symposium on Bioscience and Nanotechnology organised by the Graduate School of Interdisciplinary New Science and the Bio-Nano Electronics Research Centre, noting that 16 students gave poster presentations at the Symposium.

2.3 COLLABORATIVE RESEARCH AND EDUCATIONAL PROGRAMMES

PERFORMANCE

The School has so far exchanged memoranda of understanding (MoUs) on the development of collaborative research and educational programmes with quite a few overseas universities and companies.

The International Affairs Office supported the conclusion of the MoUs and the Secretariat of the Graduate School on the Kawagoe Campus established the administrative procedure of the PhD double degree programmes and supported a student, who participated in the programme, in collaboration with the University of Nantes. Note that Toyo University has exchanged MoUs with Sorbonne University and the University of Nantes to start “PhD double degree programmes” in 2018 as mentioned.

The “Erasmus+ programme”, which had been carried out in 2018 in collaboration with the Politehnica University of Timisoara, was extended by one more year thanks to some outstanding results and the School organised a new programme for the academic year 2020

in collaboration with the Secretariat of the Research Promotion Office and the Bio-Nano Electronics Research Centre.

ACHIEVEMENTS

One student participated in the “PhD double degree programme” organised by Toyo University and the University of Nantes. She stayed in Nantes for three months to carry out theoretical and numerical study and spent nine months in Kawagoe on her experimental study on the synthesis and characterisation of carbon nanostructures.

Toyo University and the Politehnica University of Timisoara finalised the “2020 Erasmus+ programme”; that is,

- (a) One PhD student will stay in Kawagoe from 10th April to 28th July 2020 to carry out collaborative research on “Patterns formed by magnetic nanoparticles”.
- (b) One Toyo professor will give eight lectures on “Nanoscience and nanotechnology” during his five day stay in Timisoara.

Two internship programmes were organised and given to

- (a) 58 students from Himeji High School.
- (b) One master student from the Skolkovo Institute of Science and Technology, Russia.

The Secretariat of the Research Promotion Office, the Graduate School and the Bio-Nano Electronics Research Centre efficiently supported the above academic activities. The collaborative programmes were successfully carried out in terms of the joint publications of scientific papers in international journals and joint presentations at international conferences.

2.4 ORGANISATION OF INTERNATIONAL SYMPOSIA AND SEMINARS

PERFORMANCE

The School organised and held international symposia and seminars for young researchers in collaboration with the Bio-Nano Electronics Research Centre to encourage and accelerate their international research activities. The Secretariat efficiently supported the symposia and seminars collaborating with the academic staff members.

ACHIEVEMENTS

- (a) The 17th International Symposium on Bioscience and Nanotechnology was organised and held by the School and the Bio-Nano Electronics Research Centre. There were two plenary talks and two PDs gave talks on their latest research results. Students and PDs

also gave poster presentations. Note that each master student is required to give at least one poster presentation at the Symposium for the acquisition of the Master's Degree.

- (b) Two international seminars on "Research and educational programmes in the UK" were held as part of the Top Global University Project, inviting one British researcher.
1. Education systems and language programmes at Queen Mary and the UK.
 2. Research and innovation in the UK.

2.5 EVALUATION OF THE ACADEMIC AND ADMINISTRATIVE ACTIVITIES

PERFORMANCE

The lectures, research supervision and administrative support for the students were evaluated by the master and doctoral students based on the following questionnaire.

- (a) Questionnaire concerning the lectures / workshops / research organised by the Graduate School of Interdisciplinary New Science
- (a-1) Please give your opinions on the contents, level and management of the lectures / workshops / research.
- (a-2) Please describe what you have acquired from the lectures / workshops / research.
- (a-3) Please give your comments and suggestions for the improvement of the lectures / workshops / supervision of research and curriculum.
- (b) Questionnaire concerning the administrative support
- (b-1) Please give your comments on the administrative support.
- (b-2) Please give your comments and suggestions for the improvement of the administrative support.

An external evaluation committee was organised inviting new members.

Dean, Professor, Graduate School of Nanobioscience, Yokohama City University
Head, Professor, College of Engineering, Shibaura Institute of Technology
Researcher, National Institute of Advanced Industrial Science and Technology
General Manager, Device Functional Analysis Department, Nissan ARC Ltd.
Corporate Officer, Chief Researcher, Research and Development Group, Hitachi Ltd.

An external advisory committee will also be organised with new members.

Director, Tokyo Metropolitan Industrial Technology Research Institute
Professor, Faculty of Pharmaceutical Sciences, Josai University
General Manager, Central Research Laboratory, Hitachi Ltd.

ACHIEVEMENTS

Some important issues were raised and discussed for the improvement of the curriculum, the contents and management of the lectures and the administrative support for the students based on the students' evaluation.

EVENTS

Date	Name	Number of participants			Total
		Academic staff members	Young researchers (PDs/students)	Administrative staff members	
12th & 26th June and 24th July 2019	Nano/bio technology seminars for students of Himeji High School via the TV Conference System	5	8	0	13
19th – 21st August 2019	Internship programme composed of 7 projects for students from Himeji High School Place: Bio-Nano Electronics Research Centre	5	16	3	24
30th October – 24th December 2019	Internship programme for a master student from the Skolkovo Institute of Science and Technology, Russia	3	4	3	10
3rd – 4th December 2019	Seminars for the Top Global University Project	6	50	2	58
6th December 2019	The 17th International Symposium on Bioscience and Nanotechnology	7	80	6	93

	https://www.toyo.ac.jp/news/research/labocenter/bnel/20191108/				
December 2019 – March 2020	Negotiation on the Erasmus+ Programme with the Politehnica University of Timisoara https://www.toyo.ac.jp/news/research/labocenter/bnel/20191024Erasmus/	2	0	4	6
December 2019 – March 2020	Negotiation on the Erasmus+ Programme with the University of Bucharest https://www.toyo.ac.jp/news/research/labocenter/bnel/20191113Erasmus_Bucharest/	2	0	4	6

3) FD/SD STRATEGIES IN 2020 / ACT, PLAN

The Graduate School of Interdisciplinary New Science will intensify and accelerate the international research and educational activities in collaboration with advanced overseas universities and industries. The outline of the FD/SD activities carried out in 2020 is summarised below.

- (a) The academic staff members will give several extracurricular courses to the students to encourage their international activities in addition to the fundamental and specialised lectures and workshops.
- (b) The academic staff members will encourage and support the students to carry out advanced research from theoretical, analytical and experimental points of view.
- (c) Several international programmes will be initiated and performed in collaboration with overseas universities.
 1. “Erasmus+ Programme” with the Politehnica University of Timisoara, Romania.
 2. “Erasmus+ Programme” with the University of Bucharest, Romania.

3. “PhD Double Degree Programme” with the University of Nantes, France.
 4. Negotiation on the “English Courses for Toyo Students” with the University of Exeter, UK, the Queen Mary University of London, UK, and the University of California Santa Barbara, USA.
 5. Internship programmes for high school students and students/PDs from partner universities.
 6. Application for the “RISE Programme” organised by the European Commission, EU, in collaboration with French, Belgian, Greek and Spanish universities.
- (d) International symposia and seminars will be organised and held for young researchers such as master and doctoral students and PDs.
- (e) The external evaluation committee will be held in the first half of 2020, whereas the external advisory committee in the latter half.

We believe that the international research and educational activities initiated by the School will make a great contribution to the progress of the international programmes such as the “TopGlobal University Project” carried out at Toyo University.

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

本研究科では、開講初年度（2018 年度）以前から、福祉社会開発研究センターにおける活動等を通じて、教員の研究や社会貢献、また、管理業務に関する資質向上を図ってきた。加えて、教員の授業運営能力や研究能力の資質向上を目的とした外部の FD 講演会等への参加促進、修了生を含む海外講師の招聘、各種シンポジウムの開催、及び関連図書の配置等を行ってきた。

本研究科の初年度となる 2018 年度には、社会福祉学研究科博士前期課程・後期課程（福祉社会デザイン研究科を含む）に在籍している学生への授業等への満足度に関するアンケート調査を行った。実施期間は、2018 年 12 月末～2019 年 1 月末であり、計 15 名が回答した。本アンケートは自由記述式であり、（1）授業・講義、（2）主査・副査の諸指導、（3）その他についての質問を設定し、各学生が提供された教育をどのように捉えているのかを理解することを目的に行われた。その結果、「授業・講義」や「主査・副査の諸指導」については概ね満足しているという回答が多かった。ただ、「授業・講義」については、各学生の個別の研究テーマに沿った内容も取り入れてほしいという要望が出された。次年度である 2019 年度は、各学生の関心を可能な限り取り入れながら進めていくことを、研究科会議内で確認した。「主査・副査の諸指導」については、博士後期課程の授業や指導を昼間に行ってほしいという要望が出された。本アンケートの分析時には、次年度の時間割は確定済だったことから、2020 年度以降の対応を行うことを教員間で確認した（2020 年度の時間割には可能な限り反映させている）。「その他」については、院生研究室の備品等に関する要望が多く見受けられたため、教員だけでなく教務課とも協議し、出来る限り対応を行っていくことを確認した。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実施内容 / PLAN, DO

2019 年度は、2018 年度と同様、社会福祉学研究科博士前期課程・後期課程（福祉社会デザイン研究科を含む）に在籍している学生へのアンケート調査を行った。実施期間は、2019 年 12 月 16 日（月）～2020 年 1 月 15 日（水）であり、計 23 名（博士前期 16 名、博士後期 7 名）が回答した。聴取内容は、昨年度と同様、（1）授業・講義、（2）主査・副査の諸指導、（3）その他、であった（すべて自由記述）。本研究科の FD 研修担当教員が集計し、改善方法等を 2020 年 2 月 17 日（月）の研究科の会議で検討した。

3) 2019 年度における FD・SD 活動の成果と課題 / CHECK, ACTION

上記のアンケート調査から明らかになったことは、以下の通りである。

(1) 授業・講義

博士前期課程の学生からは、「社会福祉学の知識を全般的に学ぶことができた」「自分の研究課題にとって、非常に役立った」「論文執筆にあたる方法論を教えてもらい、大変勉強となった」「補助教材やレジュメ等の資料は、授業内容の理解に役立った」「異なる観点をぶつけ合うことが良いと思う」等の回答が寄せられた。社会福祉の知識を広く学べたことや、各学生の関心に沿ったテーマを選択し発表の機会が与えられたこと、また、発表後のディスカッションから様々な視点を学ぶことができる授業への参加は、学生のニーズに合致し、継続して学ぶための動機付けを高めたと考えられる。一方で、「学期開始時に、必要な資料を配布してほしい」等の要望も出された。このことについては、次年度の改善点となると考えられる。

博士後期課程の学生からは、「研究に集中できる講義で良かった」「毎回学生の発表をした後に、学生からの質問を積極的に促し、学生を主体的に学ばせるような講義で、とても学習意欲が湧いた」「アジアをはじめとする海外の研究者の研究会や勉強会の機会等もあり、とても充実していた」等の回答が寄せられた。

前年度のアンケート調査の結果を受けて、各教員が、授業内容や指導方法を精査・改善し発展させたこと、また、授業以外の場での学びや発表の場の提供等が、各学生のニーズに合致し、論文作成への動機付けを高めたようである。

(2) 主査・副査の諸指導

博士前期課程の学生からは、「昨年と比べてより丁寧な指導が受けられたように感じる」「研究課題について指導教員と相談し、すごく役立った。たくさんのアドバイスをもらった」「授業時間外にも時間をもらい、テーマ・内容が整理できた」等の回答が寄せられた。博士後期課程の学生からは、「主査は、研究枠組みや研究方法の視点についてより幅広く話題を提供しており、研究の視野が広がった。副査は、専門外でありながら、博論の進め方を丁寧に説明し、安心感を提供してくれた」「論文をまとめるために必要な視点や理論的枠組みを示して、指導して頂いていた」「現在主査からは、月 1 回、副査からは学期 1 回のペースで指導を受けている。必要に応じて先生方と相談しながら、研究を進めている。自分の研究で疑問や問題点を集中的に、いつでも相談できて良いと思う」等の回答が寄せられた。

このように、主査・副査の指導に関する評価は、総じて良好である。また、志村教授は、本年度は週末ゼミ（土曜日もしくは日曜日、月に一度のペース）を開催し、修了生や他大学の院生も含めての相互交流や学習の機会を提供した。個別の研究指導をどのように行うかは各教員に委ねられているが、引き続き、可能な限り院生の要望に応えるようにしたい旨を、教員間で確認した。

(3) その他

2019 年度は特に、一部の新生の欠席・遅刻・課題の未提出等が散見された。論文作成には、社会福祉やソーシャルワーク、調査に係る包括的な知識と理解が必要なことはもちろんであるが、大学院は研究者・実践者としての態度を学ぶ場でもある。このことから、入学時オリエンテーションの際に、大学院教育の目的や研究者としての態度等について周知徹底していくことを教員間で確認した。また、留学生への指導・対応（日本語指導、東アジア関連のシンポジウム、講師招聘）の充実と並行して、日本人学生へのさらなる指導・対応の充実も、今後の課題であることを教員間で確認した。院生研究室の備品や入手方法・手続き等に関する要望も寄せられた。教務課と協議し、出来る限り速やかに対応していきたい。

4) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

2018 年度及び 2019 年度の実績を踏まえ、継続的な教育・研究活動を実施する。具体的には、年 2 回の修士論文に係る中間報告、毎夏開催されている東洋大学社会福祉学会での発表や、教員による共同指導の機会、福祉社会開発研究センターにおける活動等を通じての社会貢献や研究・発表の機会を提供する。さらに、修士論文や博士学位論文の執筆に向けた体制づくり（論文要旨や論文作成の共通フォーマット作成を含む）を社会福祉学専攻全体の共通課題として共有し、定期的に研究科・専攻会議の議題とすることにしたい。今年度から実施されている志村教授の週末ゼミは、2020 年度も引き続き実施される予定である。このような取り組みは、留学生はもとより、日本人院生の学びの質向上にもつながると考えられる。今後も引き続き、専攻に所属する教員や専攻の院生の教育・研究活動の活性化に努めていきたい。

1) 2018 年度までの FD・SD 活動状況 / ACT, PLAN

国際教育センターの組織は一般の専任教員に加え、LEAP プログラム、NEST プログラム、さらに国際部国際課オフィスの4 つに分類される。留学支援LEAP プログラムでは年1～2回程度、外部講師あるいは学内講師を招聘し、英語教育や留学準備に関する研修を開催してきた。また、交換留学生のためのNEST プログラムでも日本語教育に関するFD を実施している。SD については、2018年度はSGU採択校のうち先駆的な取り組みを行っている大学を対象に調査及び分析を行い、取組概要を発表するとともに本学への応用について議論する研修会を行った。他にも、学生を海外に派遣することに伴う危機管理研修、異文化理解講習等を実施した。

2) 2019 年度における FD・SD 活動実績及び成果・課題 / DO, CHECK

LEAP プログラム IELTS 研修 [FD]

活動実績

TOEFL ITP 対策のための LEAP プログラムは、2021 年度カリキュラムより IELTS 対策を主軸とするプログラムに改編されることに伴い、IELTS の教授法等に関するワークショップを2回実施した。両研修とも LEAP プログラム教員に限定せず、全学に公開して実施した。1 回目は IELTS テストの実施団体である British Council および英検からエキスパートを講師として招聘し、IELTS 概要、採点基準、指導方法について研修を行った。2 回目の研修は IELTS 対策をインタラクティブに指導する方法等をテーマに実施した。

1 回目 講師： Mr. Chris Redmond (British Council)

日時： 2019 年 12 月 12 日 (木) 10:00~12:00 場所：5401 教室 参加者数：14 名

2 回目 講師： Mr. Peter Brereton (国際基督教大学)

日時： 2020 年 1 月 16 日 (木) 10:30~12:00 場所：8203 教室 参加者数：9 名

成果・課題

2 回の IELTS 対策ワークショップを通じて、IELTS の概要、採点基準を始め、効果的かつインタラクティブな指導方法について理解を深めることができた。今後、本学学生の IELTS に対するニーズやスコア傾向を理解し、本学の学生が効率的に IELTS のスコアアップを達成することができ、かつ留学先で正課授業を履修できる程度の学術的な英語力を習得するプログラムを開発して行く必要がある。引き続き、2020 年度は教育プログラムの開発に向けた一層の情報収集と定量分析が必要となっている。

日本語教育 FD プログラム [FD]

活動実績

・日本語教育実践の向上をはかるために、NEST プログラムの教員を含む学内の日本語授業担当講師を対象として、日本語教育の専門家による日本語教育 FD 研修会を実施している。2019 年度は山内博之教授（実践女子大学）をお招きし、『外国語能力をいかにして高めるかー教師・学習者という 2 つの立場からー』というテーマで行った。本 FD は本学教員だけではなく、文学部日本語教員養成プログラムを履修する学生や留学生にも公開して実施した。

講師： 山内博之教授（実践女子大学）

日時： 2020 年 1 月 21 日（火）14:45~16:15 場所：4B13 教室

参加者数： 40 名（内本学教員 6 名）

成果・課題

FD 研修会で得られた知見は、本学の日本語教育を推進するための教授法と教材の開発やテスト、クイズの開発に役立てられている。2020 年度については、山内先生ご自身の外国語学習経験と教師としてのキャリアが重ねて紹介され、特に言語教師にとって外国語学習者の視点を持ち続けることの重要性が確認された。特に、TBLT（Task based language teaching）の背景にある考え方への理解が深まったことで、教員それぞれの教育手法への応用が期待される内容であった。更に Task をベースに展開される教育実践については、引き続き、教員間で情報共有を行い、討議していく。

業務マニュアル及び引継書の取りまとめ [SD]

活動実績

持続性のある業務体制の構築を目的に、国際課内の業務について業務マニュアル及び引継ぎ書の雛形を作成し、各チームにおいて主要な業務に関するマニュアル及び引継ぎ書を作成した。これらの資料をもとに新入職員や新規配属職員のための OJT 等に活用してく予定である。

成果・課題

定型フォーマットに基づき、業務マニュアル及び引継ぎ書が作成されたことにより、効率的かつ持続的な業務体制の構築が可能となった。今後はこれらの資料を継続的にアップデートしていくとともに、新入職員や新規配属職員の業務理解のために活用していきたい。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数（人）			HP 掲載
		教員	職員	計	
2019/12/12	IELTS 研修 1 回目 [FD]	14	2	16	×
2020/1/16	IELTS 研修 2 回目 [FD]	9	0	9	×
2020/1/20	日本語教育 FD プログラム [FD]	6	0	6	×

3) 2020 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 / ACT, PLAN

LEAP プログラムについては、IELTS 対策への再編に向けて、本学の学生および英語教員を対象に IELTS に対するニーズを調査し、その調査分析に基づいて IELTS に主軸を置いた教育プログラムのコンテンツを策定する。加えて、同分析内容に応じて、必要となる知見のインプットに繋がる研修なども随時計画していく。

日本語教育プログラムについては、日本語教育に関連する多角的な側面からテーマを設定し、FD を実施する。具体的には、①コーパスという大規模言語資源を用いた日本語教育の手法と教材開発（5 月実施予定）、②社会言語学の視点による留学生の留学生活や卒業との進路を総合的に取られた言語教育の在り方（7 月実施予定）、そして、日本語教育実践手法について、③テスト理論に基づく日本語テストとクイズの作成方法（1 月実施予定）の 3 テーマで外部の専門家を講師に招聘し FD を実施する予定。

SD 研修については、2019 年度に作成した業務マニュアル及び引継ぎ書を効果的に活用した OJT を実施していきたい。

高等教育推進センター/委員会 FD・SD 活動報告

2019 年度高等教育推進センター/委員会活動一覧

月	推進委員会・部会長会議・各部会						行事	
	推進委員会	部会長	教育方法改善	FD・SD研修	高等教育研究	教育開発・改革	日程	内容
4							4月12日(金)	全学授業評価アンケート実施依頼
	①4/16(火)						4月13日(土)	ティーチング・アシスタントFD研修会
5							5月	『東洋大学FD・SD活動報告書(2018年度)』刊行
			①5/16(木)	①5/16(木)				
					①5/20(月)			
							5月25日(土)	授業評価アンケート第1Q実施期間開始(～6/7)
6	②6/10(月)					①6/9(日)		
				②6/17(月)			6月14日(金)	第29回関東圏FD連絡会@法政大学
							6月29日(土)	2019年度全国私立大学FD連携フォーラム総会・シンポジウム@創価大学
7							7月6日(土)	授業評価アンケート第2Q/春学期実施期間開始(～8/5)
							7月6日(土)	2019年度新任教員FD研修会
					②7/25(木)			
8							8月2日(金)	2018年度優秀教育活動賞表彰式
							8月2日(金)	第9回学長フォーラム
9								
10				③10/11(金)				
						③10/24(木)		
			②10/29(火)					
11				④11/7(木)			11月5日(月)	授業評価アンケート第3Q実施期間開始(～11/19)
	③11/13(水)		③11/13(水)					
							11月29日(金)	manabaユーザー会(後援)
12								
							12月18日(火)	授業評価アンケート第4Q/秋学期実施期間開始(～1/27)
1								
							1月15日(火)	2019年度全国私立大学FD連携フォーラムミーティング・懇談会@関西学院大学
2			④2/10(月)					
							2月14日(木)	2019年度FD・SD研修会「授業運営で留意したい改正著作権法」
3				⑤3/2(月)			3月2日(土)	第30回関東圏FD連絡会@東洋大学※延期
	④3/10(火)						3月9日(土)	英語で授業をおこなうためのFD研修会※延期
							3月18日(月)	高等教育推進センターニュース第3号刊行

高等教育推進委員会

第1回（第Ⅱ期通算第1回）

日時 2019年4月16日（火） 18:15～19:45

場所 白山キャンパス2号館3階 第一会議室

〔はじめに〕

- (1) 高等教育推進センター長の挨拶
- (2) 高等教育推進委員会委員の紹介
- (3) 平成30年度第4回東洋大学高等教育推進委員会要録の確認

〔議題〕

1. 協議事項

- (1) 委員の各部会配属及び部会長の選出について
- (2) 2019年度高等教育推進センター活動スケジュール及び委員会の運営について（部会運営、会議日、連絡方法等）

2. 報告事項

(1) 各部会活動状況報告

- ① 英語で授業を行うためのFD研修会実施報告
- ② 2019年度ティーチング・アシスタントFD研修会実施報告
- ③ 東洋大学高等教育推進センターニュースレター配信状況

(2) 各学部・研究科におけるFD・SD活動状況報告

(3) センター長報告

- ① 3つのポリシーに基づくPDCAサイクルについて（仮）

(4) センター報告

- ① 学生FDチームの活動状況と今後の募集について
- ② 各学部・研究科からの教学データ提供依頼状況
- ③ 「東洋大学高等教育推進センターニュース第2号」の刊行について
- ④ English Support Serviceの春学期スケジュールについて
- ⑤ 学外機関との連携について
- ⑥ 学外におけるFD・SD関連研修会について

3. その他

- (1)授業評価アンケートの実施について（再掲）

第2回（第Ⅱ期通算第2回）

日時 2019年6月10日（月） 10:40～12:10

場所 白山キャンパス2号館3階 第一会議室

〔はじめに〕

- (1)2019年度第1回東洋大学高等教育推進委員会要録の確認

〔議 題〕

1. 報告事項

- (1)各部会活動状況報告

- ①ティーチング・アシスタントFD研修会実施報告
- ②『東洋大学FD・SD活動報告書（2018年度）』の刊行（PDF）について

- (2)各学部・研究科におけるFD・SD活動状況報告

- (3)センター報告

- ①優秀教育活動賞受賞者との連携について
- ②ICTを活用した特別授業について
- ③学外におけるFD・SD関連研修会について
- ④学外機関との連携について

2. 協議事項

- (1)各部会の活動計画

3. その他

- (1)授業評価アンケートの実施について（再周知）
- (2)English Support Service について

第3回（第Ⅱ期通算第3回）

日時 2019年11月13日（水）18：15～19：45

場所 白山キャンパス 8号館中2階 第2会議室

〔はじめに〕

(1)2019年度第2回東洋大学高等教育推進委員会要録の確認

〔議 題〕

1. 報告事項

(1)各部会活動状況報告

①2019年度第1クォーター、第2クォーター及び春学期授業評価アンケート実施結果

②2019年度新任教員FD研修会実施報告

③2019年度FD・SD研修会の開催について

④2019年度英語で授業をおこなうためのFD研修会の開催について

⑤東洋大学高等教育推進センターニュースレター配信状況

⑥manabaユーザー会の開催について

(2)各学部・研究科におけるFD・SD活動状況報告

(3)センター報告

①学生FDチームの活動状況について

②English Support Serviceの利用状況について

③各学部・研究科からの教学データ提供依頼状況について

④学外機関との連携について

⑤学外におけるFD・SD関連研修会について

2. 協議事項

(1)授業評価アンケートの活用例の把握について

(2)授業評価アンケート項目の見直しについて

3. その他

(1)成績・学修成果関連データ作業に係るシステム対応について

(2)授業評価アンケートの実施について（再掲）

(3)その他

第4回（第Ⅱ期通算第4回）

日時 2020年3月10日(火)14:30 ～ 3月12日(木)14:30

場所 全学グループウェア ガルーン メッセージ

[はじめに]

(1) 2019年度第3回東洋大学高等教育推進委員会要録の確認

[議題]

1. 報告事項

(1) 各部会活動状況報告

① 教育方法改善部会

(ア) 2019年度第3クォーター・第4クォーター及び秋学期授業評価アンケート実施報告

(イ) 授業評価アンケートの活用例把握のためアンケート結果報告

(ウ) 「授業評価アンケートの項目見直しに関するスケジュール」について

(エ) 教育方法改善部会 2019年度活動報告

② FD・SD 研修部会

(ア) 2019年度英語で授業をおこなうためのFD研修会の開催について

(イ) 東洋大学FD・SD活動報告書（2019年度）の作成状況について

(ウ) FD・SD 研修部会 2019年度活動報告

③ 高等教育研究部会

(ア) 東洋大学高等教育推進センターニュースレター配信状況

(イ) 高等教育研究部会 2019年度活動報告

④ 教育開発・改革部会

(ア) manaba ユーザー会開催報告

(イ) 2019年度FD・SD研修会実施報告

(ウ) 教育開発・改革部会 2019年度活動報告

(2) 各学部・研究科におけるFD・SD活動状況報告

(3) センター報告

① 博士後期課程学生に向けたプレFDの対応について

② 学生FDチーム活動報告

③ English Support Service の利用状況について

④ 各学部・研究科からの教学データ提供依頼状況について

⑤ 高等教育推進センターニュース第3号の刊行について

⑥ 学外機関との連携について

⑦学外における FD・SD 研修会について

2. 協議事項

(1)2020 年度授業評価アンケートの実施について

(2)2020 年度ティーチング・アシスタント FD 研修会の開催について

(3)2020 年度新任教員 FD 研修会の開催について

3. その他

(1)学修成果測定指標集計・表示システム（仮）の開発状況について

(2)その他

教育方法改善部会

部会

第 1 回（第 II 期通算第 1 回）

日時 2019 年 5 月 16 日
場所 メール会議
議題 1. 2019 年度の活動計画について

第 2 回（第 II 期通算第 2 回）

日時 2019 年 10 月 29 日（火）16:45～18:00
場所 白山キャンパス 8 号館 8 階 学長会議室
議題

〔はじめに〕

- (1)教育方法改善部会部会員の紹介
- (2)教育方法改善部会について

〔議 題〕

1. 報告事項

- (1)2019 年度授業評価アンケートの実施について
- (2)2019 年度第 1 クォーター、第 2 クォーター及び春学期授業評価アンケート実施結果

2. 協議事項

- (1)授業評価アンケートの活用例の把握について
- (2)授業評価アンケート項目の見直しについて

3. その他

第 3 回（第 II 期通算第 3 回）

日時 2019 年 11 月 13 日
場所 メール会議
議題 1. 授業評価アンケート活用例把握に関するアンケートの設問 5 について

第 4 回（第 II 期通算第 4 回）

日時 2020 年 2 月 10 日
場所 メール会議
議題 1. 部会の計画の見直しについて

授業評価アンケート

実施期間

実施時期	実施期間		
第1クォーター	2019年05月25日(土)	～	2019年06月07日(金)
第2クォーター/春学期	2019年07月06日(土)	～	2019年08月05日(月)
第3クォーター	2019年11月05日(火)	～	2019年11月19日(火)
第4クォーター/秋学期	2019年12月18日(水)	～	2020年01月27日(月)

学生公開用結果の配信

実施時期	配信日
第1クォーター	2019年06月15日(土)以降
第2クォーター/春学期	2019年08月21日(水)以降
第3クォーター	2019年11月27日(水)以降
第4クォーター/秋学期	2020年02月05日(水)以降

学生へのフィードバックコメントの入力

実施時期	入力期間		
第1クォーター	2019年06月15日(土)	～	2019年06月28日(金)
第2クォーター/春学期	2019年08月21日(水)	～	2019年09月03日(火)
第3クォーター	2019年11月27日(水)	～	2019年12月10日(火)
第4クォーター/秋学期	2020年02月05日(水)	～	2020年02月18日(火)

FD・SD 研修部会

部会

第 1 回（第 II 期通算第 1 回）

日時 2019 年 5 月 16 日
場所 メール会議
議題 1. 2019 年度の活動計画について

第 2 回（第 II 期通算第 2 回）

日時 2019 年 6 月 17 日（月） 10：00～10：50
場所 白山キャンパス 8 号館 8 階 学長会議室、川越キャンパス 応接室
議題 1. 2019 年度新任教員 FD 研修会の開催について
2. 2019 年度の FD・SD 研修会について

第 3 回（第 II 期通算第 3 回）

日時 2019 年 10 月 11 日（金） 16：30～17：30
場所 白山キャンパス 8 号館 8 階学長会議室
川越キャンパス 第 3 会議室
板倉キャンパス 小会議室
議題
1. 報告事項
(1)2019 年度新任教員 FD 研修会
2. 協議事項
(1)2019 年度秋学期の FD・SD 研修会について
①2019 年度 英語で授業をおこなうための FD 研修会について
②2019 年度の FD・SD 研修会について
3. その他

第 4 回（第 II 期通算第 4 回）

日時 2019 年 11 月 7 日
場所 メール会議
議題 1. FD・SD 研修会の企画案について

第 5 回（第 II 期通算第 5 回）

日時 2020 年 3 月 2 日

場所 メール会議

議題 1. 2020 年度新任教員 FD 研修会の日程について

学内 FD・SD 関連研修会

ティーチング・アシスタント FD 研修会

日時 2019 年 4 月 13 日(土) 13:00～15:00 ※赤羽台キャンパスは別日に開催

場所 各キャンパス

参加者数

キャンパス	参加対象		参加者数
白山	TA	33 名	22 名
赤羽台	TA	1 名	1 名
朝霞	TA・SA	36 名	22 名
川越	TA・SA	79 名	66 名
板倉	TA・SA	134 名	76 名
計		283 名	187 名

各キャンパス講師（FD・SD 研修部会員）

白山 長谷川 勝久 先生

川越 藤松 信義 先生

板倉 三浦 健 先生

朝霞 鈴木 智子 先生

赤羽台 事務局

新任教員 FD 研修会

日時 2019 年 7 月 6 日（土） 13:00～16:00

場所 白山キャンパス 5 号館 3 階 5305 教室

対象 2019 年度東洋大学新任教員 45 名

参加 27 名

プログラム

13:00～13:05 開会のあいさつ（藤松 信義 FD・SD 研修部会長）

13:05～13:15 respon の使い方について

13:15～13:45 講演（松原 聡 高等教育推進センター長）

13:45～13:55 グループディスカッションの進め方について
13:55～14:10 休憩
14:10～15:45 グループディスカッション
 「学生の意欲的・主体的な授業参画を促す授業をおこなうためには？」
15:45～16:00 閉会のあいさつ（松原 聡 センター長）
16:10～ 懇親会 @4 号館 1 階 ステラ

FD・SD 研修会「授業運営で留意したい改正著作権法」

日時 2020 年 2 月 14 日（金） 14:00～16:00
場所 白山キャンパス 125 記念ホール（8 号館 7 階）
 ※各キャンパスに Webex ビデオ配信
 朝霞 第 3 会議室 川越 第 3 会議室
 板倉 小会議室 赤羽台 事務課奥会議室
対象 本学教職員および非常勤講師
参加者 約 100 名

英語で授業を行うための FD 研修会

日時 2020 年 3 月 9 日（月） 10:00～17:10
場所 白山キャンパス 10 号館
テーマ Program A：講義とプレゼンテーション（導入）（定員 12 名）
 Program B：講義とプレゼンテーション（発展）（定員 8 名）
 Program C：アカデミック・ライティング（導入）（定員 12 名）
※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、開催を延期しました。

高等教育研究部会

部会

第 1 回（第 II 期通算第 1 回）

日時 2019 年 5 月 20 日
場所 メール会議
議題 1. 2019 年度の活動計画について

第 2 回（第 II 期通算第 2 回）

日時 2019 年 7 月 25 日（木）14：45～15：45
場所 白山キャンパス 8 号館 8 階 応接室 1
川越キャンパス 4 号館 4 階 第 3 会議室
議題 1. 部会員紹介
2. 第 I 期（2017～2018 年度）における高等教育研究部会の活動について
3. 第 II 期（2019～2020 年度）における高等教育研究部会の活動について
4. その他

第 3 回（第 II 期通算第 3 回）

日時 2019 年 10 月 24 日（木）14：45～16：15
場所 白山キャンパス 8 号館 8 階 応接室 1
議題 1. 定期連載企画テーマの決定

東洋大学高等教育推進センターニュースレター

配信対象 専任教職員（常勤嘱託含む）
配信者数 1,387 名（2020 年 3 月 2 日現在）
配信実績 計 23 回
※付録にアーカイブを収録

教育開発・改革部会

部会

第 1 回（第 II 期通算第 1 回）

日時 2019 年 6 月 9 日
場所 メール会議
議題 1. 2019 年度の活動計画について

その他

MANABA ユーザー会（2019 年度）（後援）

日時 2019 年 11 月 29 日 13：15～17：00
場所 白山キャンパス 125 記念ホール

各学部・研究科からの教学データ提供依頼実績

表 2019 年度にデータを提供した組織とその内容

#	月日	組織	内容
1	4 月	経営学部 マーケティング学科	マーケティング学科一般前期 3 教科ベスト 2 均等配点の GPA と PROG テスト結果
2	5 月	理工学部 機械工学科	① 入試種別, GPA, 入学年度春学期 GPA とストレート卒業の関係 ② 必修科目「物理学 A」について: 初年度単位取得とストレート卒業の関係, および同科目の履修回数とストレート卒業の関係 ③ 次に挙げる科目区分における卒業要件 (もしくは卒業条件) 充足までの年数とストレート卒業の関係, 理工学基盤科目の区分「数学」, 同「物理」, 専門科目の区分「選択必修」 1 年秋学期における「物理学 A」の単位取得率と 1 年春学期における「力学基礎」の受講の有無の関係 (「力学基礎」は「物理学 A」の導入科目として設定されている)
3	8 月	経済学部	科目群別 GPA
4	8 月	文学部	文学部 2018(平成 30)年度授業評価アンケート分析結果報告— 授業評価アンケートが語る授業設計のヒント ※文学部自己点検・評価報告書に収録
5	10 月	文学部哲学科	(自己点検・評価関連) ①ST 比
6	10 月	理工学部 電気電子情報工学科	(自己点検・評価関連) ①累積 GPA、専門科目群の GPA、単位修得率、②所属教員の年齢構成
7	10 月	文学部 日本文学文化学科	(自己点検・評価関連) ①教員の年齢構成、男女比、②ST 比、③GPA、LG 構成、単位修得率
8	11 月	ライフデザイン学研究科	(自己点検・評価関連) ①大学院担当教員の身分、年齢
9	12 月	文学部教育学科	(自己点検・評価関連)

付録

高等教育推進センター刊行物

高等教育推進センターの刊行物は下記 URL からご覧いただけます

東洋大学高等教育推進センターHP>「刊行物」

URL : <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/publications.html>

東洋大学高等教育推進センターニュース

～本学の特色ある FD・SD 活動を取りまとめた定期刊行物～

発行：創刊号～（旧『東洋大学 FD ニュース』創刊号～第 19 号）

URL : <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/fdnews.html>



東洋大学 FD・SD 活動報告書

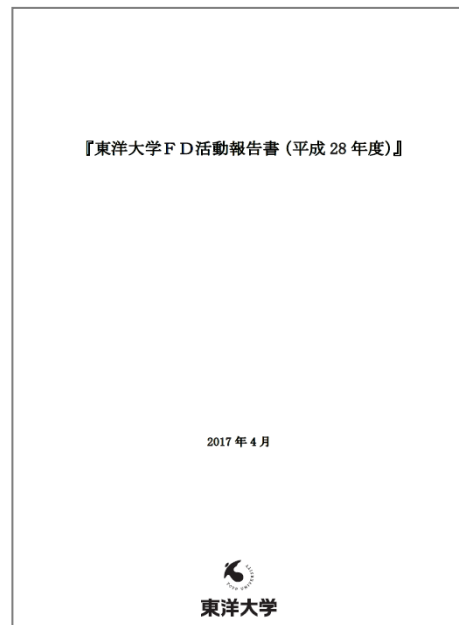
～学部・研究科、高等教育推進センター／委員会の年間の FD 活動を取りまとめた報告書～

発行：2009(平成 21)年度～

URL：<http://www.toyo.ac.jp/site/fd/fd-report.html>

CONTENTS：

- I. 学部 FD 活動状況報告
- II. 大学院 FD 活動状況報告
- III. 高等教育推進センター活動報告
- IV. 関係資料（規程、刊行物）



TA/SA HANDBOOK

～TA/SA 業務の担当者が教育補助業務を遂行するための手引書～

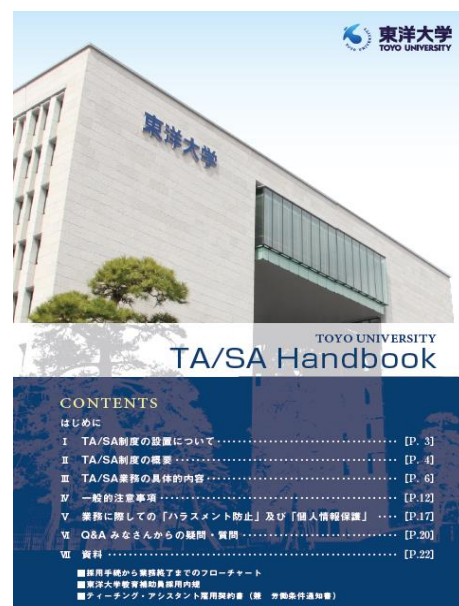
発行：2018 年 4 月 1 日改定

URL：<http://www.toyo.ac.jp/site/fd/tahb.html>

CONTENTS：

はじめに

- I. TA/SA 制度の設置について
- II. TA/SA 制度の概要
- III. 一般的注意事項
- IV. TA/SA 業務の具体的内容
- V. 業務に際しての「ハラスメント防止」
および「個人情報保護」
- VI. Q & A みなさんからの疑問・質問
- VII. 資料
 - ・採用手続から業務終了までのフローチャート
 - ・東洋大学教育補助員採用内規
 - ・ティーチング・アシスタント雇用契約書(兼労働条件通知書)



FD ハンドブック

～授業運営の基本事項をまとめた手引書～

発行：2011 年 12 月 1 日（第 2 版）

URL：<http://www.toyo.ac.jp/site/fd/fdhb.html>

CONTENTS：

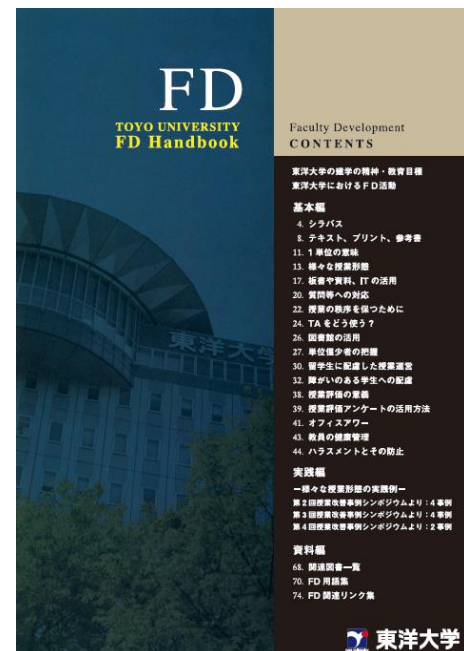
■基本編

- ・ シラバス
- ・ テキスト、プリント、参考書
- ・ 1 単位の意味
- ・ 様々な授業形態
- ・ 板書や資料、IT の活用
- ・ 質問等への対応
- ・ 授業の秩序を保つために
- ・ TA をどう使う？
- ・ 図書館の活用
- ・ 単位僅少者の把握
- ・ 留学生に配慮した授業運営
- ・ 障がいのある学生への配慮
- ・ 授業評価の意義
- ・ 授業評価アンケートの活用方法
- ・ オフィスアワー
- ・ 教員の健康管理
- ・ ハラスメントとその防止

■実践編 ー授業改善事例シンポジウムからー

■資料編

- ・ FD 関連図書一覧
- ・ FD 用語集
- ・ FD リンク集



GPA リーフレット

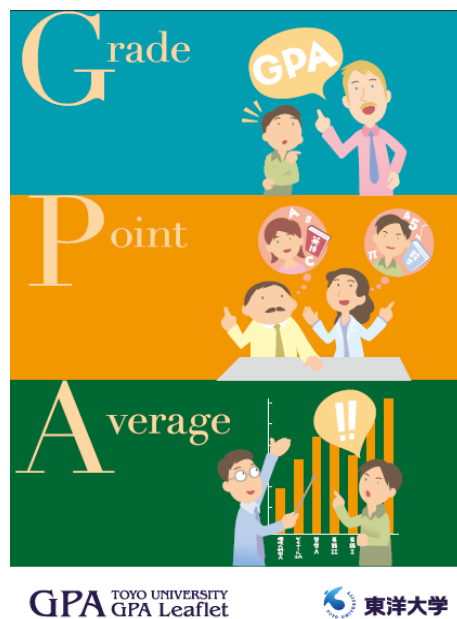
～GPA 制度の導入と活用について～

発行：2013 年

URL：<http://www.toyo.ac.jp/site/fd/17133.html>

CONTENTS：

- 東洋大学における GPA 制度の導入にあたって
- GPA とは
- 提示方法
- どのように使われる？
- 導入の背景は？
- どんな影響があるのか？
- 教員の成績評価は何が変わる？
- 他大学の取組み



学生 FD チームニュースレター

発行：No.1～No.10

URL：<http://www.toyo.ac.jp/site/fd/49128.html>

CONTENTS：

- 先輩による履修相談会
- 学生 FD サミット 2016 夏 in 札幌大学
- 学生 FD チームの紹介
- 先生インタビュー！ in 川越
- 第 4 回東洋授業へのコンクール



東洋大学高等教育推進センター規程

東洋大学高等教育推進センター規程

平成 20 年規程第 39 号

平成 20 年 12 月 17 日

公示

平成 20 年 12 月 1 日

施行

改正 平成 30 年 4 月 1 日

(設置)

第 1 条 東洋大学（以下「本学」という。）は、東洋大学学則第 3 条の 3 及び東洋大学大学院学則第 1 条の 3 に基づき、「東洋大学高等教育推進センター」（以下「高等教育推進センター」という。）を設置する。

(目的)

第 2 条 高等教育推進センターは、本学の教育活動の継続的な改善、改革を組織的に推進、支援することを目的とする。

(事業)

第 3 条 高等教育推進センターは、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 教育内容及び方法改善のための調査、研究及び支援
- (2) F D（ファカルティ・ディベロップメント）及び S D（スタッフ・ディベロップメント）の研究会、研修会、講演会等の企画、実施及び支援
- (3) 国内外の高等教育の動向に係る調査、研究及び情報提供
- (4) 新たな教育形態及び教育プログラム等の研究、開発
- (5) 各学部、研究科での教育活動の改善、改革の情報交換、調整及び支援
- (6) その他高等教育推進センターの目的達成に必要な事項

(センター長)

第 4 条 高等教育推進センターに、センター長を置く。

2 センター長は、高等教育推進センターの業務を統括し、高等教育推進センターを代表する。

3 センター長は、学長が指名する副学長とし、理事長が任命する。

4 センター長の任期は 2 年とし、再任を妨げない。ただし、副学長の在任期間内とする。

(副センター長)

第 5 条 高等教育推進センターに、副センター長を置くことができる。

2 副センター長は、本学の専任教員のうちから、センター長の推薦を経て、学長が指名し、理事長が任命する。

3 副センター長は、センター長を補佐するとともに、センター長に事故があるとき、又はセンター長が欠けた場合は、センター長の職務を代理し、又は代行する。

4 副センター長の任期は、センター長の任期満了とともに終了する。ただし、再任を妨げない。

(センター員)

第6条 高等教育推進センターに、第3条に掲げる事業を推進するために、センター員を置くことができる。

2 センター員は、学内外の専門的な知識を有する者とし、センター長の推薦を経て、学長が指名し、理事長が任命する。

(高等教育推進委員会)

第7条 高等教育推進センターに、高等教育推進委員会（以下「推進委員会」という。）を置く。

2 推進委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

(1) センター長、副センター長

(2) 各学部から推薦された専任教員 各1名

(3) 各研究科から推薦された専任教員 各1名

(4) 教務部長

(5) 教務部事務部長

(6) 高等教育推進支援室長

(7) センター員

(8) 学長が推薦する本学専任教職員 若干名

3 前項第2号、第3号及び第8号に掲げる委員の任期は、2年とする。ただし、任期の途中で委員となった者の任期は、前任者の残任期間とする。

4 委員は、再任することができる。

第8条 推進委員会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

(1) 第3条に掲げる事業に関する重要事項

(2) 学長から諮問された事項

(3) その他高等教育推進センターに関する重要事項

2 推進委員会はセンター長が招集し、その議長となる。

3 推進委員会は、委員の3分の2以上が出席しなければ開会することができない。

4 推進委員会の議決に当たっては、出席委員の過半数で決し、可否同数の場合は、センター長が決する。

5 推進委員会は、必要に応じ、委員以外の者（学外者を含む。）を推進委員会に出席させ、その意見を求めることができる。

(部会)

第9条 高等教育推進センターに、第3条に掲げる事業を推進するために、部会を置くことができる。

2 部会の部会長は、推進委員のうちから推進委員会の議を経てセンター長が指名する。

3 部会の構成員は、推進委員のうちから部会長の意見を聴いてセンター長が指名する。

4 センター長が部会長と協議し、必要に応じ、推進委員以外の者を部会に加えることができる。

5 その他部会に必要な事項は、別に定める。

(学生F Dチーム)

第10条 センター長のもとに、学生F Dチームを置くことができる。

2 学生F Dチームは、センター長のもとで、F D活動を行う。

3 学生F Dチームは、本学の学部又は研究科に在籍する学生で、F D活動への参加を希望する者のうちから、センター長が任命する。

(細則)

第11条 この規程の実施について必要な事項は、推進委員会の意見を聴いて学長が定める。

(事務の所管)

第12条 高等教育推進センターの事務は、高等教育推進支援室の所管とする。

(改正)

第13条 この規程の改正は、学長が推進委員会及び各学部教授会の意見を聴いて行う。

附 則

1 この規程は、平成20年12月1日から施行する。

2 この規程施行の際、改正後の第6条第2項第2号、第3号、第4号及び第6号の委員は、現に「東洋大学F D委員会規程」により選出された委員をもって充てる。ただし、任期は、平成21年3月31日までとする。

3 東洋大学 F D委員会規程（平成19年規程第8号）は、廃止する。

この規程は、平成29年4月1日から施行する。

附 則（平成27年規程第72号）

この規程は、平成27年4月20日から施行する。

附 則（平成29年規程第126号）

この規程は、平成29年4月1日から施行する。

附 則（平成30年規程）

この規程は、平成30年4月1日から施行する

No.	通算（号）	配信日
1	15	2019 年 4 月 9 日(火)
2	16	2019 年 4 月 23 日(火)
3	17	2019 年 5 月 14 日(火)
4	18	2019 年 6 月 11 日(火)
5	19	2019 年 6 月 25 日(火)
6	20	2019 年 7 月 10 日(水)
7	21	2019 年 7 月 23 日(火)
8	22	2019 年 8 月 20 日(火)
9	23	2019 年 9 月 3 日(火)
10	24	2019 年 9 月 17 日(火)
11	25	2019 年 10 月 1 日(火)
12	26	2019 年 10 月 15 日(火)
13	27	2019 年 10 月 29 日(火)
14	28	2019 年 11 月 12 日(火)
15	29	2019 年 11 月 26 日(火)
16	30	2019 年 12 月 10 日(火)
17	31	2019 年 12 月 24 日(火)
18	32	2020 年 1 月 14 日(火)
19	33	2020 年 1 月 28 日(火)
20	34	2020 年 2 月 18 日(火)
21	35	2020 年 3 月 3 日(火)
22	36	2020 年 3 月 17 日(火)
23	37	2020 年 3 月 31 日(火)

東洋大学高等教育推進センターニュースレター

2019年4月9日 Vol.2, No.1（通算第15号）

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫

第4回 専門科目 労働経済学、ワークライフバランスの総合政策

久米 功一（経済学部総合政策学科）

【2】コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く

第4回 独創的なアイデアを国際的に発信する力を培うために

石井 由香理（社会学部社会学科・2017年度東洋大学優秀教育活動賞受賞）

【3】高等教育政策動向等

◆PICK UP

◆高等教育政策動向等一覧（抜粋）（2019年3月18日～4月5日）

【4】その他

◆朝日ネット主催ウェビナー「これさえわかれば使える！manaba課題編」のご案内

◆学外FD・SD研修会への参加申込

◆English Support Service（ESS）

◆高等教育推進センターニュース第2号刊行のお知らせ

◆2018年度優秀教育活動賞の推薦期間のお知らせ

◆JPFF提供の実践的FDプログラム・オンデマンド講義のご案内

◆高等教育関連図書のご案内

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

【5】あとがき

【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫

第4回 専門科目 労働経済学、ワークライフバランスの総合政策

久米 功一（経済学部総合政策学科）

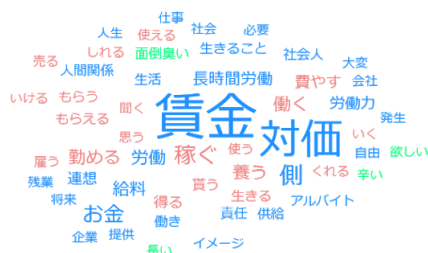
はじめに

このクラスは、経済学の専門科目として2～4年生向けに開講されている。100～200人の大人数講義である。労働経済学は、賃金や雇用など、労働に関するトピックを経済学的に分析する学問で、理論、実証、制度・歴史に関する幅広い理解が求められる。本講義では、学生の関心喚起と理解促進のために、responや統計ソフトを用いた参加型の講義を行っている。

responを用いた関心・理解の「きっかけ」づくり

テーマを身近に感じてもらうためには、responの利用が有効である。例えば、初回講義では、「働くこと」から連想することをresponで提出してもらい、その場で、テキストマイニングした結果をフィードバックしている。図1のように、学生は、働くといえば、賃金、対価という報酬と同時に、辛い、長い、という負の側面もイメージすることがわかる。では「なぜそう思うのか」を問うことから講義は始まる。

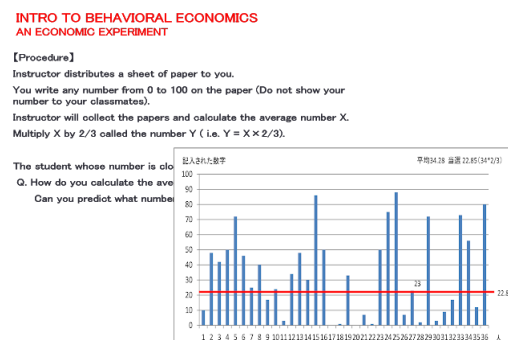
図1. 「働く」と聞いて連想すること
(responによる学生の回答をテキストマイニングしたもの)



ユーザーローカル (<https://textmining.userlocal.jp/>)

responは、Excel形式で吐き出せるため、その場で集計・分析できる利点がある。例えば、「美人投票コンテスト」という経済実験がある。被験者は0～100まで数字を1つ書き、クラスで集計後、その平均値に2/3をかけた数字に最も近い数字を書いた人が優勝するというゲームである。十分に合理的であれば、予想される数字は「0」となる。これまでは、配布した紙を回収し、講師が数値を手で入力・集計していたが、responならば即座に計算できる。図2は、講義でのゲームの手順と結果である。理論的には「0」となるところ、結果は「23」であった。こうした実験を通して、学生は人間の限定合理性を学ぶことができる。なお、優勝者には粗品を進呈している。

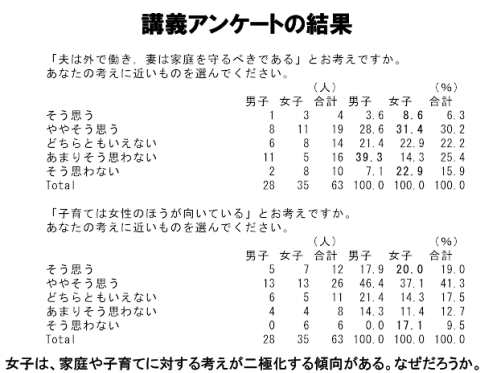
図2. 美人投票ゲームの説明と結果



学生の意識をアンケートで可視化して議論する

大人数講義では、講義形式をとるため、受け身の授業になりがちである。そこで、学生自身の問題として捉えてもらうために、responによるアンケートを実施している。例えば、性別役割分業意識によって、女性の就業が妨げられているという言説がある。これについて、学生の意識をresponで把握した上で、内閣府の調査と比較したり、東洋大学の学生の特徴を吟味したりしている。さらに、男女による意識の差について、5人程度の小グループに分けてディスカッションし、その結果をクラス内で発表し共有してもらっている。グループディスカッションで話し合い、理解を深めた結果を、期末試験において、さらに掘り下げて出題することもある。

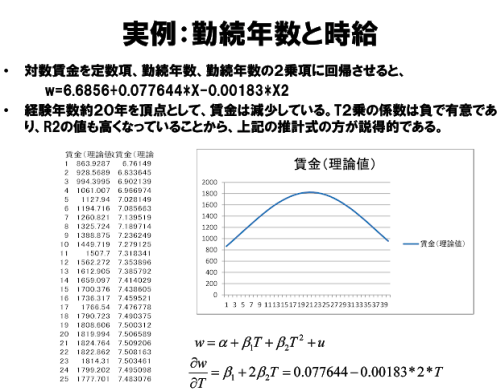
図3. responを使った性別役割分業意識に関するアンケート



実際に手を動かして、ディシプリンを習得する

経済学は、理論で導かれた仮説を実証的に分析する手続きをとる。こうした作法は、実際に手を動かしてみないとわからない面がある。例えば、人的資本理論に基づけば、「勤続年数とともに人的資本が蓄積されて生産性（賃金）が上がる」という仮説がある。本当にそうなのだろうか。講義では、ノート型PCを持参してもらい、手順を説明した上で、ToyoNet-ACE経由で600サンプルからなるデータセットを学生に貸与し、Excelで回帰分析させている。推定して理論値をプロットしたところ、図4のように、勤続年数とともに賃金が上がることを確認できた。この作業によって、仮説を立てて、検証するという経済学のディシプリンを身につけることができる。大人数講義であっても、こうした演習を交えることで、学生同士で教え合いながら、それぞれに理解を深めることができています。

図4. Excelで賃金関数を推定する



(おわり)

【2】コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く

第4回 独創的なアイデアを国際的に発信する力を培うために

石井 由香理（社会学部社会学科・2017年度東洋大学優秀教育活動賞受賞）



学生が英語でプレゼンテーションを行っている様子

この度の賞をいただくきっかけになったのは、学生たちの報告スライドだった。熱意をもって育てたという自負と一言褒めていただきたいという下心で、会議の前に私が隣に座っていた社会学科の先生にお見せした。少しだけ目を見開かれたあとに、目の前にあった新しい賞のプリントをみながら、「ちょうどいい、推薦しましょうか」と言っていたとき今度は私が驚いたという記憶がある。

当該報告スライドは、基礎演習を受講していた社会学部社会学科イブニングコース1年生たちが作成したものである。基礎演習は、春秋学期の半期授業ではあるが、再履修者でなければ、通年必修の履修である。社会学部イブニングコースのディプロマ・ポリシーにある「社会問題や社会現象について、調査、発表、討論する力」を総合的に培い、かつ、グローバル化時代に求められる英語での発信力を養う授業内容を目指した。

私は、大学での学びの出発点は、独創的なアイデアを聴衆に合わせてアウトプットする力を養うことであると考えている。そこから逆算すれば、独創的なアイデアを生み出すためには、正確な情報をインプットする力が必要になり、さらにそのために、アカデミックな文献を読解する力、社会学的な知識の土台作りが重要なことがわかる。また、アウトプットのために、レジュメの作成方法、日本語あるいは英語によるプレゼンテーションの方法、グループワークと個人で、自ら問題を発見し問いを深めていく能力などを受講生たちは伸ばすことができるように授業を設計した。

また、グループ学習と個別学習を併用し、学生たちが自らの問いを深めながら、自主的に学習をしていくような工夫をした。具体的には、学生たちを4人前後のグループに分け、前期に行ったメンバーの個人研究のなかから1～2つを選び、それをグループ学習で深めてプレゼンテーションをさせるように促した。ちなみに、翌年度は、前年度の優秀な報告スライドを見せることで高い効果があった。前年度できたのならば、自分たちもできるという自信と、ちょっとした競争意識を持ってもらえる。個人研究のレポートについても、自分たちで課題を決めさせ、毎週できたところまで持ってこさせ、教員が一人一人の能力を見極めたうえで、それぞれにアドバイスをした。

イブニングコースの学生たちは、社会人として人生経験を積んでいたり、家庭環境や病い・障がいなどと関連して、何らかのマイノリティ性を有する学生たちが多く、社会学的な問題意識とリンクしやすい人々である。そうした学生たちの貴重な経験を、アカデミックなカタチで昇華させ、自由に自主的に学ぶことができる環境づくりに、今後も貢献していきたい。

【3】高等教育政策動向等

◆PICK UP

Times Higher Education(英国)とベネッセコーポレーションが世界大学ランキング日本版2019を発表しました。

算定方法に大きな変更があり、「地方」「公立」「小規模」「国際系」大学がランクを上げました。

その中で本学は相対的にランクを若干下げて73位(昨年66位)となったものの、私立大学の中での順位(22位)には変動がありませんでした。

今年の最大の変更トピックは、教育充実度という項目が「高校の教員の評判」から、「在学する学生への調査」中心となったこと。

本学はこの項目が秀でて高く、全国14位でした。特に注目したい点は「あなたはあなたが通う大学を家族や友人に勧めたいですか」という設問の重み付けが重いことです。

一方でエントリーをやめたと思われる大学もちらほら見受けられます。

なお教育力を中心に評価する日本版と違い、研究力を中心に評価するTHE世界大学ランキングは秋に公開予定です。

(LINK) [「THE世界大学ランキング日本版2019」の結果はこちら](#)

◆高等教育政策動向等一覧（抜粋）（2019年3月18日～4月5日）

カテゴリ	配信元	webページ タイトル	更新日	URL
認証評価	大学基準協会	『大学評価ハンドブック』の改訂について	2019/4/5	こちら
認証評価	大学基準協会	大学評価「判定及び判定保留の基準とその運用指針」の改定について	2019/4/5	こちら
大学入学者選抜	文部科学省	「大学入学共通テスト実施方針（追加分）ガイドライン」の策定について	2019/4/5	こちら
大学入学者選抜	文部科学省	大学入学者選抜の公正確保等に向けた方策について（審議経過報告）	2019/4/5	こちら
初等中等教育	経済同友会	自ら学ぶ力を育てる初等・中等教育の実現に向けて～将来を生き抜く力を身に付けるために～	2019/4/3	こちら
私立大学	私立大学連盟	「平成30年度奨学金等分科会報告書」刊行	2019/3/29	こちら
私立大学	日本私立学校振興・共済事業団	「学校法人の経営改善方策に関するアンケート」報告	2019/3/29	こちら
私立大学	日本私立学校振興・共済事業団	「特色ある教育・経営の取組を行う私立学校の事例集」について	2019/3/29	こちら
生涯学習	文部科学省	「障害者の生涯学習の推進方策について―誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会を目指して―」の公表について（お知らせ）	2019/3/29	こちら
教職課程	文部科学省	平成31年度から新しい教職課程が始まります	2019/3/29	こちら
専門職大学	文部科学省	専門職大学・専門職短期大学制度がスタート～2019年4月に新しいタイプの大学が55年ぶりに誕生～	2019/3/29	こちら

初等中等教育	文部科学省	「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策（中間まとめ）」について	2019/3/29	こちら
大学入学者選抜	文部科学省	大学入学者選抜におけるミスの防止等に係る取組状況調査	2019/3/29	こちら
ICT	レスポンス	リアルタイムアンケートの自由回答をAIが瞬時に仕分け	2019/3/28	こちら
調査	日本私立学校振興・共済事業団	授業料減免事業の実態調査	2019/3/28	こちら
私立大学	私立大学連盟	私立大学の世界発信力強化に関する検討プロジェクト報告書「私立大学の国際的なプレゼンス向上のためにー世界大学ランキングの活用と課題ー」の発行について	2019/3/27	こちら
大学ランキング	THE・ベネッセコーポレーション	THE世界大学ランキング 日本版2019	2019/3/27	こちら
私立大学	日本私立学校振興・共済事業団	私立大学・短期大学教育の現状	2019/3/27	こちら
私立大学	日本私立学校振興・共済事業団	平成30年度私立大学・短期大学等入学志願動向（別冊）を更新しました。	2019/3/27	こちら
調査	リクルート進学総研	高校生価値意識調査 2018	2019/3/26	こちら
認証評価	大学基準協会	2018（平成30）年度「大学評価」等の結果について	2019/3/26	こちら
私立大学	私立大学連盟	「私立大学における教育の質向上に関する取り組み～学習成果の可視化による大学教育の質保証～」並びに「私立大学における教育の質向上に関する取り組みー提言と新たな課題ー」の刊行について	2019/3/22	こちら
初等中等教育	国立教育政策研究所	平成29年度における職場体験・インターンシップ実施状況等について	2019/3/19	こちら
私立大学	私立大学連盟	「加盟大学財務状況の推移（平成10年度～平成29年度）」	2019/3/18	こちら

※年度末・年度始めをまたぐため件数が多く、抜粋版を表示しております。全件は下記のアーカイブからご確認ください。

◆「高等教育政策等」のアーカイブは[こちら](#) ※随時追加中です

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

- ・高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES（大学改革支援・学位授与機構）
- ・海外学術動向ポータルサイト（日本学術振興会）

【4】その他

◆朝日ネット主催ウェビナー「これさえわかれば使える！manaba課題編」のご案内

---webページより抜粋転載-----

◆ウェビナー

①実施してみよう！manabaを使った小テスト

—授業の理解度確認等の小テスト課題をmanabaを使って学生に提示し、簡単に採点まで行う方法をご紹介します。

②manaba でらくらく！レポート回収

—レポート課題をmanabaを使って簡単に回収し、成績をつける方法をご紹介します。

◆主な対象

- ・manabaを今後活用したいと思われる教員の方
- ・新しく着任される教員の方

◆開催日時・申込み

※各回30分程度を予定

・4月16日(火)14:00～

実施してみよう！manabaを使った小テスト

申込：<https://bit.ly/2FEGh3F>

・4月23日(火)11:30～

実施してみよう！manabaを使った小テスト

申込：<https://bit.ly/2WCOE6Y>

・5月22日(水)14:00～

manabaでらくらく！レポート回収

申込：<https://bit.ly/2I2aCfr>

・5月29日(水)11:30～

manabaでらくらく！レポート回収

申込：<https://bit.ly/2TNtdy2>

◆学外FD・SD研修会への参加申込

参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

詳しくは[こちら](#)※ガルーン

◆English Support Service (ESS)

[詳細・ご予約](#)※ガルーン

◆高等教育推進センターニュース第2号刊行のお知らせ

昨年度3月に『高等教育推進センターニュース第2号』を刊行しました。今号は学修成果を特集しております。ご高覧ください。（高等教育推進支援室）

ダウンロードは[こちら](#)※東洋大学ホームページ

◆2018年度優秀教育活動賞の推薦期間のお知らせ

本学において優れた教育活動（各学部の授業及び授業に伴う教育活動）を企画実施し、学生に大きな教育効果を与えた専任教員に対して顕彰することを目的として、東洋大学優秀教育活動賞の推薦を依頼いたします。（高等教育推進支援室）

詳しくは[こちら](#)※ガルーン

◆全国私立大学FD連携フォーラム（JPFF）提供の実践的FDプログラム・オンデマンド講義のご案内

こちらのオンデマンド講義は、「管理運営」「研究」「教育」に関する講義をwebで視聴することができるe learningです。一部の講義は日英対応です。4月15日まで、2019年度開講分の受講申込みを受け付けております。（高等教育推進支援室）

詳しくは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

◆高等教育関連図書のご案内

高等教育推進センターでは、ブックログという読書記録のためのウェブサービスを利用して、センターが保管している高等教育に関する図書をご紹介します。「センター蔵書あり」の図書については、貸出も可能ですので、詳しくは、下記の「貸出申込みフォーム」からご確認ください。（高等教育推進支援室）

[ブックログの本棚](#)

[貸出申込フォーム](#)

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

本ニュースレターにFD・SDに係るコラムやイベント情報等の投稿を随時募集しております。

下記フォームにしたがって、ふるってご投稿ください。メール、電話でのご相談も承っております。

[投稿申請フォーム](#)

字数：800～1200字（目安）

コラムの例

○教員のみなさま

- ・「わたしが実践する授業の工夫」をテーマにしたコラム
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb siteの紹介、etc.

○職員のみなさま

- ・担当業務の紹介コラム
- ・担当学部・研究科、部署のFD・SD研修会の開催告知
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb site（特にSD関連）の紹介、etc.

【5】あとかき

このたび晴れて7,604名の新入生を迎え、4月6日（土）に日本武道館にて入学式が無事挙行されました。

新入生は胸を弾ませ、喜びや期待などで心が落ち着かない時期かと思います。

教職員の皆様、授業準備やガイダンス等本当にお疲れ様でした。

入学式の新入生代表挨拶では、将来の夢、希望を叶えるために勉学に励むと、高い志もった挨拶がされました。

東洋大学に入学した皆さんが教職員の方々とふれ合い、大きく成長され、社会で活躍していく姿が楽しみです。

今年度も高等教育推進センターニュースレターをご愛読くださいますよう、お願いいたします。

●みなさまの声をお寄せください

過日は、あたたかいお声をお寄せいただき誠にありがとうございました。発行の励みになります。

引き続き、これまでのニュースレターに対する

ご意見・ご感想・ご要望、応援メッセージなどを下記のフォームで募集しております。

些細な内容でも構いませんのでお寄せいただけますと幸いです。

※匿名で収集しておりますので、気兼ねなくお寄せください。

リンク：<https://goo.gl/forms/q14H9oRjlAU9uG9C3>

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

◆このメールは本学教職員にお届けしています。

◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。

ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。

◆掲載記事の無断転載を禁じます。

©2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター
2019年4月23日 Vol.2, No.2 (通算第16号)

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫

第5回 私の授業ってこんなんですよー言葉遊びから学ばー (楠元 純一郎)

◆PICK UP 「法学部図書館NAVI」とは??

【2】コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く

第5回 社会文化体験演習 I A/B・II A/B (寺内 大左)

【3】高等教育政策動向等

◆PICK UP

◆一覧 (抜粋) (2019年3月15日～4月22日)

【4】その他

◆学外FD・SD研修会への参加申込

◆English Support Service (ESS)

◆2018年度優秀教育活動賞の推薦期間のお知らせ

◆高等教育関連図書のご案内

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

【5】あとがき

【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫

第5回 私の授業ってこんなんですよー言葉遊びから学ばー

楠元 純一郎 (法学部企業法学科教授)



私の講義担当科目は会社法、商法総則・商行為法、海商法です。受講者数は科目、時間帯によってまちまちですが、多いクラスで300人以上のときもあります。とりわけ大講義室では大舞台に立つ臨場感、情報伝達の効率性のよさからか、とくにやり甲斐が感じられ、気分が高揚します。

私は法律学は言葉の学問であると思っています。今のところ日本語で授業をしておりますが、テクニカルタームである法律用語は、日常一般に話されている日本語からかけ離れているものが多いことから、ある意味で外国語みたいなものです。

大学で法律学を学ぶ意義は、リーガルマインドの涵養にあるといわれています。リーガルマインドとは法的思考方法のことですが、ひとつのわかりやすい例として、「物には動産と不動産があり、不動産は土地およびその定着物ですが、では動産とはなんでしょう?」と尋ねます。リーガルマインドを使えば、たったこれだけの情報から答えを引き出すことができるのです。答えは「不動産以外の物」でよいのです。なんと他人を食ったような話ですが、論理的に間違いではありません。このようなやり取りの中に、リーガルマインドが潜んでいることを感じ取ってほしいのです。

授業では従来、授業に出られなかった人のために、板書したものを写真に撮って、ToyoNet-ACEに拡大サイズで貼り付けることまではしていましたが、今年度からは、プロジェクターを使って口頭での説明に合わせてキーワード等を打ち込み（これなら留学生にもやさしい）、適宜、データベースから判例情報も引き出し、最後に授業内容の一切をToyoNet-ACEに掲載することにしています。パソコンとプロジェクターを使えば、リンクからいろいろなネット情報に瞬時にアクセスすることも可能です。最近では、法律系データベースが「[法学部図書館NAVI](#)」でコンパクトにまとめられ便利になったことから、これも授業でフルに活用したいと考えております。

授業中、解説をできるだけわかりやすくするために、あえて極端な事例（限界事例）を使います。たとえば、その他の手続が適切であったとして、株主が100人の株式会社における株主総会に議決権の51%を有する大株主がたった1人しか出席しなかったとしたら、この会議は有効に成立しているか？どうですか、みなさん？と尋ねると、「会議は成立していない」に挙手をする学生さんが多いです。株主が100人もいるにもかかわらず、たった1人しか出席のない株主総会は常識的に考えて会議として成立するはずがないと、まず、思ってもらえたらこちらとしてはシメシメです。そこから、資本多数決というのは一人一票というような頭数主義とは違い、出資割合がものをいうということを印象付け、常識を疑わせるのです。

このような言葉遊びを通じて、一つひとつの言葉のもつ概念の幅、空間に思いを馳せてもらいたいと思っています。法の解釈には一定の幅があり、自分なりの落としどころをどこにもっていくかは、言葉の運用にかかっているからです。

私の授業では、眠気覚ましに、たまには、自分で作った曲や好きな音楽を紹介して、結構自由にやらせていただいています。また、話術には「間」を意識したユーモアを取り入れることも常に心がけています。適当な息抜きも大事ですからね。

法学部図書館NAVIは、法学部の学生に向けて学習・研究に役立つ情報をまとめた、学習支援のためのページです。ページはスマホ表示にも完全対応しており、授業中に気軽にスマホからデータベースが利用できるよう、考えて設計されています。図書館NAVIは各学部・研究科単位で作成いたしますので、興味をお持ちの方は図書事務課までお問い合わせ下さい。

[illegible]

171

第5回 社会文化体験演習ⅠA/B・ⅡA/B 寺内 大左（社会学部社会文化システム学科・2017年度東洋大学優秀教育活動受賞）



はじめに

平成29年度優秀教育活動賞に社会学部社会文化システム学科の社会文化体験演習・国際理解分野を選んでいただきました。本演習は春学期の国内活動と秋学期の海外研修を組み合わせた現場体験型の学習プログラムです。プログラムの特徴を述べる前に、国際理解分野の3つの目標について説明します。

1つ目の目標は、身近な商品を通して日本と途上国の関係（グローバリゼーションの様相）を理解することです。2017年度は、1980年代から急速に国際商品化し、生産・輸出国の環境問題や貧困問題と密接にかかわる「エビ」に注目しました。学生たちはエビ消費国である日本でエビの流通と消費の実態を調べ、エビ生産国であるインドネシアでエビの生産（養殖・加工）の実態を学びました。

2つ目の目標は、インドネシアのエビ生産者とのつながりを深く理解するために、インドネシアの異文化社会を理解することです。日本では在日インドネシア人の方々にお会いして、日本で受けたカルチャーショックなどのお話を伺い、インドネシアではモスク（イスラム教徒の礼拝所）を訪問したり、ホームステイを経験するなどして異文化社会を体験しました。

3つ目の目標は、学んだことを発表し、議論するコミュニケーション能力を養うことです。学生たちはインドネシア・フィールドスタディ中に日本で調べたことをインドネシアのエビ生産者や現地の大学生に発表し、意見交換を行いました。また、年度末には公開シンポジウムを開催し、1年間の活動成果を発表し、外部の大学教員を交えてパネルディスカッションを行いました。

学生の学問に対する興味や関心を高める工夫

本分野はグローバリゼーションの様相を学ぶことを目標の一つにしていますが、国レベルの経済・政治の関係から学び始めるのではなく、学生の興味を引くために、「エビフライ定食のエビはどのような経路で食卓にとどくのか」「このエビはどこで、誰が生産しているのか」「エビを生産している方々はどのような生活を営んでいるのか」など日常生活レベルの問いを展開させて、私たちの生活とインドネシアのエビ生産地域の人々のつながりを学ぶプログラムにしています。

もう一つの学びの工夫は、徹底した現場主義を採用している点です。エビの流通を調べるために築地を訪問したり、エビの生産を学ぶためにインドネシアのエビ養殖地域を訪問しました。また、インドネシアの異文化社会を理解するために日本では在日インドネシア人の方々に話を聞いたり、インドネシアではモスクを訪問したり、ホームステイも体験します。現場のリアリティに触れる機会を多く設け、学生の興味・関心を高めるようにしています。

学習の成果を公表する多様な機会—プレゼンテーション、報告書、プロモーション・ビデオ

学習成果を公表する機会を多く設けている点も特徴的だと思います。春学期は学科のフレッシュヤーズキャンプの際に、1年生全員を対象に昨年度の活動報告を行います。秋学期のインドネシア・フィールドスタディでは国内調査の成果を英語で発表します。秋学期の最後には公開シンポジウムを開催し、1年間の活動成果を発表します。また、1年間の活動成果は報告書にまとめ、関係者に送付しています。さらに、プロモーション・ビデオを作成し、YouTubeやホームページにアップしています。以上のように成果公表の機会を多く設けることで、学習のモチベーションや活動に対する責任感が向上し、活動後の大きな達成感につながっていると思います。

◆LINK

・東洋大学社会学部社会文化システム学科「社会文化体験」科目群／国際理解分野 webページ

【3】高等教育政策動向等

◆PICK UP

第4回統合イノベーション戦略推進会議にて、「AI戦略（有識者提案）及び人間中心のAI社会原則（案）」の内容が明らかになりました。すべての大学生にAIリテラシー教育を行なうという大規模な戦略目標が掲げられています。

◆一覧（抜粋）（2019年3月15日～4月22日）

カテゴリ	配信元	webページ タイトル	更新日	URL
就職活動	経団連	採用と大学教育の未来に関する産学協議会 中間とりまとめと共同提言	2019/04/22	こちら
スーパーグローバル	日本学術振興会	スーパーグローバル大学創成支援事業 ロジックモデル（各採択大学）について掲載しました。	2019/04/18	こちら
研究	文部科学省	科学技術・学術政策研究所「科学技術の状況に係る総合的意識調査（NISTEP定点調査2018）」報告書の公表について	2019/04/15	こちら
APプログラム	日本学術振興会	大学教育再生加速プログラム（AP）パンフレットを掲載しました。	2019/04/12	こちら
諸外国	文部科学省	「諸外国の教育統計」平成31（2019）年版	2019/04/11	こちら
AI戦略	首相官邸	◇統合イノベーション戦略推進会議（第4回）	2019/03/29	こちら

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の初等中等教育など教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

- ・ [高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES](#)（大学改革支援・学位授与機構）
- ・ [海外学術動向ポータルサイト](#)（日本学術振興会）

【4】その他

◆学外FD・SD研修会への参加申込

現在申込み受付中の研修会

- ・「インタラクティブ・ティーチング」アカデミー2019（全5回）（先着順）
- ・大学行政管理学会「『大学人事』研究グループの20年と、大学職員の高等教育での関わり方と働き方を改めて問う。」（6/10学内ℳ）
- ・平成31年度FD推進ワークショップ（新任専任教員向け）大学教員の職能開発とFD（5/17学内ℳ）

参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

詳しくは[こちら](#)※ガルーン

◆English Support Service (ESS)

[詳細・ご予約](#)※ガルーン

◆2018年度優秀教育活動賞の推薦期間のお知らせ（4/30まで）

本学において優れた教育活動（各学部の授業及び授業に伴う教育活動）を企画実施し、学生に大きな教育効果を与えた専任教員に対して顕彰することを目的として、東洋大学優秀教育活動賞の推薦を依頼いたします。（高等教育推進支援室）

詳しくは[こちら](#)※ガルーン

◆高等教育関連図書のご案内

高等教育推進センターでは、ブックログという読書記録のためのウェブサービスを利用して、センターが保管している高等教育に関する図書をご紹介しています。「センター蔵書あり」の図書については、貸出も可能ですので、詳しくは、下記の「貸出申込みフォーム」からご確認ください。（高等教育推進支援室）

[ブックログの本棚](#)

[貸出申込フォーム](#)

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

本ニュースレターにFD・SDに係るコラムやイベント情報等の投稿を随時募集しております。

下記フォームにしたがって、ふるってご投稿ください。

メール、電話でのご相談も承っております。

字数：800～1200字（目安）

コラムの例

○教員のみなさま

- ・「わたしが実践する授業の工夫」をテーマにしたコラム
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb siteの紹介、etc.

○職員のみなさま

- ・担当業務の紹介コラム
- ・担当学部・研究科、部署のFD・SD研修会の開催告知
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb site（特にSD関連）の紹介、etc.

【5】 あとがき

あとがきとして最近参加したSDワークショップの紹介です。

2019年4月20日(土)に、一般社団法人 大学行政管理学会 大学改革研究会主催の「マンダラート作成ワークショップ」に参加しました。マンダラートとは、合計72のマス目に沿って、大目標・小目標・行動計画を記入し、目標に対するマイルストーンとするツールです。最近、野球の大谷翔平選手が高校1年生の時に立てた目標「ドラフト1位・8球団」により一躍有名になりました。

ワークショップ内では「5年後の自分」についてマンダラートを作成しました。講義の中でポイントとして紹介された「グタイテキニ」（グ：具体的に書く・タ：達成可能であること・イ：意欲が持てること・テ：定量化すること・キ：期日を定める・ニ：日課にする）を意識して作成しました。

今回は個人の目標でしたが、応用すれば組織での目標設定の際にも使えるとのことでしたので、普段の業務でも使える場面がありそうだと感じました。

ガルーン掲示板では、FDのみならずSDに関する研修情報も掲載しておりますので、職員の皆さまも気になる研修会等ありましたら是非ご参加ください。

講師推薦書

仕事も人生もうまくいく！ 【図解】 9マス思考マンダラチャート

https://www.amazon.co.jp/dp/4413112733/ref=cm_sw_em_r_mt_dp_U_p-SVCbK9JSP18

ガルーン掲示板学外FD・SD研修会について

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=14672>

●みなさまの声をお寄せください

過日は、あたたかいお声をお寄せいただき誠にありがとうございました。発行の励みになります。

引き続き、これまでのニュースレターに対する

ご意見・ご感想・ご要望、応援メッセージなどを下記のフォームで募集しております。

些細な内容でも構いませんのでお寄せいただけますと幸いです。

※匿名で収集しておりますので、気兼ねなくお寄せください。

リンク：<https://goo.gl/forms/q14H9oRjIAU9uG9C3>

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

◆このメールは本学教職員にお届けしています。

◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。

ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。

◆掲載記事の無断転載を禁じます。

© 2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター

2019年5月14日 Vol.2, No.3 (通算第17号)

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫

第6回 異文化への関心 (市田 せつ子・村田 由美恵)

【2】コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く

第6回 機械工学科における、ものづくりのためのPBL授業 (新藤 康弘)

【3】高等教育政策動向等

【4】その他

◆学外FD・SD研修会への参加申込

◆English Support Service (ESS)

◆高等教育関連図書のご案内

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

【5】あとがき

【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫

第6回 「異文化への関心」

市田せつ子 (国際観光学部) ・村田由美恵 (国際学部)



2016年街歩き：小石川植物園・根津神社・東京大学正門前

伝統ある東洋大学で「国際」を冠する学部としては初めて、国際地域学部が1997年度に発足した。この学部は2017年度に国際学部と国際観光学部の2つの学部が設立されたことに伴い、発展的に解消されるさなかにあるが、留学生教育の様々な方策へのヒントとして2013年—16年と4年間にわたって実施した「日本語」(留学生対象)及び「観光基礎演習」(一般)の合同授業について報告する。東洋大学の留学生は、従来、交換留学生と一般の留学生に大別され、今日ではさらに受け入れ方法も多様化しているが、ここで取り上げる留学生のほとんどは日本で日本語を1-2年間、勉強した上で、一定以上の日本語能力を備え、学術上或いはキャリア形成上のはっきりした目的があると認められて入学した学生たちである。

国際地域学部は1997年から2009年まで板倉キャンパスに位置した。学部創設後2年目にA君という、卒業後に大学教員になった学生さんが作ったサークル「アミーゴ」が約10年間、国際交流の活動を続けた。キャンパス周辺の環境や交通の条件からいってもそれは滞在型の交流だった。板倉町公民館を年に1, 2回借りて「お国料理」大会を開いたり、大学周辺の留学生用のアパートにサークルの学生が住んだりして交流を深めた。

その後、国際地域学部は2009年に白山に移転、最初の4年間は第二キャンパスという学部独自のキャンパスを持ち、2013年度から白山のメインキャンパスに移った。この時、人口密度が高く、移動の激しい都心のキャンパスの中での留学生の交流について考えさせられ、出会いと交流の定点となるべく、一般授業(日本人・留学生を問わない)と留学生だけの授業の合同授業を企画した。それぞれの授業での独自の目的もあるため、その合同の時間は4回として、準備や事後の持ち帰りの反省を入れても、全授業の3分の1を超えない範囲でカバーすることとした。

1 第3週 イントロダクション (交流とグループ分け)

2 第6週 発表会1 (国際観光学科学生)

3 第9週 発表会2 (留学生)

4 第13週 交流会（または街歩き）

グループ分けはそれぞれの授業科目におけるその年のテーマがグループ分けに反映することもあれば、合同の活動を設定して、グループも2つの授業の学生を混ぜて作ることもあった。プロセスとして1) 開放的なコミュニケーションの態度を身につけ、2) わかりやすい言語を使い、3) 授業前後のアンケートや当日の質疑を通じて自分のテーマについて異文化の視点があることを知る、という流れを心がけた。

活動1年目：（留学生11人と日本人学生17人の28人）街歩きテーマ「日本の中華料理」

留学生と日本人学生を混ぜた5つのグループを作り神保町を散策、推奨した中華料理と一緒に昼食として食べて調査する。留学生は母国（中国とは限らない）における中華料理との差異を積極的に述べることにする。この食体験を次の授業で発表する。

2年目：（留学生22人と日本人学生22人の44人）発表テーマ「環境（日本人学生）」「故郷の町（留学生）」及び交流会テーマ「お互いに聞いてみたいこと」（クイズ、インタビューを経て、結果を短時間でまとめてプレゼンする）

3年目：（留学生22人、日本人13名の35人）2年目と同じくそれぞれのゼミのテーマで発表した。日本人学生は「静岡県伊豆」を文学・観光などの視点から、留学生グループは「日本の地方」をテーマに、大都市とは異なる良さを持つ観光スポットとして話す。

4年目：（留学生22人、日本人学生14名の36人）発表テーマ「キャンパス周辺に住んだ文学者と観光の歴史（日本人学生）」、「日本人に喜ばれる自国のアピール（留学生）」。最終回の街歩きで国際観光学科学士の案内により、グループに分かれて白山周辺の見どころを訪ねた。

国際学部は多くの留学生と共に学ぶ学部であるが、留学生の日本語力がどの程度なのかかわからず、日本人学生は声をかけるのをためらう傾向にある。新入生の早い段階でお互いを知り親近感を持つことで、日本人学生・留学生双方に意見交換と交流を促すことができる。英語だから日本語だからとこだわらずにまずはお互いに声をかけ、会話が始まる楽しい経験をこれからも多くの学生に味わってほしい。国際観光学部ではチューター制度を作り、一緒にの課外行事を既にいくつか企画した。しかしまだ始まったばかりである。

【2】コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く

こちらのコラムは、[高等教育推進センター公式ホームページ](#)にも公開中

第6回 機械工学科における、ものづくりのためのPBL授業

新藤 康弘（理工学部機械工学科・2017年度東洋大学優秀教育活動賞受賞）



ものづくりに取り組む様子

はじめに

機械工学科では、「機械設計法および演習」という授業科目において、PBL（Project Based Learning）形式の授業に取り組んでおります。

実際のものづくりにおけるプロジェクトマネジメントでは、製品の企画、設計、進捗、コスト、生産、品質、安全保障などと多岐にわたって管理（マネジメント）する必要があります。そこで本授業では、機械の設計・製作にチームで取り組み、学生が主体的に「ものづくりのプロセス」を体験することを目的としています。授業ではテーマに則した機械の企画立案から進捗管理、部品の調達・コスト管理までを行い、最終講義では各チームでの発表会を実施し、ルーブリックをもとに評価を行っております。

ここでは、私が取り組んでいるPBL形式の授業の取り組みについて、ご紹介させて頂き、今後の先生方の教育活動のご参考となれば幸いです。

課題設定と評価（学生の興味・関心を高める工夫）

PBL授業での課題設定は、学生の自発的かつ自由な発想を生かした企画立案をしてもらいたいと考えており、できるだけ自由度の高いテーマ設定を行っております。また、学生の興味・関心を高める工夫として他のグループとの競技システムを導入しております。具体的には、最終的に作製した装置に関して予め提示した以下のスコア計算式を用いた評価を行い、最もポイントが高かったチームで順位を競っています。

「スコア＝基礎点－装置重量－(モータの使用個数)×(作動時間＋作製費用)」

計算式の中には、モータの個数や装置の重量、コスト等が反映されるように設定しました。「基礎点」は、機構到達度を表しており、完遂すれば50点となっています。機構を完成させるためには、モータ数（最大2個）は多いほうが有利ですが、モータを1個にして機構設計を創意工夫することで、より高得点を狙うことも可能です。モータが少ない状態で動かす機構の工夫や、軽量化を図るため製作素材の工夫、確実性を考慮

してモータを2個使うなど、戦略によって各チームの独創性を生かしたもののづくりに発展していくことを狙っています。

まとめと謝辞

PBL形式の授業では、学生の意欲をより高める工夫が必須となります。また、それとともに明確な試験問題などが存在しないために、成績評価方法も課題となります。本科目では、ルーブリックを作成しシラバスに添付することで、成績評価の事前周知を行っております。今後より一層、学習意欲の発展と習得能力の向上を図るために、課題テーマおよびルーブリックに創意工夫を凝らしながら、授業をさらに発展できればと考えております。

最後に、昨年、「機械工学科におけるものづくりのためのPBL授業」をご評価頂き、平成29年度優秀教育活動賞を受賞させて頂くことができました。これは、私一人で達成することはできず、機械工学科の先生方ならびに本科目の基礎を長年にわたって積み上げて頂きました、本学名誉教授の神田雄一先生のご指導ご鞭撻あつての賜物と考えております。この場を借りまして、あらためて感謝させて頂きたく存じます。ありがとうございました。

【3】 高等教育政策動向等

【文科省】平成30年度公募 短時間で編成される「職業実践力育成プログラム」(BP)の認定について

(2019/5/10)

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/bp/1416439.htm

【文科省】研究力向上改革2019

(2019/4/23)

http://www.mext.go.jp/a_menu/other/1416069.htm

【就職活動】採用と大学教育の未来に関する産学協議会 中間とりまとめと共同提言

「採用と大学教育の未来に関する産学協議会」は経団連と国公私立大学の代表者により構成されています。

(2019/4/22)

<http://www.keidanren.or.jp/policy/2019/037.html>

【文科省・初等中等教育】新しい時代の初等中等教育の在り方について(諮問)

(2019/4/17)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1415877.htm

【経団連・研究】Society 5.0の実現に向けた「戦略」と「創発」への転換～政府研究開発投資に関する提言～

(2019/4/16)

<http://www.keidanren.or.jp/policy/2019/034.html>

【私大連・就職活動】提言「新たな時代の就職・採用と大学教育—未来を拓く多様な人材育成に向けて—」

(2019/4/12)

https://www.shidaiaren.or.jp/topics_details/id=2465

【大学基準協会・教職課程】教職課程における質保証・向上に係る取組の調査研究報告書

(2019/3/29)

<https://www.juaa.or.jp/investigation/index.html>

【学生支援機構・調査】平成30年度(2018年度)障害のある学生の修学支援に関する実態調査

(2019/3/29)

https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/index.html

【THE・大学ランキング】Best universities in the Asia-Pacific region 2019 (THEアジア太平洋大学ランキング2019)

本学は301+にランクイン (昨年は251+)

(2019/2/20)

<https://www.timeshighereducation.com/student/best-universities/best-universities-asia-pacific-region#survey-answer>

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の初等中等教育など教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

- ・ [高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES](#)（大学改革支援・学位授与機構）
- ・ [海外学術動向ポータルサイト](#)（日本学術振興会）

【4】 その他

◆学外FD・SD研修会への参加申込

現在申込み受付中の研修会

- ・「インタラクティブ・ティーチング」アカデミー2019（全5回）（先着順）
- ・「大学人事」研究グループ 設立20周年記念シンポジウム 大学行政管理学会「大学人事」研究グループの20年と、大学職員の高等教育での関わり方と働き方を改めて問う。（6/10㍻）
- ・平成31年度FD推進ワークショップ（新任専任教員向け）大学教員の職能開発とFD（5/17㍻）

参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

詳しくは[こちら](#)※ガルーン

◆English Support Service (ESS)

[詳細・ご予約](#)※ガルーン

◆高等教育関連図書のご案内

高等教育推進センターでは、ブックログという読書記録のためのウェブサービスを利用して、センターが保管している高等教育に関する図書を紹介しています。「センター蔵書あり」の図書については、貸出も可能ですので、詳しくは、下記の「貸出申込みフォーム」からご確認ください。（高等教育推進支援室）

[ブックログの本棚](#)

[貸出申込みフォーム](#)

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

本ニュースレターにFD・SDに係るコラムやイベント情報等の投稿を随時募集しております。

下記フォームにしたがって、ふるってご投稿ください。

メール、電話でのご相談も承っております。

[投稿申請フォーム](#)

字数：800～1200字（目安）

コラムの例

○教員のみなさま

- ・「わたしが実践する授業の工夫」をテーマにしたコラム
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb siteの紹介、etc.

○職員のみなさま

- ・担当業務の紹介コラム
- ・担当学部・研究科、部署のFD・SD研修会の開催告知
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb site（特にSD関連）の紹介、etc.

【5】 あとがき

新しい元号を迎え、本日は令和第1号のニュースレターをお届けしました。

この歴史的なタイミングをきっかけに、新しいことをはじめる方も多いのではないのでしょうか。

わたしは、ニュースレターVol.1, No. 10でご紹介したMOOCと呼ばれるオンライン講座の受講を始めました。

「インタラクティブ・ティーチング」という「教えること」を学ぶ講座です。一昨年度と昨年度の高等教育推進センター主催のFD研修会にお迎えした栗田佳代子先生が講師を務められています。修了できるようがんばっています。

▼受講はこちらから

<https://www.fisdom.org/F00000086/>

最後に、令和の典拠となった万葉集から好きな歌を。

新しき年の初めの初春の 今日降る雪のいやしけ吉事

令和の時代においても、本学に良い事が積まりますように。

そのためにも、このニュースレターを通じて、できることから一つひとつ挑戦していきたいと思います。

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

- ◆このメールは本学教職員にお届けしています。
 - ◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。
ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。
 - ◆掲載記事の無断転載を禁じます。
- © 2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター 2019年6月11日 Vol.2, No.4（通算第18号）

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

- 【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫
第7回 「年間授業計画表」の作成と配布（野間信幸）
- 【2】高等教育政策動向等
- 【3】その他
 - ◆学外FD・SD研修会への参加申込
 - ◆English Support Service（ESS）
 - ◆高等教育関連図書のご案内
 - ◆本ニュースレターへの投稿を募集しています
- 【4】あとがき

【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫 第7回 「年間授業計画表」の作成と配布 野間 信幸（文学部）

はじめて教壇に立った時、教室には黒板しかなかった。今やどの教室にも機器が設置されており、隔世の感がある。機器の充実は、その都度授業スタイルに影響を及ぼしてきた。ただし機器は有効に使わないと、授業の質の向上につながらない。たびたび工夫が施されてきた所以であろう。

しかし授業の工夫は、機器に絡むことばかりではない。アナログ時代の産物ながら、工夫を重ねて今なお活用されているものもある。本号ではそれを取り上げてみようと思う。アナログの匂いがプンプン漂う「年間授業計画表」である。

（1）「年間授業計画表」の内容

「年間授業計画表」は、ワープロの普及によって作成が容易になった。初めは講義科目を対象にしたが、やがて演習科目も含め、すべての科目に拡大した。

今日どんな授業をするのか、この当たり前の情報ですら、かつてはなかなか受講生に届かなかった。今はToyoNet-Gに掲載されている「シラバス」にも公開されているので、「年間授業計画表」は役目を終えたように思えるかもしれない。

しかし大学が提示する項目に沿って作成する「シラバス」と、教室で実際に学生と対面して約束する「年間授業計画表」とは、本音と建て前ほど性格に開きがある。ToyoNet-Gの公式「シラバス」は、表向きの顔となるため、どうしても制約が多くなる。一方ToyoNet-Aceに掲載している「年間授業計画表」は、受講生だけを対象とするので、本音の授業情報を思う存分反映することができる。

「年間授業計画表」に書き込む内容は、毎回の授業のテーマや形態（講義・討論・発表等）、資料の配布日、レポートの提出日など多岐にわたる。さらに授業レジュメの取得方法、発表の手順、遅刻欠席の扱い、成績評価の点数配分にまで言及している。これらを2枚の紙にまとめて配布する。このような簡単な代物ながら、授業の運営にあたって根幹となる情報は網羅してある。

これを年度初めの授業で配布し、ガイダンスの資料として利用する。併せてToyoNet-Aceに掲載する。強調するのは、授業に臨むにあたっての受講態度である。

一方、学生の関心は成績評価にある。授業の運びを理解してもらおうとする当方とは、「年間授業計画表」に注ぐ眼差しの先がちがうのである。

（2）成績評価基準の公表

成績評価の仕組みを隠す必要はないと、つねづね思っている。受講生に全面公開しておくことで、それに見合った受講態度を求めるといい。私は「年間授業計画表」に成績の付け方を明記することで、双方の約束事（契約）にしてしまっている。

成績評価に関わる配点を抽出してみると、出席点1点、小テスト（毎時）1点、レポート（回数によって）1～5点、発表（同前）3点～5点、学期末試験15点～30点等々あり、これらを50点満点になるよう組み合わせている。

授業の内容や形態によって項目と配点は異なるが、積み上げ方式であることには変わりはない。受講生には、成績や単位は与えられるものではなく、各人で掴み取ってゆくよう発破をかけている。

（3）手放せない「年間授業計画表」

アナログ時代の産物ではあっても、「年間授業計画表」は授業の礎のような存在になっている。また授業の実相を反映する、鏡のようなものでもある。それゆえ作成にいくら手間がかかっても、もう手放せなくなってしまった。

私の専門の中国文学には、呉剛という男が月に追放されて、罰として切っても切っても倒れぬ桂の木を、永遠に切らされている、という話がある。永続的に改訂を重ねる「年間授業計画表」も、どこかそれに似た趣きがある。

しかし呉剛の行為とちがうのは、「年間授業計画表」の作成は苦行ではなく、好意的に受け入れてくれる受講生が存在していることだ。さて、それで授業が上手くいっているのかと訊ねられたら、「ぼちぼちでんな」と答えることにしている。

【2】高等教育政策動向等

1）【調査】第10回全国院生生活実態調査（全国大学生生活協同組合連合会）

（2019/06/10）

https://www.univcoop.or.jp/news_2/news_detail_1482.html

2）【大学入試センター】「令和3年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト出題教科・科目の出題方法等」及び「大学入学共通テスト問題作成方針」

（2019/06/07）

<https://www.dnc.ac.jp/news/20190607-03.html>

3）【文科省】入学者選抜実施要項

令和3年度版が公開されました。

（2019/06/05）

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/senbatsu/1346785.htm

4）【教育費負担軽減】高校生向け修学支援新制度ホームページ開設

高校生・保護者向けのwebページです。

（2019/06/03）

<http://www.mext.go.jp/kyufu/index.htm>

5）【文科省】令和元年度（2019年度）からの国際共同利用・共同研究拠点の公募について（公立大学、私立大学）

（2019/06/03）

http://www.mext.go.jp/a_menu/kyoten/1417295.htm

6）【文科省】教学マネジメント特別委員会 開催状況

5月30日（木）に第5回が開催されました。国が初めて全国共通項目で実施する学生調査（学部3年生対象）の内容が議論されました

（http://www.mext.go.jp/kaigisiryoy/2019/05/_icsFiles/afieldfile/2019/05/29/1417489_6.pdf）。

教学マネジメント特別委員会（第5回）のすべての会議資料はこちら（http://www.mext.go.jp/kaigisiryoy/2019/05/1417489_25603.html）をご覧ください。

（2019/05/30）

7）【文科省】（大学入試改革）2021年度入学者選抜（一般選抜）における国立大学の英語資格・検定試験の活用予定の公表状況について

82大学中79大学が英語資格・検定試験を活用

（2019/05/31）

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/detail/1417592.htm

8) 【文科省】(大学入試改革) 2021年度入学選抜に向けた各大学の検討状況の調査結果

(2019/05/31)

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/detail/1417589.htm

9) 【文科省】大学入学選抜の公正確保等に向けた方策について(最終報告)

(2019/05/31)

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/senbatsu/1417494.htm

10) 【文科省】大学における教育内容等の改革状況について(平成28年度)

(2019/05/28)

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336.htm

11) 【文科省】学校教育法等の一部を改正する法律

改正内容

- ・学校教育法(認証制度の厳格化)
- ・私立学校法(私立学校のガバナンス強化)
- ・国立大学法人法(一人複数大学制)

(2019/05/24)

http://www.mext.go.jp/b_menu/houan/kakutei/detail/1415449.htm

12) 【学術会議】提言「我が国における微生物・病原体に関するリテラシー教育」

(2019/05/20)

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t275-1.pdf>

13) 【文科省】2019年度大学の世界展開力強化事業～日-EU戦略的高等教育連携支援～公募申請状況

国際共同修士課程プログラム(内訳: 国立大学8件、公立大学0件、私立大学2件)

(2019/05/17)

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1416636.htm

14) 【文科省】平成30年度大学等卒業者の就職状況調査(4月1日現在)

大学生の就職率は97.6%(前年同期比0.4ポイント低下)※調査開始以降2番目に高い

(2019/05/17)

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/05/1416816.htm

15) 【教育再生実行会議】技術の進展に応じた教育の革新、新時代に対応した高等学校改革について(第十一次提言)

提言とりまとめまでのワーキング・グループの議論はこちら(https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaiei/jikkoukaigi_wg/kaigi.html)

(2019/05/17)

<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaiei/teigen.html>

16) 【自由民主党 政務調査会 経済成長戦略本部】「令和」時代・経済成長戦略

「(1)AI・データ時代の人材育成のための教育システム改革」(pp.23-25)をご覧ください。

(2019/05/14)

<https://www.jimin.jp/news/policy/139537.html>

17) 【自由民主党 教育再生実行本部】教育再生実行本部 第十二次提言

高等学校普通化の見直しを提言

(2019/05/14)

<https://www.jimin.jp/news/policy/139621.html>

18) 【文科省】高等教育段階の教育費負担軽減

「高等教育段階の教育費負担軽減」については、こちらのwebページに取りまとめられています。

(2019/05/14)

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/hutankeigen/index.htm

19) 【経産省】「大学による大学発ベンチャーの株式・新株予約権取得等に関する手引き」

「経済産業省は、大学による大学発ベンチャーの株式・新株予約権取得を促進し、大学発ベンチャーの成長を加速させる観点から、『大学による大学発ベンチャーの株式・新株予約権取得等に関する手引き—知的財産権のライセンスに伴う新株予約権の取得を中心に』を策定しました。」

(2019/05/08)

<https://www.meti.go.jp/press/2019/05/20190508002/20190508002.html>

20) 【経産省】大学発ベンチャー調査、大学発ベンチャーデータベース 公表

(2019/05/08)

<https://www.meti.go.jp/press/2019/05/20190508001/20190508001.html>

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の初等中等教育など教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

- ・ [高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES](#) (大学改革支援・学位授与機構)
- ・ [海外学術動向ポータルサイト](#) (日本学術振興会)

[3] その他

◆学外FD・SD研修会への参加申込

参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

研修会の詳細やお申込方法は[こちら](#)※ガルーン

【現在申込み受付中の研修会】

- ・ 6/24(月)18:30-20:30「第43回マネ研サロンわが国の大学ガバナンス改革の課題とこれからの方向性—イギリスの高等教育改革に学ぶ」@ハリウッド大学院大学(港区六本木) (6/17学内申込〆切)
- ・ 6/29(土)15:00-17:00「科研費を中心とする研究費獲得上の留意点と科研費改革後の対応・スキルの養成(仮)」@東洋大学白山キャンパス (6/21学内申込〆切)
- ・ 7/6(土)10:00-12:00「英語による授業のためのWS」@芝浦工業大学豊洲キャンパス (6/21学内申込〆切)
- ・ 7/6(土)13:00-16:00「研究室指導に必要なコーチング技術入門WS」@芝浦工業大学豊洲キャンパス (6/21学内申込〆切)
- ・ 「インタラクティブ・ティーチング」アカデミー2019(全5回)(先着順)

◆English Support Service (ESS)

[詳細・ご予約](#)※ガルーン

◆高等教育関連図書のご案内

高等教育推進センターでは、ブックログという読書記録のためのウェブサービスを利用して、センターが保管している高等教育に関する図書をご紹介しています。「センター蔵書あり」の図書については、貸出も可能ですので、詳しくは、下記の「貸出申込みフォーム」からご確認ください。(高等教育推進支援室)

[ブックログの本棚](#)

[貸出申込フォーム](#)

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

本ニュースレターにFD・SDに係るコラムやイベント情報等の投稿を随時募集しております。

下記フォームにしたがって、ふるってご投稿ください。

メール、電話でのご相談も承っております。

付録

—東洋大学高等教育推進センターニュースレター Vol.2 アーカイブ

字数：800～1200字（目安）

コラムの例

○教員のみなさま

- ・「わたしが実践する授業の工夫」をテーマにしたコラム
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb siteの紹介、etc.

○職員のみなさま

- ・担当業務の紹介コラム
- ・担当学部・研究科、部署のFD・SD研修会の開催告知
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb site（特にSD関連）の紹介、etc.

【4】 あとがき

あとがきということで最近取り組んでいるプロジェクト（業務）
「経済同友会版インターンシップ」の紹介です。

今年度より本学が経済同友会と協定を結び、
低学年（本学では学部2年生）対象に長期インターンシッププログラム
を協働し実施することになりました。

このインターンシップの特長は、
経済同友会加盟企業の日本を代表する企業が受け入れ先となるだけでなく、
多くても最大10名程度の少人数に対して最低2週間以上のプログラムを提供いただくということです。

今年度、本学からは全学の学部2年生から11名を選抜して、
(株)三井住友銀行・花王(株)・KDDI(株)等に派遣いたします。

86名のエントリーがあり、現在選考を行っていますが、
多くの方が、2年生とは思えないほど受け答えもしっかりされていて11人を選ぶのに大変苦慮しております。

夏季休暇中に「東洋大学代表」として全力でインターンシップを行い、
周りの学生たちにもいい影響を与えられるような人に成長してくれればいいなと期待しております。

◆詳細情報（特設サイト）

<https://sites.google.com/view/toyo-doyukai-internship/home>

※PCの場合、ブラウザによって閲覧できないことがございます。

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

E-mail: m1fdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

◆このメールは本学教職員にお届けしています。

◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。

ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。

◆掲載記事の無断転載を禁じます。

© 2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター 2019年6月25日 Vol.2, No.5（通算第19号）

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

【1】高等教育政策動向等

【2】学生FDチームの近況報告 01

【3】その他

◆学外FD・SD研修会への参加申込

◆English Support Service (ESS)

◆高等教育関連図書のご案内

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

【4】あしがき

*シリーズ2「わたしが実践する授業の工夫」はお休み

【1】高等教育政策動向等

1) 【Society5.0】「経済財政運営と改革の基本方針2019～『令和』新時代：『Society 5.0』への挑戦～」(骨太方針2019)閣議決定

高等教育の文脈におけるキーワード：高等教育無償化、Society5.0時代に求められる能力の育成、STEAM教育、実践的な職業教育、リカレント教育

そのほか、「成長戦略実行計画」、「成長戦略フォローアップ」、「令和元年度革新的事業活動に関する実行計画」、「まち・ひと・しごと創生基本方針2019」、「規制改革実施計画」も同日に閣議決定されました。

(2019/6/21)

<https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/cabinet/2019/decision0621.html>

2) 【日本語教育】「日本語教育推進法」成立

(2019/6/21)

<http://www.sangiin.go.jp/japanese/joho1/kousei/gian/198/meisai/m198090198010.htm>

3) 【大学入学者選抜】河合塾「大学入試改革に関する意識調査」公表

2021年からの新入試について、約7割が不安を感じています(対象：現中学2年生～高校3年生の男女600組、同一の親子)。

(2019/6/21)

<https://www.kawaiijuku.jp/jp/news/detail.html?id=320>

4) 【文科省】「感染症研究の推進の在り方に関する検討会報告書」公表

(2019/6/20)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shinkou/052/gaiyou/1418125.htm

5) 【文科省】海外の大学との大学間交流協定、海外における拠点に関する調査結果

各大学の協定について、Excelファイルでデータベース化されたファイルが公開されています。

(2019/6/20)

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shitu/1287263.htm

付録

—東洋大学高等教育推進センターニュースレター Vol.2 アーカイブ

6) 【初等中等教育】OECD国際教員指導環境調査 (TALIS) 2018年 結果

(2019/6/19)

・教育政策研究所 (日本語) ※2013年調査との比較、参加48か国平均との比較

<http://www.nier.go.jp/kenkyukikaku/talis/index.html>

・OECD (英語、日本語) ※参加国の結果、日本に関する分析

https://www.oecd.emb-japan.go.jp/itpr_ja/00_000487.html

7) 【大学ランキング】QS世界大学ランキング2020

(2019/6/19)

<https://www.topuniversities.com/university-rankings/world-university-rankings/2020>

8) 【文科省】国立大学改革方針について

(2019/6/18)

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/1418126.htm

9) 【文科省】ASEAN+3高等教育の流動性・質保証に関するワーキング・グループの活動実績

(2019/6/17)

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shitu/1367505.htm

10) 【文科省】外国人の受入れ・共生のための教育推進検討チームの報告の取りまとめについて

(2019/6/17)

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/06/1418054.htm

11) 【文科省】外国大学等の日本校の指定

(2019/6/13)

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shitu/08052204/1417852.htm

12) 【スポーツ庁】大学スポーツ振興の推進事業において平成30年度に採択した15大学の成果報告書

(2019/6/12)

http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop09/list/detail/1417761.htm

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の初等中等教育など教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

・高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES (大学改革支援・学位授与機構)

・海外学術動向ポータルサイト (日本学術振興会)

【2】学生FDチームの近況報告 01

「学生FDチームが再始動しました！」

(高等教育推進支援室 石川 瑛士)

ニュースレター第14号 (2019年3月26日配信) でもご紹介しましたが、高等教育推進センター直属の組織として、学生FDチームという団体があります。

本学の学生FDチームは、学生の大学生活の中心である授業を、教員、職員、学生の三位一体で改善、向上するべく、2010年度から活動しています。これまで、「授業への声コンクール」や「学びセミナー」などを実施してきました。

しばらくの間、学生FDスタッフの人数不足により活動が滞りがちでしたが、昨年度末から今年度にかけて立て続けに学生さんから問い合わせがあり、新メンバー3名を迎えました。

先日6月19日には活動を再始動すべくミーティングを行いました。



今秋には、学生の大学での学びをより良くするために、教職学（教員・職員・学生）の代表者が一堂に会し、意見交換する場を設定したいと考えています。

今後の学生FDチームの活動にどうぞ注目下さい！

【3】 その他

◆ 学外FD・SD研修会への参加申込

参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

研修会の詳細やお申込方法は[こちら](#)※ガルーン

【現在申込み受付中の研修会】

- ・ 7/5(金)18:30-20:30 2019年度 Rcus大学マネジメントセミナー「高等教育政策の最新動向『高等教育政策をめぐる状況とその目指すもの』」@筑波大学 東京キャンパス（[文京区大塚](#)）（6/30学内申込〆切）
- ・ 7/25(木)13:30-17:30 大学改革支援・学位授与機構「令和元年度大学質保証フォーラム 変革期における大学質保証」@一橋講堂（千代田区）（7/11学内申込〆切）
- ・ 7/26(金)9:30-12:00 大学改革支援・学位授与機構「公開研究会」@学術総合センター（7/11学内申込〆切）
- ・ 8/9(金)10:00-16:50 「～教育の質的転換を目指すICT利用～2019年度ICT利用による教育改善研究発表会」@東京理科大学 森戸記念館（[新宿区神楽坂](#)）（7/10学内申込〆切）
- ・ 8/22(木)-23(金)「第9回大学コンソーシアム八王子 FD・SDフォーラム 2040年の高等教育をデザインする－生涯学び続ける学修者を育成するために－」@八王子市学園都市センター（7/15学内申込〆切）
- ・ 8/26(月)-28(水)「国際教育夏季研究大会2019」@南山大学（名古屋市）（7/21学内申込〆切）
- ・ 「インタラクティブ・ティーチング」アカデミー2019（全5回）（先着順）

◆ English Support Service (ESS)

[詳細・ご予約](#)※ガルーン

◆ 高等教育関連図書のご案内

高等教育推進センターでは、ブックログという読書記録のためのウェブサービスを利用して、センターが保管している高等教育に関する図書をご紹介します。「センター蔵書あり」の図書については、貸出も可能ですので、詳しくは、下記の「貸出申込みフォーム」からご確認ください。（高等教育推進支援室）

[ブックログの本棚](#)

[貸出申込みフォーム](#)

◆ 本ニュースレターへの投稿を募集しています

本ニュースレターにFD・SDに係るコラムやイベント情報等の投稿を随時募集しております。

下記フォームにしたがって、ふるってご投稿ください。

メール、電話でのご相談も承っております。

[投稿申請フォーム](#)

字数：800～1200字（目安）

コラムの例

付録

—東洋大学高等教育推進センターニュースレター Vol.2 アーカイブ

○教員のみなさま

- ・「わたしが実践する授業の工夫」をテーマにしたコラム
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb siteの紹介、etc.

○職員のみなさま

- ・担当業務の紹介コラム
- ・担当学部・研究科、部署のFD・SD研修会の開催告知
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb site（特にSD関連）の紹介、etc.

【4】あとがき

ニュースレターでは、国内の高等教育政策などをご紹介していますが、今回のあとがきでは、どのように情報収集しているのか、その一部をご紹介します。

情報源はおもに3つです。

- ①新聞
- ②メールマガジン
- ③ホームページ（Distill Web Monitorの利用）

新聞は、ToyoNet-ACEから朝日新聞、毎日新聞を斜め読み、他紙についても、図書館契約のデータベースからほぼ毎日確認しています。

文部科学省などの官公庁は、メールマガジンに登録し、メールから最新の情報をキャッチしています。

メールマガジンがない大学基準協会や学術会議などは、ホームページの更新状況を随時確認するわけですが、「Distill Web Monitor」*というGoogle chromeの拡張機能を活用しています。

この機能のおかげで、登録したwebページが更新されると通知が来るので便利です。2週間に一度、通知が来たwebページだけアクセスしています。

その他、課内で回覧される教育系の新聞、雑誌、報告書を読んだり、本屋さんで新刊を確認したり、テレビ、ラジオなど、常にアンテナを張るように意識しています。

おすすめの情報収集方法がありましたら、ぜひご教示ください。

また、興味関心のあるトピックなどございましたら、お知らせください。

※宛先：高等教育推進支援室（mlfdjimu@toyo.jp）

教職員のみなさまにとって役に立つ情報をお届けできるよう努めて参ります。

*Distill Web Monitor, <<https://distill.io/>>, 2019年6月25日アクセス.

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

◆このメールは本学教職員にお届けしています。

◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。

ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。

◆掲載記事の無断転載を禁じます。

© 2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター 2019年7月10日 Vol.2, No.6（通算第20号）

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

- 【1】 新任教員FD研修会開催報告～講演編～
- 【2】 高等教育政策動向等
- 【3】 その他
 - ◆学外FD・SD研修会への参加申込
 - ◆English Support Service（ESS）
 - ◆高等教育関連図書のご案内
 - ◆本ニュースレターへの投稿を募集しています
- 【4】 あとがき

【1】 2019年度新任教員FD研修会を開催しました～講演編～ （高等教育推進支援室スタッフ）

新任教員FD研修会は、継続的な教育改善の取り組みの一環として、4月に本学の専任教員に着任した先生方を対象に、毎年度7月に実施しています。着任して3か月を振り返り、授業運営にあたって、どのように学生の意欲的・主体的な学びを促していくか、またその他課題などを共有し、教員の交流と意見交換を深める機会としています。

今年度は、先週の土曜日7月6日午後、白山キャンパス5号館のアクティブ・ラーニング教室に、27名の新任の先生方が一堂に会しました。松原聡高等教育推進センター長による講演とグループディスカッションの2本立てのプログラムで実施しました。今号では、センター長講演を、次号ではグループディスカッションの内容をご報告したいと思います。

○2019年度新任教員FD研修会プログラム

- 13:00～13:05 (5) 開会のあいさつ（藤松 信義 FD・SD研修部会長）
- 13:05～13:15 (10) responの使い方について
- 13:15～13:45 (30) ★講演（松原 聡 高等教育推進センター長）
- 13:45～13:55 (10) グループディスカッションの進め方について
- 13:55～14:10 (15) 休憩
- 14:10～15:45 (95) ★グループディスカッション
「学生の意欲的・主体的な授業参画を促す授業をおこなうためには？」
- 15:45～16:00 (15) 閉会のあいさつ（松原 聡 センター長）
- 16:10～ 懇親会 @4号館1階 ステラ

松原センター長の講演では、センター長が実践されているICTを活用した授業運営をご紹介いただきました。昨今の高等教育の課題には、「アクティブ・ラーニングの実践」「学修時間の確保」「ダイバーシティの実現」などが挙げられます。センター長が実践されている授業では、これらの課題を解決するために、電子書籍、電子黒板、respon（レスポン）、PowerPoint（のとある機能）が活躍しています。



写真①：センター長講演に耳を傾ける新任の先生方

1. 【予習】（電子書籍の活用）

まずはじめに、電子書籍を活用した学修時間確保の手立てが紹介されました。センター長は、附属図書館で契約している電子書籍を予習教材として用いられています。電子書籍を用いることで、紙のシラバス図書特有の「返却待ち」が発生しません。学生は、スマートフォン、タブレット、ノートパソコンのいずれかがあれば、隙間時間を使って、どこでも学修（予習）に取り組むことができます。また、授業中の学生の主体的な学びを促すために、単に電子書籍を読むよう指示するのではなく、「講義の際に、感想を聞きますので、30字でも50字でもまとめておいてください」と具体的に予習課題を設定されていることも特長です（写真②）。



写真②：電子書籍を使った予習のアナウンスの例

※電子書籍の使い方は、[東洋大学高等教育推進センターニュースレター, Vol.1, No.6](#)をご覧ください。

2. 【ゼミ】（AL教室の活用）

電子黒板

次に、ゼミのグループワークで電子黒板を利用する事例が紹介されました。ゼミがおこなわれるアクティブ・ラーニング教室には、6台の電子黒板が設置されており、各グループ毎に電子黒板を使用して、学生のスマートフォンに保存された写真やスライド画像、文書の画像等を投影し、電子黒板に書き込みながら活発に議論がされているとのこと。加えて、電子黒板の書き込みをデータで保存することも可能であるため、ディスカッションのグループ間の共有やふりかえり、欠席者へのフォローも容易になります。

※白山キャンパスには、5号館と10号館に電子黒板が設置されたアクティブ・ラーニング教室が計6教室あります。5号館の5103教室、5204教室、5304教室、5305教室、10号館のA102教室、A103教室です。

※電子黒板の操作説明

- ・ [manual](#)
- ・ [Description of Whiteboard Mode / ホワイトボードの使い方](#)
- ・ [How to User Easy Interactive Pen / 電子ペンの使い方](#)
- ・ [天井プロジェクター・壁面ホワイトボードの使い方](#)

3. 【講義】（responを活用したアクティブ・ラーニング、PowerPointの字幕表示機能）

respon

大人数の講義科目では、株式会社レスポンのリアルタイムアンケートシステム「respon」を使ってリアルタイムに学生のコメントを集計、表示することで、学生と教員双方向の授業運営を可能にする方法ご紹介いただきました。これまでは、コメントペーパーを使って教員が学生のコメントを把握することはできました。しかし、学生が同じ教室にいるほかの学生の考えを知ることは履修者数が増えるほど難しく、大きな課題でしたが、responのおかげで学生間のコメント共有が可能になり、学生からも好評であるとのことでした。

講演もresponを使って、参加者とコミュニケーションを取りながら進められました。参加された先生方からは、「50名の講義では学生の反応をなかなか確認できない。responを使うと、理解度や意見を確認しながら講義を進めることができるのは大変素晴らしいと思った。双方向のコミュニケーションがとれるresponを今後より活用していきたい。」「学生が主体的に取り組む『仕掛け』を学ぶことができました。学生自身が、気づき、考え、発言し、共有することの重要性を感じました。」などの感想が寄せられました。



写真③：responで寄せられた感想を共有

PowerPointの音声字幕機能

また、センター長講演では、PowerPointの音声字幕機能を利用して進められました。音声字幕機能とは、リアルタイムで音声を確認し、翻訳し、テキストとして字幕を表示する機能です。これまで、聴覚の障がいをもつ学生には、ノートテイクが求められていましたが、この機能によってサポート体制の充実が見込まれます。また、「話し手の言語」は18言語、「字幕の言語」は62言語（2019年7月現在）をカバーしているため、言語の壁を越えて講義をおこなうことが可能です。

※PowerPointの音声字幕機能の使い方（MicrosoftのWebページ）

※Windowsの場合、Windows 10 および PowerPoint バージョン 16.0.11231.20070 以降、Macの場合は、PowerPoint for macOS バージョン 16.22.127.0 以降が必要です。Web版はOffice 365 Educationにログインすると使用することができます。

4. 【復習】（responを活用しての事後投稿）

responは授業外でも活躍します。センター長は、授業が終わった後にresponから授業のコメントを入力するよう、授業の最後に学生にアナウンスされるとのこと。一度家に帰って、授業を思い起こして文章にすることで、学修時間を確保するとともに、学びを深める効果が期待されます。学生の感想を回収方法は、コメントペーパーを使用したり、ToyoNet-ACEのアンケート機能を使ったりと、方法は様々ありますが、responであれば、ほとんどの学生のスマートフォンに専用のアプリケーションがダウンロードされているため、コメントを投稿しやすいというメリットが考えられます。

アクティブ・ラーニングの実践、学修時間の確保、ダイバーシティの実現を目指して、ICTを最大限に活用した授業を展開されている松原センター長。休憩や懇親会の時間も、参加された先生方がセンター長と意見交換されている様子が印象的でした。先生方のICTを活用した授業へのご関心の高さに、高等教育推進支援室のスタッフ一同が引き締まる思いです。今回は、グループディスカッションの成果をご紹介します。（つづく）

【2】高等教育政策動向等

◆PICK UP／教学マネジメント特別委員会審議状況

7月5日の第6回は、「学修成果の把握・可視化」が議論されました。

「資料4-1 教学マネジメントに係る指針に盛り込むべき主な事項（④学修成果の把握・可視化）」の最後で、「学修成果の把握・可視化」に関して、次のように締めくくられています。

「学位プログラム単位で『卒業認定・学位授与の方針』に定める能力を測定するためのルーブリックを作成した上で、学位プログラム全体の到達目標と極めて関連性が深い特定の授業科目や、学位プログラムが提供する教育の集大成である卒業論文作成等において論文作成等に関連する様々な活動を総合的に評価するなどの手法により、授業科目レベルで直接的に学生の能力を測定することで、学生一人一人が自らの学修成果をより具体的に説明できるようにすると共に、大学が教育改善に活用できるようにすることも考えられる。ただしこの場合、カリキュラムレベル、授業科目レベルの双方において、課題の設定や評価基準、授業科目の内容等について、慎重に設計することが必要。このため、授業科目の重要性に鑑み、個々の教員ではなく教育課程を担当する教員が集団でしっかりとした体制を組み、学位プログラム全体で通用する評価とすることが望ましい。」（p.4）

第7回も引き続き、「学修成果の把握・可視化」が議論され、2020度中を目途に、制度改正及び周知がされる予定。

（第6回会議資料）<http://www.mext.go.jp/kaigisiryoy/2019/07/1417846.htm>

1）【大学基準協会】『「大学評価（認証評価）の有効性に関する調査」報告書』公開

この報告書は、認証評価第2期にあたる2011（平成23）年度から2017（平成29）年度までに大学基準協会の大学評価を受けた大学を対象に行ったアンケート調査、訪問調査の結果をまとめたもので、大学評価が大学の教育の質保証・向上にどのような影響を与えたのか、その効果と課題を検証することを目的としたものです。（下記のWebページより引用）

（2019年7月9日）
https://www.juaa.or.jp/news/detail_617.html

2）【大学入試センター】「大学入試英語成績提供システム」における資格・検定試験に関する報告

「TOEIC(R) Listening & Reading Test およびTOEIC(R) Speaking & Writing Tests」が参加申込を取り下げました。
（2019年7月2日）
<https://www.dnc.ac.jp/news/20190702-01.html>

3）【文科省】学術情報基盤実態調査（旧大学図書館実態調査）—平成30年度結果の概要

調査結果の主なポイント

◆大学図書館編

・図書館資料費は713億円であり、平成28年度に続き減少傾向となり、前年度より6億円（0.8%）減少。そのうち、電子ジャーナル経費は297億円であり、前年度より5億円（1.7%）減少。

◆コンピュータ及びネットワーク編

・セキュリティポリシーは、国立大学では全大学で策定されているが、公立大学では11大学（12.0%）、私立大学では168大学（27.6%）が未

策定。

・情報システムのクラウド化は、690大学（87.8%）が推進。クラウド化の効果として、563大学（81.6%）が「管理・運用等にかかるコストの軽減」を、561大学（81.3%）が「利便性・サービスの向上」を挙げている。

（下記のwebページより引用）

（2019年6月28日）

http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/jouhoukiban/kekka/k_detail/1418394.htm

4）【私大連】『日本私立大学連盟 私立大学ガバナンス・コード（第1版）』を策定、公表

（2019年6月27日）

https://www.shidairen.or.jp/topics_details/id=2527

5）【リクルート進学総研】高校生の進路選択に関する調査（進学センサス）

調査の結果、85%の高校生が大学の『アドミッション・ポリシー（入学受け入れ方針）』を認知しているとのこと。

（2019年6月26日）

<http://souken.shingakunet.com/research/2010/07/post-e53f.html>

6）【文科省】「大学等におけるフルタイム換算データに関する調査 報告書」について

文部科学省では、科学技術統計の国際的な取りまとめを行っている経済協力開発機構（OECD）への報告のため、我が国の大学等における研究者数を国際的な基準であるフルタイム換算値を算出するのに必要な係数（フルタイム換算係数）について現状を適切に反映させていくために調査を行っています。（下記のwebページより引用）

教員の研究活動時間割合は平成14年度の調査以来減少傾向にあり、平成30年度は、平成25年度より2.1ポイント減少して32.9%でした。この結果は、保健分野の教員の社会サービス活動（診療活動等）の増加が影響しています。

（2019年6月26日）

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/06/1418365.htm

7）【文科省】第6期科学技術基本計画に向けた重要課題（中間とりまとめ）

（2019年6月25日）

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu28/houkoku/1418594.htm

8）【経産省】「未来の教室ビジョン」（「未来の教室」とEdTech研究会 第2次提言）

経済産業省では、昨年1月から有識者会議として「未来の教室」とEdTech研究会を立ち上げ、AIや動画、オンライン会話等のデジタル技術を活用した教育技法であるEdTech（エドテック）を活用し、人の創造性や課題解決力を育み、個別最適化された新しい教育をいかに作り上げるかについて、1年半にわたり議論されてきました。

論点を初等中等教育分野に絞り、「学びのSTEAM化」、「学びの自立化・個別最適化」、「新しい学習基盤の整備」の3つの柱で構成される、研究会としての第2次提言、「未来の教室ビジョン」としてまとめられました。

（下記のwebページより一部引用）

（2019年6月25日）

<https://www.meti.go.jp/press/2019/06/20190625002/20190625002.html>

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の初等中等教育など教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

・高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES（大学改革支援・学位授与機構）

・海外学術動向ポータルサイト（日本学術振興会）

[3] その他

◆学外FD・SD研修会への参加申込

参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

研修会の詳細やお申込方法は[こちら](#)※ガルーン

【現在申込み受付中の研修会】

・7/25(木)13:30-17:30 大学改革支援・学位授与機構「令和元年度大学質保証フォーラム 変革期における大学質保証」@一橋講堂（千代田区）

付録

—東洋大学高等教育推進センターニュースレター Vol.2 アーカイブ

(7/11学内申込〆切)

・ 7/26(金)9:30-12:00 大学改革支援・学位授与機構「公開研究会」@学術総合センター (7/11学内申込〆切)

・ 8/9(金)10:00-16:50 「～教育の質的転換を目指すICT利用～2019年度ICT利用による教育改善研究発表会」@東京理科大学 森戸記念館 (新宿区神楽坂) (7/10学内申込〆切)

・ 8/22(木)-23(金)「第9回大学コンソーシアム八王子 FD・SDフォーラム 2040年の高等教育をデザインするー生涯学び続ける学修者を育成するためにー」@八王子市学園都市センター (7/15学内申込〆切)

・ 8/26(月)-28(水)「国際教育夏季研究大会2019」@南山大学 (名古屋市) (7/21学内申込〆切)

・ 「インタラクティブ・ティーチング」アカデミー2019 (全5回) (先着順)

◆English Support Service (ESS)

[詳細・ご予約](#)※ガルーン

◆高等教育関連図書のご案内

高等教育推進センターでは、ブックログという読書記録のためのウェブサービスを利用して、センターが保管している高等教育に関する図書をご紹介します。「センター蔵書あり」の図書については、貸出も可能ですので、詳しくは、下記の「貸出申込みフォーム」からご確認ください。(高等教育推進支援室)

[ブックログの本棚](#)

[貸出申込みフォーム](#)

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

本ニュースレターにFD・SDに係るコラムやイベント情報等の投稿を随時募集しております。

下記フォームにしたがって、ふるってご投稿ください。

メール、電話でのご相談も承っております。

[投稿申請フォーム](#)

字数：800～1200字 (目安)

コラムの例

○教員のみなさま

- ・「わたしが実践する授業の工夫」をテーマにしたコラム
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb siteの紹介、etc.

○職員のみなさま

- ・担当業務の紹介コラム
- ・担当学部・研究科、部署のFD・SD研修会の開催告知
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb site (特にSD関連) の紹介、etc.

【4】あとがき

先月のご縁があり様々な研修会・セミナーに参加する機会がありました。他大学の教員、職員とFD (SD) について、お話しすることができたのは、大きな刺激になると同時に、抱えている問題のヒントを得る機会にもなりました。

先生方と肩肘の張らない場で議論をしたことに、とても印象に残っているものが1つあります。

「教員は研究と教育、どちらに傾注すべきなのか」

意見が分かれるテーマかもしれません。研究重視、教育重視、いずれも間違っていないと思います。その場での議論では「研究重視」が推されていたと記憶しています。

(あくまで個人的な見解ですが) 研究で得た知識を社会に還元する使命の1つとして、後世への教育があると思います。一方で教育上に必要な準備 (授業準備、論文指導など) で多くの文献を遡ったり、フィールドワークを牽引したりすることで、研究の深化が進むこともあるかと思います。

そう考えると研究と教育は切っても切れない関係のものではないでしょうか。

しかし社会の変遷によっては、今の考え方も変わっていく可能性はあると思います。経済の動向、社会の動向によって、重視される事柄が変遷

していくのであれば、常に柔軟な思考を持って、向き合っていかなければならない問題だと感じます。

この高等教育推進も常に柔軟な思考を持って、進めてまいりたいと思います。

また、このあとがきをお送りする直近には、新任教員FD研修会を開催しました。本学へ着任するまでの背景も専門分野も異なる新任教員のみなさまが、1つのテーマについて自らの経験に基づき、意見交換・発表をすることによって、今後の授業運営のヒントとなっていましたら、主催した者としても嬉しい限りでございます。

研修会・セミナーへの参加は刺激や知識を得ると同時に、自覚の少ない疲労にも包まれることでしょうかから、これからの暑い時期に備えて、体調を整えてまいりましょう。

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

- ◆このメールは本学教職員にお届けしています。
 - ◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。
ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。
 - ◆掲載記事の無断転載を禁じます。
- © 2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター
2019年7月23日 Vol.2, No.7（通算第21号）

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

- 【1】 新任教員FD研修会開催報告～グループディスカッション編～
- 【2】 高等教育政策動向等
- 【3】 その他
 - ◆学外FD・SD研修会への参加申込
 - ◆English Support Service（ESS）
 - ◆高等教育関連図書のご案内
 - ◆本ニュースレターへの投稿を募集しています
- 【4】 あとがき

【1】 2019年度新任教員FD研修会を開催報告
～グループディスカッション編～
（高等教育推進支援室スタッフ）

前回 に引き続き、7月6日に開催した2019年度新任教員FD研修会についてご報告します。今回は、グループディスカッションについてです。

学部・キャンパスを越えた先生方の交流の促進と、先生方の教育活動のご経験や工夫等について意見交換を深めることを目的に、例年、「学生の意欲的・主体的な授業参画を促す授業をおこなうためには？」をテーマにグループディスカッションを実施しています。今年度も2つの目的を達成するために、4部構成で実施しました（表①）。

表① グループディスカッションの構成
※クリックすると拡大表示されます

構成	順番	ワークの単位	内容	所要時間
Iアイスブレイク	①	グループ	・自己紹介	5分
	②	個人	・実際に持っている、または計画している「学生の意欲的・主体的な授業参画を促す」取組を5つ以上付箋に書き出す	10分
	③	グループ	・ペーパーボードを利用して、グループでアイデアを共有する ・重要な観点（キーワード）を選び、具体的に盛り下げる ・重要なキーワードは赤いペンで丸を付ける	20分
	④	グループ	・出てきたアイデアをテーマごとにまとめ、キャッチーで目を惹くタイトルを付ける	10分
II全体共有	⑤	全体	・他のグループのまとめ（ポスター）を見て回る ・良いと思ったアイデアに丸シールを貼る（貼る枚数は無制限）	15分
	⑥	グループ	・自分のチームのポスターで最も丸シールが貼られたテーマを確認し、1分間のプレゼンテーションに備える	5分
	⑦	全体	・全体に向けて、1分間のプレゼンテーションをする	10分
IV振り返り	⑧	個人	ワークシートに下記4点について振り返りを記入する ・今日気づいた新しいアイデア ・来週から出来ると思える取組 ・グループで出たものの、発表に至らなかったアイデアを生かす方法 ・その他、印象に残ったこと	10分
	⑨	グループ	・振り返りをグループのメンバーに発表する	10分

1. 運営上の工夫～グループディスカッションの共有をどうするか？～

今年度の開催にあたって、運営上もっとも工夫した点は、グループディスカッションの内容をまとめた各グループのポスターを、良いと思ったアイデアに丸シールを貼りながら自由に見て回る時間を設定した点です（画像①）。



画像①：他のグループのポスターを見て回る先生方

一昨年度と昨年度の新任教員FD研修会の参加者アンケート結果を見返していると、「他のグループの意見をもっと聴きたかった」との声が寄せられていました。この反省から、FD・SD研修部会を6月に開き、各グループのアイデアを全体で共有する方法について議論しました。

グループディスカッションの全体共有に関しては、各グループの代表者が3～5分程度、全体に向けて発表することが多いと思います。しかしながら、グループ数が多いほど、発表を聴く時間が必要です。また、アクティブラーニングの手法のひとつに「ポスターツアー」があります。この方法であれば、発表する役割と発表を聴く役割の両方を全員が担当することができますが、部会で議論した結果、半日の限られた研修会でポスターツアーの趣旨や方法をご説明し、実施するのは難しいだろうという結論に至りました。

そこで採用したのが、他のグループのディスカッションのまとめ（ポスター）を自由に見て回り、良いと思ったアイデアに丸シールを貼るという方法です。そして、グループの代表者が全体に向けて発表する際には、シールの数が多かったアイデアを中心に、1分程度で説明していただくことにしました。

2. ポスター巡回で注目が集まった、学生の意欲的・主体的な授業参画を促す工夫は...？

Fグループの「自尊感情を高める工夫」のカテゴリとAグループの「情意」のカテゴリにシールが多く集まりました。学生の心理的な側面に配慮した工夫が参加された先生方の共感を呼びました。

Fグループでは、「社会に求められる東洋大生」を育てるために、学生の学力差に着目し（画像②中心）、基礎学力を身に付けるために実践的な教育を行なう中で（画像②左上）、教員側から学生の自尊感情を高める工夫をすることで学生が自信を持てるようになり（画像②右上）、そして自信があることでアウトプットできるようになり、仲間たちとともに自分を磨くことができるようになる（画像②右下）のではないかと、という提案がなされました。学生の意欲的・主体的な授業参画を促すための土台として、学生の良いところを褒め、教員と学生の信頼関係を築く重要性を共有することができました。



画像②：Fグループのポスター

※クリックすると拡大表示されます

Aグループも学生の自尊心を高めるために、学生の情意面に配慮した工夫を提案されました（画像③左下）。Fグループの「褒める」という観点に加えて、Aグループからは学生の良いところを褒める前に、学生を「びびらせる」ことを実践しているという事例が紹介されました。

ここでの「びびらせる」というのは、初回の授業で今後の授業に係る課題を学生に出すことで、学生たちの「わたしってこんなに知らないんだ」「意外とこんなこと分かっていないんだ」と学生の心を揺さぶり、知らないことに気づかせることです。そして、学生を「びびらせた」あとは、学生の自尊心を守るために、その後の授業で、学生に「いいですね」「いい所に気がきましたね」などと声をかけてフォローしているとのこと。「びびらせる」と「褒める」のバランスをとるコツをご説明いただきました。

[illegible]

※クリックすると拡大表示されます

3. おわりにかえて

限られた時間ではありましたが、参加された先生から「グループディスカッションが盛り上がり、その背景に、先生方のご経験・知恵・蓄積を共有できたという充実があった」という声が寄せられ、主催した高等教育推進センターとしてとても嬉しく思います。

今年度本学に着任された先生方におかれましては、土曜日のお忙しい中ご参加いただきありがとうございました。

高等教育推進センターでは、引き続き本学のFD・SD推進に努めて参ります。

【2】高等教育政策動向等

1) 【文科省】「我が国の経済社会を牽引する高度経営人材養成の在り方について（報告）」の取りまとめについて

「経営系大学院機能強化検討協力者会議」の検討結果が取りまとめられました。
(2019/7/19)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/085/gaiyou/1419246.htm

2) 【経産省・産官学連携】「大学ファクトブック2019」及び「「組織」対「組織」の本格的産学連携 構築プロセス実例集」を取りまとめている

経済産業省、一般社団法人日本経済団体連合会及び文部科学省が、「大学ファクトブック2019」を取りまとめました。

(以下webページより引用)「大学ファクトブック」は、2016年に策定した「産学官連携による共同研究強化のためのガイドライン」に基づく取組の状況や産業界との連携実績などのデータを「見える化」することで、ガイドラインの目指す「組織」対「組織」の本格的な産学連携の拡大を目指すものです。

(2019/7/19)
<https://www.meti.go.jp/press/2019/07/20190719007/20190719007.html>

3) 【文科省】第6期科学技術基本計画に向けた提言について

(2019/7/18)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/qijiyutu/qijiyutu26/houkoku/1418767.htm

4) 【リクルート進学総研】「進学ブランド力調査2019」発表

本学の順位

- 「志望したい大学」ランキング（関東エリア）
 - 【全体】7位（昨年10位）
 - 【男子】9位（昨年10位）
 - 【女子】7位（昨年9位）
 - 【文系】6位（昨年10位）
- 「知っている大学」ランキング（関東エリア）
 - 【全体】13位（昨年14位）

(2019/7/17)

<http://souken.shingakunet.com/research/2012/07/post-66a6.html>

5) 【文科省】平成30年度文部科学白書の公表について

文部科学省は、教育、科学技術・学術、スポーツ、文化芸術にわたる文部科学省全体の施策を広く国民に紹介することを目的とし、文部科学白書を毎年刊行しています。

「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」が特集されています。

(2019/7/16)

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/07/1418930.htm

6) 【文科省】平成30年度科学技術調査資料作成委託事業「諸外国の研究公正の推進に関する調査・分析業務」の取りまとめについて

目次

序章 現代世界における研究公正の動向

第1章 本調査の背景・目的

第2章 本調査の実施体制および実施プロセス

第3章 カントリーレポート（米、英、仏、独、豪、韓、中）

第4章 研究費の返還に関する諸外国の状況

第5章 我が国の研究公正/不正対応の質向上に向けた議論

(2019/7/16)

http://www.mext.go.jp/a_menu/jinzai/fusei/1418732.htm

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の初等中等教育など教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

・高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES（大学改革支援・学位授与機構）

・海外学術動向ポータルサイト（日本学術振興会）

【3】 その他

◆学外FD・SD研修会への参加申込

参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

研修会の詳細やお申込方法は[こちら](#)※ガルーン

【現在申込み受付中の研修会】

・「インタラクティブ・ティーチング」アカデミー2019（全5回）（先着順）

◆English Support Service (ESS)

[詳細・ご予約](#)※ガルーン

◆高等教育関連図書のご案内

高等教育推進センターでは、ブックログという読書記録のためのウェブサービスを利用して、センターが保管している高等教育に関する図書をご紹介しています。「センター蔵書あり」の図書については、貸出も可能ですので、詳しくは、下記の「貸出申込みフォーム」からご確認ください。（高等教育推進支援室）

[ブックログの本棚](#)

[貸出申込みフォーム](#)

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

本ニュースレターにFD・SDに係るコラムやイベント情報等の投稿を随時募集しております。

下記フォームにしたがって、ふるってご投稿ください。

メール、電話でのご相談も承っております。

[投稿申請フォーム](#)

字数：800～1200字（目安）

コラムの例

○教員のみなさま

・「わたしが実践する授業の工夫」をテーマにしたコラム

[付録](#)

—東洋大学高等教育推進センターニュースレター Vol.2 アーカイブ

- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb siteの紹介、etc.

○職員のみなさま

- ・担当業務の紹介コラム
- ・担当学部・研究科、部署のFD・SD研修会の開催告知
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb site（特にSD関連）の紹介、etc.

【4】あとがき

先日、文部科学省職員も登壇する研修会に参加しました。

その中で、盛んにあげられていた言葉がEBPMです。

H30年度内閣府取組方針*****

EBPM (Evidence Based Policy Making)

政策の企画をその場限りのエピソードに頼るのではなく、

政策目的を明確化したうえで合理的根拠（エビデンス）に基づくものとする

話の流れとしては、これからは大学の評価や運営もエビデンスベースを求められるだろう、

しかし多様性の垣根のような組織である大学において、

公平なエビデンスを定義するのは中々困難だという内容でした。

確かに、エビデンスに基づいて政策が決定されるならば、

公平でないエビデンスに基づいて不利益を被る側はいい気持ちがありません。

エビデンスは過去から産み出すものなので、「今」を決めるのにベストとはいえない面があります。

また、登壇者の医師から医療ではエビデンスベースでも事故は起こること、

仮説ベースの行動が医療業界でイノベーションを生み出すことがままあることなど、

エビデンスが万能な起点となるわけでもないという意見があり、印象的でした。

<リンク>

[内閣府ホームページ「内閣府におけるEBPMへの取組」](#)

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

◆このメールは本学教職員にお届けしています。

◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。

ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。

◆掲載記事の無断転載を禁じます。

© 2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター 2019年8月20日 Vol.2, No.8（通算第22号）

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

- 【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫
第8回 大人数授業におけるrespon自由記入アンケート機能の活用（箕曲 在弘）
- 【2】高等教育政策動向等
- 【3】その他
 - ◆学外FD・SD研修会への参加申込
 - ◆English Support Service（ESS）
 - ◆高等教育関連図書のご案内
 - ◆本ニュースレターへの投稿を募集しています
- 【4】あとがき

【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫 第8回 大人数授業におけるrespon自由記入アンケート機能の活用 箕曲 在弘（社会学部 社会文化システム学科）

はじめに

2018年度から学科専門科目のひとつである「文化人類学」を、定年退職された先生から引き継ぐ形で、わたしが担当することになった。同科目は、学部共通科目にも指定されているので、社会学部の全学生が履修可能である。

自分の専門分野について教えられるよい機会だと意気込んでいたところ、同年春学期の登録者数は約300人、同秋学期は400人、そして今年度春学期にはついに500人になってしまった。

多くの学生が「文化人類学」という耳慣れない名称の科目に関心を持ってきているようで、たいへんうれしい。だが、これだけの人数の履修生を飽きさせずに、毎回90分の授業をこなすことは、極めて難しい。この場でその試行錯誤の過程のすべてをお伝えすることはできないが、なかでもわたしが重視しているresponの自由記入アンケートの利用のみ紹介したい。

responの自由記入アンケート機能

毎回、授業の最後5～10分を使い、学生たちにその日の講義の内容を振り返って、考えたことをresponに自由に書き込んでもらうようにしている。この際、「自分の経験や他の授業、あるいは読んだり、聞いたりしたこと、その日の講義の内容を結びつけて書くのが望ましい」と述べ、評価するコメントの基準を明示している。ここには授業において習った概念を、具体的な事例に適用できているかどうかを確認する意図がある。

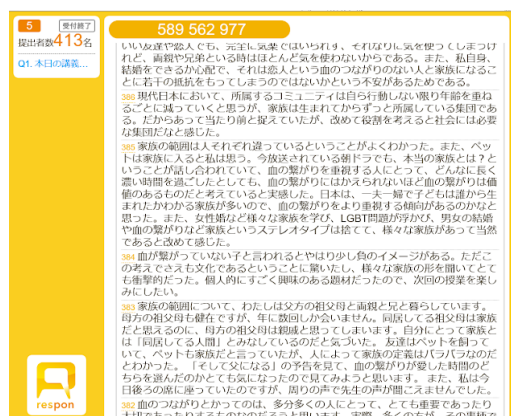
そのうえで、翌週の授業において、わたしが選んだコメントを20～30件程度、プリントに印刷して配布している。たんにresponの画面を見せるだけでなく、プリントとして配布しているのは、そのプリント自体が教材となり、さらなる発展的な学びを可能にすると考えからである。

私にとって最初は意外であったが、学生たちは紙の上に鉛筆で文字を書くよりも、ポチポチと入力するほうがたくさん書きこんでくれるのだ。

時間があるときには、学生のコメントに、わたしがさらにコメントを加えて応答するという事もしている。一方で、授業では、冒頭の5分程度を使って、学生のコメントの一部に触れ、前回の講義において説明が不十分だった点を補ったり、質問に答えたり、興味深いコメントを紹介したりしている。

500人程度（毎回の出席者数は400人強）のコメントを毎週チェックするのは、相当つらいものがある。これが原因かどうかは断言できないが、学期途中で頸と肩に激痛が走り、医者に行ったこともあった。だが、学生のコメントを通して、「この部分は学生に伝わっていないな」と

反省したり、「この学生の発想は鋭いな」と感心したり、こちらにもさまざまな学びがある。このために、できる限りの時間をつかってコメントに目を通して。



さいごに

この振り返りコメントの紹介は、学生から好評である。授業評価アンケートにおいても「（コメントを読まれた）人は今度も授業ちゃんと受けてコメント書こうと思うだろうし、選ばれなかった人も次選ばれるように頑張ろうと思うのでモチベーションが上がる」といった回答があった。苦勞も多いが、この方法は学生の学びを動機づけることに役立っている。

【2】高等教育政策動向等

1) 【文科省】平成30年度文部科学白書 公開

目次

第1部 特集

特集1 2040年に向けた高等教育のグランドデザイン

特集2 激甚化する災害への対応強化

第2部 文教・科学技術施策の動向と展開

第1章 教育再生の着実な実現

第2章 東日本大震災からの復興・創生の進展

第3章 生涯学習社会の実現

第4章 初等中等教育の充実

第5章 高等教育の充実

第6章 私立学校の振興

第7章 科学技術・学術政策の総合的推進

第8章 スポーツ立国の実現

第9章 文化芸術立国の実現

第10章 国際交流・協力の充実

第11章 ICTの活用の推進

第12章 安全・安心で質の高い学校施設の整備

第13章 防災・減災対策の充実

第14章 行政改革・政策評価等の推進"

(2019/8/15)

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201901/1420047.htm

2) 【科学技術・学術政策研究所】「科学技術指標2019」・「科学研究のベンチマーキング2019」公表

科学技術指標は、科学技術活動を客観的・定量的データに基づき体系的に把握するための基礎資料であり、約180の指標で日本及び主要国の状況を表しています。

科学研究のベンチマーキングは、日本及び主要国の科学技術活動を、論文という指標から把握するための基礎資料です。（webページより引用）

(2019/8/9)

<https://www.nistep.go.jp/archives/41356>

3) 【大学改革支援・学位授与機構】日本公式のNICとして「高等教育資格承認情報センター」を9月1日に開設

ユネスコの国際的な規約に基づき、日本の高等教育資格の国際通用性の確保や、円滑な資格の承認への支援を目的とする「高等教育資格承認情報センター」が開設されます。（webページより引用）

（2019/8/9）

<https://www.niad.ac.jp/notice/news2019/international2019/nicjp.html>

4）【文科省】令和元年度学校基本調査速報の公表について

大学進学率（53.7%）が過去最高を更新しました。数値は速報値であり、12月(予定)の報告書刊行後に更新されます。

（2019/8/8）

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/08/1420008.htm

5）【ランキング】QS Best Student Cities Ranking

東京が世界第2位にランクイン

（2019/7/31）

<https://www.topuniversities.com/city-rankings/2019>

6）【文科省】『大学における海外留学に関する危機管理ガイドライン』フォローアップ調査

調査の目的：平成29年3月31日付文科高第2168号で通知した「大学における海外留学に関する危機管理ガイドライン」について、大学、高等専門学校及び専修学校（専門課程）における実施状況を確認し、各学校における危機管理体制について確認するとともに、危機管理ガイドラインの改善点等や課題を把握し、今後の改善等に活用できるようにする。（webページより引用）

（2019/7/30）

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1419759.htm

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の初等中等教育など教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyoko.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

- ・高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES（大学改革支援・学位授与機構）
- ・海外学術動向ポータルサイト（日本学術振興会）

【3】 その他

◆学外FD・SD研修会への参加申込

参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

研修会の詳細やお申込方法は[こちら](#)※ガルーン※URLを更新しました

◆English Support Service (ESS)

[詳細・ご予約](#)※ガルーン

◆高等教育関連図書のご案内

高等教育推進センターでは、ブックログという読書記録のためのウェブサービスを利用して、センターが保管している高等教育に関する図書をご紹介しています。「センター蔵書あり」の図書については、貸出も可能ですので、詳しくは、下記の「貸出申込みフォーム」からご確認ください。（高等教育推進支援室）

[ブックログの本棚](#)

[貸出申込フォーム](#)

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

本ニュースレターにFD・SDに係るコラムやイベント情報等の投稿を随時募集しております。

下記フォームにしたがって、ふるってご投稿ください。

メール、電話でのご相談も承っております。

[投稿申請フォーム](#)

字数：800～1200字（目安）

コラムの例

○教員のみなさま

- ・「わたしが実践する授業の工夫」をテーマにしたコラム
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb siteの紹介、etc.

○職員のみなさま

- ・担当業務の紹介コラム
- ・担当学部・研究科、部署のFD・SD研修会の開催告知
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb site（特にSD関連）の紹介、etc.

【4】あとがき

2019年度の春学期が終了し、夏季休暇期間に入りました。
試験実施や採点等、先生方におかれましては大変お疲れ様でした。

また、8月2日には学長フォーラムそして優秀教育活動賞の表彰式がありました。
ワークショップでは組織間の垣根を越えて繋がりを深め、有意義な意見交換が
できたと感想をいただいております。
数多くの教職員の皆様にご参加いただきまして、盛会に終えることができました。
ご理解とご協力をいただきました皆様に心より御礼申し上げます。

夏季休暇といえば、かつての通年カリキュラム時代においては、
レポート課題が出された記憶がありますが、最近はいかがでしょう。
一部の学生は留学やインターンシップに取り組み、
秋学期には大きく成長して戻ってくる学生も居ることと思います。
自律的な成長機会をいかに創るか、
学生にとってはこの期間をどう活用できるかにかかっているかもしれません。

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

- ◆このメールは本学教職員にお届けしています。
 - ◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。
ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。
 - ◆掲載記事の無断転載を禁じます。
- © 2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター
2019年9月3日 Vol.2, No.9 (通算第23号)

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

- 【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫
第9回 学生同士の相互評価とフィードバック (仲 綾子)
- 【2】高等教育政策動向等
- 【3】その他
 - ◆学外FD・SD研修会への参加申込
 - ◆English Support Service (ESS)
 - ◆高等教育関連図書のご案内
 - ◆本ニュースレターへの投稿を募集しています
- 【4】あとがき

【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫
第9回 学生同士の相互評価とフィードバック
仲 綾子 (ライフデザイン学部人間環境デザイン学科)

(1) はじめに

担当講義「医療福祉建築計画」において、学生同士の相互評価とフィードバックのしくみを学生の提案をもとにつくりあげたので共有したい。この講義の履修者数は70人程度、3年生を中心に、4年生が1割程度受講している。

(2) レスポンの活用と展開

筆者はかねてより、レスポンを出欠確認だけでなく、講義へのフィードバックを得る手段として活用していた。レスポんに記載された内容は学生全員に公開し、すべてのフィードバックを全員で共有していた。これにより、同じ講義を受けていても学生によって記憶に残るポイントが異なること、同じ論点について学生それぞれが異なる考えをもっていること等が明らかとなり、多様なものの見方、考え方があることを学生が実感できる有効なツールであることがわかっていった。

この経験から、レスポンの活用をさらに展開して学びの射程を広げたいと考えた。この講義では前半に筆者がレクチャーを行い、後半にレクチャーに関連する課題を提示し、学生が提案を発表するという方式をとっている。デザイン提案するためにスケッチは欠かせない。しかし、残念ながらレスポンはテキストのみに対応し、画像を共有することができない。そこで、情報システム課に画像共有できるアプリを要望した。すぐには対応できないが、将来的には画像共有できることを期待できそうではあった。しかし今、目の前にいる学生にベターな学びの環境を提供したいという思いが残る。考えた末、今回はアナログな方法で対応することとした。

(3) 学生の相互評価とフィードバック

アナログな方法とは、以下の通りである。

- ①課題説明 (例えば、「外来患者が快適に診察を待つことができる方法 (空間/プロダクト/システム等) を提案する」) : 5分
- ②学生がスケッチと文章で紙に提案を描く : 10分
- ③提案を机の上においておき、全員が教室内を歩き回って他の学生の提案を見て、よいと思うものにシールを貼る : 20分程度
- ④席に戻り、以下の順で発表する。1)発表したい学生が自分の提案を発表する。2)学生が他の学生を推薦して発表する。3)貼られたシールが多い提案を3案程度発表する。4)筆者がいくつかピックアップして発表する。
- ⑤各発表に対して、学生がレスポんでコメントを送る。

この方法は、他の学生の提案をじっくり見て評価する機会となった。同時に、シールを貼られた学生は、肯定的評価を得てモチベーションが高

まっている様子だった。

(4) 相互評価とフィードバックの方法の改善

シールでの評価を3回ほど重ねた後、レスポンスで学生から「シールを貼ってもらうのはうれしいが、評価の理由を知りたいので、付箋に理由を書いて貼るようにしたらどうか」という提案があった。学生が授業の改善方法を提案してくれたのである。さっそく採用したところ、多くの学生から付箋の方法はとても良いとの反応があり、その後、この方法が定着した。

(5) さらに改善に向けて

学生の提案によって相互評価とフィードバックの方法が改善されたとはいえ、さらに改善すべき点が残っている。まず、学生が歩き回って他の学生の提案を見て評価するのは、移動に時間がかかる。また、1つの提案に対して同時に3人程度で見るのが限界というスペースの制約がある。そして、付箋に書かれたコメントを、書かれた本人は見るができるが、学生全員に共有することができない。さらに、紙に描かれた提案と付箋に記されたコメントを記録として残しておくことが難しい。現在は、筆者が保管し、学生が記録として残しておきたい場合は各自写真を撮っていた。望ましくはデジタルデータとして全員で情報共有したい。このような問題点を解決する方策として、画像データをアップロードでき、それに対して他の学生がコメントやいいねをつけることができるアプリを利用することを検討したい。

(6) おわりに

本稿では、学生が相互評価とフィードバックの方法を提案し、それを採用することにより授業改善できたことを示した。学生は受け身の立場でなく、自ら主体的に授業づくりに関わることができる。今後とも学生とともによりよい学びの環境をつくり出していきたい。

【2】高等教育政策動向等

1) 【文科省】令和2年度予算

http://www.mext.go.jp/a_menu/yosan/r01/1420672.htm
(2019/8/29)

2) 【文科省】大学入試英語ポータルサイト 開設

(webページより引用) 2020年4月から、英語資格・検定試験を活用して、大学入試で英語の4技能を評価することを支援する「大学入試英語成績提供システム」の運営がスタートします。

このホームページでは、受験生や高等学校、大学の教職員の方に、「大学入試英語成績提供システム」の目的や内容を理解していただけるよう、関係情報を整理し掲載しています。

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/detail/1420229.htm
(2019/8/27)

3) 【文科省】ASEAN+3 留学生の学修履歴のための成績証明書および補足資料に関するガイドライン

(webページより引用) 文部科学省では、ASEAN+3 教育大臣会合の下におかれている「ASEAN+3 高等教育の流動性・質保証に関するワーキング・グループ」(以下「WG」という。)の主導国として、ASEAN+3 域内の相互理解、平和構築、発展促進のため、質保証を伴った留学等の流動性の向上に取り組んでいます。

2018年11月1日に開催された第4回教育大臣会合にて、下記のとおり、WG作成の「ASEAN+3 留学生の学修履歴のための成績証明書及び補足資料に関するガイドライン」が承認されました。本ガイドラインは、域内の大学に(学位取得を目的としない短期の)留学した学生が派遣中に取得した単位が、派遣元の大学において円滑に認定されるため、参考とすべき指針を提示するものです。

ついては、各大学等において、域内で交換留学等を実施する際には、本ガイドラインを踏まえた成績証明書や補足資料の発行等に御配慮くださるようお願いします。

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shitu/1418711.htm
(2019/8/23)

4) 【文科省】大学院設置基準の一部改正について(諮問)

大学院設置基準改正要綱(案)(webページより引用)

第一 博士後期課程におけるプレFDに関する改正

大学院は、博士後期課程の学生が修了後自らが有する学識を教授するために必要な能力を培うための機会を設けること又は当該機会に関する情報の提供を行うことに努めるものとする。

第二 ファイナンシャル・プランに関する改正

大学院は、授業料、入学料その他の大学院が徴収する費用及び修学に係る経済的負担の軽減を図るための措置に関する情報を整理し、学生及び入学を志望する者に対して明示するよう努めるものとする。

第三 施行期日

この改正は、公布の日から施行するものとする。ただし 第一については、令和二年四月一日から施行するものとする。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1420274.htm
(2019/8/9)

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の初等中等教育など教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

- ・高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES（大学改革支援・学位授与機構）
- ・海外学術動向ポータルサイト（日本学術振興会）

【3】 その他

◆学外FD・SD研修会への参加申込

参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

研修会の詳細やお申込方法は[こちら](#)※ガルーン

◆English Support Service (ESS)

[詳細・ご予約](#)※ガルーン

◆高等教育関連図書のご案内

高等教育推進センターでは、ブックログという読書記録のためのウェブサービスを利用して、センターが保管している高等教育に関する図書をご紹介しています。「センター蔵書あり」の図書については、貸出も可能ですので、詳しくは、下記の「貸出申込みフォーム」からご確認ください。（高等教育推進支援室）

[ブックログの本棚](#)

[貸出申込みフォーム](#)

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

本ニュースレターにFD・SDに係るコラムやイベント情報等の投稿を随時募集しております。

下記フォームにしたがって、ふるってご投稿ください。

メール、電話でのご相談も承っております。

[投稿申請フォーム](#)

字数：800～1200字（目安）

コラムの例

○教員のみなさま

- ・「わたしが実践する授業の工夫」をテーマにしたコラム
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb siteの紹介、etc.

○職員のみなさま

- ・担当業務の紹介コラム
- ・担当学部・研究科、部署のFD・SD研修会の開催告知
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb site（特にSD関連）の紹介、etc.

【4】 あとがき

わたくしごとではありますが8月は他に比べると比較的時間の融通をつけやすいので
学びの月間と位置づけ「学びの貯金」をしておりました。

たくさんの情報に触れる中で、
やはり印象的だったのは18歳人口減少の話題でした。

繰り返し言われていることではありますが、

21年後の2040年には2018年に118万人いた18歳人口が、なんと88万人まで落ち込むことが予想されています。

大学進学率の伸長を加味しても、2017年に63万人いた大学進学者数は51万人にまで落ち込むことが予想されています。割合で言うと2割程度の減少するということになります。

スーパーで2割引っていわれると、そこそこ安くなっていると個人的には感じるのですが、それと同じく「そこそこ減っているな」ということが21年後には起きてしまうんだなと思い焦りを感じました。

私はまだ（何事も無ければ）仕事をしている年齢ですので、いつか訪れてしまうこの事実を心にとめながらいまの業務に向き合っていかなければならないなと感じました。

資料：2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）（中教審第211号）

18歳人口の減少を踏まえた高等教育機関の規模や地域配置

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/12/17/1411360_10_5_1.pdf

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

- ◆このメールは本学教職員にお届けしています。
 - ◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。
ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。
 - ◆掲載記事の無断転載を禁じます。
- © 2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター
2019年9月17日 Vol.2, No.10 (通算第24号)

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

【巻頭言】高等教育推進センターニュースレター創刊1周年に寄せて

【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫

第10回 ICT、ペアワーク、洋楽、カラオケを利用したTOEIC授業の工夫(湯舟 英一)

【2】高等教育政策動向等

【3】その他

◆学外FD・SD研修会への参加申込

◆English Support Service(ESS)

◆高等教育関連図書のご案内

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

【4】あとがき

【巻頭言】高等教育推進センターニュースレター創刊1周年に寄せて

角谷 昌則(高等教育研究部会 部会長)

高等教育推進センターよりこの『ニュースレター』を配信するようになって早1年が経ちました。まだまだ開発中の誌面ですが、お読みいただいている教職員の皆様に御礼申し上げます。

ご承知のように高等教育が置かれた状況におきましても、大学入試制度改革に見られるようにさまざまな変化が急速に進行中です。私たちの日々の教育活動でも、新たな変化への対応や工夫などが要請されております。誌面にはこれまで多くの先生方にご登場いただき、ご自身の思考と実践をご披露していただきました。ご協力いただいた先生方にも、この誌面をお借りして御礼申し上げます。

もっとも、大学での教学は規模の大きさや専門性の多様さなどもありますので、そうした一騎当千の先生方の名人芸だけで支えていけるものではありません。いわば全体としての底上げが必要なわけですが、活発なFD/SD活動を中心に本学の教職員が一丸となって教学の質的向上に取り組み、そこに当ニュースレターも関わることができたら、高等教育推進委員会高等教育研究部会及び発行スタッフ一同そろって願っている次第でございます。

今号より2年目に入りますが、今後ともご支援ご協力のほどをどうぞよろしくお願い申し上げます。

【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫

第10回 ICT、ペアワーク、洋楽、カラオケを利用したTOEIC授業の工夫

湯舟 英一(総合情報学部総合情報学科)

はじめに

総合情報学部では、1年次にTOEICの入門的な授業、2年次にTOEICリスニング授業、2年～4年次に上級者と初級者に対応する選択必須授業を4つ開講している。このうち私が担当する2年次のTOEICリスニング授業では、英語聞き取りのためのボトムアップ音声理解を促すための自著テキストとそのe-learning教材を使用している。ボトムアップとは、流暢なフレーズの音声情報を頼りに理解を行う作業である。例えば、lやrなどの個々音や単語単位の聞き分けではなく、They'reゼ、You'reヨ等の短縮形、in an hourイナナー等の音連結、get together ゲットウゲザ等の破裂しない破裂音、let you know レッチュノー等の融合同化など、様々なネイティブライクなチャンク発音に慣れ、それらを意識上の思考なしのダイレクトに知覚し意味に直結させる練習である。

web教材の活用とペアワークの実施

教科書はweb教材が用意されており、毎回上記のような音声変化ごとに編集されたユニットの練習問題をPCやスマートフォンで聞いて、問題となる音声変化に対応する空所を埋め、解答を確認後、各自で音声だけを聞いてそれをリピートする練習、それを和訳する個人練習を行う。10分程度練習した後、ペアを組み、先ず一人は10のセンテンス(音読時に各2秒程度)を読み、もう一人は教科書を見ないで、その英語を即日本語にするタスク、いわば同時通訳を行う。ここで重要なことは、英文を1つの画像のように聞き取って理解し、それを自分の日本語で言うことである。こうすることで、英単語を一つ一つ聞き取ってそれを訳して理解しようとする初級者の聴解方略を変え、同時に、ネイティブライクな音声変化に慣れることができる。

次に、別のペアを組み、一人が英語を話し、もう一人は相手の英語を即リピートする。ここでのポイントは、機械的なリピートではなく、ジェスチャー付きでアイコンタクトをしながら相手にその英語を「自分の言葉」として言う。こうすることで、機械的なタスクがコミュニケーションになり、学生も楽しい。ペアワークは全員立って行い、10文終わったペアから座れるので、事前練習と合わせて必死に行うことになる。



写真① web教材の画面

英語歌から英語発音を学び、歌い、全学英語カラオケ・チャンピオンシップ出場へ

さて、TOEICは文字通りビジネスライクな言語材料なので、内容は無味乾燥である。そのため、授業中でその日に練習した音声を含む洋楽や映画のセリフを紹介して、親近感や有用性を実感してもらう。授業で紹介する楽曲はビートルズやクイーンなどスタンダードなものから、Ariana GrandeやEd Sheeranなど最新のものまでを含む。配布プリントの左側には英語歌詞、その右側の対応する行には和訳を載せている。英語歌はリアルな英語発音の宝庫であり、音楽や歌手の魅力が英語を聴く意欲を増進する最高の教科書である。英語歌はサビでの繰り返しや韻を踏むため、そこに教えた音声の繰り返し出てくるものを選ぶ。

総合情報学部では、今年で3回目となる全学英語カラオケ・チャンピオンシップを主催している。川越キャンパス7号館のシアターには、最新の業務用カラオケ機が設置され、学生は空き時間に自由に利用できる。1、2年生に対しては、英語必須授業の補完として、市販のe-learning教材システムを導入し、授業評価の10%に充てている。3,000ポイントを達成することが条件であるが、代わりにカラオケで英語歌を1時間×10回練習することで、3,000点に換算している。

本学部に設置されている第一興商のカラオケ機には私が監修する英語カラオケ用カタカナ **Nipponenglish** が振られた洋楽曲が現在700曲以上搭載されており、カナ通りに歌うとネイティブライクな発音で歌うことが可能であり、上記のカラオケ大会もこれらの曲の中から選曲することになっている。



写真② 全学英語カラオケ・チャンピオンシップの様子

さいごに

以上のように、TOEIC授業において流暢な英語発音をICTとペアワークを利用した参加型学習で学び、その発音の特徴を人気の英語歌で体験し、自分でも歌い、最終的に全学英語カラオケ大会への出場、という英語学習の階段を上することで、多くの学生が楽しみながら英語学習を進め、自信と意欲と主体性のあるグローバル人材に育てて欲しいと願っている。

【2】高等教育政策動向等

1)【THE】THE世界大学ランキング2020 発表

THE (Times Higher Education) が世界大学ランキング2020 (World University Rankings 2020) を発表しました。

本学は、1001+にランクインしました。

(2019/9/12)

https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2020/world-ranking#!/page/0/length/25/sort_by/rank/sort_order/asc/cols/stats

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の初等中等教育など教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

・高等教育質保証の海外動向発信サイト [QA UPDATES](#) (大学改革支援・学位授与機構)

・海外学術動向ポータルサイト (日本学術振興会)

【3】その他

◆学外FD・SD研修会への参加申込

参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

研修会の詳細やお申込方法は[こちら](#)

※ガールーン／掲示板／大学教職員向け1／【ご案内】2019年度学外FD・SD研修会について

◆English Support Service (ESS)

詳細・ご予約

※ガールーン／[大学]各種学内サービス／各種支援サービス／English Support Service／紹介掲示

◆高等教育関連図書のご案内

高等教育推進センターでは、ブックログという読書記録のためのウェブサービスを利用して、センターが保管している高等教育に関する図書をご紹介しています。「センター蔵書あり」の図書については、貸出も可能ですので、詳しくは、下記の「貸出申込みフォーム」からご確認ください。(高等教育推進支援室)

[ブックログの本棚](#)

[貸出申込みフォーム](#)

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

本ニュースレターにFD・SDに係るコラムやイベント情報等の投稿を随時募集しております。
下記フォームにしたがって、ふるってご投稿ください。
メール、電話でのご相談も承っております。

投稿申請フォーム

字数：800～1200字（目安）

コラムの例

○教員のみなさま

- ・「わたしが実践する授業の工夫」をテーマにしたコラム
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb siteの紹介、etc.

○職員のみなさま

- ・担当業務の紹介コラム
- ・担当学部・研究科、部署のFD・SD研修会の開催告知
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb site（特にSD関連）の紹介、etc.

【4】あとがき

ニュースレターの発行から1年が経ちました。

スタッフの業務として定着しつつありますが、
このニュースレターは、高等教育推進委員会高等教育研究部会による企画、運営の下で進められております。
スタッフとしても、1年間の皆様のご愛読と企画検討いただいた先生方に、心より感謝申し上げます。

部会の先生方からは「読んでみたくなる記事を」という方針を一貫してお示しいただきましたが、
次なる企画を検討する際もスタッフとして尽力してまいりたいと存じます。

先生方のほか職員の方々も学外FD研修会などに足を運ばれていることと思いますが、
ぜひ、このニュースレターに研修の成果報告等をご投稿いただくなど、
今後のニュースレターの充実に寄与いただければ幸いです。

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

◆このメールは本学教職員にお届けしています。

◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。

ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。

◆掲載記事の無断転載を禁じます。

© 2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター 2019年10月1日 Vol.2, No.11（通算第25号）

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

【巻頭言】高等教育推進センターニュースレター創刊1周年に寄せて

【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫

第11回 学生の学ぶ姿勢を考える（高橋 珠実）

【2】高等教育政策動向等

【3】その他

◆学外FD・SD研修会への参加申込

◆English Support Service（ESS）

◆高等教育関連図書のご案内

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

【4】あとがき

【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫

第11回 学生の学ぶ姿勢を考える

高橋 珠実（食環境科学部 食環境科学科）

私が担当する科目は健康やスポーツ科学に関するものであるため、多くの学生が興味関心を持っている分野だと思います。しかし、高校生までの学びの経験からか、受け身の学生が多く、授業は自分たちが作っていくものだという意識がまったく感じられません。学生とやり取りしながらの展開に持ち込むまで、しばらくの間、一人で一方的に話し続ける授業が続きます。

そんな時に心がけていること、自分が授業を面白がって行っていれば、学生も何か面白さを感じてくれるのではと、私自身が面白いと思える工夫をちりばめながら授業を進めていきます。そして「こんなことに疑問を感じたことはない？」「こんな経験はないですか？」と身近なことを質問していき、やり取りするきっかけを探ります。答える学生がいればその回答に反応し、授業後のレポートの記述も参考にしながら、授業中のやり取りの方法を考えます。もっと学ぶことを面白がってほしいという思いから、授業内容に関わる私の経験談を多く話します。学生は、私自身の失敗談、痛い話、育児話には耳を傾け、うれしい反応をくれます（まっすぐ私を見て、少し微笑んで聞いてくれます）。授業中にまったく反応なしと感じても、レポートに書かれた記述を読んで、「授業中の反応は薄いけど、こんな多くの気づきがあったんだなあ」と感心することもしばしば。そのレポートが次の授業への活力になります。

私自身が面白がれる授業を行うために日々授業のネタを探しています。新聞で授業内容に関わる記事を見つけては切り取り、それが学生に読ませたい記事であれば授業で配り、読ませ、内容と自分の考えをまとめさせ、提出させます。学生にとって新聞を読むということは新鮮なことで、ほとんどの学生がきちんと取り組んでくれます。その後、学生自身でも調べ学習を行ったという報告を聞くことも多く、ある程度の効果を感じています。

手書きのレポートを書かせ、そのレポートを読むことが楽しみなのですが、大人数講義で毎回、レポートを書かせることはできません。3年前に大人数講義を担当するようになって以降、しづしづToyoNet-ACEの機能を使うことになりました。出席確認を行うことはもちろん、あらかじめ授業の内容に関するアンケートや課題を出しておき、授業内で集計結果を見せたり、その結果を授業の内容に盛り込んだりもします。学生にとってこのような方法は自分が授業に参加していることが感じられたり、他の受講生との違いを確認することができ、楽しみだったりするようです。私はやはり手書きのレポートを書かせる方が好きなのですが、このような機能を使って学生の学ぶ姿勢を変えていくことができないものだろうか、大人数講義ではToyoNet-ACEを使い、毎年少しずつ工夫を加えて授業改善を試みています。

積極的に学生自らが面白さを見つけられるよう、学生の受け身の学ぶ姿勢をいかに変えていくか、そのことをテーマに様々な取り組みを行っていきたくと試行錯誤の毎日です。

【2】高等教育政策動向等

【文科省】令和2年度開設予定の大学の学部等の設置届出について（令和元年7月分）

本学の「グローバル・イノベーション学専攻」の設置含む4校について、令和2年度開設予定の設置届出が受理されました。

（2019/9/30）

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ninka/1421387.htm

【文科省】高等教育の修学支援新制度の対象機関（確認大学等） 公表

高等教育の修学支援新制度では、大学等における修学の支援に関する法律に基づき、一定の要件を満たすことの確認を受けた大学・専門学校等（確認大学等）を対象機関とすることとなっています。

本学では本制度の対象機関となるための確認申請を文部科学省へ行っていました。2019年9月20日、正式に対象大学として認められました。

（2019/9/20）

・文科省webページ

>>> http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/hutankeigen/1421393.htm

・本学在校生向け周知

>>> <https://www.toyo.ac.jp/ja-JP/news/academics/student-support/2019092001/>

・本学の申請書

>>> <https://www.toyo.ac.jp/ja-JP/about/data/hutankeigen/>

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の初等中等教育など教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

・高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES（大学改革支援・学位授与機構）

・海外学術動向ポータルサイト（日本学術振興会）

【3】 その他

◆学外FD・SD研修会への参加申込

参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

研修会の詳細やお申込方法は[こちら](#)

※ガルーン／掲示板／大学教職員向け1／【ご案内】2019年度学外FD・SD研修会について

◆English Support Service (ESS)

[詳細・ご予約](#)

※ガルーン／[大学]各種学内サービス／各種支援サービス／English Support Service／紹介掲示

◆高等教育関連図書のご案内

高等教育推進センターでは、ブックログという読書記録のためのウェブサービスを利用して、センターが保管している高等教育に関する図書をご紹介しています。「センター蔵書あり」の図書については、貸出も可能ですので、詳しくは、下記の「貸出申込みフォーム」からご確認ください。（高等教育推進支援室）

[ブックログの本棚](#)

[貸出申込フォーム](#)

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

本ニュースレターにFD・SDに係るコラムやイベント情報等の投稿を随時募集しております。

下記フォームにしたがって、ふるってご投稿ください。

メール、電話でのご相談も承っております。

[投稿申請フォーム](#)

字数：800～1200字（目安）

コラムの例

○教員のみなさま

・「わたしが実践する授業の工夫」をテーマにしたコラム

・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告

・高等教育に関するおすすめの書籍やweb siteの紹介、etc.

○職員の方のみなさま

- ・担当業務の紹介コラム
- ・担当学部・研究科、部署のFD・SD研修会の開催告知
- ・学内外のFD・SD研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍やweb site（特にSD関連）の紹介、etc.

【4】あとがき

また、その話となるかもしれませんが、THE世界大学ランキング2020が発表されました。本学は今年も1001+位となりましたが、ランクインする大学が毎年100大学以上増えていることを考えると、善戦しているとも考えられますが、かろうじてと考えることもできます。

大きな傾向としては、医学系研究の評価が引き続き高く評価されていること、そして日本の大学のプレゼンスが下降していることがわかります。

日本の大学はアメリカに次いで世界で2番目に多い110大学がランクインしましたが、1000位以内に入った大学はわずか43大学(昨年比8大学減)で、67大学は1001位以下という結果となりました。1000位以内に入った大学の数が最も減った国でもあるのです。

文部科学省は政策目標の中で、ランキング100位以内に10大学がランクインすることを掲げていますが、現状を鑑みると難しいように思えてなりません。

THEは研究力と研究成果を中心に大学を評価していますが、もう少し、違う観点での評価があってもよいかなと思っています。

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

- ◆このメールは本学教職員にお届けしています。
- ◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。
ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。
- ◆掲載記事の無断転載を禁じます。

© 2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター
2019年10月15日 Vol.2, No.12 (通算第26号)

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

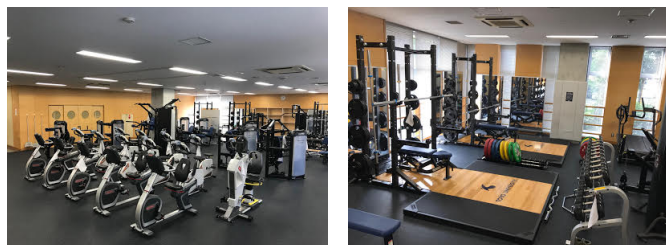
目次

- 【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫
第12回 スポーツ健康科学科目の紹介 (西村 忍)
- 【2】高等教育政策動向等
- 【3】その他
 - ◆学外FD・SD研修会への参加申込
 - ◆English Support Service (ESS)
 - ◆高等教育関連図書のご案内
 - ◆本ニュースレターへの投稿を募集しています
- 【4】あとがき

【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫
第12回 スポーツ健康科学科目の紹介
西村 忍 (経営学部 マーケティング学科)

白山キャンパス所属スポーツ健康科学科目担当教員としての取り組み

白山キャンパスと赤羽台キャンパスの第一部学生が履修するスポーツ健康科学科目（いわゆる体育実技・講義・演習）については、全て総合スポーツセンター（板橋区清水町）で開講しています。非常に充実した施設にて多種多様のスポーツ種目の授業運営が可能となっており、2019年度は2100人を超える学生が来校しています。



写真① | 先月9月に機材を総入れ替えしました
(総合スポーツセンター アリーナ棟内1階トレーニング室)

しかしながら、センターが竣工した2011年度当時は、学生にとっては初めての“移動教室”となったため、前年度の白山キャンパスでの履修者数からは半減し、1200人を超えるのが精一杯の状況でした。2012年度を迎える前に、スポーツ健康科学担当教員間で協議を行い、学生が履修しやすい環境を整える事と選択できる実技科目の種目の多様化を積極的に進めました。具体的には、

- (1) 専任教員の担当種目の見直しを行い、多種多様なスポーツ種目の設置を行う事により選択肢を増やす、
- (2) 専任教員の出校日と研究日の見直しを行い、授業を1時限目から5時限目まで開講することによって履修時間の選択幅を広げる、
- (3) 学生が最も履修を希望する2時限目と3時限目の時間帯にコースを多めに開講し、抽選科目とならないように履修者数を確保する、
- (4) 1科目1曜時限で開講していたスポーツ健康科学実技ⅠA・ⅠB・ⅡA・ⅡB・ⅢA・ⅢBの見直しを行い、ゼミナールのように複数の科目が同じ曜時限に履修できるように準備を進めました。

その結果、2012年度1717名、2013年度2250名、2014年度には2600名を超えるV字回復を遂げることができました。センターでの授業は、“移

動教室"ではありますが、学生にとってスポーツの価値の中核である「楽しさ」「喜び」を享受できる、また運動習慣を身に付けることができる環境が整った場でありたいと思っています。

担当授業での取り組み

2019年度にセンターで開講している実技科目は、81コース（12種目）あります。バスケットボール、バレー、サッカーなどの団体競技種目と水泳、ヨガ、フィットネストレーニングなどの個人競技種目が開講されています。この中で、私は「フィットネストレーニング」を専門として担当しています。チームスポーツ特有のコミュニケーションを取ることが苦手な学生やボールを扱う技術・スキル経験がないと敬遠する学生が数多く履修しています。



写真② | 「フィットネストレーニング」の授業を通じて、学生は健康になるための知識や方法学び、自分に合ったトレーニングメニューを作成することができるようになる

授業内容は、トレーニングを通じて健康な体になるだけでなく、健康になるための知識を育む事に注力しています。特に、女子学生には間違ったダイエット方法、例えばランニングマシンでひたすら歩く、バイクを30分以上漕ぐなど有酸素運動が絶対的に効果的だと信じている学生に対して、筋力トレーニングの重要性と正しい食事・栄養学について話をしています。筋トレをするとムキムキになって嫌だと考えている女子学生ですが、週1回の授業でアスリートのような身体が手に入るのであれば、みんなが東洋“体育大学”生になってしまいます。

新体組成計を活用して、体重だけに注目するのではなく、体脂肪と筋肉をどれだけ持っているのか現状を理解させ、筋肉量をアップさせるトレーニングが必要なのか、それとも脂肪を燃焼させるためのトレーニングが必要なのかの指導を行い、そして各々に必要と思われるトレーニングすべき部位の筋トレメニューの作成を行わせるようにしています。15回の授業で自分に合ったトレーニングメニューを完成させるようなイメージで授業を展開しています。

授業中は、トレーニング室内を巡回しながらトレーニングを行なっている学生に対して、個別にコミュニケーションを取り、メニューの相談に乗るだけでなく、正しくトレーニング器具を使いこなせるように姿勢やフォームにも意識させて傷害予防にも繋がるようにしています。

又、測定した新体組成計の結果を元にレポート課題を課しており、必ず赤ペンでコメントを入れて全員に返却するようにしています。それにより、学生の抱えている疑問や質問に対して一つひとつ丁寧に答えることが可能となり、より深く履修している学生について知ることができることが非常に楽しいとやりがいを感じております。

必修科目ではないスポーツ健康科学科目を履修するためにセンターへ来校する学生達は、本当に運動が好き、体を動かしたい、スポーツを楽しみたいなどモチベーションが高いと強く感じます。たとえ運動することに対して苦手意識があったとしても、大教室での授業と違い、少人数教室にて15回の授業で顔を合わせていると、顔馴染みとなり自然とコミュニケーションを取りながら楽しく汗を流しています。そのような場も提供できる授業がスポーツ健康科学実技の醍醐味でもあると考えております。

【2】高等教育政策動向等

1) 【文科省】各大学における大学入試英語成績提供システムの活用予定状況（令和元年9月30日時点）

(2019/10/7)

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/detail/1420229.htm#eigo1007

2) 【マイナビ】『2019年度新卒採用・就職戦線総括』を発表

<2019年度（2020年卒）新卒採用・就職戦線の主な特徴>（webページより引用）

- ①学生のインターンシップへの参加が一般化。企業側の実施率も半数を超え過去最高に
- ②企業の採用意欲は高水準を維持。学生は効率的に就職活動する傾向にあり、行動量は減少
- ③3月～4月の内々定率が増加。最終的には前年並みの内々定率に

(2019/10/3)

(プレスリリース) https://www.mynavi.jp/news/2019/10/post_21500.html

(pdfダウンロード) <https://saponet.mynavi.jp/release/resource/2019-soukatsu/>

Pick up | 無償化 ①

2019年10月から消費税増税とそれに伴う軽減税率が始まりました。

どの商品が8%なのか10%なのか、どこで食べると8%なのか10%なのか、
どこでキャッシュレス決済すると還元率が2%なのか5%なのか、
結局キャッシュレス決済はどのアプリ（システム）、カードが良いのか……。
「どれが」「どこで」「どの条件で」……、難しく感じます。

ですが、今回の増税によって、全世代型社会保障と称される、
社会保障制度の「どこに」充填されるのでしょうか。

充填される1つに「教育の無償化」があります。

今回の増税と同時に始まった教育の無償化は、幼保教育の無償化です。

➤ <https://www.youhomushouka.go.jp/> （内閣府特設ページ）

半年遅れて2020年4月から始まるのが、高等教育の無償化です。

（本学も9月20日に高等教育の無償化の対象大学として認定されました。）

➤ <http://www.mext.go.jp/kyufu/> （文部科学省特設ページ）

➤ <https://www.toyo.ac.jp/about/data/hutankeigen/> （東洋大学掲載ページ）

では小学校・中学校・高等学校を指す、初等・中等教育の無償化については、どうでしょうか。

小学校の初等教育ですでに無償化が行われているとされています。

小学校の6年間は義務教育であることが、無償化が行われているとされる理由です。

「義務である納税による税金で、義務である教育を行う費用を賄う」＝「授業料は発生しない」
という論理でしょうか。（大雑把な理解でしたらすみません……。）

ですが、私立学校では授業料等を徴収しています。

そのため、私立小学校・中学校に通う児童生徒を対象とした経済的支援制度があります。

➤ http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/shugaku/detail/1385578.htm （文部科学省案内ページ）

※この制度は「実証事業」であり、令和3（2021）年度までの実施期間で行われています。

中学校・高等学校の中等教育はどうでしょうか。

中学校の3年間も義務教育ですので、小学校と同じ論理で無償化が行われているとされてます。

私立学校に関しても、上述で紹介した経済的支援制度があります。

高等学校の無償化は約10年前の2010年から「公立高等学校に係る授業料の不徴収及び

高等学校等就学支援金の支給に関する法律」という法律のもとで実施されています。

この法律では、公立学校について授業料を徴収しないこととするとともに、

公立以外の学校の生徒へは、「高等学校等就学支援金」の支給を受けることができることが目的とされています。

そしてこの法律は2014年から「高等学校等就学支援金の支給に関する法律」に改正され、

学校の公立・私立を問わず「高等学校等就学支援金」を支給する制度となりました。

➤ http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/mushouka/1342674.htm （文部科学省案内ページ）

実は2020年4月から、この「高等学校等就学支援金」における私立学校の支給額が増加することとなっています。

➤ http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/mushouka/1418201.htm （文部科学省案内ページ）

その他、上記以外にも各自治体が独自に行っている制度もあります。

➤ http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/mushouka/detail/1353842.htm （文部科学省案内ページ）

なかでも大阪府の取り組みは先進的と言えます。私立高等学校の無償化を実施しながら、

大阪府立大学と大阪市立大学で独自に無償化拡大を目指すを発表されたことは、大きな意義があると思います。

➤ <http://www.pref.osaka.lg.jp/shigaku/shigakumushouka/> （大阪府案内ページ：私立高等学校授業料支援制度）

➤ <https://mainichi.jp/articles/20190918/k00/00m/040/010000c> （毎日新聞社記事ページ：大阪府立大学と大阪市立大学の無償化について、2019年10月9日閲覧）

このように各教育段階に分けて調査してみると、初等教育・中等教育（特に前期課程と呼ばれる中学校等）に対する支援制度が手薄であることが見えてきます。

「実証事業」が終わった後はどうなるのでしょうか。新たな支援制度が生まれるのでしょうか。

またこの度始まる高等教育の無償化において、大学院生は対象となっておりません。

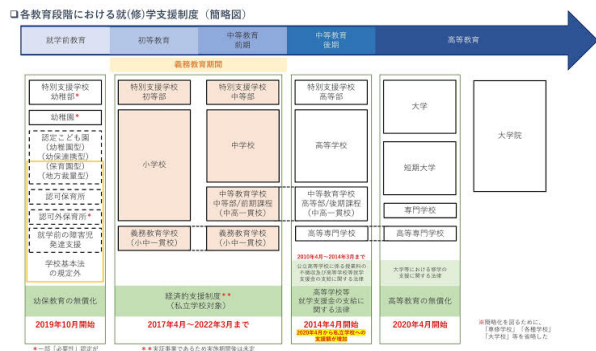
日本の研究力低下が声高に言われている中、将来その研究活動を支えていく

金の卵とも言える大学院生への修学支援が無いことは、大学院進学への阻害要因の1つとされてしまわないでしょうか。

今後の動向が気になります。

さて「教育の無償化」である就(修)学支援制度について、紹介いたしましたが、いかがでしたでしょうか。それぞれの教育段階で、それぞれの支援制度があり、軽減税率のような複雑さを感じます。

最後に可能な限り、わかりやすく図式化してみました。
(一部誤った解釈などがありましたら、ご容赦ください。)



※クリックすると、拡大表示されます

私たちが納めている税金が、私たちの働く教育業界に、多数の制度によって還元されていることを、改めて考えなければならないのかもしれません。

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

- ・高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES (大学改革支援・学位授与機構)
- ・海外学術動向ポータルサイト (日本学術振興会)

【3】その他

◆学外FD・SD研修会への参加申込

参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

研修会の詳細やお申込方法は[こちら](#)

※ガルーン／掲示板／大学教職員向け1／【ご案内】2019年度学外FD・SD研修会について

◆English Support Service (ESS)

詳細・ご予約

※ガルーン／[大学]各種学内サービス／各種支援サービス／English Support Service／紹介掲示

◆高等教育関連図書のご案内

高等教育推進センターでは、ブックログという読書記録のためのウェブサービスを利用して、センターが保管している高等教育に関する図書をご紹介しています。「センター蔵書あり」の図書については、貸出も可能ですので、詳しくは、下記の「貸出申込みフォーム」からご確認ください。(高等教育推進支援室)

[ブックログの本棚](#)

[貸出申込フォーム](#)

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

本ニュースレターにFD・SDに係るコラムやイベント情報等の投稿を随時募集しております。

下記フォームにしたがって、ふるってご投稿ください。

メール、電話でのご相談も承っております。

[投稿申請フォーム](#)

字数：800～1200字（目安）

【4】あとがき

高等教育を推進する立場にあたって、まずは自己研鑽を図るために、JPFF（全国私立大学FD連携フォーラム）の実践的FDプログラムのオンデマンド講義(VOD)を視聴しています。

http://www.fd-forum.org/fd-forum/html/practice_course.html

残念ながら、すでにID・パスワードの発行申込期間が過ぎてしまっているため、また次の機会に具体的な紹介をしたいと思います。今回は別機関で無料かつ申込不要の仕組みをご紹介します。

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター
専門性開発プログラム(Professional Development Program)
<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/PDPonline/>

- (1) 高等教育リテラシー形成
- (2) 専門教育指導力形成
- (3) 学生支援力形成
- (4) マネジメント力形成

以上のように動画内容がグルーピングされており、様々な内容が15分～20分の動画でチャプターごと構成されています。
(上記のほかに、大学教育イノベーション日本【HEIJ】のフォーラム動画もあります。)

全国から多彩な教授陣が登場されているので、無料のプログラムとしては、文句なしのプログラムとなっております。

自己研鑽のため、授業の進め方のヒントを得るためなど、活用方法は大きいにあるかと思います。

もしこのあとがきを見て、興味を持たれましたら、アクセスしてみてください。
(...関係者の回し者のようなあとがきになってしまいましたね。)

発行元
東洋大学 高等教育推進センター
〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20
E-mail: mlfdjimu@toyo.jp
HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>
ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

- ◆このメールは本学教職員にお届けしています。
 - ◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。
ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。
 - ◆掲載記事の無断転載を禁じます。
- © 2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター 2019年10月29日 Vol.2, No.13（通算第27号）

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

- 【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫
第13回 英語で情報を発信する姿勢の向上を目指して（伊藤 健彦）
- 【2】高等教育政策動向等
- 【3】その他
 - ◆学外FD・SD研修会への参加申込
 - ◆English Support Service（ESS）
 - ◆高等教育関連図書のご案内
 - ◆本ニュースレターへの投稿を募集しています
- 【4】あとがき

【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫 第13回 英語で情報を発信する姿勢の向上を目指して 伊藤 健彦（情報連携学部 情報連携学科）

私たち英語チームのリスニングとスピーキングの授業は、ディスカッションやプレゼンテーションなど、学生が英語で情報を発信する活動が主体となっています。

教室には黒板がなく、プロジェクターで映し出された内容について、学生は持参したPCでメモを取ります。学生はGoogle Classroom上で課題を提出するため、教員はオンライン上で学生のアウトプットを確認し、フィードバックを常時行っています。学生は大学にいる時以外でも教員に質問ができるので、彼らが困ったときにすぐに対応できる点で便利です。

教室には丸い形の机が配置されているため、机と椅子を動かすことなく、学生はスムーズに議論に入れます。この点を活用し、議論するメンバーを活発に入れ替えて新鮮さを保つようにしています。なるべく多くのメンバーに情報を発信する練習をすると、学生は英語を使うことに慣れていきます。



写真 | 教室には、黒板、固定の机や椅子がない

主な授業内容は、「アプリケーションの提案」です。身近な問題を英語で議論し、その問題を解決するアプリを考えてもらいます。具体的なコンテンツを考えることで、日々学んでいるプログラミング知識をどう活かすかを学生は意識するようになります。今年度は東京オリンピックが迫っている時期ということもあり、オリンピックに有益なアプリを考えることが授業内での重要な取り組みとなっています。最終的に、自分たちで考えたアプリについて他の学生たちの前でプレゼンテーションすることで、大人数を前にした情報発信の姿勢を身につけます。

プログラミングなど、現在学んでいる知識がどのように社会で活用できるかを議論して発表する活動を通して、英語で情報を発信する姿勢を身につけ、社会で活躍するための基盤を作ってほしいと願っています。

【2】高等教育政策動向等

1) 【文科省】知識集約型の価値創造に向けた科学技術イノベーション政策の展開 — Society 5.0の実現で世界をリードする国へ — 中間取りまとめ

取りまとめ：科学技術・学術審議会 総合政策特別委員会

目次：

第1章 基本認識

第2章 価値創造の源泉となる基礎研究・学術研究の卓越性と多様性の強化

第3章 知識集約型の価値創造に向けた大学・国立研究開発法人の役割の拡張

第4章 イノベーションの担い手の育成

第5章 デジタル革命の進展に対応した新たな研究システムの構築

第6章 政策イノベーションの実現

第7章 今後更に検討すべき事項

(2019/10/24)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu22/houkoku/1422095.htm

2) 【文科省】産学官連携の更なる発展に向けた今後の改善について（とりまとめ）

取りまとめ：科学技術・学術審議会 産業連携・地域支援部会 第10期産学官連携推進委員会

目次：

1. 背景・目的

2. アンケート及びヒアリング

3. 産学官連携の主な課題

4. 大学等の出資範囲の拡大

5. まとめ

(2019/9/25)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu16/011/houkoku/1421792.htm

3) 【文科省】教学マネジメント特別委員会（第9回）

議題

1. 教学マネジメントに係る指針及び学修成果の可視化等について

2. その他

(2019/9/24)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/047/giji_list/index.htm

4) 【文科省】人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト（中間まとめ）

取りまとめ：学術分科会 人文学・社会科学特別委員会

目次：

I. 検討の背景

II. 目的

III. 大きなテーマ

IV. 実施体制

V. 継続的な検討の必要性

(2019/9/19)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/048/houkoku/1421958.htm

5) 【文科省】今後の産学官連携・地域科学技術政策に関する方向性について

取りまとめ：科学技術・学術審議会 産業連携・地域支援部会

目次：

1. 現状認識（第5期科学技術基本計画策定時からの進展・変化）

2. 次期科学技術基本計画に向けて特に議論が必要な部分

(2019/9/19)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu16/houkoku/1422212.htm

6) 【文科省】大学分科会（第150回）

議題

1. 法科大学院教育の充実等について
2. 大学設置基準の一部改正について
3. 高等専門学校の国際展開等について
4. 地域における高等教育機関と大学間の連携の在り方について
5. 教学マネジメント特別委員会の審議経過報告について
6. その他

(2019/9/18)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/1421411.htm

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

- ・高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES（大学改革支援・学位授与機構）
- ・海外学術動向ポータルサイト（日本学術振興会）

【3】 その他

◆学外FD・SD研修会への参加申込

参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

研修会の詳細やお申込方法は[こちら](#)

※ガルーン／掲示板／大学教職員向け1／【ご案内】2019年度学外FD・SD研修会について

◆English Support Service (ESS)

[詳細・ご予約](#)

※ガルーン／[大学]各種学内サービス／各種支援サービス／English Support Service／紹介掲示

◆高等教育関連図書のご案内

高等教育推進センターでは、ブックログという読書記録のためのウェブサービスを利用して、センターが保管している高等教育に関する図書をご紹介しています。「センター蔵書あり」の図書については、貸出も可能ですので、詳しくは、下記の「貸出申込みフォーム」からご確認ください。（高等教育推進支援室）

[ブックログの本棚](#)

[貸出申込フォーム](#)

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

本ニュースレターにFD・SDに係るコラムやイベント情報等の投稿を随時募集しております。

下記フォームにしたがって、ふるってご投稿ください。

メール、電話でのご相談も承っております。

[投稿申請フォーム](#)

字数：800～1200字（目安）

【4】 あとがき

いきなりですが、プロトコールという言葉をご存じですか。

色々な意味がありますが、今回お話しするプロトコールは外国からの来賓を接遇する際の決まりごとについてです。

旗の掲げる際、どのようにどの順番で掲げるか、どちらを左にするか、交差するならどちらが前か、席次はどのように決めるかなど、些細なことですが、そういうマナーがあることは知っておくと良いと思います。

例えば。。。。

- ・国の大小は一切考慮しない。アルファベット順などの規則で掲揚、席次を決定する。
- ・相手の国旗を掲げるときは必ず日本(ホスト)の旗も掲げ、同じ大きさの旗を掲げる。団体の旗は原則飾らない。
- ・汚れた旗は飾らない。日が落ちる前に旗を降ろす。

プロトコール自体は明確なルールではありません。

相手への敬意の表明と、無用な誤解を生まないようにするためのマナーです。
また、折角のおもてなしのための対応なので、旗を逆さに掲揚するといった間違いは避けたいものです。
(イギリスのユニオンジャックなど、一見上下がわかりにくい国旗でも上下があったりします)

先日大統領にご来学いただいたブルガリア共和国の国旗も、縦に掲揚する場合、
表裏を間違えると戦争を思い起こさせるとのことでした。
(ブルガリア共和国の広報ページへ→[Twitter](#), [大統領府ホームページ](#))

SGUだけでなく、ワールドカップ、オリンピックと世界がどんどん近くなってきています。
ちょっとフォーマルな世界のマナー覗いてみませんか。

国際儀礼（プロトコール）/外務省
https://www.mofa.go.jp/mofaj/ms/po/page25_001892.html

お詫び
前回のVol.2, No.14において、「幼保教育の無償化」とありましたが、正しくは「幼児教育・保育の無償化」でした。お詫びして訂正いたします。

発行元
東洋大学 高等教育推進センター
〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20
E-mail: mlfdjimu@toyo.jp
HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>
ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

- ◆このメールは本学教職員にお届けしています。
 - ◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。
ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。
 - ◆掲載記事の無断転載を禁じます。
- © 2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター 2019年11月12日 Vol.2, No.14（通算第28号）

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

- 【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫
第14回 自分が受けたい講義を目指して（村野 昭人）
- 【2】高等教育政策動向等
- 【3】LINK
- 【4】あとがき

【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫 第14回 自分が受けたい講義を目指して 村野 昭人（理工学部 都市環境デザイン学科）

私が座学の講義において行っている工夫として、三つ紹介します。いずれも目新しい内容ではありません。自分が学生時代に「このやり方がいいな。」と思ったものを、自分なりに試行錯誤しながらアレンジしたものとなります。

1）時事問題の紹介

一つ目は、時事問題の紹介です。

土木系の科目が中心となる学科の中で、私は主に環境に関する講義を担当しております。環境問題への関心を高めてもらうよう、講義の冒頭に、その週の新聞やニュースの記事を紹介しています。環境問題にも流行り廃りがあり、たとえば、一昨年は食品ロスの問題、昨年から今年にかけてはプラスチックごみの問題が、毎日のように報道されました。そのようなホットな話題を中心に紹介しています。教室のPCでネット接続が可能になってからは、講義開始直前に流れたニュースを紹介することも容易になりました。

2）講義中のミニレポート

二つ目は、講義中のミニレポートです。

毎回の講義で、その日の重要なポイントや、講義内容への感想、質問などを書くレポートを課しています。学生は講義中にレポートを作成し提出します。翌週の講義で、主な感想を紹介したり、質問に答えたりしています。講義中に、手を上げて質問する学生はまずいませんが、紙に書く形式だと、かなりの質問が出ます。すぐには正確に答えられない質問があっても調べる時間があるメリットもあります。

ちなみに回収したレポートを学籍番号順に並び替えるという作業は、少々面倒なのですが、学生の学籍番号と名前を覚えるという効果があります。自分の番号を教員に覚えられていると分かったら、喜ぶ学生は多いです。資料を印刷している間など、隙間の時間を活用して並び替え作業をしています。ちなみに、この取り組みを200名近い人数で行ったこともありますが、それ以上の人数となると、ちょっと大変かと思います。

二年前からは、レポートの一部をresponで回答させることを始めました。最初は、講義中にスマホの操作をすることを公認することに対して抵抗を感じていましたが、リアルタイムで学生に内容を紹介するのは大変面白く、学生の反応もよいので重宝しています。ただ、じっくりと自分の考えをまとめる必要がある設問では、やはり紙に書く方が適しているように思います。

3）他の先生の講義とのつながりの紹介

三つ目は、他の先生の講義とのつながりの紹介です。

講義では、「〇〇先生の講義でも出てきたと思います。」「この内容は、〇〇先生の〇〇学で、より詳しく触れます。」といった言葉を、意識的に盛り込むようにしています。他の科目とのつながりを伝えるだけでなく、教員同士の連携が取れていることを学生にアピールする狙いもあります。さらに、中間試験やレポートの時期を、他の講義と重ならないように調整することもあります。

学生と話をしていると、各教員の授業に対する姿勢を、シビアにチェックしていることが分かります。「あの先生は、学生に関心がなく、ただ

自分の話したいことを話しているだけ。」などと言われることがないように、常に試行錯誤を続けていきたいと思います。

2月より連載をしてきました、「私が実践する授業の工夫」は今回で終了となります。
13学部、14名の皆様にご寄稿いただきました。本当にありがとうございました。

読者の声欄では、とても素晴らしい企画で、火曜日が楽しみですとの嬉しいお声をいただきました。
意外なところからは事務職員からも「よくよく考えてみると、日々教員が行っている工夫について知らないことが多かった」という声もいただきました。

学生の成長の最前線で奮闘されている教員の皆様の熱意を共有できたこと、
また、教員皆様の授業において、何か役に立っているようであれば、
東洋大学独自のFD・SD企画として本当に有意義な連載だったと思います。

次号からのテーマはただいま高等教育研究部会で鋭意検討しております。
こちらも様々な気づきやきっかけになるような連載となるよう、部会員一同熱を上げています。
引き続き、次のテーマにつきましてもお楽しみいただければ幸いです。
改めまして、ご寄稿いただきました14名の教員の皆様に感謝を申し上げます。

<読者の声投稿フォーム>

リンク：<https://goo.gl/forms/q14H9oRjlAU9uG9C3>

【2】高等教育政策動向等

1) 【日本学術会議】「研究者の『働き方改革』と自由な研究時間確保の両立についての日本学術会議幹事会声明」公表

(2019/11/7)

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-kanji-3.pdf>

2) 【文科省】令和元年度「全国学生調査（試行実施）」について

昨年12月のグランドデザイン答申で提言された全国的な学生調査について、11月25日～12月20日の期間、全国の大学生を対象として大規模なアンケート調査が試行実施されます。（本学は、この試行実施の対象ではありません）

(2019/11/7)

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/11/1421627.htm

3) 【文科省】大臣メッセージ（英語民間試験について）

令和2年度の大学入試における英語民間試験活用のための「大学入試英語成績提供システム」の導入が見送られることになりました。

このことに対する各団体からのコメント

・国立大学協会, <https://www.janu.jp/news/whatsnew/20191101-wnew-comment.html>

・私大連, https://www.shidaiaren.or.jp/topics_details/id=2621

(2019/11/1)

http://www.mext.go.jp/a_menu/other/1422381.htm

4) 【日本学術会議】提言「第6期科学技術基本計画に向けての提言」公表

「科学技術基本計画」とは？

・「科学技術基本計画は、平成7年11月に公布・施行された科学技術基本法に基づき、科学技術の振興に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るための基本的な計画であり、今後10年程度を見通した5年間の科学技術政策を具体化するものとして、政府が策定するものです。」（文部科学省, http://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/kihon/main5_a4.htm）

・現在、総合科学技術・イノベーション会議にて、2021年度からの第6期の策定作業が進められています。

(2019/10/31)

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-24-t283-1-abstract.html>

5) 【文科省】2019年度 就職・採用活動に関する調査結果について（速報版）

最終版は、3月頃公表予定。

(2019/10/30)

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/10/1422283.htm

6) 【内閣府】学生の就職・採用活動開始時期等に関する調査結果（速報版）

7) 【内閣官房】就職・採用活動日程に関する関係省庁連絡会議

2022年3月卒業予定の現2年生の就職・採用活動について、現行と同じく、広報活動3月、採用選考活動6月ルールが適用される予定
(2019/10/30)
https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/shushoku_katsudou/index.html

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

- ・高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES (大学改革支援・学位授与機構)
- ・海外学術動向ポータルサイト (日本学術振興会)

【3】 LINK

- ◆学外FD・SD研修会への参加申込
- ◆English Support Service (ESS)
- ◆高等教育関連図書のご案内
貸出申込フォーム
- ◆本ニュースレターへの投稿

【4】 あとがき

ここところ、様々な部署等から学生アンケートについてのお問い合わせをいただくようになりました。
本学では新入生アンケート(春)、在学生アンケート(秋)、そして卒業時アンケート(卒業式の日)を実施しています。

それぞれのアンケートで多くの項目を聞き、それぞれ対応する学部・学科、部署等と共有することで活用していますが、更なる活用方法を検討しています。

また、詳細な分析ではありませんが、全体的な傾向をつかむための集計も行っています。
[ガールのファイル管理](#)> [IR関連-機関調査](#)> [学生アンケート結果](#) に保存していますので、ぜひ学生の回答結果をご覧ください。

なお、実施に際しては多くの方にご協力をいただいていますこと、
毎度回答して下さる学生も含めこの場を借りて感謝申し上げます。
ただいま、在学生アンケートを実施しております。
引き続きご協力のほどなにとぞよろしくお願いいたします。

●みなさまの声をお寄せください

これまでのニュースレターに対する

ご意見・ご感想・ご要望、応援メッセージなどを下記のフォームで募集中です。
些細な内容でも構いませんのでお寄せいただけると幸いです。(匿名OKです)

リンク : <https://goo.gl/forms/q14H9oRjlAU9uG9C3>

企画

東洋大学 高等教育推進センター
高等教育研究部会

発行元

東洋大学 高等教育推進センター
〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

◆このメールは本学教職員にお届けしています。

◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。

ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。

◆このメールの再配信、および掲載された記事の無断転載を禁じます。

© 2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター
2019年11月26日 Vol.2, No.15 (通算第29号)

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

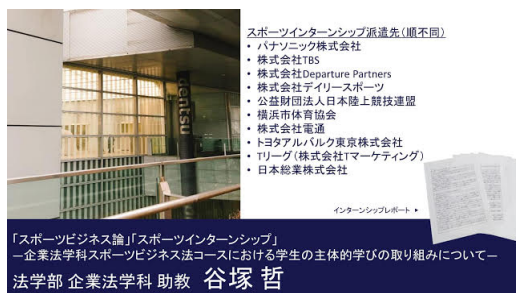
- 【1】コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く
第7回 スポーツビジネスへの気づき (谷塚 哲)
- 【2】高等教育政策動向等
- 【3】LINK
- 【4】あとがき

【1】コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く

Vol. 1, No. 12～Vol. 2, No. 3 (通算第17号) にて配信した連載を再開いたします。

こちらのコラムは、[高等教育推進センター公式ホームページ](#) においてもご覧いただけます。

第7回 スポーツビジネスへの気づき
谷塚 哲 (法学部企業法学科・2018年度東洋大学優秀教育活動賞受賞)



スポーツインターンシップの授業は、2018年度で3回目の実施となります。年々、履修者が増え、今では約100人の学生が、スポーツビジネスの現場で学ぶことができます。

このインターンシップを経験し、スポーツビジネスに興味を持つ者、また興味があったが、現実には厳しいと実感した者等々、様々な感想をいただくきっかけになったと感じています。過去、学生からの感想の中には、「インターンシップの現場では、バイトの様な仕事ばかりでつまらなかった」などの意見がありました。しかし仕事にはいろいろな役割があり、チケットのもぎり、会場の警備なども重要なスポーツビジネスであること、またスポーツビジネスといってもテレビなどで見る華やかな部分ばかりではなく、地味な仕事の連続であること、などを気づいてもらうことにおいては、このインターンシップの授業は学生たちにとって、大変重要な機会だと考えています。多少厳しいことではありますが、そのような現実を学生たちには常に授業で伝えています。

一方で、インターンシップを経験したことにより、一層、スポーツビジネスに興味をもった学生も多く、「勉強になった」「楽しかった」「将来スポーツビジネスを就職先として考えたい」などの感想もたくさん見かけます。またうれしいことにインターンシップ先からも「東洋大学の学生は真面目でよくやってくれる」との評判をいただくことも多く、この授業を実施した意味を少しずつ実感しております。

国は2020年を契機に、スポーツビジネスに力を入れていく方針です。そのための人材育成・確保が急務とされています。しかし日本においてスポーツビジネスは、まだまだ新しい産業であり、一般的な産業と比べ、就職先が多くないのが現状です。しかし今、ガバナンスやコンプライアンスなどの経営、法律、会計知識等を必要とされるスポーツ界において、法律を学ぶ学生がスポーツビジネスに興味をもつことは大変すばらしいことであると私自身、認識しております。日本のスポーツビジネスの発展のためにも、このスポーツインターンシップの授業が学生たちの気づきになってくれることに、今後も期待しています。

【2】高等教育政策動向等

1) 【日本学術会議】提言「歴史的思考力を育てる大学入試のあり方について」公表

(2019/11/22)

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/2019.html>

2) 【大学生協】「2019年度保護者に聞く新入生調査」概要報告 公表

(2019/11/18)

https://www.univcoop.or.jp/news_2/news_detail_1586.html

3) 【日本学術会議】提言「持続可能な生命科学のデータ基盤の整備に向けて」公表

(2019/11/18)

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/2019.html>

4) 【文科省・厚労省】令和元年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査（10月1日現在）

全体の概要（webページより引用）

大学の就職内定率は76.8%（前年同期比0.2ポイント低下）。このうち国公立大学の就職内定率は、79.4%（同4.4ポイント上昇）、私立大学は、75.9%（同1.7ポイント低下）。

(2019/11/15)

(文科省) http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/11/1422624.htm

(厚労省) https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000184815_00006.html

5) 【大学入試センター】大学入試英語成績提供システムの導入延期に伴う令和3年度大学入学者選抜大学入学共通テストの出題方法等について

(2019/11/15)

<https://www.dnc.ac.jp/news/20191115-01.html>

6) 【マイナビ】2021年卒対象「2019年度 マイナビ大学生インターンシップ調査」公表

(2019/11/14)

https://www.mynavi.jp/news/2019/11/post_21798.html

7) 【内閣府】第11回経済財政諮問会議

「経済再生・財政健全化の一体的な推進強化④（教育・科学技術）」が議題に上げられています。具体的には、「教育のICT化等を通じた人材育成」と「官民連携による戦略的な研究開発投資の促進」について議論されています。

(2019/11/13)

<https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/minutes/2019r/index.html#tab1113>

8) 【経団連】Society 5.0時代の人材育成に向けた義務教育の抜本的ICT化を求める緊急提言

(2019/11/12)

<http://www.keidanren.or.jp/policy/2019/096.html>

9) 【マイナビ】「2020年卒マイナビ 企業新卒内定状況調査」を発表

(2019/11/12)

https://www.mynavi.jp/news/2019/11/post_21750.html

10) 【内閣府】総合科学技術・イノベーション会議（第46回）

「基礎研究と若手研究者支援について～2019ノーベル化学賞受賞を契機として～」が議題に上げられています。
(2019/11/11)
<https://www8.cao.go.jp/cstp/siryo/haihui046/haihu-046.html>

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

・高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES (大学改革支援・学位授与機構)

・海外学術動向ポータルサイト (日本学術振興会)

【3】 LINK

◆学外FD・SD研修会への参加申込

◆English Support Service (ESS)

◆高等教育関連図書のご案内

貸出申込フォーム

◆本ニュースレターへの投稿

【4】 あとがき

突然ですが本学のオウンドメディア

『LINK UP TOYO (リンクアップトウヨウ) 東洋大学』をご存知でしょうか？

リンク：<https://linkuptoyo.com/>

先生方にご協力いただき制作した記事や、

本学卒業生の活躍を紹介する記事など、

普段とは違った様々な角度から、東洋大学を読むことができます。

ふとした瞬間に息抜きとしてぜひご覧ください。

【LINK UP TOYOとは？】 (サイトより引用)

LINK UP TOYOとは、時代の要請に応えるべく

先駆的な取り組みや研究を推進する東洋大学と、読者の“知りたい”をつなぐメディアです。

日常生活・暮らしに役立つ情報から仕事に生きるヒント、

さらに未来への指針となるコンテンツまで、さまざまなテーマを取り上げ、

読者の人生を彩り、豊かにするWebメディアを目指します。

最後に私のお気に入り記事をシェアいたします。

『銭湯経営の概念を打ち破る！人気銭湯「寿湯」オーナーが思い描く、寿湯の“今”と“野望”』

リンク：<https://linkuptoyo.com/kotobukiyu>

●みなさまの声をお寄せください

これまでのニュースレターに対する

ご意見・ご感想・ご要望、応援メッセージなどを下記のフォームで募集中です。

些細な内容でも構いませんのでお寄せいただけると幸いです。(匿名OKです)

リンク：<https://goo.gl/forms/q14H9oRjIAU9uG9C3>

企画

高等教育推進センター

高等教育研究部会

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

- ◆このメールは本学教職員にお届けしています。
 - ◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。
ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。
 - ◆このメールの再配信、および掲載された記事の無断転載を禁じます。
- © 2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター

2019年12月10日 Vol.2, No.16 (通算第30号)

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

- [1] シリーズ3 | 東洋大学におけるダイバーシティとその対応に向けて
 - 第1回 2部教育の課題—特に体育会所属学生への対処方法 (後藤 武秀)
- [2] コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く
 - 第8回 Lunchtime sessions – How ITM provides extra student learning opportunities in English (Graham Robson)
- [3] 高等教育政策動向等
- [4] LINK
- [5] あとがき

[1] シリーズ3 | 東洋大学におけるダイバーシティとその対応に向けて

近年、さまざまなところで、「ダイバーシティ」(diversity)や「多様性」という言葉を耳にするようになりました。経済産業省からは、「ダイバーシティ2.0行動ガイドライン」(2018年6月改訂)が示され、企業における「ダイバーシティ経営」が謳われています。

一方、2018年に中央教育審議会が答申した「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」においても、「多様性」はキーワードのひとつになっています。「多様な学生」「多様な教員」「多様で柔軟な教育プログラム」「多様性を受け止める柔軟なガバナンス等」「大学の多様な『強み』の強化」...。本文50ページの中で、実に86回「多様」の語が出現します。各大学では「多様な○○」をどのように受け止め、2040年に向けて実現していくと良いのでしょうか。

ここで、ダイバーシティ(diversity)の語源にさかのぼってみると、ひとつの対立が浮かび上がってきます。diversityの語は、ラテン語の「dis-」(aside; 離れて)と「vertere」(to turn; 向きを変えること)から生まれた言葉です。実は、「dis-」に代わってその反対の意味の「unus-」(one; ひとつの)を最初におくと、「universe」になり、その派生語として「university」ができました。あらゆる知や人材の共同体、つまり総合大学です。

高等教育研究部会では、7回にわたって、この大学(university)における多様性(diversity)について、幅広く議論を展開していきたいと思えます。語源をみると、このテーマがいかに難題が明らかであると思えます。したがって、このシリーズは、ダイバーシティについて正解を提示するものではありません。各回、第二部課程、障がい学生支援、合理的配慮、社会人学生、大学院教育、外国人留学生支援、学生海外派遣、国際共同教育・研究、など複数の観点から、教職員の経験や学部・研究科の取組の紹介、学内外におけるFD・SD研修会の参加報告をおこない、みなさまとともにダイバーシティについて考えるきっかけとなれば幸いです。

第1回 2部教育の課題—特に体育会所属学生への対処方法— 後藤 武秀 (法学部法律学科 教授・高等教育研究部会 部会員)

2部の現状

白山校舎の各学部には2部が設置されている。その学生総数は、国際学部(旧 国際地域学部)の地域総合専攻(夜間開講)を加えると3千余名に達する。これは、全学部学生数のおよそ10%であり、白山校舎だけでみると15.7%に達する。

2部の授業は1部と同じものを提供するという原則のもとに時刻6時15分から2コマの授業が行われているが、授業並びに単位認定はそう容易なものではない。卒業率が例年70%台という数字がそれを物語っている。

もともと、2部は勤労者が退勤後に大学教育を受ける機会を提供するという目的で設置された。しかし、大学、専門学校の門戸が広がった結果、本来の目的で2部に進学する学生は激減した。そのために、2部の使命は終わったとして2部を閉鎖する大学が増えた。そのような中で本学は2部を存続させたために、逆に希少性が生じ、定員の充足も果たしてきている。とはいえ、多様な形の入試で受験生を集めたために、学生間の学力差が大きくなっており、これが2部教育の問題の一つとなっている。また、昼夜開講、通信教育部制の受講などにより、関心の異なる学

生が同一のクラスで受講していることも問題となっている。様々な問題を抱えながらの授業運営であるが、その中で最も苦慮し、またそれなりの対応をしているのが体育会所属学生への対応である。

体育会所属学生への対応

法学部2部法律学科の場合、おそらく30%以上の学生が体育会所属で運動部活動をしているのではないかと推測される。1部の運動部優秀選手推薦枠が限られていることから、2部を選択して入学してくる。本来、練習後に通学できるはずであるが、疲れるのであろうか、欠席が目立つ。これらの学生に1部と同様の水準の授業を提供し、学業の成果を単位という形で認定していかなければならない。これをどのように行うのか、苦慮している教員も多いのではないかと推測する。

私の場合、2つの方法で一定の水準に達することができるよう努めている。第1は、相当きついかと思われるほどのレポートを課すことである。幸い、提出物に関しては積極的に対応してくれるので一定の成果を挙げていると思う。内容についても充実したものとなることを求めているが、参考文献に目を通す時間も少ないことを考慮した上で評価している。

第2は、学期中に、2度試験を行うことである。採点に手間がかかるが、試行錯誤の結果行きついたところである。1学期分の学習を学期末試験だけの評価で決めると、対外試合などで欠席したときの授業内容から出題されると、これに対応できない学生が出てくるので、複数回の試験を行うことによってそのハンデを克服してもらおうというわけである。幸い、ほとんどの学生が複数回受験してくれるので、大方の学生が単位を取得するに至っている。

【2】コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く

こちらのコラムは、[高等教育推進センター公式ホームページ](#) においてもご覧いただけます。

第8回 Lunchtime sessions

– How ITM provides extra student learning opportunities in English

グライアム・ロブソン 教授、ターナー・マシュー 講師、中井 文子 准教授、ハーディ・ダレル 講師、パートレリ・キャロライン 講師、ロバート・ハミルトン 講師、渡邊 勝仁 講師

(国際観光学部国際観光学科・2018年度東洋大学優秀教育活動賞受賞)



In the Faculty of International Tourism Management (ITM) at Toyo, we feel that using English is very important. Many of our students will need to use English for study abroad, foreign internships, and in their future jobs, but we also hope that students understand that learning English can unlock doors to new ways of thinking and unique experiences even in Japan.

As we work towards a future curriculum that offers tourism subjects in English, ITM is keen to increase the amount of time that students come into contact with English. However, right now, due to curriculum and time constraints, students have a finite number of class hours of studying English a week. Therefore, as part of our FD efforts, ITM decided to offer special topic classes in English during weekday lunchtimes for both first and second year students called “lunchtime sessions”. It was for the second year program of lunchtime sessions in autumn of 2018 that my colleagues and I were proud to receive an award for educational excellence this summer, and it is about that program that this article highlights.

Some of the details of that program included myself and six ITM English teachers (professors Bertorelli, Hamilton, Hardy, Nakai, Turner and Watanabe) offering a range of different sessions to students focused on how to maximize free resources and study more effectively outside of class. Further, two foreign experts were invited to give talks on how to meet the needs of foreign tourists when creating tours (Rob Goss – a British travel writer) and ways in which Japanese people can take opportunities for interaction with tourists during the 2020 Tokyo Olympics (Lauren Shannon – an American tourism business owner in Tokyo). Students enrolled in the ITM compulsory English for Tourism II class could get extra credit points and TGL points for voluntarily attending a certain number of these sessions.



There were three main goals that we hoped our lunchtime session would achieve. First, we wanted students to attain a higher score on the end of second year TOEIC Test to both help with the job-hunting efforts in the third year and show students how their English level had changed from

the TOEIC Test score they received when entering ITM. To this end, for example, Professor Turner, being a prolific user and producer of podcasts, showed students how using podcasts could improve listening ability for the TOEIC Test. A second goal was to show ITM students how a different viewpoint could open student's minds about how to best look after foreign tourists. During Mr. Goss' speech, students were interested to learn through examples how small interactions with the local fisherman in Iwate Prefecture was one of the highlights for foreign tourists on a recent tour he participated in. Lastly, we hoped that by showing free resources such as podcasts, and by catching interest in topics that ITM students might find important and appealing, we could stimulate students to find their own information and ways to enjoy studying English beyond Toyo. One thing that sometimes stops students from reaching higher levels of English ability is not being able to find a topic or idea to follow on their own in that second language – in a more autonomous way. In other words, we hoped the lunchtime sessions would make students more like lifetime users of English than just causal users of English.

So...what was the result of our lunchtime sessions? It would be difficult to say this early whether we have turned students into lifetime English users, but anecdotally, my colleagues and I have heard that students enjoyed and received benefit from attending the sessions. Also, even with the sessions being voluntary, the number of attendees at each event was around 100 students. This showed students were motivated to take these extra learning opportunities. The biggest and clearest result, however, was an average increase of 11% in TOEIC Test scores at the end of the second year, compared to those at the end the first year. It would be naïve to think that this increase was all because of the lunchtime sessions, but it does show that students are able to increase their skills through English instruction in ITM.

Along with lunchtime sessions, ITM is committed to helping students improve themselves and their language ability for their futures, and we look forward to the next FD challenge.

Professor Graham Robson
Head of ITM Global Committee

【3】高等教育政策動向等

1) 【大学基準協会】「判定保留」制度の廃止と追評価制度の一部変更について（大学評価 短期大学認証評価）

(2019/12/3)

https://www.juaa.or.jp/news/detail_641.html

2) 【OECD】生徒の学習到達度調査2018年調査（PISA2018）結果 公表

読解力 15位／79か国・地域

数学的リテラシー 6位／79か国・地域

科学的リテラシー 5位／79か国・地域

(2019/12/3)

関連リンク

・国立教育政策研究所「『OECD生徒の学習到達度調査2018年調査（PISA2018）』の結果について」

<http://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/index.html>

・OECD「PISA2018」

<http://www.oecd.org/pisa/>

・OECD東京センター「若者はデジタル化する世界で苦戦している—PISA2018調査結果」

<http://www.oecd.org/tokyo/newsroom/young-people-struggling-in-digital-world-finds-latest-oecd-pisa-survey-japanese-version.htm>

3) 【内閣府】「子どもの貧困対策に関する大綱」閣議決定

(2019/11/29)

<https://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/index.html#taikou>

4) 【文科省・経産省】学生・企業の接続において長期インターンシップが与える効果についての検討会 設置

(2019/11/25)

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/gakuseishien/1422982.htm

5) 【科学技術・学術政策研究所】論文の引用・共著関係からみる我が国の研究活動の国際展開に関する分析[調査資料-285]の公表について

分析調査の結果、「地理的近接性があり、研究の成長性も高いASEAN諸国との協力は、日本の研究活動の国際展開を図るうえで、今後重要となる可能性がある」ことが示唆されました。

(2019/11/22)

<https://www.nistep.go.jp/archives/43160>

6) 【文科省】教学マネジメント特別委員会（第11回）会議資料

「教学マネジメント指針（案）」が示されました。

(2019/11/21)

<http://www.mext.go.jp/kaigisiryō/2019/11/1422464.htm>

関連リンク

Between情報サイト「教学マネジメント指針、完成へー学修成果の可視化と情報公表が柱」

<http://between.shinken-ad.co.jp/univ/2019/11/kyogakumanagement.html>

7) 【THE】 World University Rankings 2020 by subject (学術分野別THE世界大学ランキング2020)

(2019/11/19)

<https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/by-subject>

8) 【科学技術・学術政策研究所】STI for SDGs に関する政策レビュー及び研究助成との関連づけへの人工知能 (AI) 関連技術の試行的活用 [DISCUSSION PAPER No.174]の公表について

(2019/11/14)

<https://www.nistep.go.jp/archives/43051>

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

- ・高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES (大学改革支援・学位授与機構)
- ・海外学術動向ポータルサイト (日本学術振興会)

【4】 LINK

◆学外FD・SD研修会への参加申込

◆English Support Service (ESS)

◆高等教育関連図書のご案内

貸出申込フォーム

◆本ニュースレターへの投稿

【5】 あとがき

Today is the day!

It's our pleasure to share Prof. Robson's (and his colleague's) good practice in English!

And new serial theme is "Diversity". Nowadays, diversity is well-known in the University.

Committee of Promotion of Higher Education will write about "Diversity" with many points of view.

This newsletter welcomes essays written in English!

●みなさまの声をお寄せください

これまでのニュースレターに対する

ご意見・ご感想・ご要望、応援メッセージなどを下記のフォームで募集中です。

些細な内容でも構いませんのでお寄せいただけますと幸いです。(匿名OKです)

リンク：<https://goo.gl/forms/q14H9oRjIAU9uG9C3>

企画

高等教育推進センター

高等教育研究部会

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

◆このメールは本学教職員にお届けしています。

◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。

ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。

◆このメールの再配信、および掲載された記事の無断転載を禁じます。

© 2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター
2019年12月24日 Vol.2, No.17 (通算第31号)

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

- 【1】シリーズ3 | 東洋大学におけるダイバーシティとその対応に向けて
第2回 コミュニティ心理学の観点から考える障がい学生支援 (角谷 昌則)
- 【2】コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く
第9回 化学の基礎をもっと分かりやすくために (李 沁潼)
- 【3】高等教育政策動向等
- 【4】高等教育推進センターからのお知らせ
 - ・2/14(金)開催 FD・SD研修会「授業運営で留意したい改正著作権法」
 - ・3/9(月)開催 英語で授業をおこなうためのFD研修会
- 【5】LINK
- 【6】あとがき

【1】シリーズ3 | 東洋大学におけるダイバーシティとその対応に向けて
第2回 コミュニティ心理学の観点から考える障がい学生支援
角谷 昌則 (生命科学部生命科学科 教授・高等教育研究部会 部会長)

小中高の現状

平成19年度から特別支援教育がスタートし、障がいのある幼児児童生徒の支援体制が整えられてきた。例えば小中高の各学校では、「チーム学校」の名の下に学校教職員以外にスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなど、外部の専門家が学校活動に当たり前に参画するようになった。あるいは、特別支援学校を中核として域内の諸学校を一つのまとまりとして特別支援教育を推進する、「スクールクラスター」の構築なども進められている。また個々の教員のレベルでも、ここ数年の間に「授業のユニバーサルデザイン」化が進展し、「障がいがある子もいない子もよく分かる」授業方法の改善や教室環境の整備などが実践されている。

支援の充実に向けた小中高のこうした動きに大学は加わっていない。しかし障がいを抱えた学生にも高等教育機会は保障されるべきであるし、実際に障がいをもった学生を入学させている。大学に入ったら、途端に必要な支援が得られなくなった、ということが無いようにしなければならない。

理系学部の視点

発達障がいをもった学生は、対人関係において苦労をする場合が多い。その苦労は特に理系学部において顕在化し易いと思われる。1年次から実験や実習が多く、人付き合いと共同作業が連続する。やっと終わったと思ったらレポート書きが待っており、実験や実習の内容を的確にまとめて文章化し、期限までに提出しなければならない。さらに年次が上がって研究室に配属されると、その狭くて深くで濃密な人間関係に晒される。ラボでの友人関係もさることながら指導教員との関係も苦労の種で、それらで躓くと大学に身の置き場が無くなってしまう。

こうした問題意識などから、生命科学部ではこの12月に発達障がい等をもった学生への対応について、学生生活委員会とFD委員会との共催で講演会を実施した。講師として招来したのは、人間総合大学大学院の萩原豪人先生で、臨床心理士としてこれまでさまざまな教育・医療機関で現場経験を積まれてきたコミュニティ心理学の専門家である。「コミュニティ心理学」とは、「様々な異なる身体的心理的社会的文化的条件を持つ人々が、だれもが切り捨てられることなく共に生きることを模索する中で、人と環境の適合性を最大にするための基礎知識と方略に関して、実際におこる様々な心理的社会的問題の解決に具体的に参加しながら研究をすすめる」学問とのことで、大学のダイバーシティの展開にも直接的に関わってくる分野だといえる。

講演会の中では、発達障がい種の見立てや学生支援に関し、具体事例も交えながら多面的・多角的な解説がなされた。その中で特に印象に残ったことを記してみたい。それは困難さを抱える学生を支える学内外関係者の連携のあり方である。まず関係者として、授業担当教員、所属ゼミ担当教員、学習支援担当教員、学生相談室、保健室、学生課、就職担当スタッフ、医療機関、福祉機関、家族、などが挙げられる。講演会で

は、それら関係者と学生本人とのつながりは、一部の関係者との太いパイプよりも、細いパイプで良いからたくさん多岐であることが大事と指摘された。ここが、「ネットワーキングでサポートする」、ことのポイントだと教えられた。

手を繋ぎ続ける

大学側も資財を投じてそうした部署と専門家を整備してきており、それゆえに困難さや問題を抱えた学生が現れたら、正に専門部署や専門家による適切な対応をしよう、ということになる。また私たち現場の教職員も、障がいをもった学生の問題や悩みについては、自分のような素人が問題をこじらせる前に専門家による専門的な対応にお任せしよう、と専門家送りの発想になってしまうのではないかと。萩原先生のPPスライドの1枚に「連携：手を繋ぎ続ける」というものがあつた。言葉として当たり前なものであるが、きちんと実行できているかどうか要注意と感じさせられた。



生命科学部FD講演会配布資料より

ダイバーシティ豆知識

全国ダイバーシティネットワーク

文部科学省は、2015年度より科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ」を進めています。この事業は、2006年度から2014年度まで同省が展開した「女性研究者研究活動支援事業」を継承するものです。2020年度予算案には、10億円（0.1億円増）が計上されています。

2018年に本事業に採択された大阪大学は、幹事機関として、文部科学省と連携し、「女性研究者を取り巻く研究環境整備や研究力向上、意識改革や働き方改革等」に取組む諸機関をつなぐ全国ダイバーシティネットワーク」を統括しています。全国ダイバーシティネットワークのホームページでは、女性研究者の育成や研究力向上に関する国内外の取組動向や参考事例が公開されていますので、ぜひご覧ください。

全国ダイバーシティネットワーク ホームページ

<https://www.opened.network/>

【2】コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く

こちらのコラムは、[高等教育推進センター公式ホームページ](#)においてもご覧いただけます。

第9回 化学の基礎をもっと分かりやすくために

李 沁潼（生命科学部応用生物科学科・2018年度東洋大学優秀教育活動賞受賞）



私が担当している「基礎化学演習」は、主に高校段階で化学を勉強したことがない学生向けの授業です。化学の苦手意識が強い学生が多いので、まず初回の授業で、「一番難しいと思う内容」についてアンケートを実施しました。その結果、「モルや濃度の計算が分からない」、「化学物質の名称と性質が覚えられない」といった声が把握できました。それをもとに、授業実施の際、多くの学生が苦手と感じた内容を、2、3回の授業に分けてゆっくり教えるといった工夫をしました。その他にもいくつか工夫を試みしたので、共有させていただきます。

① イメージの付かない化学概念を身近のものに例える

化学物質の量を把握するために使われている「物質質量（モル）」の概念は、ほぼすべての化学計算に用いる、数の単位です。しかし、日常生活で使うことがないため、いきなり「1モルの塩化ナトリウム」と言うと、イメージがつかず、計算の時に混乱する学生が多かったです。このようなことを改善するために、「物質の1モル」も、「チョコボールの1箱」も、数が違うだけの「1パック」と捉えることを紹介しました。このようにイメージの付かない化学概念を身近のものに例えながら説明すると、学生は抵抗感が減り、自然に理解できるようになりました。また、毎回の授業の後半では、10問程度の演習テストを設定し、学生の理解度をその場でチェックしています。

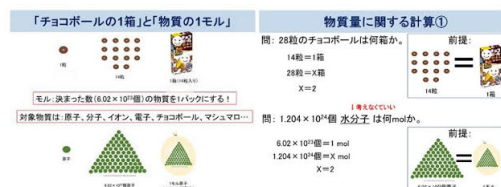


図. 授業で使ったスライドの一例

② 化学のことを、生命科学的な視点（学際的な視点）で理解する

生命科学部応用生物科学科は、4年間の学びにおいて「応用動物」、「植物資源利用」、「微生物利用」、及び「生命環境」の分野の学問を展開しています。その際、様々な生命現象を理解するために、学際的な視点が必要だと考えられます。初年次の科目として、「基礎化学演習」は、化学の基礎計算だけでなく、生物や環境分野の知識との関連性も含めて紹介しています。例えば、化学結合の一種である「共有結合」は、DNAという生体物質の中でも見られることや、元素周期表の15族に属している窒素とリンは、生態系において重要な栄養元素である一方、ゆえに現在多くの水圏環境で富栄養化という環境問題も引き起こしていることなどを紹介しました。

また、授業の最後には、当日の授業内容と関連しているトピックを設定し、10分程度のディスカッション時間を設けています。その際に、「TED-Ed」で公開されている動画を授業のリソースとして多く使用しました。「TED-Ed」は、「TED」のEducation版であり、生命科学や人文などさまざまなトピックを5分ほどの動画で紹介するwebサービスです。特に、多分野の内容を融合して分かりやすく説明しているものが多く、授業のリソースとして使えるものが多いと思います。例えば、「分子の構造」の回では、人工甘味料が「甘い」と感じるのは、分子の構造が糖と似ており、人間の味覚受容体を誤魔化しているからであることを動画で紹介しました。また、動画のナレーションは英語ですが、各言語の字幕が付いているので、母国語で内容を理解しながら英語環境に自然に馴染むことができたのではないかと思います。

2018年4月から「基礎化学演習」を担当して以来、授業の内容や進行について、生命科学部のたくさんの先生方から貴重なご助言をいただいております。学生たちも私と一緒に頑張ってきました。授業はまだいろいろと未熟な部分があると思いますが、これからも改善していきたいと思っています。今回は、自分のわずかな経験ですが効果があったことについて紹介させていただきました。今回の優秀教育活動賞の受賞を励みに、引き続き頑張っていきたいと思っています。

【3】 高等教育政策動向等

1) 【文部科学省】GIGAスクール構想

学校における高速大容量のネットワーク環境と、義務教育段階における1人1台端末の整備について、2023（令和5）年度までの実現を目指す方針が示されました。

文部科学省、経済産業省、総務省が2019年度補正予算案と2020年度予算案に、それぞれGIGAスクール構想に関わる項目を盛り込んでいます。（2019/12/20）

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/mext_00127.html

2) 【未来投資会議】新たな成長戦略実行計画策定に関する中間報告 取りまとめ

（2019/12/19）

<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/miraitoshikaigi/dai34/index.html>

3) 【経済財政諮問会議】新経済・財政再生計画改革工程表2019

新経済・財政再生計画改革工程表2019が示されました。文教・科学技術に関しては、GIGAスクール構想、SDGs、若手研究者支援等が新たな施策として明記されました。

（2019/12/19）

<https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/minutes/2019r/1219/agenda.html>

4) 【文部科学省】大学入学共通テストの記述式問題について

大学入学共通テストの国語と数学の記述式問題の導入が見送られることが決定しました。

（2019/12/17）

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/detail/1420229_00001.htm

5) 【科学技術・学術政策研究所】研究現場の閉塞感を打破するには: エビデンスベースの政策立案の前提条件の共有に向けて — NISTEP定点調査ワークショップ2019より — [調査資料-286]の公表について

（2019/12/6）

<https://www.nistep.go.jp/archives/43333>

付録

— 東洋大学高等教育推進センターニュースレター Vol.2 アーカイブ

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

- ・高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES（大学改革支援・学位授与機構）
- ・海外学術動向ポータルサイト（日本学術振興会）

【4】高等教育推進センターからのお知らせ

2020/2/14(金)開催 FD・SD研修会「授業運営で留意したい改正著作権法」

高等教育推進センターでは、2019年度FD・SD研修会「授業運営で留意したい改正著作権法」を開催する運びとなりましたので、ご案内申し上げます。みなさまのご参加をお待ちしております。

〔開催趣旨〕

2018年5月、ICT活用教育を促進するための改正著作権法が成立しました（2020年4月1日施行予定）。本学においてもToyoNet-ACE等のICTツールの利用が普及し、どこからが著作権の侵害になるのかといった問い合わせを受けることも多くなりました。つきましては、改正著作権法が認める教育利用上の例外や公衆送信権の取扱の変更についてのFD・SD研修会を開催いたします。先生方が安心して教材を作成し、配布することができるよう、授業運営において知っておきたい知識を中心にお話しいたします。

日時：2020年2月14日(金) 14:00～16:00（開場 13:30～）

場所：白山キャンパス 125記念ホール（8号館7階）

※各キャンパスにWebexビデオ配信いたします

朝霞 第3会議室 川越 第3会議室

板倉 小会議室 赤羽台 事務課奥会議室

対象：本学教職員および非常勤講師

申込方法：webフォームから申し込みをお願いいたします。※2020年2月6日(木)〆切

■ <https://bit.ly/2KYIPx3>



2020/3/9(月)開催 英語で授業をおこなうためのFD研修会

2014年度より大変好評をいただいております「英語で授業を行うためのFD研修会」（BRITISH COUNCIL大学教員向け英語研修プログラム）について、「講義とプレゼンテーション（導入）」「講義とプレゼンテーション（発展）」「アカデミックライティング（導入）」の3つのプログラムを同時開催いたしますので、下記のとおりご案内申し上げます。なお、「講義とプレゼンテーション（発展）」は初開講のプログラムです。みなさまのご参加をお待ちしております。

日時：2020年3月9日(月)10:00～17:10

場所：白山キャンパス（詳細は追ってご連絡いたします）

対象：本学専任教員

講師：British Council専任英語講師

申込方法：webフォームからお申込みください。※2020年1月27日(月)〆切

■ <https://bit.ly/2rq6YpC>



【5】 LINK

- ◆学外FD・SD研修会への参加申込
- ◆English Support Service (ESS)
- ◆高等教育関連図書のご案内
貸出申込フォーム
- ◆本ニュースレターへの投稿

【6】 あとがき

前回からスタートしたシリーズ3「東洋大学におけるダイバーシティとその対応に向けて」では、障がい学生支援についてご紹介いただきました。冒頭の初等中等教育における「授業のユニバーサルデザイン」を聞いて、教員免許状更新講習で「授業のユニバーサルデザイン入門」を受講したと家族が話していたことを思い出しました。メディアでは、いろいろな批判を耳にする免許更新制度ですが、受講した本人は、知識を更新できて勉強になると言っていました。また、デジタル教科書やiPadも授業でよく使うようになったそうです。GIGAスクール構想が打ち出され、義務教育段階では、どんなEdTechが進展していくのか動向が気になりますね。

さて、今年最後のニュースレターとなりました。
本年も大変お世話になりました。どうぞ良いお年をお迎えください。

- みなさまの声をお寄せください
これまでのニュースレターに対する
ご意見・ご感想・ご要望、応援メッセージなどを下記のフォームで募集中です。
些細な内容でも構いませんのでお寄せいただけますと幸いです。（匿名OKです）
リンク：<https://goo.gl/forms/q14H9oRjIAU9uG9C3>

企画
高等教育推進センター
高等教育研究部会

発行元
東洋大学 高等教育推進センター
〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20
E-mail: mlfdjimu@toyo.jp
HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>
ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

- ◆このメールは本学教職員にお届けしています。
 - ◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。
ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。
 - ◆このメールの再配信、および掲載された記事の無断転載を禁じます。
- © 2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター
2020年1月14日 Vol.2, No.18 (通算第32号)

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

- [1] シリーズ3 | 東洋大学におけるダイバーシティとその対応に向けて
第3回 英語卒論指導の難しさ (佐藤 節也)
- [2] コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く
第10回「基礎化学」における授業の効率化と文系出身学生のための授業改善に関する取り組み (藤澤 誠)
- [3] 高等教育政策動向等
- [4] 高等教育推進センターからのお知らせ
 - ・2/14(金)開催 FD・SD研修会「授業運営で留意したい改正著作権法」
 - ・3/9(月)開催 英語で授業をおこなうためのFD研修会
- [5] LINK
- [6] あとがき

[1] シリーズ3 | 東洋大学におけるダイバーシティとその対応に向けて
第3回 英語卒論指導の難しさ
佐藤 節也 (国際学部グローバル・イノベーション学科 教授・高等教育研究部会 部会員)

はじめに

文学部英語コミュニケーション学科で3年間勤務した後、2017年4月の国際学部グローバル・イノベーション学科創設に伴って転籍し、3年を経た。新学科における来年度の最大の課題は何といっても4年生の英語卒論指導である。外国人留学生の英語力や学力には微塵の不安もないが、日本人学生に関しては海外留学を1年間近く経験しているとはいえ大いに不安がある。文学部ゼミでも英語卒論指導を4年間行ってきたので多少経験はあるが、いくら早めに準備を始めるよう口酸っぱく指導しても学生の間には切迫感はないかなかなか生まれず、提出時期間際になって生煮えの卒論の添削に毎年追われてきたのが偽らざる実情である。

ましてや国際学部の新学科は英語での卒論提出(8,000語程度)を卒業の要件としているため、日本語での執筆を許すという逃げ場もない。そこで、過去の経験等をもとに英語での論文執筆に不慣れな日本人学生が陥りやすい弱点を取りまとめ、指導の心覚えとすることにした。もちろん、参考文献の読み込み不足はもとより、英語語彙の不足や文法の誤り、スペルミス、英語表現方法の未熟さ、文献引用方法の誤り(イタリックvs括弧の区別)、結論に本文中に触れていない新たな論点を盛り込む、盗用・剽窃など、共通の問題点は挙げればきりが無いが、それらは英語論文執筆指導のうえではテクニカルなポイントであり、本稿ではあえて触れないこととする。

卒論テーマの選定

多くの学生が共通して直面する悩みの一丁目一番地は卒論テーマの選定である。この点、学生に対しては、たとえゼミで取り扱う専門テーマから離れたとしても、何よりも自分の興味が続くテーマを選ぶよう指導している。卒論執筆は1年間近く時間をかける長期の大プロジェクトであるから、途中で飽きが来ることもあるし、興味の対象が執筆途中で移り変わることもある。テーマ選定に当たって教員もアドバイスはするが、最終的には本人が納得のいくテーマを選ぶことが第一である。他人から押し付けられたテーマでは論文を書くモチベーションが長続きしない。

卒論にどのようなテーマを選びたいか学生に聞くと、はじめは往々にして漠然とした興味・関心しか述べない(例えば「FinTechについて何か書きたい」)が、それを如何に個別具体的に調査分析が可能なりサーチ・クエスチョン(working title)に落とし込むよう指導するかがポイントとなる(例えば「Facebookが暗号通貨Libraの発行を計画しているが、Libraは先行するBitcoinとどこがどう異なるのか、Libraの社会的意義・狙いは何か、Libra発行により金融資本市場にどのような影響が生じるか、各国金融当局は何を心配していてどのような反応を示しているか、どのような規制策を検討しているか」程度には踏み込んだりサーチ・クエスチョンを考えさせる)。卒論執筆を通じて自分は何を理解したいと思っているか、何を新たな知識として習得したいと思っているか、自分のモチベーションをはじめに文章化し明確化しておくことが何よりも重要である。そのためには噛み砕いたサーチ・クエスチョンになるべく多く用意するよう指導することがポイントとなる。

リサーチ・プロポーザル

次のステップは卒論の提案書を作成させることである。そのためには、まず卒論の基本構造、すなわち論文は要約、序論、先行研究のサーベイ、調査分析方法（サーベイ手法、統計処理方法など）、作業スケジュール、参考文献といった構成要素から成り立っていることを説明したうえで、提案書のテンプレートを用いてまず実際にドラフトさせてみるのが有効な指導方法であるように思う。その作業を通じて、それぞれの構成要素で何を、どの程度の分量で、どのような詳しさを記述すべきなのか学生に体験させる。例えば序論ではリサーチの目的を明らかにし、どのようなリサーチ・クエスチョンを取り上げるのかを記述すべきなのだという原則ルール（論文作法）を具体的に理解させる。また、その過程で、論文執筆は一直線に進むことはありえず、行ったり来たりする試行錯誤の繰り返しになることも同時に体得することが期待される。そのほかの構成要素である先行研究のサーベイ、調査分析方法（サーベイ手法、統計処理方法など）、作業スケジュール、参考文献についても、紙面の都合でここでは詳述しないが、何を記述すべきかは自ずと類推で理解されよう。

こうした作業を繰り返し続けることにより、当初は大雑把な小見出しを書き出す程度に留まっていた作業が次第により深化・細分化したリサーチ・クエスチョン設定へと向かえば、卒論執筆にモメンタムが生まれた兆候であり喜ばしい。要は、骨格でしかなかった提案書が具体的なアクション・プランへと結びつくようになれば、自ずと卒論が形になってくることを体感できることになる（例えば「IMFやBIS等の国際機関、各国中央銀行、シンクタンクが発行している報告書やプロジェクト概要書を徹底的に読み込んで、各国当局がLibraの何を問題視して拒否反応を示しているか現状を把握するとともに、そこから何が汲み取れるかを調査分析する」のようにアクション・プランが具体化してくる）。

勿論、学生がリサーチ・プロポーザルに示した作業スケジュールに沿って粛々とリサーチを継続すると期待することは非現実的であろうから、時折中間チェックを行い、壁に突き当たっているようなら個別指導することは必須であろう。

英語動画の活用

英語論文指導に当たって海外著名大学で使用されているマニュアルとしては例えば下記があるが、どちらも定評あるテキストであり、推奨したい。

- ・ Adrian Wallwork (2016), *English for Writing Research Papers*, Springer
 - ・ Kate L. Turabian (2018), *A Manual for Writers of Research Papers, Theses, and Dissertations: Chicago Style for Students and Researchers*, University of Chicago Press
- ※東洋大学附属図書館OPACシステムにリンクしている。

また、英語論文執筆を指導する動画はYouTubeに多々アップされており、中でも海外著名大学が学部学生向けに作成した動画には参考になる点が少ない。さらに、On-line learningであるCourseraにもAcademic Writingを取り扱った優れた講座が存在する。論文執筆を学生に指導する際に活用すると良いと思う。

- ・ 英国レスター大学
https://youtu.be/1hVNF_8S6Ok
- ・ 英国ケンブリッジ大学
<http://sms.cam.ac.uk/media/1464870>

ダイバーシティ豆知識②

特別支援教育

今年度から新しい教職課程が始まりました。
この約20年振りの見直しでは、「特別支援教育」に関する科目が必修化されました。

特別支援教育の歴史は、2007(平成19)年4月に遡ります。
学校教育法一部改正により、「特殊教育」から「特別支援教育」に切り替わりました。

文部科学省のホームページによると、従来の「特殊教育」は、障害の種類や程度に応じて特別な場で手厚い教育をおこなうことに重点が置かれていました。それに対し、「特別支援教育」は、発達障害を含め、障害のある子ども一人一人の教育的ニーズに応じた支援をおこなうことに重点が置かれています。

したがって、特別支援教育は、特別支援学校や特別支援学級の特別な場だけではなく、特別な支援を必要とする児童生徒が在籍するすべての学校で実施されます。

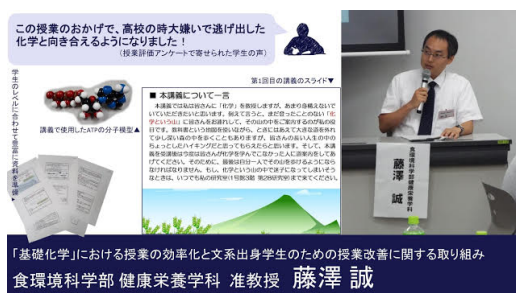
昨年末に公表された2018(平成30)年度「特別支援教育に関する調査」によると、国公立の小・中・高等学校において発達障害等のため通級による指導を受けている児童生徒数は過去最多の12万3千人（前年度より1万3千人増）に及ぶことがわかりました。

特別支援教育の実施から10年以上経ちますが、特別な教育的支援を必要とする児童生徒への指導や支援のさらなる充実が求められていることがうかがえます。

【2】コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く

こちらのコラムは、[高等教育推進センター公式ホームページ](#)においてもご覧いただけます。

第10回 「基礎化学」における授業の効率化と文系出身学生のための授業改善に関する取り組み 藤澤 誠（食環境科学部健康栄養学科 准教授・2018年度東洋大学優秀教育活動賞受賞）



はじめに

大学全入時代の学生の質保証のための授業の質的転換や成績評価の厳格化および単位制度の実質化への対応、さらに、国際化やクォーター制度への対応など、授業改善の悩みは尽きません。また、管理栄養士課程の食環境科学部健康栄養学科では文系科目での受験生を受け入れていることから、新入生は化学や生物の学力に大きな差があります。初年次教育での「基礎化学」では、4年間の勉学を意欲的に継続するために必要な化学の学力を身に付けてもらいつつ、学力の高い学生がさらに学びを深められるようにするため、日々試行錯誤しています。その一部の取り組みをご紹介します。

① 授業の効率化

授業の質的転換を図るためには、演習問題やグループワークなど学生のアウトプットの機会を増やす必要がありますが、講義内容を減らすずに実施するためには、授業の効率化が必須と考えました。そこで、最も短縮できそうな資料などの配布と回収の時間を減らすため、大学では異例の座席指定(学籍番号順)としました。スライドの印刷物も配布していますが、スライドが見えない学生のために一番前の座席は空けています。配布物は13部×8列分を用意しておくことで配布してから話を始めるまでの時間を大幅に節約できました。また、学籍番号順であることから、欠席確認が迅速かつ厳密に可能となり、試験や課題の回収後の採点・集計や学生への返却も効率よくできるようになりました。さらに、意外なことに、講義中の私語や睡眠がほぼ皆無となり、勉学に集中できる環境ができたうえ、学生の名前と顔も覚えやすくなるなど、多くのメリットがありました。一方で、授業評価アンケートでの学生の満足度は下がりました。座席選択の自由度の低下(エントロピーの減少)によるストレス(?)が原因かもしれませんが、講義が静かすぎたため、演習問題の答え合わせなど学生同士で話す機会を取り入れたことで改善されました。

② 文系出身学生のための授業改善と成績評価のための取り組み

文系出身学生は講義内容の復習と定着のための自主学習が必須です。そのため、講義の最初に、前週の講義内容から10問の小テスト(3分)と解説を導入しました。これは、知識の習得や思考力を養う他に、正確な学力の評価にも使える(定期試験だけでは標本が少なく)と考え、成績にも反映させています。また、健康栄養学科では、毎日8:00に問題が配信されるmanabaを活用したActive Learning Management System (Active-LMS)を実施しており、基礎化学の問題も毎週配信し、毎回少なくとも6割以上の学生からの提出がありました。そのほか、成績には反映させないものの自己学習の促進のため、演習問題や暗記カードを配布したり、さらなる学習に繋がるようにコラムを掲載したりしています。また、特に学力に不安のある学生(例年5~10名程度)に対しては、複数回の補習を実施して不安を取り除けるように支援しています。

【3】高等教育政策動向等

1) 【マイナビ】「マイナビ大学生低学年のキャリア意識調査」発表

大学生低学年（1、2年生）の4人に1人が、すでにインターンシップに参加しており、今後参加したいという回答も78%に及ぶことがわかりました。

(2020/1/9)

https://www.mynavi.jp/news/2020/01/post_22153.html

2) 【科学技術・学術政策研究所】「博士課程在籍者のキャリアパス意識調査：移転可能スキルへの関心と博士留学生の意識」公表

下記の内容について調査、分析がおこなわれました。

- 1) 博士課程在籍者等のキャリアパスに関する意識調査
- 2) 博士課程在籍者等の移転可能スキルに関する意識調査
- 3) 博士留学生等のキャリアパス意識調査

(2020/1/6)

<https://www.nistep.go.jp/archives/43565>

3) 【文部科学省】大学入試のあり方に関する検討会議 設置

付録

—東洋大学高等教育推進センターニュースレター Vol.2 アーカイブ

大学入試における英語4技能の評価や記述式出題を含めた大学入試のあり方について検討を行うための会議が設置されました。

(2019/12/27)

https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/mext_00063.html

また、非公開としていた会議の議事録が公開されました。

- ・大学入試英語4技能評価ワーキンググループ

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/101/index.htm

- ・「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」検討・準備グループ(平成28年5月～平成29年3月)

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/100/index.htm

4) 【科学技術・学術政策研究所】「大学と民間企業による協働研究開発システムの実態 ―工学系の事例研究―」公表

(2019/12/27)

<https://www.nistep.go.jp/archives/43574>

5) 【文部科学省】「新しい時代の初等中等教育の在り方 論点取りまとめ」公表

(2019/12/26)

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1382996_00003.htm

6) 【文部科学省】私立大学等の平成30年度入学者に係る学生納付金等調査結果 公表

(2019/12/25)

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shinkou/07021403/1412031_00001.htm

7) 【文部科学省】教学マネジメント特別委員会 終了

詳細は、下記の関連リンクにてまとめられていますので、ぜひご覧ください。

(2019/12/17)

<https://www.mext.go.jp/kaigisiryu/2019/12/000002840.html>

関連リンク：Between「教学マネジメント特別委員会が終了、年明けに指針公表へ」

<http://between.shinken-ad.co.jp/univ/2019/12/kyogakumanagement.html>

- ◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

- ◆海外については、下記のWebサイトをご確認ください。

- ・高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES (大学改革支援・学位授与機構)

- ・海外学術動向ポータルサイト (日本学術振興会)

【4】高等教育推進センターからのお知らせ

2/14(金)開催 FD・SD研修会「授業運営で留意したい改正著作権法」

高等教育推進センターでは、2019年度FD・SD研修会「授業運営で留意したい改正著作権法」を開催する運びとなりましたので、ご案内申し上げます。みなさまのご参加をお待ちしております。

〔開催趣旨〕

2018年5月、ICT活用教育を促進するための改正著作権法が成立しました(2020年4月1日施行予定)。本学においてもToyoNet-ACE等のICTツールの利用が普及し、どこからが著作権の侵害になるのかといった問い合わせを受けることも多くなりました。つきましては、改正著作権法が認める教育利用上の例外や公衆送信権の取扱の変更についてのFD・SD研修会を開催いたします。先生方が安心して教材を作成し、配布することができるよう、授業運営において知っておきたい知識を中心にお話しいたします。

日時：2020年2月14日(金) 14:00～16:00(開場 13:30～)

場所：白山キャンパス 125記念ホール(8号館7階)

※各キャンパスにWebexビデオ配信いたします

朝霞 第3会議室 川越 第3会議室

板倉 小会議室 赤羽台 事務課奥会議室

対象：本学教職員および非常勤講師

申込方法：webフォームから申し込みをお願いいたします。※2020年2月6日(木)〆切

■ <https://bit.ly/2KYIPx3>

付録

—東洋大学高等教育推進センターニュースレター Vol.2 アーカイブ



3/9(月)開催 英語で授業をおこなうためのFD研修会

2014年度より大変好評をいただいております「英語で授業を行うためのFD研修会」(BRITISH COUNCIL大学教員向け英語研修プログラム)について、「講義とプレゼンテーション(導入)」「講義とプレゼンテーション(発展)」「アカデミックライティング(導入)」の3つのプログラムを同時開催いたしますので、下記のとおりご案内申し上げます。なお、「講義とプレゼンテーション(発展)」は初開講のプログラムです。みなさまのご参加をお待ちしております。

日時：2020年3月9日(月)10:00～17:10

場所：白山キャンパス(詳細は追ってご連絡いたします)

対象：本学専任教員

講師：British Council専任英語講師

申込方法：webフォームからお申込みください。※2020年1月27日(月)〆切

■ <https://bit.ly/2rq6YpC>



【5】 LINK

- ◆ 学外FD・SD研修会への参加申込
- ◆ English Support Service (ESS)
- ◆ 高等教育関連図書のご案内
貸出申込フォーム
- ◆ 本ニュースレターへの投稿

【6】 あとがき

新年あけましておめでとうございます。

2020年のニュースレターは英語卒論指導に関するコラムからスタートしました。

英語卒論と聞くと、大学時代のある友人を思い出します。

一緒に勉強するときはいつも、英語を書いていた。

日頃の授業で課される日記やレポート、3年次に提出するミニ英語卒論、そして英語卒論。

4年間こつこつと英文を書き続けていた姿に刺激を受けていました。

このニュースレターも引き続きこつこつと配信していきたいと思います。

本年もご愛読のほどどうぞよろしくお願いいたします。

●みなさまの声をお寄せください

これまでのニュースレターに対する

ご意見・ご感想・ご要望、応援メッセージなどを下記のフォームで募集中です。

些細な内容でも構いませんのでお寄せいただけますと幸いです。(匿名OKです)

リンク：<https://goo.gl/forms/q14H9oRjlAU9uG9C3>

企画
高等教育推進センター
高等教育研究部会

発行元
東洋大学 高等教育推進センター
〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20
E-mail: mlfdjimu@toyo.jp
HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>
ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

- ◆このメールは本学教職員にお届けしています。
 - ◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。
ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。
 - ◆このメールの再配信、および掲載された記事の無断転載を禁じます。
- © 2018-2020 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター 2020年1月28日 Vol.2, No.19（通算第33号）

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

- 【1】シリーズ3 | 東洋大学におけるダイバーシティとその対応に向けて
第3回 大学院教育におけるダイバージェンス（金子 友裕）
- 【2】高等教育政策動向等
- 【3】高等教育推進センターからのお知らせ
 - ・【申込受付中】2/14(金)開催 FD・SD研修会「授業運営で留意したい改正著作権法」
 - ・【申込期間延長】3/9(月)開催 英語で授業をおこなうためのFD研修会
- 【4】LINK
- 【5】あとがき

【1】シリーズ3 | 東洋大学におけるダイバーシティとその対応に向けて 第4回 大学院教育におけるダイバージェンス 金子 友裕（経営学研究科 教授・高等教育研究部会 部会員）

社会人大学院生の特徴と問題

経営学研究科ビジネス・会計ファイナンス専攻では、平成29（2017）4月から、税理士養成に特化した「税理士養成プログラム」を開始している。このプログラムでは、税理士試験の科目免除を可能とする研究・教育（論文指導）体制を整えることとしている。このプログラムに基づき税理士試験科目免除を希望する学生がいるが、この多くが社会人大学院生である。

筆者はまだ数年しか大学院教育に関与していないため、十分な経験に基づくとは言い難いが、実務経験の長い社会人大学院生の中には共通の特徴があるように思われる。

社会人大学院生の多くが、長い社会経験の中で、実務をよく理解し、基礎的な知識の習熟が済んでいる。この点は、その分野の問題点の抽出等において有用であり、修士論文作成に望ましい要素である。しかし、一方では、理論的な考察が要求されるときに、「実務ではこのような処理しています」等の意見を聞くことになるが、このような指摘は指導上困るものである。なぜなら、このような指摘をしているときに学生は、思考停止に陥っているからである。その処理は理論的・制度的に問題はないのか、なぜ実務でそのような処理をしているのか、等を考察して欲しいのである。

長年の経験等を示してもらふことは、実務経験のない（または少ない）大学教員にとって興味深いものであることもある。しかし、論理的な帰結として自分の主張に至るプロセスを説明して欲しい時にまで、自分以外の他者（多くは財務省や国税庁等）の結論（通達等で示される取扱い）のみを示して満足してしまう（思考停止してしまう）ことがあり、ここに大きな問題を感じている。

社会人大学院生への大学院教育

このような社会人大学院生については、修士課程の2年間で論理的な考察というものを身に付けることが大きな課題となる。なお、社会人大学院生の知識等にはばらつきがあり、実務に必須な内容はよく理解・習熟しているが、基礎的な概念等が不足している場合も多い。しかし、この点は、1年生の講義科目等の学習や自分の報告等を通じて、ある程度対応しているように思われる。このため、修士論文作成に関する指導では、論理的な考察が大きな課題となることが多い。

大学生に対する教育であれば、ほぼ白紙の状態から論理的な考察というものを教育していくことになるが、社会人大学院生については実務経験に基づく思考停止（または思考の放棄）が常態化している場合があり、この解消から始める必要がある。この解消には、前述のように、その処理は理論的・制度的に問題はないのか、なぜ実務でそのような処理をしているのか、等を考察する必要があることを説明し、この考察はどのように行すべきかを考える習慣を身に付ける必要があることを繰り返し説明することになる。

ゼミ等における大学生に対する教育でも、論理的な考察を理解・習熟してもらうには苦労が絶えないが、社会人大学院生には、大学生とは異なる

る特徴があり、この特徴を意識した教育が必要であると感じている。

ダイバーシティ豆知識③

「2040年を見据えた大学院教育のあるべき姿」（審議まとめ）

昨年1月、中央教育審議会大学分科会は「2040年を見据えた大学院教育のあるべき姿～社会を先導する人材の育成に向けた体質改善の方策～」を取りまとめました。

大学院が2040年の社会の需要に応える存在であるために、様々な方策が提言されています。

金子先生にご紹介いただいた、ビジネス・会計ファイナンス専攻が展開する上記の教育プログラムのように、平日夜間と土曜日に授業を開講するなど、社会人の学修ニーズに応えるリカレント教育の充実もその方策の一つとして提言されています。

また、ダイバーシティの観点では、大学教員養成としてのブレFD実施・情報提供の努力義務化だけではなく、「将来に向けて博士課程修了者の高度な専門性や幅広い能力を多様な場で活用していくためには、起業という選択肢も含め、大学以外の場や研究者以外の進路も拡大していくことが必要である」と指摘されています。

【2】高等教育政策動向等

1) 【内閣府】「研究力強化・若手研究者支援総合パッケージ」決定

総合科学技術・イノベーション会議（第48回）にて決定しました。

（2020/1/23）

<https://www8.cao.go.jp/cstp/siryo/haihui048/haihu-048.html>

2) 【文科省】令和元年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査（12月1日現在）公表

大学生の就職内定率：87.1%（前年同期比0.8ポイント低下）

※平成9年3月卒の調査開始以降、2番目に高い数値となり、引き続き高い水準を維持。

（2020/1/17）

https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/11/1422624_00001.htm

3) 【文科省】平成30年度 大学等における産学連携等実施状況 調査結果公表

（2020/1/17）

https://www.mext.go.jp/a_menu/shinkou/sangaku/1413730_00005.htm

4) 【文科省】大学入試のあり方に関する検討会議（第1回）

議事録：https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/103/gijiroku/mext_00148.html

配布資料：https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/103/siryo/1417595_00001.htm

（2020/01/15）

関連リンク：Between情報サイト「4技能評価等再検討の有識者会議—『入試で教育を変える』に異議」

<http://between.shinken-ad.co.jp/hu/2020/01/nyushi.html>

5) 【リクルート進学総研】カレッジマネジメント Vol.220 Jan.-Feb. 2020「中期計画で実現する大学の未来」刊行

2020年4月私立学校法改正により、中期計画の策定が義務付けられます。

各大学の中期計画の策定状況について、両角准教授（東京大学大学院）と合同による調査分析結果が特集されています。

（2020/1/10）

http://souken.shingakunet.com/college_m/

〔参考〕高等教育関連の刊行物（オンラインで無料で購読可）

・大学時報（日本私立大学連盟）

<https://daigakujihou.shidaiaren.or.jp/>

・カレッジマネジメント（リクルート進学総研）

http://souken.shingakunet.com/college_m/

・Between（Benesse）

<http://between.shinken-ad.co.jp/between/>

・大学教育と情報（私立大学情報教育協会）

<http://www.juce.jp/LINK/journal/index.html>

・Guideline（河合塾）

6) 【私情協】大学における数理・データサイエンス・AI教育支援プラットフォーム オープン

同協会データサイエンス教育分科会が収集した情報が掲載されています。

(2019/12/23)

<http://www.juce.jp/datascience/>

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

- ・高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES (大学改革支援・学位授与機構)
- ・海外学術動向ポータルサイト (日本学術振興会)

【3】高等教育推進センターからのお知らせ

【申込受付中】2/14(金)開催 FD・SD研修会「授業運営で留意したい改正著作権法」

高等教育推進センターでは、2019年度FD・SD研修会「授業運営で留意したい改正著作権法」を開催する運びとなりましたので、ご案内申し上げます。みなさまのご参加をお待ちしております。

〔開催趣旨〕

2018年5月、ICT活用教育を促進するための改正著作権法が成立しました(2020年4月1日施行予定)。本学においてもToyoNet-ACE等のICTツールの利用が普及し、どこからが著作権の侵害になるのかといった問い合わせを受けることも多くなりました。つきましては、改正著作権法が認める教育利用上の例外や公衆送信権の取扱の変更についてのFD・SD研修会を開催いたします。先生方が安心して教材を作成し、配布することができるよう、授業運営において知っておきたい知識を中心にお話しいたします。

日時：2020年2月14日(金) 14:00～16:00(開場 13:30～)

場所：白山キャンパス 125記念ホール(8号館7階)

※各キャンパスにWebexビデオ配信いたします

朝霞 第3会議室 川越 第3会議室

板倉 小会議室 赤羽台 事務課奥会議室

対象：本学教職員および非常勤講師

申込方法：webフォームから申し込みをお願いいたします。※2020年2月6日(木)〆切

■ <https://bit.ly/2KYIPx3>



【申込期間延長】3/9(月)開催 英語で授業をおこなうためのFD研修会

※※席に余裕がございますので、申込期間を延長いたします。※※

※※1/28(火)以降のお申し込みは、先着順といたします。※※

2014年度より大変好評をいただいております「英語で授業を行うためのFD研修会」(BRITISH COUNCIL大学教員向け英語研修プログラム)について、「講義とプレゼンテーション(導入)」「講義とプレゼンテーション(発展)」「アカデミックライティング(導入)」の3つのプロ

グラムを同時開催いたしますので、下記のとおりご案内申し上げます。なお、「講義とプレゼンテーション（発展）」は初開講のプログラムです。みなさまのご参加をお待ちしております。

日時：2020年3月9日(月)10:00～17:10

場所：白山キャンパス（詳細は追ってご連絡いたします）

対象：本学専任教員

講師：British Council専任英語講師

申込方法：webフォームからお申込みください。

■ <https://bit.ly/2rq6YpC>



【4】 LINK

- ◆学外FD・SD研修会への参加申込
- ◆English Support Service (ESS)
- ◆高等教育関連図書のご案内
貸出申込フォーム
- ◆本ニュースレターへの投稿

【5】 あとがき

これまでのニュースレターに対する
ご意見・ご感想・ご要望、応援メッセージなどを下記のフォームで募集中です。
些細な内容でも構いませんので皆様のお声をお寄せいただけますと幸いです。

フォーム：<https://goo.gl/forms/q14H9oRjIAU9uG9C3>

企画
高等教育推進センター
高等教育研究部会

発行元
東洋大学 高等教育推進センター
〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20
E-mail: mlfdjimu@toyo.jp
HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>
ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

- ◆このメールは本学教職員にお届けしています。
 - ◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。
ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。
 - ◆このメールの再配信、および掲載された記事の無断転載を禁じます。
- © 2018-2020 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター
2020年2月18日 Vol.2, No.20 (通算第34号)

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

- 【1】シリーズ3 | 東洋大学におけるダイバーシティとその対応に向けて
第5回 障がい学生支援におけるキャンパスソーシャルワーカーの役割 (佐藤 亜樹)
- 【2】コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く
第11回 ENGLISH PRESENTATION II と SGUルーム (内丸 公平)
- 【3】高等教育政策動向等
- 【4】高等教育推進センターからのお知らせ
 - ・ **【申込期間延長】** 3/9(月)開催 英語で授業をおこなうためのFD研修会
- 【5】LINK
- 【6】あとがき

【1】シリーズ3 | 東洋大学におけるダイバーシティとその対応に向けて
第5回 障がい学生支援におけるキャンパスソーシャルワーカーの役割
佐藤 亜樹 (社会学部社会福祉学科 准教授・高等教育研究部会 部会員)

本稿では、障がいのある学生が学業に集中し、安心して大学生活を送ることを可能にするために、大学側にはどのような対応が求められるのかを、キャンパスソーシャルワーカーという新しい職種の業務を概観することを通して、考察していく。

ところで皆さんは、キャンパスソーシャルワーカーという職種について見聞きしたことがあるだろうか。また、キャンパスソーシャルワーカーには、どのような資格が求められ、どのような役割を果たしているのかご存知だろうか。筆者は、社会福祉学研究科及び社会学部社会福祉学科にて、ソーシャルワークという名のついた科目をいくつも担当し、ソーシャルワークとは何かについて日々学生に教えている。にもかかわらず、この職種についてはまったく知識がなかった。障がい学生の学習権の保障のために、白山キャンパス常駐のキャンパスソーシャルワーカーと2019年3月に協働を開始するまで、その存在さえ知らなかった。

日本全国で活動するキャンパスソーシャルワーカー同士の情報交換と相互支援のために立ち上げられたキャンパスソーシャルワークネットワーク(2013)によれば、キャンパスソーシャルワーカーとは、「大学で働く福祉職(社会福祉士・精神保健福祉士)であり、...大学生特有の問題や様々な生活問題の相談を受けている。時代や社会の変化から生じる学生の課題を見極め、学生の求める支援に応じた対応を行う。学内の教職員や他の専門職、家族、学外の関係機関との連携を図りながら、学生自身が自らの力で問題解決できることを大切に活動を行う」と定義されている。つまり、大学生活における学生の学習権を保障し、大学生活上の多様な問題の解決に向けて、学生本人の自己決定を尊重しながら、本人やその家族、また、教職員を含む学内外の関係者・機関と連携しながら支援を行う専門職であるといえよう。

2014年に東海大学の長沼が実施した科研費調査(基盤研究C:25380837)によれば、郵送した質問紙調査に回答した439大学のうちの59大学が、社会福祉士や精神保健福祉士の有資格者をキャンパスソーシャルワーカーとして雇用していることがわかった。その職務内容は主に、「学生や家族への個別支援(78.3%)」であり、次いで「発達障がいのある学生への対応(73.9%)」「精神障がいのある学生への対応(63.0%)」「身体障がいのある学生への対応(50.0%)」であった。さらに「学生対応に悩む教職員へのコンサルテーション(45.7%)」も行っており、その対象には教職員も含まれていることがわかる(キャンパスソーシャルワークネットワーク2014)。その他にも、「性教育や望まない妊娠への対応(4.3%)」や「セクシュアルアカデミック・ハラスメントへの対応(21.7%)」「自殺予防・自殺対策(32.6%)」等も主たる業務であるが、障がい学生への対応業務が圧倒的に多いことがわかる。

筆者は2019年度から、東洋大学における全学障がい学生支援委員会に出席し、学内支援サービスを受けている学部別の障がい学生総数の一覧を目にする機会がある。そのことから、社会学部所属の学生によるサービス申請利用が最多であることを知った。また、最近の傾向として、秋学期になってもわずかではあるものの新規申請が続いており、特に発達障がいと精神障がいのある学生からの申請増加が著しいことがわかった。筆者は今年度初めて、担当学生からの授業等への合理的配慮に係る申請の一連のプロセスに関わることを経験した。そのプロセスの一環として、学生本人とその保護者、キャンパスソーシャルワーカー、学内の臨床心理士、教務課職員等との会合に出席し、相互に情報共有を行い、問題解決の方法や手続きについての話し合いを重ねた。このプロセスでは、まずは本人が抱える悩みや不安、問題を傾聴し受容する。その後、本

人の意向を尊重しながら、どのようにすれば学生の学習権を保障することができるのかを、参加者全員が模索する。本会合の利点は、学生本人のみ、もしくは一部の関係者のみでのやりとりではわからなかった問題や状況の全貌が、関係者一堂が対面し話し合うことにより明らかになることである。この会合では、不安や問題に押しつぶされそうな中で、学生本人がどのように考え、判断し、行動したのか、また、関係者はどのようなことに不安を感じ疑問を抱いているのか、学生生活をスムーズに送るためにはどのようなサービスが適しているのか、学生はそのサービスを期待しているのか、それが安全で安心な学生生活に結び付くのか等を率直に話し合い、全体としてどちらの方向を向いて対応していくのかを考えていく。このプロセス自体が、学生の福利向上のために不可欠であることを実感している。このことは、ゼミ担当教員が、学生が抱える不安や問題を一人で抱え込むことを防ぎ、間接的にはあるものの、教員が教育や研究等の本来業務に集中することを促し、支えることにつながっているといえよう。

前述したキャンパスソーシャルワークネットワーク（2014）はまた、大学管理者から見たキャンパスソーシャルワーカー配置の効果として、「学生への支援について教職員で話し合う機会が増えた」「学生が学内の支援部署につながった」「学生の生活状況が多面的に把握できるようになった」等を挙げ、教職員間の連携が強化されたことを示している。これらの評価は、今回筆者が感じたキャンパスソーシャルワーカー配置の効果と一致している。

大学入学は人生における一大イベントである。それは時として、高校までの固定化された「学級（居場所）」の消失を意味する。さらに親元を離れ、一人暮らしを始めるとなれば、家族や友人等の重要な他者との関係も希薄となり、おまけに新しい関係構築まで求められるのである。このように、彼らを取り巻く環境もそれまでとは大きく変化することから、彼らが感じるストレスは相当なものになると考えられる。心身に障がいがあれば、そのストレスはさらに増大するのではないだろうか。一方で、大学教職員の業務や責任は年々増加しており、教職員は疲弊している。そのような状況下で、担当ゼミの教員や一部の職員が、学生に関するすべての問題を抱え込むには限界がある。障がいのある学生が実り多い大学生活を送り、また、教職員が本来業務に十分な時間を費やすことを可能にするキャンパスソーシャルワーカーへの期待は大きい。

参考文献

キャンパスソーシャルワークネットワーク（2013）「広がっています！キャンパスソーシャルワーカーのわ：大学にキャンパスソーシャルワーカーを導入しませんか」

https://drive.google.com/file/d/0B5gGla4cn4W_VE5GUTVfZktXMms/view
（最終閲覧2020年2月13日）

キャンパスソーシャルワークネットワーク（2014）「キャンパスソーシャルワーカーの活用に関する2014年全国調査」

https://drive.google.com/file/d/0B5gGla4cn4W_Uy1Gdmp3TjZ0UjA/view
（最終閲覧2020年2月13日）

【2】コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く

こちらのコラムは、[高等教育推進センター公式ホームページ](#)においてもご覧いただけます。

第11回 ENGLISH PRESENTATION II と SGU ルーム

内丸 公平（総合情報学部総合情報学科 助教・2018年度東洋大学優秀教育活動賞受賞）



総合情報学部の必修英語はすべて統一教科書・統一シラバスのため、基本的にはシラバスに沿った授業を行うことが求められますが、シラバスの目標を最大化するためにEnglish Presentationの授業で行ったさまざまな工夫のうち、ひとつだけご紹介させていただきます。

当該授業は学生が英語でプレゼンできることを目標としているため、まずスピーキングを習慣化させる必要があると考えました。そこで、毎回、授業の最初の数分間を使って「一分間トーク」というペアワークを実施しました。このペアワークでは、一方の学生が一分間、英語でスピーチを行っているあいだ、もう一方の学生がワードカウンターのワークシートを用いて、パートナーが何語発話できたのかを計測します。ペアワークでスピーチの練習をしても、相手の英語にきちんと耳を傾ける学生は稀ではないかと思いますが、相手の単語数を計測するというタスクを課すことで、しっかりと相手の話にも耳を傾けようとする姿勢が生まれたように思います。

本学部では英語に苦手意識を持つ学生が多いため、トークのトピックが日常的かつ自由になりすぎると、かえって英語が出てこないのではないかという懸念があったため、課題として書いてきた英語プレゼンのスクリプトについて話してもらいました。一度自分で書いた英語であるため、学生たちも話しやすかったようです。実際に学生の多くは一分間途切れることなく、ミニプレゼンを行っていました。

このように授業の冒頭でミニプレゼンを行い、授業の後半でPCを利用してペアでプレゼンの練習を行うという授業を行うことで、スピーチの習慣化に務めました。また、SGU ルームという英語学習支援室を開設しているため、試験前など授業外でも希望者には添削や指導を行うことができました。

【3】高等教育政策動向等

1) 【大学入試センター】令和2年度大学入試センター試験実施結果の概要 公表

(2020/2/6)

https://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00038209.pdf&n=%E5%88%A5%E6%B7%BB%E5%BC%91_%E5%A0%B1%E9%81%93%E7%99%BA%E8%A1%A8_%E5%AE%9F%E6%96%BD%E7%B5%90%E6%9E%9C%E3%81%AE%E6%A6%82%E8%A6%81.pdf

2) 【大学入試センター】令和3年度大学入学選抜に係る大学入学共通テストの出題方法等の変更について

(2020/1/29)

<https://www.dnc.ac.jp/news/20200129-01.html>

3) 【リクルート進学総研】第9回 高校生と保護者の進路に関する意識調査2019 公表

(2020/1/29)

<http://souken.shingakunet.com/research/2010/07/post-7a54.html>

4) 【大学分科会】「教学マネジメント指針」公表

(2020/1/22)

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360_00001.html

関連リンク：Between情報サイト「教学マネジメント指針公表—『学修者目線』への転換を促す」

<http://between.shinken-ad.co.jp/univ/2020/02/kyogakumanagement.html>

5) 【著作物の教育利用に関する関係者フォーラム】「改正著作権法第35条運用指針策定に関する論点整理」公表

(2020/1/20)

<https://forum.sartras.or.jp/info/003/>

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

- ・高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES (大学改革支援・学位授与機構)
- ・海外学術動向ポータルサイト (日本学術振興会)

【4】高等教育推進センターからのお知らせ

【申込期間延長】3/9(月)開催 英語で授業をおこなうためのFD研修会

2014年度より大変好評をいただいております「英語で授業を行うためのFD研修会」(BRITISH COUNCIL大学教員向け英語研修プログラム)について、「講義とプレゼンテーション(導入)」「講義とプレゼンテーション(発展)」「アカデミックライティング(導入)」の3つのプログラムを同時開催いたしますので、下記のとおりご案内申し上げます。なお、「講義とプレゼンテーション(発展)」は初開講のプログラムです。みなさまのご参加をお待ちしております。

日時：2020年3月9日(月)10:00～17:10

場所：白山キャンパス(詳細は追ってご連絡いたします)

対象：本学専任教員

講師：British Council専任英語講師

申込方法：webフォームからお申込みください。※1/28(火)以降のお申し込みは、先着順

■ <https://bit.ly/2rq6YpC>



【5】 LINK

- ◆学外FD・SD研修会への参加申込
- ◆English Support Service (ESS)
- ◆高等教育関連図書のご案内
貸出申込フォーム
- ◆本ニュースレターへの投稿

【6】 あとがき

先週の金曜日、2019年度FD・SD研修会「授業運営で留意したい改正著作権法」を開催しました。
高等教育推進センター主催で "SD" がついた研修会をはじめて、
テレビ会議システムを利用した多地点開催もはじめて、とはじめて続きのイベントでしたが、
講師を務めてくださった安藤先生、藤原さん、企画してくださった高等教育推進委員会の先生方、
会場およびテレビ会議システムの設営を手伝ってくださった
情報システム課の皆さま、各キャンパスの職員の皆さまのご協力を賜り、
そして参加者の皆さまのおかげで、盛会のうちに終えることができました。
心よりお礼を申し上げます。

当日の配布資料をToyoNet-ACEにて公開しています。下記URLからアクセスください。
また、収録した動画を絶賛編集集中ですので、公開次第、お知らせします。

URL: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2736777c1263429_3490414623

- みなさまの声をお寄せください
これまでのニュースレターに対する
ご意見・ご感想・ご要望、応援メッセージなどを下記のフォームで募集中です。
些細な内容でも構いませんのでお寄せいただけますと幸いです。（匿名OKです）
リンク: <https://goo.gl/forms/q14H9oRjlAU9uG9C3>

企画
高等教育推進センター
高等教育研究部会

発行元
東洋大学 高等教育推進センター
〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20
E-mail: mlfdjimu@toyo.jp
HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>
ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

- ◆このメールは本学教職員にお届けしています。
 - ◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。
ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。
 - ◆このメールの再配信、および掲載された記事の無断転載を禁じます。
- © 2018-2020 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター 2020年3月3日 Vol.2, No.21（通算第35号）

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

- 【1】シリーズ3 | 東洋大学におけるダイバーシティとその対応に向けて
第6回 短期海外研修Diversity Voyageに参加した学生が考えるダイバーシティ
- 【3】高等教育政策動向等
- 【4】高等教育推進センターからのお知らせ
 - ・【動画公開】2019年度FD・SD研修会「授業運営で留意したい改正著作権法」
 - ・【開催延期】英語で授業をおこなうためのFD研修会
- 【5】LINK
- 【6】あとがき

【1】シリーズ3 | 東洋大学におけるダイバーシティとその対応に向けて 第6回 短期海外研修Diversity Voyageに参加した学生が考えるダイバーシティ 話し手：Pさん（学部4年生・2017年夏Diversity Voyage参加） 聞き手：矢野 智子（高等教育推進センター センター員・高等教育研究部会 部会員）

東洋大学にあるダイバーシティとは何だろうと考えたとき、最初に思い浮かんだのが、国際教育センターとグローバル教育推進プロジェクト（GIFT）による短期海外研修Diversity Voyageでした。というのも、同じ部署で学生アルバイトをしているPさんが参加していたのですが、参加の前と後で、表情も行動も驚くほど変わったのです。加えて、本学が実施している学生アンケートにおいても「Diversity Voyageを全学部卒業必須科目にしてほしい」という旨のコメントが寄せられているそうで、いったいどんな海外留学プログラムなのか気になっていました。そこで第6回は、Diversity Voyageに参加したPさんにインタビューをし、Diversity Voyageでの経験と、その経験を通じてPさんが感じ、考えた「ダイバーシティ」を聞くことにしました。

環境を変えて、自分と向き合いたかった

— Diversity Voyageについて教えてください。

Diversity Voyageは、東南アジアの都市で、現地の学生と一緒に現地の課題解決に取り組む9日間の短期海外研修プログラムです。春と夏の年2回開催されていて、すべての学部生・大学院生が参加できます。わたしは、大学2年生の夏に、タイのバンコクに行きました。これがはじめての海外でした。プログラムを通して、「タイ人の野菜摂取量を増やすためには？」という課題に対し、現地の学生2人と東洋大生3人のチームで、アクションプランを考えました。

— なぜ、この研修プログラムに参加しようと思ったのでしょうか。

もともと、大学に入学する前から、時間がたっぷりある大学生の間に海外に行きたいという気持ちがありました。東洋大学にはさまざまな海外留学プログラムがありますが、「本気で自分のグローバルに向き合う9日間」というDiversity Voyageのサブタイトルに惹かれたのが一番の理由です。今思い返すと、自分とは何者かと無意識に考え、ふさぎ込んでいた自分と深く向き合うきっかけが欲しかったのだと思います。

— はじめての海外、バンコクはどうでしたか。

出国する前に開催された事前研修から、穴があれば入りたい気持ちでした。実際に、事前研修は寝坊しましたし、パスポートの手続きも憂鬱でした。しかし、いざバンコクに到着してみると、驚きと感動の連続でした。まず、漂う匂いの違いに驚きました。そして、交通量の多さに驚くとともに、バンコクの街を走る車のほとんどが日本車だったので、日本の素晴らしさをはじめて感じました。一方で、出国する前から抱えていた、人間関係はうまくいこうかという心配な気持ちは、到着してからもしばらくは拭えずにいました。

「安心できる場所」の存在

― そのネガティブな気持ちをどのように対処しましたか。

最初のきっかけは、不安を燃やしたことです。到着して2日目の朝、グループ活動が始まる前に、自分の中にある不安をすべて書き出すというワークをしました。そのワークの最後に、不安を書き出した紙を火の中に入れました。紙が燃えて、消えていく様子を目の当たりにして、ほんとうに不安が消えてなくなってしまったような気がしました。

そして、毎晩、東洋大学から参加した学生20名が集まるチェックアウトという時間のおかげでもあります。チェックアウトでは、一人ずつ、その日一日感じたことをみんなの前で語ります。ルールがいくつかあるのですが、姿勢を正しくする、話したい人から話し始める、話している人にはただ黙って耳を傾ける、などです。時間の制限はありません。みんなが語り終わるまで、毎回2〜3時間は経っていたと思います。Diversity Voyageに参加するまで、自分の感情をだれかの前で吐き出すという経験がありませんでした。チェックアウトを通して、みんなもわたしと同じように心の中では葛藤や悩みを抱えている、そして飾らない自分の話を聞いてくれる人がいることに気づかされました。

― プログラムの中で安心できる場所があったんですね。一方で、日中のグループ活動では、言語の壁はありませんでしたか。

現地の学生は英語のレベルが非常に高く、世界にはこんな人たちがいるんだと圧倒されました。ですが、現地の学生は建設的なコミュニケーションを交わすことに重きを置いていたので、文法的な誤りに対するわたしの恐怖心は次第に薄れ、純粋にことばのやり取りを楽しむことができていたように思います。とはいえ、英語を話すわたしは、赤ん坊のようだったと自分でも分かっています。そういう意味では、夜のチェックアウトで日本語を使って深い対話をする中で、知的なバランスが保たれていたように感じています。



写真 | 事前研修から事後研修まで、
さまざまな思いや考えがワークシートに書き込まれていました

知らなかった自分の発見

― プログラムの中で印象的だった出来事がありますか。

フィールドワークの一環として、バンコクのマクドナルドで突撃インタビューをしたのですが、英語でできたんです!! 先ほどもお話ししたように、人間関係の構築に関しては苦手意識を持っていて、人とのコミュニケーションは恐怖でしたが、まさに自分の殻を破った瞬間でした。うれしくなって、話しかけたい衝動にかけられて、最終日には近くに知らない人に次々に話しかけていました。そこには、知らない自分がありましたね。笑

― 9日間という短い期間で変化があったんですね。長期的に見て、帰国後、学びに向かう姿勢は変化しましたか。

学びたい気持ちがいっそう強くなりました。帰国後、3年生の一年間、協定校の東京外国語大学でタイ語の科目を履修し、単位を修得しました。昼は外大、夜は東洋で勉強していました。実は、Diversity Voyageから帰国後、一人でバンコクに行ったのですが、衣料品店で値切り交渉に成功しました。もちろんタイ語です!

ほかにも、熱中できることに出会えました。3、4年のゼミです。卒業論文は必須ではなかったのですが、執筆して、賞をいただくことができました。日本語だけではなく、英語で書かれた文献を読むことにも抵抗がなかったですね。

エンパシーを持って航海してほしい

― Diversity Voyageを経験して、研修名にもありますが、「ダイバーシティ」とは何だと思いましたか。

わたしにとってのダイバーシティの根本は、自分の存在を認めることだと思います。自分の良いところも悪いところも受け入れる。そして、自分を受け入れてはじめて、知らなかった文化や価値観を受け入れる余白ができると思います。この状態が、個人の中のダイバーシティだと思います。一人ひとりに、この状態が広がっていくことを願っています。

また、Diversity Voyageを経験して、多様な文化、価値観、考え方をを持った人と協働するときに必要な力は、"Empathy"、日本語にすると「共感力」だと実感しました。思いに寄り添い、共感することで、人とさらに繋がることができるとわかりました。現地の学生とのグループ活動、チェックアウト、夜中の4時まで語り合った何気ない時間は、エンパシーのやり取りの時間だったと思います。

この春、大学を卒業して、社会人になります。人事部の方からは、いろんな能力を持った人を採用し、多様性を意識していると言われてます。きっと、Diversity Voyageでの経験が生きてくると思っています。

― さいごに、東洋大学にメッセージをお願いします。

まず、学生のみなさん。東洋大生全員にDiversity Voyageに参加してほしいです。9日間という期間は、楽しくても、苦しくても、精神的に留学しやすい長さです。金銭的にも比較的手ごろです。なんとなく寂しい気持ちを持っている人、がんばった経験がない人には特におすすめしたいです。Diversity Voyageは、短期海外「研修」と言われていますが、形式的で一方通行の研修ではありません。寄せては返す海を渡る航海の旅でした。躓いたときには、「エンパシー」を思い出してください。ぜひみなさんに、航海に出てほしいです。

そして、先生方、職員の方にもDiversity Voyageを知ってもらいたいです。よく大学でも先生方、職員の方向けの「研修会」があると聞きました。どうやら、運営されているGiFTのスタッフさんの一部はコーチングスキルというのを習得されているようです。わたしも学んでみたいです。卒業してもわたしの学びは続いています。

【2】高等教育政策動向等

1) 【文科省】新型コロナウイルスに関連した感染症対策に関する対応

随時更新されています。

https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/index.html

2) 【就職みらい研究所】就職白書2020 - 就職活動・採用活動の振り返り編 - 公開

(2020/2/26)

https://data.recruitcareer.co.jp/white_paper_article/hakusho20200226001/

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

- ・高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES (大学改革支援・学位授与機構)
- ・海外学術動向ポータルサイト (日本学術振興会)

【3】高等教育推進センターからのお知らせ

【動画公開】2019年度FD・SD研修会「授業運営で留意したい改正著作権法」

2月14日開催した2019年度FD・SD研修会の資料と収録動画をToyoNet-ACEにて公開しています。

下記URLからアクセスいただき、ぜひご活用ください。

URL: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2736777c1263429_3490414623

【開催延期】英語で授業をおこなうためのFD研修会

3月9日に開催を予定していた英語で授業をおこなうためのFD研修会は、

新型コロナウイルスの影響を鑑み、開催を延期いたします。

事態が収束したのち、現在お申し込みをいただいている方を優先し、延期開催をする予定です。

【5】LINK

- ◆学外FD・SD研修会への参加申込
- ◆English Support Service (ESS)
- ◆高等教育関連図書のご案内
貸出申込フォーム
- ◆本ニュースレターへの投稿

【6】あとがき

インストラクショナル・デザインの実践に関する

学外FD研修会を受講された先生から、

「教える」ということの概念から覆されるほど、

様々なことを学ぶことができた、という嬉しいメッセージをいただきました。

本文中のPさんですが、人生を変えてしまうようなことも

ほんの一步踏み出したところにあるのかもしれません。

学外FD研修会へのご参加、お待ちしております。

(近々の研修会はすべて中止されており、ご案内できなくてすみません)

●みなさまの声をお寄せください

これまでのニュースレターに対する

ご意見・ご感想・ご要望、応援メッセージなどを下記のフォームで募集中です。

些細な内容でも構いませんのでお寄せいただけますと幸いです。(匿名OKです)

リンク : <https://goo.gl/forms/q14H9oRjIAU9uG9C3>

企画

高等教育推進センター

高等教育研究部会

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

◆このメールは本学教職員にお届けしています。

◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。

ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。

◆このメールの再配信、および掲載された記事の無断転載を禁じます。

© 2018-2020 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター 2020年3月17日 Vol.2, No.22 (通算第36号)

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、<メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

- 【1】シリーズ3 | 東洋大学におけるダイバーシティとその対応に向けて
第7回 国際連携による教育研究プログラムの推進 (前川 透)
- 【2】高等教育政策動向等
- 【3】LINK
- 【4】あとがき

【1】シリーズ3 | 東洋大学におけるダイバーシティとその対応に向けて 第7回 国際連携による教育研究プログラムの推進 前川 透 (学際・融合科学研究科 教授・高等教育研究部会 部会員)

はじめに

現在のように、世界中で多くの人が高等教育を受け、研究を実施するようになると、「私の考えていることは、世界の中で誰かが考え実施しているだろう」というのは本当であろう。研究グループ間の競争も激化し、研究の優先権・独自性を巡る争いも多々見られる。そのような研究者は研究を楽しんで行っているのか。それぞれの学生はいわゆる「A cog in a machine」になっていないか。さらに、「研究成果の事業化」が国・大学の優先事項となり、「知的好奇心による研究」に比べ、即座に役に立つ技術開発が良い研究であると考えられるようになってきた。

学際・融合科学研究科 / バイオ・ナノエレクトロニクス研究センター (BN Centre) では、元々、「生体分子・細胞とナノ構造体は仲が良いのであろうか」という「Proposition」のもとに教育研究を実施してきた。また、「日本のやり方が最良」、「日本製は安心・安全」、「オールジャパン・プロジェクトの推進」という発想には疑問を抱き、多様性を重んじ、国際連携による教育研究プログラムの実施を推進してきた（なお、BN CentreのLogoには「Dynamic diversity: Global excellence in action」と記されている）。現在、日本の科学技術の水準はかなり落ち込んでいる。国際的に連携することにより、それぞれの大学・国における教育研究プログラムの特徴を理解することができ、このことが本研究科 / BN Centreにおける教育研究プログラムの国際性・先進性・柔軟性・多様性の発展に大きく貢献してきた。

国際連携による研究教育プログラムの推進

学際・融合科学研究科 / BN Centreが国際連携による共同研究を開始・実施する場合、「技術開発に特化した研究」、「他の研究グループとの競争」、「発表論文数の増加」等を目的としない。連携研究者の「人間性」、「発想」が重要で、通常は、ボトム・アップ型で連携を進めていく。つまり、他の研究者・研究グループの論文を検索・調査した結果、あるいは、国際学会での発表・議論の結果、連携するグループとの共同研究に発展する場合が多い。大学間連携協定を締結した後に共同研究について考えること（トップ・ダウン型）は稀である。まず、e-mail, Skype等でコミュニケーションをとった後、我々が連携予定グループを訪問し（あるいは連携予定グループが我々を訪問し）、お互いの研究分野・研究実施状況・研究施設を理解するためのセミナーを開催する。先進的研究を実施している研究者は国際性・柔軟性がある場合が多く、共同研究の実施が容易である。

国際連携による研究プロジェクトには、ほとんどの場合大学院生・Post-doctoral (PD) 研究者が参加し、プロジェクトの実施は教育・若手研究者の育成という観点からも重要である。学生・PDsは、異なる国籍・人種・宗教・分野の研究者・学生との交流により国際性・先進性・柔軟性が育成される。

国際連携による教育研究プログラムの実施例 [1,2]

これまでに海外大学と実施した代表的な共同研究の例を以下に示す。本学の学生・若手研究者の参考になれば幸いである。

(a) University of Nantes: 主な補助金「Horizon 2020, European Commission, European Union」

2018年5月22日にBN Centreで開催した「EU Horizon 2020 Symposium: Marie Skłodowska-Curie ITN "Enabling Excellence"」では、EUの大学（University of Nantes, France; University of Oxford, UK; University of Sussex, UK; University of Zaragoza, Spain; National Hellenic Research Foundation, Greece）の学生・研究者24名および学際・融合科学研究科 / BN Centreの若手研究者5名が参加し、研究発表・議論を行い、共同研究の実施について話し合った [3,4]。その成果として、2019年度より学際・融合科学研究科の博士後期課程の学生がUniversity of Nantesとの「PhD double degree programme」に参加し、「新規カーボンナノ構造体の創成」に関する研究を実施している [5]。University of Nantesで理論的研究を、東洋大学で実験的研究を実施する。本研究連携により、理論研究と実験研究の同時実施が可能となった。さらに、Justus-Liebig University Giessen, Germany; Florida State University, USAの研究者が本共同研究に参加することとなった。今後、EUの「Horizon 2020: RISE Programme」に申請し、共同研究を推進していく。

(b) University of Oxford: 主な補助金「Royal Society」、「Japanese Society for the Promotion of Science (JSPS)」

Nicole Grobert Research Group, University of Oxford, UKとは、2004年よりセミナーを開催してきた。その成果として、「カーボンナノ構造体の創成」、「磁性ナノ粒子の創成」に関する共同研究を実施してきた。BN CentreのPD研究者2名がOxfordで、またOxfordの大学院生2名がBN Centreで共同研究を実施した。特に、「カーボンナノチューブとタンパク質の相互作用」、「超微小磁性ナノ粒子の合成およびMRI造影剤としての可能性」に関して興味深い成果が得られた [6]。現在も、学際・融合科学研究科の学生が上記研究を実施している。今後、UKの補助金が獲得できれば、Oxfordの若手研究者がBN CentreのPDとして上記研究を実施する。

(c) University of Sussex: 主な補助金「Engineering and Physical Sciences Research Council (EPSRC)」

Sir Harry Kroto（1996年度ノーベル化学賞受賞）がBN Centreの客員研究員、学際・融合科学研究科の客員教授に就任し、2004年より「カーボンナノ構造体の創成」に関する共同研究を開始した。University of Sussexの学生5名がBN Centreで共同研究を実施した。現在、当時の参加学生が他大学の教授・研究者となっており、いくつかの大学と教育研究連携プログラムを実施している。

(d) University of Brighton: 主な補助金「FP7, European Commission, European Union」

BN Centreで実施してきた「二酸化炭素の室温分解および炭素ナノ粒子の合成」に対して、University of Brightonより共同研究の申込みがあり、共同セミナーをBN CentreとUniversity of Brightonで開催後、共同研究を開始した。ある会社のCEOからの寄附もあり、University of Brightonに共同実験室が整備され、1名のPDが採用された。University of BrightonのPDがBN Centreで、また、BN CentreのPDがBrightonで共同研究を実施し、ナノサイエンス分野において、多くの成果が得られた。前述のように発表論文数の増加が目的ではないが、論文数の観点からは、最も成果が得られたプロジェクトであり、FP7の延長も認められた。

(e) Sorbonne University

Sorbonne Universityの前身であるUniversity Pierre and Marie Curie (UPMC) Paris 6と2004年に共同セミナーを開催し、「磁性ナノ粒子による自己組織化・パターン形成」に関する共同研究を開始した。お互いの大学でセミナーを開催した後、研究者交流（UPMCのPD 2名、講師1名; BN CentreのPD 1名）・学生交流（UPMCの博士課程学生2名）を実施し、その成果として、東洋大学とSorbonne Universityは、2018年に「PhD double degree programme」の実施協定を締結した [5]。

(f) Internship programmesの実施による共同研究の推進 [1,2]

BN Centreでは、他大学の修士・博士課程の学生、PDs（UK, USA, India, France, Hungary, Romania, Oman, Algeria, Malaysia, Russia）に対してInternship programmesを実施してきた。学生・研究者がそれぞれの大学資金あるいは外部資金により来日し、BN CentreのPDs、学際・融合科学研究科の学生と共同研究を行った。一般に、短期間（2週間～3ヶ月）のプログラムであるが、プログラム終了後も共同研究を継続した例もある。



国際セミナーの開催

まとめ

それぞれの研究グループに得意分野（実験的解析・数值的解析・理論的解析・分析技術等）がある。学生・研究者が一人で完結できる研究は限られている。国際連携による研究プロジェクトの開始当初は、英語によるコミュニケーションの難しさ、研究手法等の違いにより日本人学生・研究者に戸惑いが見られるが、それも時間が解決してくれる。学生の国際学会での発表意欲が格段に高まり、共同研究成果が国際論文誌に発表されたときの学生の達成感は格別である。若手研究者の自立・国際化という観点から、「国際連携による教育研究プログラムの実施」による教育効果は非常に高い。EUでは異なる国に所属する研究者・研究グループが組織する「国際教育研究プログラム」に対する助成が積極的に行わ

れている。本学の研究者・研究グループがEUの大学と連携し共同研究を実施することにより、EUの補助金への申請も可能となる [7]。国際連携プロジェクトが常に成功するとは限らないが、それから学ぶことは多い。

1. 2016 – 2019 Achievements in the bio-nano innovation programme: Development of nano robotics: Application of nano robots to biomedical and environmental studies (2020), Kawagoe, Japan (to be published on 31st March 2020).
2. Achievements in the Bio-Nano Science Fusion Course, Graduate School of Interdisciplinary New Science, Toyo University: April 2007 – March 2019 (2019), Kawagoe, Japan.
https://www.toyo.ac.jp/-/media/Images/Toyo/academics/gs/glns/achievements/Achievements_201903.ashx?la=en&hash=CAC5EAA32BBEA4533AD8CCACA2BC8F2558A7B3E8
3. EU Horizon 2020: Marie Skłodowska-Curie ITN "Enabling Excellence" International Symposium on Nanoscience and Nanotechnology.
<https://www.toyo.ac.jp/en/news/research/labo-center/bnel/351639/>
4. Invited talk at an International Seminar organised by the Delegation of the European Union to Japan and EURAXESS.
<https://www.toyo.ac.jp/en/news/research/labo-center/bnel/352294/>
5. Double degree programme
<https://www.toyo.ac.jp/academics/gs/glns/53314/>
6. D. Piché et al., ACS Appl. Mater. Interfaces 11, 6724-6740 (2019).
DOI: 10.1021/acsami.8b17162
7. Horizon 2020
<https://ec.europa.eu/programmes/horizon2020/en>

【2】高等教育政策動向等

1) 【日本政策金融公庫】令和元年度「教育費負担の実態調査結果」公表

(2020/3/11)

https://www.jfc.go.jp/n/findings/kyoiku_kekka_m_index.html

2) 【リクルート進学総研】カレッジマネジメント Vol.221「教学マネジメント—学修者本位の教育への転換」刊行

電子ブック版は下記URLからご覧いただけます。

(2020/3/6)

http://souken.shingakunet.com/college_m/

3) 【マイナビ】「マイナビ2021年卒大学生 新型コロナウイルス感染拡大に対する就職活動実態調査」発表

(2020/3/6)

https://www.mynavi.jp/news/2020/03/post_22614.html

4) 【クアクアレリ・シモンズ社】QS World University Rankings by Subject 2020 発表

(2020/3/4)

<https://www.topuniversities.com/subject-rankings/2020>

5) 【マイナビ】「2021年卒マイナビ大学生広報活動開始前の活動調査」発表

(2020/3/4)

https://www.mynavi.jp/news/2020/03/post_22556.html

6) 【私大連】新型コロナウイルス感染症に関する加盟大学、国等の情報一覧

(2020/3/3)

https://www.shidaiaren.or.jp/topics_details/id=2710

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)

※アーカイブでは、上記以外の教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。

※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。

・高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES (大学改革支援・学位授与機構)

・海外学術動向ポータルサイト (日本学術振興会)

【3】LINK

- ◆学外FD・SD研修会への参加申込
- ◆English Support Service (ESS)
- ◆高等教育関連図書のご案内
貸出申込フォーム
- ◆本ニュースレターへの投稿

【4】あとかき

2月14日に開催しました、本学法学部安藤教授と情報システム課藤原課長補佐によるFD・SD研修会「授業運営で留意したい改正著作権法」は大盛況のうちに終わりました。

当日の盛り上がりだけでなく、事後アンケートでも非常に評判が良く、講師のお二人に深く感謝を申し上げるとともに、熱意をもって参加して下さった教職員の皆様にもお礼申し上げます。

ご意見が多かったものは、
「不安なところがあったが、すっきりした」
「これだったら自分も試せるかも」
といったものでした。

日進月歩と言われるほどICT技術の進歩は目覚ましいものがありますが、時代の変化に応じ、関係法令も対応されています。専門家のエッセンスをお届けするFD・SD研修会をこれからも企画してまいります。

なお、当日の動画と資料はToyoNet-ACEで公開しています。ご自宅からでもアクセスできますので、ぜひご覧ください。

(We also prepare the document in English!)
https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2736777c1263429_3490414623

●みなさまの声をお寄せください
これまでのニュースレターに対する
ご意見・ご感想・ご要望、応援メッセージなどを下記のフォームで募集中です。
些細な内容でも構いませんのでお寄せいただけますと幸いです。（匿名OKです）
リンク：<https://goo.gl/forms/q14H9oRjlAU9uG9C3>

企画
高等教育推進センター
高等教育研究部会

発行元
東洋大学 高等教育推進センター
〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20
E-mail: mlfdjimu@toyo.jp
HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>
ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

- ◆このメールは本学教職員にお届けしています。
 - ◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。
ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。
 - ◆このメールの再配信、および掲載された記事の無断転載を禁じます。
- © 2018-2020 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター
2020年3月31日 Vol.2, No.23 (通算第37号)

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、<メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を本学全専任教職員にお送りしています。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、バックナンバーは[こちら](#)※ToyoNet-ACE

目次

- 【1】シリーズ3 | 東洋大学におけるダイバーシティとその対応に向けて
第8回(最終回) 高等教育におけるダイバーシティの「確保」を考える(松原 聡)
- 【2】高等教育政策動向等
- 【3】お役立ちリンク集(ToyoNet-ACE, Cisco Webex, 電子ブック関連)
- 【4】LINK
- 【5】あとがき

【1】シリーズ3 | 東洋大学におけるダイバーシティとその対応に向けて
第8回(最終回) 高等教育におけるダイバーシティの「確保」を考える
松原 聡(高等教育推進センター長・経済学部総合政策学科 教授)

ダイバーシティを語るときに、常に「どういう意味ですか?」との問いが寄せられたものである。しかしここ数年、この言葉はようやく人口に膾炙してきた。しかし、そもそもダイバーシティとはなにか、となると、まだ十分な社会的な合意はできていないように思う。

当初は、ダイバーシティを男女共同参画とほぼ同様に捉える向きもあったが、今はさすがにより幅広く捉えられるようになってきている。たとえば筑波大学は、ダイバーシティに「性別、国籍、年齢及び障害の有無」[1]の4点を掲げている。しかし、LGBTの問題を考えれば、性別だけでは不十分である。早稲田大学では、「性別、障がい、性的指向・性自認、国籍、エスニシティ、信条、年齢」[2]と、性別の他に「性的指向・性自認」の項目などを加えている。

私を知る限りで、ダイバーシティをもっと幅広く定義しているのは中央大学である。同大は「障害、病歴、経済状況、家庭環境、性別、性自認、性的指向、年齢、国籍、人種、言語、信念、宗教」[3]の13項目を掲げている。今、新型コロナウイルス感染症で話題の「感染症法」(「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」〈平成10年10月2日法律第114号〉)の前文には、「我が国においては、過去にハンセン病、後天性免疫不全症候群等の感染症の患者等に対するいじめの恐れや差別や偏見が存在したという事実を重く受け止め、これを教訓として今後に生かすことが必要である。」とある。「病歴」をもダイバーシティに加え、対象を幅広く捉えた中央大学のこの定義は高く評価されてよい。

ダイバーシティという概念は、そもそも人々は本来的に多様性を持っており、その多様性によって差別があったり、機会が奪われたりすることがないようにすべきである、ということを示すためにあるはずである。その、人々がもつダイバーシティとは何かの認識が、この議論の出発点になる。その先に、多数者の論理、利害が優先されがちな社会にあって、さまざまな相対的な少数者たちに、差別や偏見、機会の差があってはならないという議論に進むはずである。ダイバーシティの議論の本質はここにある。

わたしたちのような高等教育機関においては、社会に対して、教育や研究を通してダイバーシティの認識や差別の解消への働きかけが求められている。しかし、その前提となるのが、大学という組織自体におけるダイバーシティの「確保」である。

大学は、今や進学率が5割を超え、社会の中の特殊な存在ではなく、一般的な組織の一つとなっている。そういった大学という組織にあっては、一般の社会と同様のダイバーシティが確保されるべきである。

たとえば日本では、障害者の比率は7%ほどとされている。大学における障害者比率がこれを大きく下回っているのが現実であり、障害者の大学進学になんらかの差別や機会の喪失があったと考えざるを得ない。また、医学系の大学や学部では、女子学生の比率が低くなっている。先般、いくつかの医学系の大学や学部で、入試における女子差別が明らかになった。こういった差別、機会の喪失があったからこそ、「性別」というダイバーシティが確保されないことになってしまうのである。入試において男女差別を行うなど、教育機関としてはあってならないことであることは言を俟たない。

しかし、もう一つ、日本の大学には、意図せざるダイバーシティの喪失がある。それは、先に紹介した大学のすべてが、ダイバーシティの一つに掲げている「年齢」である。図1は、OECD諸国における大学入学者の平均年齢である。日本はその中で最下位である。同時にその年齢が18歳であることにも注目しなければならない。入学者のほぼ全員が高校卒業直後であるということである。

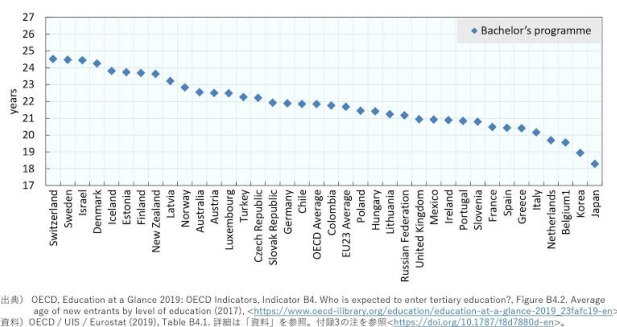


図1 学士課程入学者の平均年齢（2017年）

このことは、図2にあきらかであって、日本では社会人経験者等の「25歳以上の入学者」の割合が、OECD諸国平均の15.8%を大きく下回る2.5%となっている。入学者のほぼ全員が、現役ないしは1浪の高校卒業者ということである。諸外国では当たり前存在である社会人や社会人を経験した学生が、日本では皆無に近く、結果的に年齢ではまったく均質な組織になってしまっている。こういった、国際的に見れば異様といわざるをいない、均質な組織の中で、学生にどのようにダイバーシティを教育できるというのだろうか。

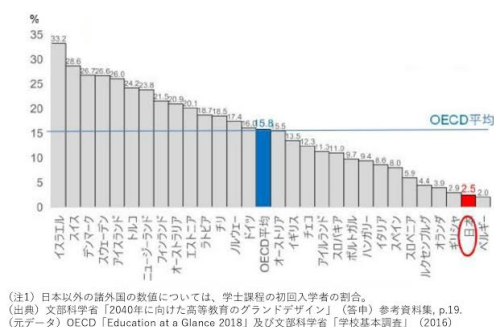


図2 25歳以上の学士課程入学者の割合の国際比較（2016年）

しかしこの責任は大学にあるというよりは、大学が高卒直後の生徒を受け入れ、それを4年間で卒業させ、企業の一斉採用で世に送り出すという日本の社会システムにある。このシステムを変える新たな一歩を、まず何らかの形で、大学の側が踏み出すべき時期に来ているのではないか。

私は大学においても、社会全体と同様のダイバーシティが「確保」されていることが必要だと考えている。たとえば、私の20人のゼミで、障害をもった学生が社会の7%を反映して1、2名、LGBTなどの学生も同じく1、2名、外国人学生は、アメリカの大学が2、3割であることを踏まえれば4、5名、そして社会人はOECD諸国の15%を反映して3名。こんな構成であれば、さまざまな立場、考えを持つ学生の中で、どんなに素晴らしい教育ができるであろうか。このことは学生自身の成長に資するはずであるし、また彼らが社会に出たときのダイバーシティに対する認識や対応も変わってくると思う。

本学は2016年に、私立総合大学として初めて女性学生を受け入れてから「男女共学100周年」を迎え、男女共同参画には一定の成果を出せていると思われる。しかし、そのときに「性別のみならず、国籍、宗教、貧富などのあらゆる壁を超えるダイバーシティを多角的に学び、共に考える」[4]ことの必要性を記したが、今は残念ながらそれが組織的にも、施策的にも十分に実現できていないとは言えない。

まずダイバーシティを本学で「確保」した上で、それを教育、研究に活かし社会に還元していくことが、今、何よりも求められているのである。

- [1] 筑波大学ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター ホームページ
<http://dac.tsukuba.ac.jp/?page_id=668>
- [2] 早稲田大学ダイバーシティ推進宣言
<https://www.waseda.jp/inst/diversity/about/mission/diversity_declaration/>
- [3] 中央大学ダイバーシティ宣言
<<https://www.chuo-u.ac.jp/aboutus/efforts/diversity/declaration/>>
- [4] 東洋大学学報WEB「日本のダイバーシティ実現に向けて」
<<https://www.toyo.ac.jp/site/gakuhou/313023.html>>

【2】高等教育政策動向等

1）THE世界大学ランキング日本版2020

THE世界大学ランキング日本版2020が発表されました。

本学は64位（昨年73位）にランクインしました。

（2020/3/24）

<https://japanuniversityrankings.jp/rankings/>

関連リンク：Between情報サイト「『THE世界大学ランキング日本版2020』－東北大学が初のトップに」
<http://between.shinken-ad.co.jp/univ/2020/03/JUR2020.html>

2) 【大学基準協会】『大学評価ハンドブック』改訂

改訂版は、2021年度以降の大学評価に用いられます。
本学は、2021年度に大学基準協会による大学評価（認証評価）を受審します。
(2020/3/24)
https://www.juaa.or.jp/news/detail_665.html

3) 【文科省】令和元年度改革総合支援事業の選定状況 公開

本学は、「タイプ4（社会実装の推進）」に選定されました。
(2020/3/19)
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shinkou/07021403/002/002/1340519.htm

4) 【私大連 他】「共同声明 学修経験時間の尊重に向けたインターンシップの取り組みについて-学生の学修経験時間を担保し、豊かな学びを生かした社会へ-」

(2020/3/19)
https://www.shidairen.or.jp/topics_details/id=2722

5) 【文科省】令和元年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査（2月1日現在）発表

(2020/3/18)
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/11/1422624_00002.htm

6) 【マイナビ】「2021年卒大学生のライフスタイル調査」発表

・日常生活編（2020/3/25）
https://www.mynavi.jp/news/2020/03/post_22770.html
・働き方編（2020/3/18）
https://www.mynavi.jp/news/2020/03/post_22698.html

7) 【マイナビ】「2021年卒大学生公務員イメージ調査」発表

(2020/3/17)
https://www.mynavi.jp/news/2020/03/post_22681.html

8) 【文科省】「成長分野を支える情報技術人材の育成拠点の形成（enPiT）」enPiT-Pro中間評価結果 公表

本学が採択された「ICTベースの社会形成のための文理融合のためのICT教育」はA評価（これまでの取組を継続することによって、計画どおり事業目的を達成することが可能と判断される）を得ました。
(2020/2/28)
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/enpit/1395904_00001.htm

◆「高等教育政策動向等一覧等」のアーカイブは[こちら](#)
※アーカイブでは、上記以外の教育関連全般の政策動向等もご紹介しています。
※閲覧は@toyo.jpのアカウントを持つ教職員に限定しています。

◆海外については、下記のwebサイトをご確認ください。
・高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES（大学改革支援・学位授与機構）
・海外学術動向ポータルサイト（日本学術振興会）

【3】お役立ちリンク集

以下、新学期の授業実施にあたり、本学が導入しているToyoNet-ACEやCisco Webexの使い方に関するリンクをまとめました。適宜ご参照ください。

ToyNet-ACE・respon

■ 使い方全般

→使い方とサンプル(教員向け) | ToyNet-ACE
https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_2493139

■ ToyNet-ACEに容量の大きい動画やファイルを埋め込む方法

→「ToyNet-ACEで外部教材を扱う操作」 | ToyNet-ACE
https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2736777c1263429_3490414623

Cisco Webex

■ Cisco Webex 全般

■ Webexに関する基本情報

→【ビデオ会議】Webexの活用について | ガルーン (2020/2/25掲出)
<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=16246>

→Webex利用についての情報 / The information for using Webex. | ガルーン (2020/3/16掲出)
<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=16331>

■ Webex全般に関する意見交換のための掲示板

→Cisco Webex 活用について (意見交換) - 改題 | ガルーン (2020/3/9掲出)
<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=16307>

■ Webexに関するウェビナー情報・ウェビナー収録動画閲覧

→https://www.cisco.com/c/m/ja_jp/training-events/events-webinars/collaboration-webinars.html

■ Webex Meetings

■ Webex Meetingsの使い方動画

→https://www.cisco.com/c/m/ja_jp/solutions/webex/how-to-use.html

■ マニュアル (pdf)

→画面で見せる入門書の元祖! 「できるWebex Meetings」
https://www.cisco.com/c/dam/global/ja_jp/products/collateral/conferencing/webex-meetings/dekiru-webex-meetings.pdf

→Cisco Webex Meetings かんたんセットアップガイド

https://www.cisco.com/c/dam/global/ja_jp/products/collateral/conferencing/webex-meetings/cisco-webex-meetings-easy-setup-guide-jp.pdf

■ Webex Teams

■ マニュアル

→画面で見せる入門書の元祖! 「できる Webex Teams」
https://www.cisco.com/c/dam/global/ja_jp/products/catalog/pdf/dekiru-webex-teams.pdf

→Cisco Webex Teams かんたんセットアップガイド

https://www.cisco.com/c/dam/global/ja_jp/solutions/collateral/collaboration/webex-teams/cisco-webex-teams-easy-setup-guide-jp.pdf

■ Webex Training (参考)

※下記の資料は、慶応義塾大学での講習会資料です。

■ オンライン授業標準実施マニュアル (教員用) ver. 20200327

<https://docs.google.com/presentation/d/15X8SqT7cpbMaOI3YlpXxzFHfIJgdSfhU33BmearBI2A/edit?usp=sharing>

■ SFC Online Class Operation Manual (for Faculty) ver. 20200324

<https://docs.google.com/presentation/d/1wlyuay2NpbpyiGbCz5iOvDzOAZoBeYRemzHgSrWY4SQ/edit?usp=sharing>

■ Webex Trainingの使い方 (動画)

https://scrapbox.io/sfc-online/Webex_Training%E3%81%AE%E4%BD%BF%E3%81%84%E6%96%B9%E5%BC%88%E5%8B%95%E7%94%BB%E5%BC%89

※Webex MeetingsとWebex Trainingの機能比較

https://www.cisco.com/c/ja_jp/products/conferencing/product_comparison.html

電子ブック

■ 電子ブックお役立ちページ

→【図書館】「電子ブックお役立ちページ」OPENのお知らせ | ガルーン (2019/8/28掲出, 2020/3/21最終更新)

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=15392>

■ 電子ブックeBook Libraryの操作方法

→授業外学修を促すICT活用例 ―電子ブックeBook Libraryのご紹介 | ToyoNet-ACE (2018年11月30日)

https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2818483c1263429_1074299631

【参考】ToyoNet-ACEにて、その他のリンクを掲出しております。

https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_3664882c1263429

【4】 LINK

- ◆学外FD・SD研修会への参加申込
- ◆English Support Service (ESS)
- ◆高等教育関連図書のご案内
貸出申込フォーム
- ◆本ニュースレターへの投稿

【5】 あとがき

●みなさまの声をお寄せください

これまでのニュースレターに対する

ご意見・ご感想・ご要望、応援メッセージなどを下記のフォームで募集中です。

些細な内容でも構いませんのでお寄せいただけますと幸いです。(匿名OKです)

リンク : <https://goo.gl/forms/q14H9oRjIAU9uG9C3>

企画

高等教育推進センター

高等教育研究部会

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

◆このメールは本学教職員にお届けしています。

◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。

ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。

◆このメールの再配信、および掲載された記事の無断転載を禁じます。

© 2018-2020 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学 FD・SD 活動報告書（2019 年度）

発 行 東洋大学高等教育推進センター

発行日 2020 年 5 月

編 集 東洋大学高等教育推進支援室

〒112-8606

東京都文京区白山 2-28-20

TEL: 03-3945-7253 / FAX: 03-3945-7238

Mail: mlfdjimu@toyo.jp